兵庫農科大学史

兵庫農科大学史

学歌

山鳥 崇 作詞
内海誓一郎 作曲

一、丹波路や多紀高原に
　新しき理想かざして
生れたり兵庫農大
　いざ吾等若き力に
限りなき希望をこめて
　暁の鐘を打たなむ

二、たたなはる山々遠く
　こだまする雄叫びあげて
進みゆく兵庫農大
　いざ吾等若き生命に
くれなゐの燈火かかげ
　はろかなる道を照らさむ

三、かぐはしき大地の匂い
　豊かなるみのりとともに
栄えゆく兵庫農大
　いざ吾等若き心に
とこしへの真理求めて
　たゆみなく進みゆかなむ

初　代　兵庫農科大学長
故　三　宅　　捷　博　士

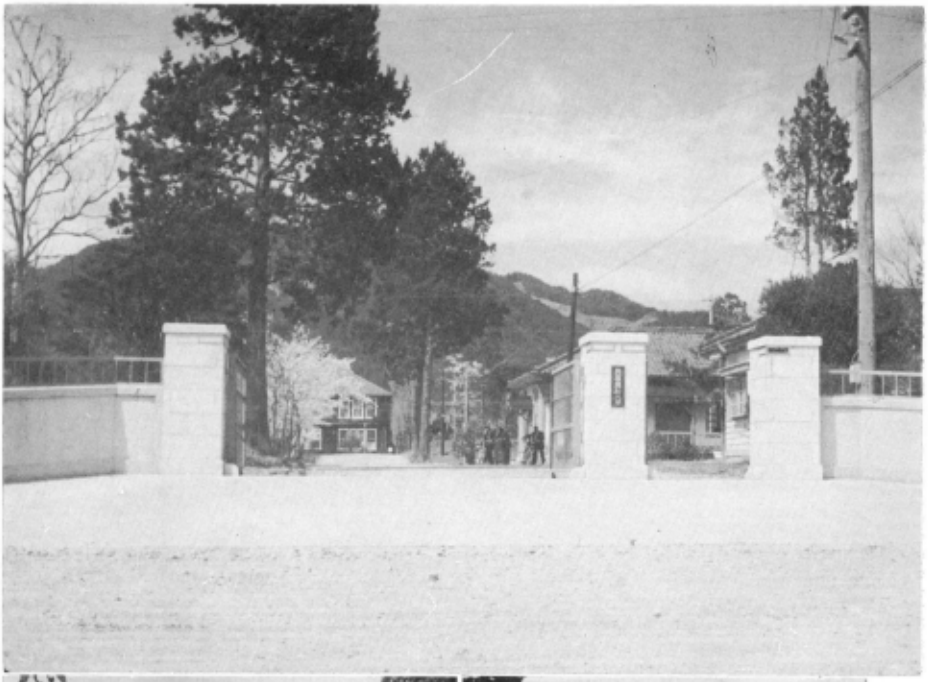
兵庫農科大学副学長

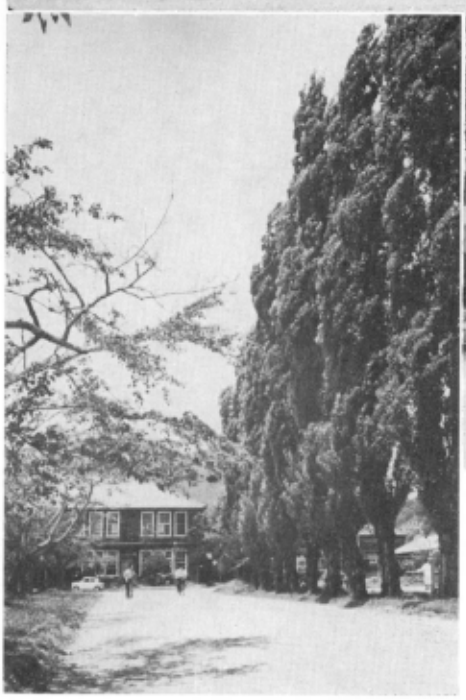
故 森　為三 博士

現兵庫農科大学長

佐 伯 秀 章 博 士

① 大学本館
② 農学一号館
③ 教養一号館
④ 教養二号館
⑤ 教養三号館
⑥ 学生食堂・同ホール
（草創期二階図書室）
⑦ 農学二号館
⑧ 農芸化学館
⑨ 教養四号館
⑩ 学友会運動部室
⑪ 畜産学館
⑫ 図書館
⑬ 各科製造工場
⑭ 動物飼育室
⑮ 学生寮・職員寮
⑯ 運動場
⑰ 篠山第一農場
⑱ 県立篠山産業高校
⑲ 篠山町

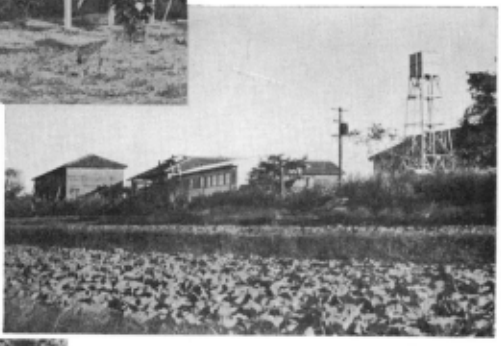




大学正門および学内

（篠山農場）

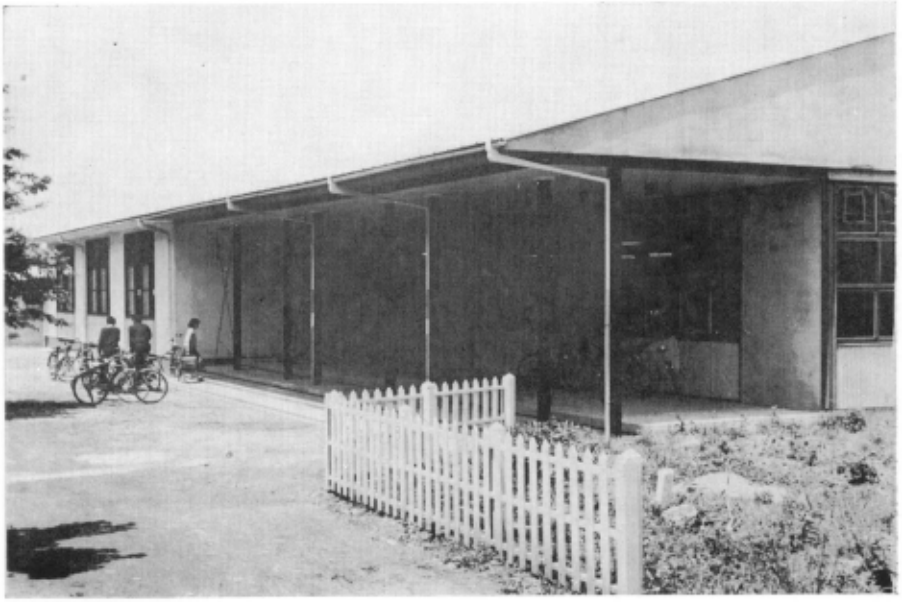
（加古川農場）



附属農牧場

（今田牧場）

附 属 図 書 館

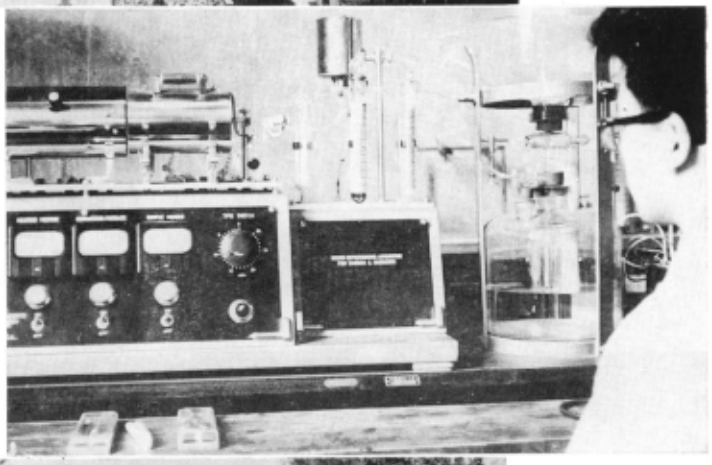


（図書館入口）

（図書館内部）

研究・実習スナップ

（ガラス室）



（機器分析）

（乳牛審査実習）

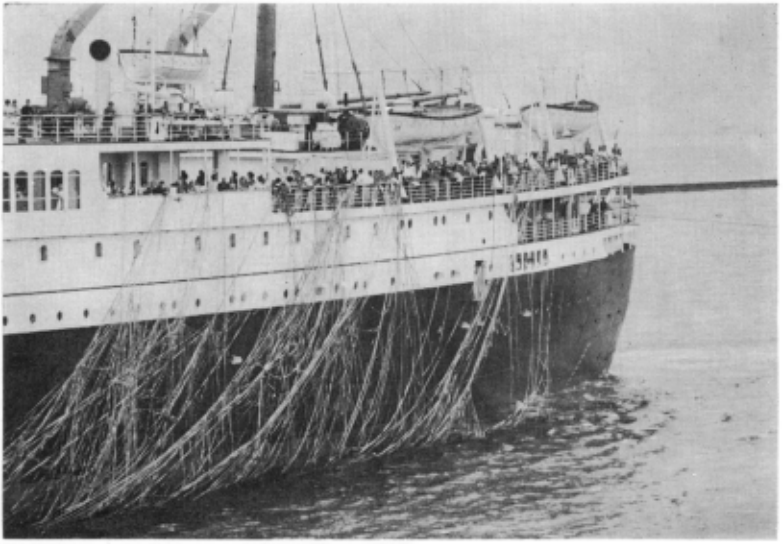
（調査団使用の三輪車）

カンボジャ調査団

（船内の壮行会）

（カンボジャ原住民の生活）

ブラジル調査団



（壮途）

（船上の団員）

（クリチーバ大学訪問）

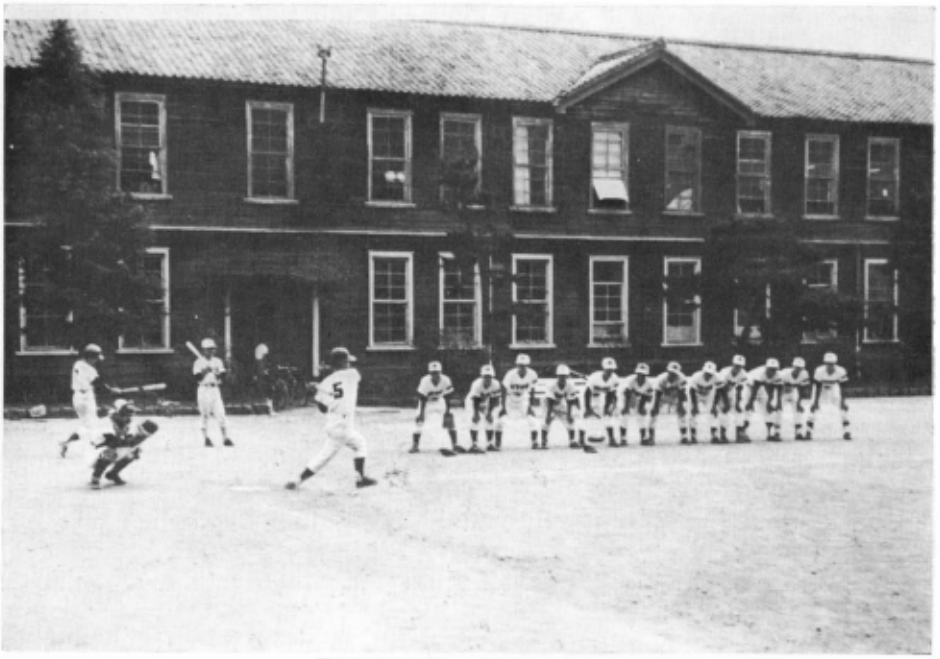
（大湿原地帯にて）

（オリエンテーション）

学内スナップ

（職員親睦バレー）

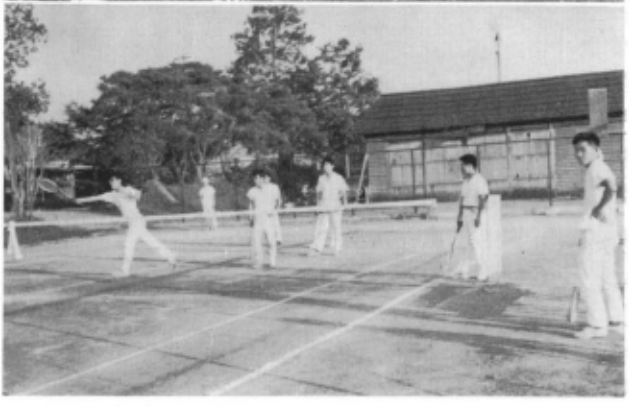
（大学祭）



（野球部）

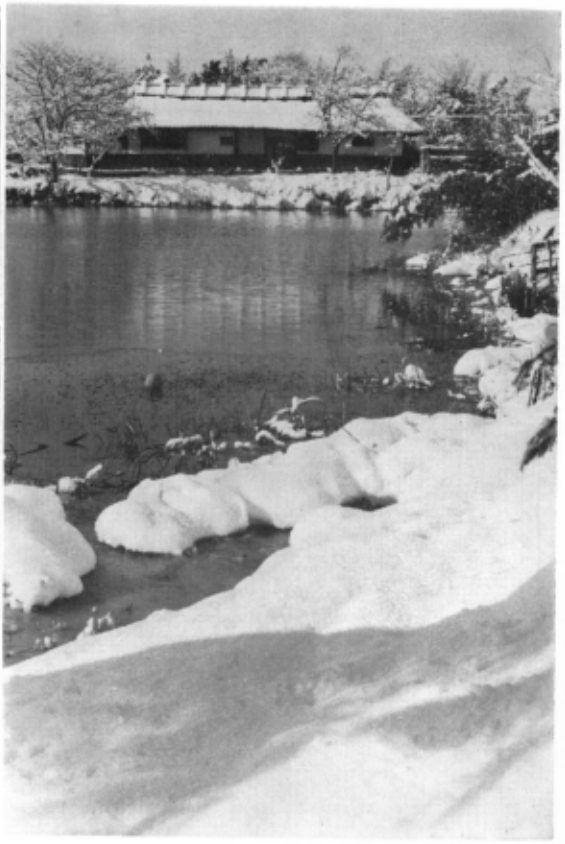
学友会運動部

（拳法部）



（テニス部）

四季の篠山



（榊　原　洋　子）

雪の城下町（伊藤和彦）

序

兵庫農科大学は昭和24年の創立以来20年の歩みを続けてきたが今や神戸大学農学部に移管となり、その使命を果たして発展的に解消することになった。篠山学舎に誕生し草創時代の困難をのりこえて確固たる基盤が確立され、研究に学風に教育に燦然と斯界に輝く農大となり、兵庫県の農業に対してもいささかの貢献を果たしてきた。

その後わが国農業情勢の大きい変化に伴ないそれに対応して一層その使命達成に見合うように学科組織の改善が挙学一致の努力によって現在の形に実現しいよいよ充実した歩みが続けられた。然るに昭和41年度から国立移管が始まって神戸大学農学部として継承されることになった。

本学20年の歴史はそのまま骨肉となって農学部に受け継がれて発展して行くことではあるが、兵庫農科大学の名称との別かれは共に歩んだわれわれにとっては誠につらい淋しいことである。

曲折多かりし本学20年の足跡を記録し、その歴史を支えて今日までの発展に献身されし多くの先輩の功績を偲びつつここに国立移管を記念して農科大学記念史を編纂し、発展的に解消する県立兵庫農科大学の在りし姿を残したい。

昭和44年浅春

兵庫農科大学長

佐伯秀章

同窓生の皆様へ

同窓生の皆様、社会におけるきびしい道をお元気でご健闘ご精進のこと深甚なる敬意を表します。

愛する母校、わが兵庫農科大学は本年3月31日をもって神戸大学農学部にそのよき伝統を受けつがれ円満に国立移管が完了致しました。

新学舎は北は六甲山を控え、南は大阪湾を見下した眺望絶佳の地六甲台に、6階建の研究棟を含む5棟の本館をはじめ各種の附属施設が立派に完成しました。

昭和24年丹波篠山の地に創設されてより20年、草創時代の困難をのりこえて確固たる基盤が確立され、自治と開拓精神を中心とする兵庫農大スピリットを柱として発展してきた母校20年の足跡を記録し、国立移管を記念して兵庫農科大学史が兵庫県ならびに大学当局によって編纂され各方面に配布されました。

同窓会としましてはこの記念史を同窓生全員におとどけし母校20年の姿を偲んでいただくと共に、母校の一層の発展を祈念したいと思い、ここに兵庫農科大学史の『同窓会版』を刊行することを決めました。

再版に当り、種々御高配を賜りました兵庫県教育課ならびに編纂委員会専門委員長川那部治良教授に厚く御礼申上げます。

おわりに、2代目学長として母校の充実と発展のためご尽力下され国立移管完了と共に退官されました佐伯秀章先生、その後任として大学紛争の困難な時期に日夜母校のためご努力下さっている学部長事務取扱清水俊秀先生はじめ恩師諸先生方のご多幸をお祈り申上げますと共に、同窓生の皆様もご健康で各自の職場でご健闘あらん事を切に祈念致します。

昭和44年 5月31日

同窓会長

西川欣一

目　　次

題　　字……兵庫県知事　金井元彦
序　　……兵庫農科大学長　佐伯秀章
第1章　兵庫農科大学の設置—胎動期…… 1
　第1節　神戸医科大学予科の廃止と兵庫農科大学設置への気運…… 1
　第2節　設置認可申請書の提出…… 7
　第3節　申請書に基づく設置委員の調査…… 9
　第4節　認可指令の通達…… 15
　第5節　初代学長の決定…… 17
　第6節　む　す　び…… 18
第2章　草創期の兵庫農科大学…… 20
　第1節　開学式の開催…… 20
　第2節　教授陣容の整備…… 22
　第3節　農芸化学科、畜産学科の増設と教職課程の設置…… 25
　第4節　草創期の附属施設その他…… 30
　第5節　む　す　び…… 35
第3章　完　　成　　期…… 36
　第1節　完成充実期の概要…… 36
　第2節　研究業績の開花結実…… 37
　第3節　海外調査団の派遣…… 62
　第4節　む　す　び…… 75
第4章　体質改善と国立移管…… 77
　第1節　経過のあらまし…… 77
　第2節　学者グループによる答申と体質改善の実現…… 84
　第3節　む　す　び…… 91
第5章　附　属　施　設…… 95
　第1節　附属農場…… 95
　第2節　後年追加編入された加古川農場…… 106

第3節　附属牧場…… 115
第4節　附属図書館…… 121
第5節　国立移管後の帰趨…… 126
第6章　学生のあゆみ…… 128
第1節　入学試験の推移…… 128
第2節　学生生活の概観…… 134
第3節　卒業生の就職状況…… 142
第7章　「篠山時代を語る」座談会の記録…… 144
発端――岸田知事の熱意と篠山町の優位性――設置委員の視察を迎えて――粘りの森先生、創設のうらに近藤先生――資金難のうらばなし――三宅先生の人となり――公舎や住居の心配――学長用自動車、海外留学――むすび
第8章　随想のかずかず…… 165
まえがき…… 165
Ⅰ　胎動期編
県立農大の創設……岸田幸雄…… 165
開設時代の思い出……吉川覚…… 168
農大開学まで……森秀二…… 170
森為三先生を偲んで……足立隆夫…… 173
三宅捷先生のひととなりと建学の精神……高山敏弘…… 176
書きとめておきたいあの頃の一駒……西羅寛…… 184
Ⅱ　草創期編
草創期の思い出……佐伯秀章…… 186
兵庫農大の草創期……山本秀雄…… 189
篠山時代を回顧して……浜口栄次郎…… 192
兵庫農科大学草創時代……浜田秀男…… 193
開学の頃……西川欣一…… 196
草創のころと学歌……山本賢治…… 198
10年間の回顧……桜井芳次郎…… 200

兵庫農大草創期に想う……宮　沢　秀　介…… 203
農芸化学科発足のころ……麦　林　楢太郎…… 205
私が着任したころ……堀　江　格　郎…… 207
畜産学第一講座時代の思い出……福　島　豊　一…… 209
農場随想……松　尾　浩　気…… 212

Ⅲ　完成期編

思い出のままに……太　期　　勇…… 216
ドラフト……東　　順　三…… 219
農大とキリスト教活動……清　水　俊　秀…… 221
カンボジヤ調査団の頃の思い出……岩　田　久二雄…… 224
農短大合併の想い出……平　林　成　志…… 225
牧場の想い出……三　宅　睦　男…… 227
加古川農場草創時代の思い出……秋　田　謙　司…… 229
思　い　出……河　南　保　幸…… 231

Ⅳ　国立移管編

思い出すまま……吉　村　貞　彦…… 233
思い出の中に……竹　内　照　蔵…… 235
農業土木の年輪……後　藤　定　年…… 238
5学科27講座と附属図書館……小　野　　豊…… 246
国立移管・体質改善時代の声なき声……奥　谷　禎　一…… 248

附表Ⅰ　沿革の概要…… 250
附表Ⅱ　学長名誉教授および部課長等役職員…… 255
附表Ⅲ　兵庫農科大学職員一覧…… 259
附表Ⅳ　歳出決算額調、教職員数…… 280
表1　創立以来の歳出決算額調…… 280
表2　教職員数の推移表…… 281
附表Ⅴ　兵庫農科大学卒業生一覧…… 283
附図1　兵庫農科大学校舎配置図…… 299
附図2　附属農場総合位置図…… 300

附図３　兵庫農科大学（神戸大学農学部）専門教育校舎配置図…… 301
あ　と　が　き…… 302

第1章　兵庫農科大学の設置－胎動期

第 1 節　神戸医科大学予科の廃止と兵庫農科大学設置への気運

兵庫農科大学の誕生を明らかにするためには必然的にその前身たる神戸医科大学史の一部を摘録することが捷径であろう。

即ち県立神戸病院を母体として昭和19年県立医学専門学校の名のもとに新設せられたが、同20年３月17日戦争の末期的大空襲によって全面的に焼失して終戦を迎えるに至った。

しかも衛生行政面において軍政下に指示せられたことは県衛生課の機構拡充と県単位に高水準の医科大学の設置などが含まれていた。

既に文部省では医学教育審議会を設けて医学教育制度の改革案を検討し始めていた。即ち当時の医学専門学校51校を対象として、施設、設備その他の内容を審査して水準以上のものをＡ級とし、それ以外をＢ級と判定、Ａ級は大学に昇格、Ｂ級は廃校とするという案があったが、本県にあってもＡ級として大学に昇格することを標榜したことは当然のことであった。

一医学専門学校が昭和21年度より３カ年間にわたり当時としては可成り巨額とされる4,700万円の予算をもっぱら施設、設備の拡充、強化に充当することによってほぼ大学への昇格可能の見通しをつけ、計画案の実施に専念の結果遂に21年４月には県立医科大学としてその設置が認可せられたのである。その間の経緯について詳述することは避けるが、その予科教室設置の有力候補地としてあげられたのが篠山連隊兵舎跡であったことは衆知のところである。その理由の一は、既に明治40年建設以来、40年余の年数を経たとはいえ、基礎資材は極めて頑丈でここ10年ないし20年は充分その用に堪え得ることであった。従って戦後インフレーション下においての新設は到底実行不可能な予算によっても既設の兵舎利用と統制資材を公定価格で入手するという特別措置によって改修を完了することができたのである。更に理由の二としては連隊跡の所在地たる多

紀郡篠山町は、郡民性極めて純朴で、工業地域としての発展性乏しく、静かにして住みよい学都として適当であったことである。なお理由の三としては、篠山町はローカル線福知山線の一駅にすぎないが、大阪、神戸へは約2時間で達することができ、時代の進展とともに経済的距離はますます短縮せられ、京阪神地帯につながる要衝地帯ともいえることであった。

更に学制の改革は相次いで実施せられ、教育基本法、学校教育法の公布（22年3月）によって新学制による新制高等学校の誕生と新制大学の発足が23年4月から実施せられるに至った。従ってその当然の結果として旧制度による大学の廃止が決定せられ、旧制大学予科の学生募集は24年度から停止し、25年度をもって閉鎖と決定せられ、神戸医科大学予科も開学以来わずか5カ年、即ち昭和26年3月最後の第6回修了式をもって終焉を告げることとなったのである。しかし、このことが明らかにせられたのは昭和23年1月のことで、篠山町としては正に大きいショックであった。24年度以降はもっぱら縮小の一途をたどりやがては消滅の運命にあったことは明らかで、折角学都として君臨したばかりの篠山町地元の人々の驚愕ぶりは筆舌にはつくし難いものがあった。地元では必然的にこれが対策をいかにすべきかを徹底的に論議しこれに代わる学校施設の実現を期する対策協議会が、23年1月早々に開かれた。

その顔ぶれは森予科長、渡辺地方事務所長、山口町村会長、飯田同副会長、藤本篠山町長、畑岡野村長、森本精一郎氏、野々口県議、西羅農学校長、父兄会側としては今村判事、山本秀雄、本山定治の諸氏が顔をつらね、正に地方有力者の殆んどを網羅してその熱意の烈しさを示すに充分なものがあった。

即ち一応考えられた具体案としては、これに代わって既往の設備を比較的能率よく利用し得るような理農科大学（仮称）を設置して摂丹の学生を中心として広く県内の優秀な学生を教育しようとする意向がつよく述べられた。協議の結果は理農科大学期成同盟会を設立することに決定、その準備委員長としては山口町村会長（大芋村長）をもってし、当日の出席者をもって委員とするとともに単に多紀郡のみに止まらず、氷上、有馬（現在の三田市全地域および神戸市の一部）の両郡にも呼びかけて運動を強力に展開することとなったのである。

医大予科への県の投資状況は、昭和21年度初めに100万円の創設費をもって連隊兵舎を改造し、21年6月より授業を開始、爾後の改造、内容設備中の資材の騰貴、労賃の値上げなどのため未完成のものについては、22年度追加予算の計上により特別教室の実験実習設備なども不完全ながらもできあがり、医大予科学生の授業ないし実験実習には支障のない程度にまで達しており、当時の設備を評価しても1500万円程度とみられ、これを活用する途としては農科ならびに農科に必要な基礎としての理科を加えた理農科大学の発展を期そうとしたものである。

かくして地元の多紀郡町村会を中心とし、その他有志の烈々たる情熱によって、廃滅の憂き目にあった医科大学予科の設備を大巾に利用する理農科大学(註)の設置は当時篠山川改修問題とともに多紀郡としての大きい宿願となった。即ち岸田知事に陳情書を提出する一方郡選出の畑、野々口の両県議は山口町村会長、藤本篠山町長らとともに県内の与論の結集にもっぱら努めようとしたのである。

県議会での与論づくりに地元県議畑貞雄氏をはじめ地元有力者の想像を絶する努力と情熱の発露傾注があったこと元よりであるが、一方地方庁、地方議会がいかに農大設置を要望し必然性を認めたとしても、またいかに経費上の裏づけを保証したとしても、監督官庁たる文部省、ひいては中央教育審査委員会の査定承認なくしては何らの意義をも有するものでなかったことはいうまでもなく、また文部省当局は全国における大学設置の情勢を大局的に観察して、極めて公正に判断して適正に認可するものであったことは勿論で、何としても常に認可に値するものであることを認識せしめるとともに県当局ないしは県議会の意向如何を常に時期をみて中央に連絡することが極めて重要なことであったのである。

別章農大草創時を憶う座談会速記録或は随想録において舞台裏における幾多の要路に当った人々の努力や奇行を認めることができるが、一貫していえることは医大予科長森為三博士の献身的努力と同氏を取り巻く庶務を担当した人々

(註) 既設の医大予科の施設を活用することにより農科ならびに農科に必要な基礎としての理科を加えた「理農科大学」の発展を目指しての名称であるが、後年「農科大学」1本にしぼられた。

と、県側知事をはじめ教育課長以下関係係官と更には地元県議畑貞雄氏、藤本篠山町長、山口町村会長らの積みあげられ且結合せられた総合効果のもたらせた賜とみるべきであろう。

県立大学設置に対する県知事の考え方は、丁度この問題が取上げられようとした23年3月の第8回県議会における矢野善寛議員の質問に対する知事の答弁によって推測し得る。

即ち同県議会において矢野議員は岸田知事が隣県たる岡山における総合大学設置に賛成署名捺印したことを指摘して、「兵庫県内にも大学に昇格志望つよき高等専門学校が可成り多数あり、これらのものを総合して兵庫県総合大学設置という構想を今にして打ち立てなければいつの日に実現の可能性があるか、極めて見通しはよくない。知事の本当の肚を聞かせてほしい」との質問を行なった。これに対して知事は次のような答弁をされているが、戦後の兵庫県の行政を担う岸田知事の文教施策の一端をうかがい得るが、兵庫農科大学の新設もこの一環の線に沿うものとみることができる。

知事は「総合大学が過去において本県に設置し得なかったことは京都に官立の帝国大学が設置され、つづいて大阪に総合大学が設置された関係上、本県がいかに熱意をもって運動してもその実現は困難と考えられる。私が一昨年来県就任後間もなく県立医学専門学校の昇格が県内の与論として問題視せられていたのでこれを採りあげて当時の県会の御協賛を経て単科大学として発足、爾後堅実な発展をみているのである。またその後教育制度の改正によって新制大学制度実施のこととなり、官立の単科大学は24年度より、また公立ならびに私立大学は23年度より実現されることとなって、現在の県立経済専門学校を単科大学としての商科大学としたいと考え、目下政府に運動中である。今日においては単に単科大学を作るというだけでなく、将来できれば総合大学を本県におきたいということは頭初よりの私の熱意であり、恐らくまた県民各位もそのような与論を作っておられることとおもう。しかし少くとも総合大学の建設には相当の施設も必要とせられるし、また大学の性格上、施設以上に優秀な教授陣容の構成が第一条件で、一朝一夕に大がかりな建設は困難とおもう。従って医学部、商経学部のように基盤のあるところからやり始めて、県立大学を作り出し

たいと考えている。

またできるだけ早く県会の御意見を採り入れるためにも、大学制度設置に関する委員会をも作ってみたいと考える。」

—ここにはこの他に岡山大学に対する署名問題についての釈明がなされているが省略—

これによっても明らかなように、岸田知事は就任間もなくより、県立大学としての総合性をもったものを漸次設置していくことを鮮明にしていたことが肯づかれる。従って後に設置するに至った兵庫農科大学も既にこの知事の声明的な発言によってその実現が約束づけられていたともいえよう。

要するに岸田知事の肚の中には、国立神戸大学が今日のような発展を遂げることは全く考えの外にあり、ただ県独自の県立大学からなる大学の総合化の実現の対象として考え、ひたすらその長期的実現を夢みていられたのであろうと推測される。

こうした中にあって、23年3月ないし4月の間に、前述の畑貞雄県議の周到緻密な全県議への農科大学設置に関してこの周知徹底運動は極めて短時日の間において功を奏したものといわねばならない。即ち正木県会議長を始め多数の県会議員は相次いで現地視察を行なって何れもが賛意を表し、その実現には心からの努力を惜しまぬことを確約していたことによっても、着々と基本的な柱が打ち立てられていたことがわかる。

県会内にも大学設立委員会が設けられるに至り、4月12日県会教育委員一行10数名が調査のため篠山町に馳せ参じ、医大予科の諸施設を視察した。

23年5月畑県議は篠山川改修工事実現促進のため建設院はじめ衆議院、参議院に陳情した傍ら医大予科の新制農科大学へ切り替え設立に関しても詳細に説明して廻りその充分な理解を得ることに努めた。このことは再三にわたって行なわれた。正規の設置申請書を提出するに先だち、その円滑に認可を得るためにも、文部省当局に対する準備的行動として少くとも中央官庁を理解せしめるため執られた万全の策といわざるを得ない。

23年6月23、24日の両日にわたり、畑県議、山口町村会長、森予科長、脇田町村会事務局長らは県恩賀課長、松永主事らとともに上京、先ず森戸文相に農

大設立の趣旨を具体的に説明し可成り力づよい同意を得て大きい効果をあげ得た模様である。

戦後の復興はかばかしからぬ当時において現今のような東海道新幹線の存在は元よりなく、交通、経済等すべての点において不自由だっただけに上京は並大抵のことではなかったわけで、県を始め地元お歴々の上京が相次いで行われたのは旺盛な熱情なしには到底なし得ないことであったとおもわれる。

かくして兵庫農大設置の気運は盛りあがり、兵庫県会は23年7月8日議員総会を開催、7月20日までには中央教育審査委員会に対して大学設置案を提出する必要に迫られていたので、旧制姫路高等学校より県立工業大学設立、医大予科より県立農科大学設立の二案を上程して満場一致で可決するとともに次の設立意見書とともに設置認可申請書を中央に提出する運びとなったのである。

同意見書は議員総会の名の下に篠山町の自然環境などを勘案して、その最適地なることを理由とし、且本県が従来近畿一の農業県であるに拘わらず未だに農業専門学校以上の学校を有していないことなどによってその設立を必要とする旨を強調したものである。

設立意見書をここに掲記する。

県立新制農科大学設立意見書

兵庫県はわが国屈指の農業県でありながら従来農業専門学校がなかったため農業専門教育をうけるのには遠く他府県に遊学したので父兄の負担は莫大なものがあります。

その上農学は本来適地適作の理に従い本県農業を対象としてもっとも適切なる農業経営の研究と農業指導者の養成は喫緊の要事であります。この趣旨よりして篠山の医科大学予科の設備内容を転用して明年度より新制農科大学を設置されるならば、同地が郷土的伝統、環境よりみて教育適地であることならびに各種必要施設に恵まれている点より勘案してもっとも適切なことと思われるので県として適当な措置をとられたい。

右決議する

昭和23年7月8日

兵庫県会議員総会

この総会の結びとしての岸田知事の挨拶を次に記す。

「最後に一言御礼を申上げます。

本日学務課長より説明かたがたお願い致しました姫路工業大学並びに篠山農科大学新設の件について議員総会において極めて適切なる御意見の御決定を満場一致をもって頂きましたことはわれわれ当局においても誠に有難くまた力づよい感を深くするわけであります。

御承知の通り両大学とも一は現に工業高等学校と併置という形となりますし他の一は全然関係のない施設を新設するというようなことで、今後ともこの施設まで到達するには相当文部当局なり大学設置委員会通過の上に困難が段々あると存じますが、幸い斯様な県会議員総会の総意を頂きました上は、私始め当局は何とかして皆様の御期待に副う様、懸命の努力をしたい考えでありますのでこの上とも宜しく御指導御協力を賜わりたいと存じます。

この際一言御礼申上げます。」

第 2 節　設置認可申請書の提出

第1節の叙述の通り、県会のつよい柱を背景として県の県立農科大学設置の根本方針は確固のものとなり、一路目的の達成に岸田知事自身も7月12日直接篠山町に出張、医大予科の現施設に対する詳細視察を行ない、つづいて7月13日来篠した芦田首相を迎えてその歓談の中にも農科大学設置のつよい陳情が行なわれた模様である。

ここに農科大学設置の認可申請書の提出ということになるのであるが、その内容を抜萃してみると次の通りである。

(ア) **目的と使命**

わが国特に兵庫県における農業全般の進歩発達に貢献するために農学の学理と応用を研究し、教養高き農学者、農業技術者等を養成することを目的および使命とする。

(イ) **名　称**

兵庫県立農科大学（後に「兵庫農科大学」と改称した）

(ウ) **位　置**

a　本　校

兵庫県多紀郡岡野村東浜谷
旧歩兵第70連隊兵舎跡

b　実習農場　（第1－1表参照）	
i　多紀郡岡野村東浜谷本校隣接地	15,000坪
ii　多紀郡南河内村東木ノ部	10,652
iii　多紀郡日置村井上	2,700
iv　多紀郡城北村藤岡奥岩谷ノ坪	2,292
v　川辺郡良元村小林	44,850
vi　明石市王子町 365	42,665
vii　朝来郡和田山町	14,103
c　放牧地	6,000
d　放牧林	15,000
e　演習林	172,680

(エ) **校　地**（現在兵庫県立医科大学予科の校地）

総坪数　11,208坪　（運動場 3,300坪を含む）

(オ) **校地建物**

大学構内の建物は既設の県立医科大学予科の建物を転用する

これによってみると第1農場たる本校隣接地の5町歩の農地は隣接する県立篠山農業高等学校の実習地約9町8反歩のほぼ½に当り、同校西羅校長は既に23年8月1日付で全実習地9町8反歩の農科大学との共用について承諾書を提出して来ていた。

また第2、第3農場は郡西部指導農場、東部指導農場として経営されていたものであり、放牧林候補地たる城北村知足所在の5町歩とともにその所有者ないし管理者の分譲方承諾書が付せられている。また郡町村会長山口房次郎氏よりその管理に属する郡農業会建物392坪、郡公会堂建物158坪、郡農業会郡公会堂敷地2,199坪などの分譲承諾書も附せられ、正に地元農業高等学校、農業会を始め諸団体は挙って農科大学設置に全幅の協力をおしまない体制を布いたものとみてよい。

またこのような体制をもたらせた地元県議、町村会などのつよい協力や、これまでに漕ぎつけた医大予科長をはじめ関係庶務当事者の努力は激賞の価値がある。

なお農科大学を篠山町に設置することを適当とする理由を申請書にみると次の通り記されている。

①教育最高機関の地方分散を図るとともに特に高地寒冷地農業経営の研究に適

すること

②実習地の獲得容易であり、且校舎が充分の面積を有すること

③篠山町は極めて閑静な地であって教育環境として最適であること

少くとも上述の②の理由によって既設校舎の利用、実習地の獲得など地元の好意もあってその新設には格好の条件を提供したことがあげられるとともに、①の理由により農学科としての使命が高地寒冷地における農業経営の研究におかれることが当初標榜せられたことも注意すべきである。③の理由は自他ともに認める閑静な教育環境として何人にも納得されるところであろう。

第 3 節　申請書に基づく設置委員の調査

前2節に述べたような経緯の下に県当局は勿論県会をあげて単独農科大学の設置に専念するに至ったのであるが、認可するのは文部省であり、また大学設置委員会の充分な認識を得ることが必要であったため、地元県議、地元町村会、転化の主体たる医科大学予科長らは県教育課関係主脳との陳情上京を再三にわたって行ない、文部省当局の認識を漸次深めていったことはいうまでもない。しかも交通地獄と物資食糧難に喘ぐ苦難の時代に直面しつつ一大学の設置のために全く私利私欲を度外視して没頭した地元、医大予科、県などの関係者たちの目にみえない努力は何ものにも代えがたい尊いものであったに相違なく、読者は別章の座談会速記録を精読して想像せられたい。

当時農科大学創設のための予算は全くなく、陳情のため頻繁に上京する旅費のやりくり算段は医大予科の事務の衝にあった小島良君によって何とか行なわれたのであり、当時の町村会事務局長たりし脇田氏の苦心もさこそと推測される。

申請書は既に作成されていたが、提出したのは8月上旬(6日とおもわれる)畑貞雄県議、藤本篠山町長、森医大予科長、堀県教育課長らの一行の上京の際であり、文部省専門教育課を訪問、上田薫視学官、坂本事務官らの指示を受けた由である。

次いで8月7日には文部次官、針山大学教育課長、日高専門教育課長らとも面談、更に首相官邸に丹波出身の有田官房次長を訪問して今後の援助方を懇願

した。

なお大学設置委員長たる和田東大総長を訪ね、また農学の権威たる千葉大学竹田教授に面接農科大学設置についての指示をうけた。

この陳情上京はやがて8月中旬の上田視学官の篠山への現地視察を促進することとなり、24年度を期して新設に踏み切ろうとする兵庫農科大学の前途に対し光明を与えることとなったといえる。

上田視学官は8月14日県恩賀課長とともに来篠、申請中の医科大学予科の校舎を視察、翌15日は元練兵場（農場候補地）と農大附属農場とみられる南河内村木ノ部、日置村井上の県指導農場と良元村小林所在の県立農業試験場分場を専門的立場から視察したが、その態度からも同事務官は篠山町を学都にすることには協調的であったようである。

次いで農科大学設置の決め手ともなる重大な視察が行なわれることとなった。それは、23年11月17日—18日の両日にわたって大学設置委員全員、既に県が農大設置のため委嘱した京大農学部教授団、文部省当局者を迎え、県側としては岸田知事始め県当局首脳部、摂丹、但馬の全県会議員、県会両党幹事長らが来篠、地元としては森予科長、山口期成同盟会長、藤本篠山町長ら関係者全員が出席、実に大学設置運動始まって以来の大規模な視察ということができる。

前夜（16日）の懇談会における岸田知事の挨拶は次の如きものである。

『篠山町に県立農大を設置することは県下の与論である。県当局、県会をあげてこれが設置を要望し、地元もまた非常な熱意をもってその設置を期している。

本日はこのことについて各方面の関係者が揃って参会していることでも御承知願いたい。

御出張の各位には充分御視察の上、是非県民の熱望を容れて頂くよう格段の御配意をお願い申し上げる次第である。』

これに対する大学設置委員代表桑田委員の答礼は次の通りである。

『私たち一行は命令をうけて視察に参ったので、それ以外の権限は許されていないが、岸田知事のお言葉の通り県民の熱意、与論をそのまま中央に詳細報

告することとしたい。』

この視察の日程は次の通りであった。

11月17日、午前中一行は土地の環境調査のため、王地山公園、旧篠山城趾に登り全町および周辺の状況を視察し、学都として環境、条件を調べた。

午後は医大予科の校舎、授業状況、各種施設、隣接農場、南河内村木ノ部県指導農場などを視察の後、書類審査を行なった。

11月18日　一行篠山町出発、川辺郡良元村の園芸試験場を視察後帰京した。

兵庫農科大学設置は同委員会の本視察の結果報告に基づき本省で開かれる大学設置委員会に議せられて始めて決定されるのである。

由来、兵庫農科大学の設置は他の多くの場合にみるような専門学校の昇格とは異なり、単なる医科大学予科校舎ならびに諸施設の転用を機としての全くの新設である点で農科大学としての設備、内容という点からすれば、なお多くの不備難色のあることは明らかであり、従ってこれらの欠陥を是正するための措置を執らない限り、認可されるには可成りの問題があるものとみられた。このことは郷土出身の有田喜一氏よりの次の如き連絡によって明らかである。即ち大学設置委員の一行は帰京後兵庫農科大学の設置について委員会を開いた結果なお最後的の可否を決定するに至らず、更に設備完備の方法や経営面についての具体的な再調査の上で決定することに方針を決めたとのことである。

一方県では23年12月5日、出井多紀地方事務所長、山口町村会長（大学設置期成同盟会長）畑、野々口の2県議を招致して協議の結果、12月8日の議員総会に県会に上程すべき農大設備費の金額1,000万円計上ということに落着いた。

12月県会における農科大学設置準備金支出についての知事説明の要旨(抜萃)は次の通りである。

「次に教育関係におきましては、本県がわが国屈指の農業県なるに鑑みまして、これが農業指導者を養成することが喫緊事でありますので、かねてより議員各位の御賛成を得て多紀郡篠山町に現存する医科大学予科の設備内容を転用し、新制農科大学を設置しようとしているのでありますが、何分大学設置委員会において相当高度の規準に基づいて審査されますので、取敢えずこれが設置

準備に要する経費として1,000万円を計上致した次第であります。」

なお12月9日県会常任教育委員は急遽篠山に出張、医大予科と篠山農業高校の現状を詳細に視察し、設備拡充の具体化を急ぐこととなった。これと相前後して篠山農大設置準備委員会が結成せられ、諸々の面においての農大の完成への体制がととのえられたとみるべきである。

その顔ぶれをみると、県側では、副知事、総務部長、教育部長、議事課長、教育課長、庶務課長、県教育委員、県会教育常任委員、京都大学農学部教授3名、地元としては、畑、野々口両県議、出井地方事務所長外2名、山口町村会長、藤本篠山町長、畑畑村長、西尾大山村長、波部日置村長、小谷城北村長、畑岡野村長、学校側として森予科長、西羅前篠山農高校長、片倉篠山農高校長外2教官、稲山建蔵氏らであり、その初会合を12月16日に開き、終始熱心な討議が行なわれたが、全員この機を失しては悔いを将来永遠に残すことが必至であるとし、再度の調査を受けるまでに設備を完全に充実するため23年12月末までに実験室、図書機械器具、農機具を準備することを申合わせた。

また、この間地元側有力者たる出井多紀地方事務所長、畑貞雄県議、山口、飯田両正副町村会長、西羅前、片倉現篠山農高校長らは農大設置問題と関連して上県、県当局と協議の末、篠山農高を新設の農大の附属高校として包含されることに内定した。このことも文部省に対して、附属高校を包含する農大の誕生として好感を抱かしめる好材料とみてよかろう。

これらの措置がいかに適宜行なわれても、これを文部省に連絡して再度の視察を懇請しなければすべては水泡に帰する憂があったので、12月13日、14日にわたって森予科長は岸田県知事、県会議長、総務部長らとともに上京して文部省当局、大学設置委員らに対して上記準備委員会の決議により徹底的に設備充実に着手しつつあり、是非来春早々に再度視察願いたき旨陳情をなし、文部省当局、大学設置委員も再視察の確約を与えたのである。

県において計上をみた1,000万円の使途については検討の結果、実験室5カ所の電気水道設備ならびにそれに附帯した一切の改造工事を500万円で完成、残り500万円は図書、機械、機具、農機具、設備購入費に充てて県所有のトラックを総動員して、24年1月3日までにその充実を期することとなった。

23年12月末から24年1月への歳末新春の公務員の「1年を通じて甲羅を干す唯一の6日間」の間にも医大予科の諸施設はその内容を一変したのである。即ち上述の500万円の工事（実験室5カ所の電気、水道設備とそれに附帯する工事一切）を地元2業者の協力によって完成し、更に図書、機械、器具、農機具などの必要諸材料の購入も予科職員の協力によって迅速に進められた。

年の瀬ともいうべき12月26日には兵庫農科大学の設置指導に当っていた京都大学近藤金助農学部長を始め、並河、香川、榎本、片桐の各教授は県総務部長谷本氏、恩賀課長らとともに医大予科施設の整備状況を下見した。更に御用納めも過ぎた12月29日には文部省専門教育課主任、大学設置係坂本事務官の厚意にみちた指導的出張が試みられた。

これらの経緯を経て遂に昭和24年1月5日には大学設置委員の再度の視察をうけることとなったが、一行は吉松、寺沢、藤岡の3氏で、臼井、床井の2文部事務官とともに来篠、県側よりは吉川副知事、谷本総務部長、恩賀課長、半沢教育主事、加藤県会議長らが同席したが、その講評としては前回の11月の調査以後の短期間にも拘わらずその間の諸施設の意外な進捗ぶりが賞讃せられ、またトラクターを始め、精米機、製粉機、脱穀機、鋤、鍬などの農機具、顕微鏡、実験機具など諸機械機具類の整備と研究教室の完全な改造は特に多大の好印象を与えた模様である。

1月5日の大学設置委員の再度の視察に基いて論議せられた設置委員会の結果打診のため、岸田知事、森予科長、半沢教育主事の3名が上京したが、知事の帰庁談話は次の通りである。

「文部省でも設備の充実してきたのには驚いていた。再度の視察をした大学設置委員も同じような驚きを語っているとのことで、現在の段階ではわれわれの誠意と努力を高く買って呉れているようだから、農大設置はなんとかものになるだろうとおもう」と語られている。

なお再度の調査に次いで、いよいよ結びの調査ともみられる視察が1月31日農学部に対する専門的見地から専門委員として東京農業大学長佐藤寛次氏、東京大学農学部教授佐々木清綱氏の2氏によって行なわれた。

県側としては岸田知事、吉川副知事、谷本総務部長、恩賀学務課長、馬出納

長を始め、県会教育常任委員、地方県議、町村会代表者、地元地方事務所、主体たる医大予科長始め関係者更に京都大学関係委員など多数の関係者の出席があり、県ならびに地元の熱意を表明して農大設置実現を懇請するところがあった。この視察を最後の報告として、農大の新設は正式に決定をみることとなったということができる。

当日佐藤東京農大学長の昼食の席上談話の概要は次の通りである。

「ここへ来る前に氷上郡にお住まいの農学の権威者安藤広太郎博士にお出会いしたが、同博士からも裏日本における農大の設置は必要であるとくれぐれも篠山町での農大設置の実現をつよく依頼された。この度現実に候補校舎や諸施設をみて、本当に適当と思うからその実現のためには努力する心算である。」

同時に2氏は書類審査を行なった。

同席した吉川副知事はこの視察のかもし出した雰囲気から推断して、「農大の新設はますます有望になってきた」と前提して次のように語っている。

「佐藤東京農大学長は『農大設置の暁には地元の人々はよりよい学都の建設に精進していただきたい。同大学は全く新設であって更に理想的な条件を備え得る可能性があるわけである。こうした小さな街に大学が設置されることは恐らく全国でも始めてのことであろう』と断定を避けながらも極めて好意をもって語って下さった。県としてもこの趣旨を体して今後とも地元とも緊密な連絡をとって実現に努力する方針である。来る12日か13日には設置の可否が判明するであろう。」

次いで2月15日懸案の篠山川改修の実現促進を兼ねて農大設置問題陳情のため上京した多紀郡選出の畑、野々口両県議、藤本篠山町長らは文部省大学局長、次官からその後の情勢を聴取したが、何れも「安心せよ」との回答があり、佐々木代議士からも大学設置内定の電報があって事態は極めて有利に展開したようである。

文部省では3月1日から3日まで開かれた大学設置委員会において、県ならびに地元の誠意を認めて県立農科大学の設置を全員一致をもって承認することとなり、大学設置総委員会で確定した。その結果は3月25日の大学設置認可となったのである。

満1カ年有余にわたる森予科長を中心とし、兵庫県当局、地元町村会などの努力は報いられ、篠山町には全国的にも異例ともみられる新制農科大学が雄々しくも設置せられたのである。

その喜びひとしおの森予科長は感慨を次の通り述べた。

「最初農科大学を設立しようとしたときは純粋の医大予科として鍬一つないところだったため、他の農専を昇格する場合と違って母体がなく相当苦労したが、幸い地元を始め、県当局、京大農学部の教授の方々、文部省当局などの御協力によって漸く実現の運びとなった。その上拡充の際、県当局から1,000万円を出してもらったので急速に農科大学としての設備を充実することができた。これは設置認可を獲得する上において大きい力となった。

県当局のこの措置は誠に機宜を得たものというべく、本当に嬉しい。」

第4節　認可指令の通達

遂に24年3月25日付をもって、時の文部大臣高瀬荘太郎の名によって認可指令のあったことが明らかにされた。（別掲）

その設置条件としては次の5項目があげられている。

①一般教養図書ならびに専門図書殊に外国書を更に充実すること

②農場の整備を行なうこと

③予定されている校舎、実験、実習研究施設の改修および整備を完了すること

④学年進行に伴ない必要な専任教員の補充をなすこと

⑤以上の各事項とも、実施につき報告を徴し必要ある場合は委員会として実地視察をする。なお教員組織については充実に至るまで大学設置委員会に協議しなければならない。

要するに教員、図書館、農場などを始め、農科大学として態様の整備充実に専らつとむべきことが条件として要請せられたのであり、認可の時点における欠を補なうためのあらゆる努力が求められている。

なお申請書に記載した農場を参考のため第1—1表により示しておく。

兵学二号
昭和二十四年三月二十五日
文部省学校教育局長

兵庫県知事殿

大学設置認可について

昭和二十三年七月一日附をもって申請の標記のことについては別紙指令の通り認可になったから右御了承の上指令に示された条件の実施について万遺漏のないよう御取計い願いたい。

兵学二号
兵庫県立農科大学設立者
兵庫県

昭和二十三年七月一日をもって申請の学校教育法による兵庫県立農科大学設置のことは、大学設置委員会の答申に基づき次の様に認可する。

昭和二十四年三月二十五日
文部大臣　高瀬荘太郎

一、位　置　兵庫県多紀郡岡野村東浜谷
二、学部学科　農学部農学科
三、開設学年　第一学年
四、開設時期　昭和二十四年四月
五、設置条件
(一) 一般教養図書並に専門図書殊に外国書を、更に充実すること
(二) 農場の整備を行なうこと
(三) 予定されている校舎、実験、実習研究施設の改修及び整備を完了すること
(四) 学年進行に伴ない必要な専任教員の補充をなすこと
(五) 以上の事項については、その実施につき報告を徴しまた必要ある場合は委員会として、実施視察をする。なお教員組織については、その充実に至るまで大学設置委員会に協議しなければならない。

（設置認可に関する通達の写し）

第1－1表

当初申請書に記載された農場

農　場	面　積	所　在　地	距　離	備　考
第一農場	49,585.50㎡	兵庫県多紀郡岡野村東浜谷	本学正門前の畑地	篠山農業高等学校より分譲
第二 〃	35,212.31	仝　南河内村東木の部	本学より3粁西方	多紀郡西部指導農場
第三 〃	8,925.39	仝　日置村井上	仝　4粁東方	仝　東部指導農場
第四 〃	7,576.66	仝　城北村藤岡奥岩屋の坪	仝　2粁東北方	東窟寺所有
第五 〃	＜68,923.84 79,336.80	川辺郡良元村小林	仝汽車で1時間余	＜県園芸試作場 県園芸宝塚分場
第六 〃	141,037.69	明石市王子町365	仝汽車で3時間余	県立農業試験場
第七 〃	46,620.28	朝来郡和田山町	仝汽車で2時間余	県立但馬分場
計	437,218.47			
放牧地	19,834.20	多紀郡岡野村東浜谷	本学隣接地	篠山農業高等学校
放牧林	49,585.50	仝　城北村知足	仝　4粁北方	—
放牧林	570,828.27	仝　畑村火打岩字畑山	仝　5粁東北方	—
計	640,247.97			
総　計	1,077,466.44			

第5節　初代学長の決定

設置認可を得た場合、早急に人事、施設その他実際に当るべきは学長でありその選考も急を要したことであったことは元よりである。

兵庫農科大学設置に関し県から委託されていた京都大学農学部長近藤金助氏を主とし、同大学農学部教授並河功、香川冬夫、榎本中衛、片桐英郎氏ら4教授の間において慎重詮衡の末、初代学長としては、元台北帝国大学農学部長と

して活躍せられた生物化学界の権威たる三宅捷博士を起用することに決定した。

同氏の略歴を紹介すれば、大正7年北海道帝国大学農科大学農芸化学科を卒業、北海道帝国大学助手、助教授を歴任後、大正15年1月農学博士の学位を獲得後台湾総督府高等農林学校教授として赴任、同年2月より2カ年間台湾総督府在外研究員を命ぜられ、イギリス、ドイツ、スイスおよびアメリカの4カ国に在留した。

昭和3年台北帝国大学の設置されるや同大学教授に任ぜられ理農学部生物化学講座を担当、また台湾総督府技師を兼任、更に昭和18年より農学部長に補せられ終戦を迎えたが、国立台湾大学農学院に留用せられ、23年6月自然退官され帰国せられた。

帰国後23年10月より北海道大学農学部講師として母校に教鞭をとられていたが、既に台北帝国大学において農学部長の重責を果たされ、また農芸化学界にあっては炭水化物研究においては名声嘖々たる権威者たり、特にその傑出した政治的手腕と相まって戦後の新制大学として特色をもつ本大学の学長としては最適材と断言して可なりであろう。

第6節　むすび

兵庫県立農科大学は県立神戸医科大学予科制度の廃止に伴ない、その施設転用とともに農業県たる兵庫県での農学部関係大学新設という理念を実現し、いわゆる草ぶかい丹波の一城下町を有力候補地としてここに設置の実を結んだのは森予科長を柱とし、県知事を始め、地元有力者の着実な活動によるものと断じてよいが、この成果をもたらせた原動力は基本的中心施設たる医大予科の長森為三博士の牢固たる農大設立への信念によるものとみなければならない。同博士の学者としての偉大さはここに詳述することを避けるが、一点のみ記しておきたい。

文部省大学設置委員会一行の視察により、ある特定施設の欠如を揶揄的に指摘せられたような場合、これに立会った地元側或は予科職員たちはもうこれで絶望だとして悲観的となり憂うつなムードに包まれていても、森氏は「一つ一

つ指摘されたことを忠実に少しでも前の視察のときよりもよりよくしてそれだけ前進したことをみて頂ければこれに越したことはありません。誠実をもって物事に当れば決して失敗することはありません」と終始自信と執心の人柄を披瀝せられ、予科の庶務に当る人々を激励せられたという。再三にわたる設置委員会のきびしい視察に対しても不撓不屈の農大設置の情熱によって常に七転び八起きの精神をもってつらぬきつづけられた結果の賜とみてよいであろう。

しかもこの情熱溢れる予科長の下に事務担当の小島良、森秀二、足立隆夫の3君は当時は青年職員として常に予科長の趣旨を体して最善をつくし、視察の都度要求されたもろもろの書類の作成に没頭して職責を全うした。

直接表面にあらわれた功績は知事、副知事、森予科長、畑県議の人人に帰せられはしても、勇将の下に弱卒なしのたとえの通り、急場急場に当って適切な書類の作成をなしまた適宜の措置を講じて兵庫農大が生まれ出ずる状態にまでもってきたこれら陰の人たちの努力をこそ高く評価すべきであろう。

農大の新設とともに必要とされるものは教職員住宅の建設であり、24年3月県資材課長来篠、王地山梅ケ谷（敷地380坪）青山城趾（敷地450坪）を候補地として、2カ所に10戸ずつを新築することとなった。

これらの候補地中、王地山住宅は丹陽組に落札早速工事が進められたが、青山城趾は郡有でしかも史蹟として存置すべしとの予想外の反対があり、青山邸の一部300坪を借受けることに変更して農大教職員住宅10戸が建築せられることとなった。

元より梅ケ谷と北新町とでは決して充分とはいえず、なお昭和26年、28年、更に30年と西新町、郡家、河原町に約80戸の県営或は町営住宅が建設せられ、結局は農大教職員の需要に応ずることができたのである。

かくして生まれた兵庫農科大学はただ開学の式典をまつばかりになったが、県の首長たる岸田知事の満ち足りた欣びはひとしおのものがあり、その随想録においても充分表現されているが、次の二句は同知事のものされたものでありここに追記しておく。

大学の建つ篠山や青嵐

大学の門標かけて樟若葉

第2章　草創期の兵庫農科大学

第 1 節　開学式の開催

兵庫農科大学誕生の時点を画したものは昭和24年 5 月20日に開かれた開学式であろう。

神戸医大予科という前身はあったとはいうものの全く畑ちがいの農学部を包摂する農科単科大学が、戦時下の精兵を鍛え抜いたいわゆる「つわものどもの夢の跡」を根城として当時駅弁をすら売っていなかった町に設立せられたのである。（地方新制大学の呼称を「駅弁大学」で表現するものが多かったが、本学は未だ駅弁大学にも至らなかった。）

開学式は多数の来賓を迎えて教職員全員と欣びに満ちた新入学生を網羅していとも厳粛の裡に催された。

当日の主な祝辞、式辞の大要を次に記しておこう。

(1)　文部大臣祝辞

新らしくできた制度のもとに運営される大学の機能を充分に発揮することはなかなか至難のこととおもわれる。そのためにする設備の整備、内容の刷新のためにも、学校当局の一段の努力が望まれるのである。ここに本大学の発足について関係各位の御労苦に感謝するとともに教職員、学生諸君が新制度の趣旨を充分体して真理探究と人間完成への熱意に燃えられ、学園は堅く結束、独自の学風を樹立しもって使命の達成に進まれんことを希望する。

(2)　知事式辞

わが兵庫県は10万 5 千町歩の耕地、54万町歩の山林を有する一大農林業県であるとともに関西でも高度な消費地でもあるが、それにもかかわらず農林業に対する最高教育機関を欠いていた。ここに県会の充分な御理解と地元の熱意と中央の大学設置委員会の御懇切な御指導によって当地に本大学の誕生をみたのであって欣快に堪えない。

本大学の所在地は正に学都としてふさわしい街であり、本学の発展はやがて農学、農業に対する最高の理論を究めるとともにこれを直ちに実地に応用し、

地方産業の啓発に貢献されることとなることは必然であるが、すべては将来に期待されることとなる。

学長を始め、教職員、学生が一体となられて本学設立の目的完遂と光輝ある学風の樹立に邁進されんことを期待してやまない。

(3) 学長式辞

県知事はじめ県当局、文部当局、大学設置委員、京都大学農学部の諸先生、地元の各位の甚大な御尽力により本日ここに開学式を催おすに至ったことを心から感謝するとともに本大学の完成に努力することをお誓いする。

現今の如き日本の革命期に一歩を踏み出す本大学当事者として大いに考慮すべき必要があるとおもう。

本大学の現時局下においての使命は食糧問題の解決であり、そのための直接的方法としては農産物の増産とこれら農産物の合理的利用と合理的分配とでなれけばならない。

「本大学当面の使命としては本県を対象として農業全般の進歩発展に貢献するため農学の学理を研究し応用し教養高き農学者、農業技術者の養成をなすことであり、ひたすらこの使命の達成に努め、やがては全世界の文化ならびに全人類の幸福のため寄与して大学の国際的性格を満足せしめようとすることである。」……三宅博

しかしながら現時下にあっては本大学が万事不整備なことは御覧の通りであり、この重責を担う私は誠心誠意努力を致す覚悟である。

何卒皆々様の今後本大学のための精神的、物質的な御援助を心からお願いする次第である。

特に三宅学長の切々たる新設大学へ傾ける情熱はやがて展開されんとする草創期での人的物的資源の整備、完成期への躍進が約束づけられたかの如くであった。

また大学の国際的性格云々を論じておられるのは本学が完成期にブラジル、カンボジアその他東南アジア諸国の開発指導などに寄与するに至った事実や、後年移民学講座を新設して全学に海外進出の気運をみなぎらせた事実などがこ

れを裏書きしているものといえよう。

第 2 節　教授陣容の整備

昭和24年 5 月20日に開学式をあげることができた県立兵庫農科大学は学校の年度始めとせられる 4 月上旬にスタートを切れなかったが、そこには手続き上入試、新入学生の決定、新入学生に対する寄宿舎の改築などの手順があり、大学設置認可が 3 月25日であったことからみてもその間の50ないし60日の経過は当然とみなければならぬ。むしろこれらの幕間にあって蔭の人々のその間におけるもろもろの仕事を遺憾なく仕遂げた功績をこそ讃えて然るべきであろう。

三宅学長は北海道より赴任され、氏独特の秀れたる農大建設のつよい情熱に然えつつ、きびしい創設の日々を励みつづけられた。

昭和24年度は農学科50名を70名の中から選抜入学許可をしたが、これに対しての教養 1 年目のコースであっただけに、教科の運営は既往医大予科の教官をもって概ね充当することができたのである。

しかし24年入学の学生が 2 年目を迎えた25年度には必然的に専門科目担当教官の新任を必要とするに至った。

24年10月 4 日の教官会議において、作物第 1（食用作物、飼料作物）、作物第 2（工芸作物）、育種学、作物保護学、食飼化学、農産加工学、畜産学、土壌肥料学、農場など専門学科目の講座が増設せられることを決定した。

県の基本的方針としては、人事については飽くまでも三宅学長の裁断にまつとともに、京都大学農学部長近藤金助博士および教授たりし並河功、香川冬夫榎本中衛、片桐英郎の 4 博士を県立農科大学設置委員として嘱託してその指導を受けることを原則とした。これによって人選は極めて至公至平に且迅速に進められ、しかも優秀なスタッフが短時日の内に揃えられた。

兼任教授として和牛の権威羽部義孝教授、兼任講師としては榎本教授、小林教授、片桐教授、渡辺教授らの顔ぶれがならんだことをもってしても、当初京都大学農学部の教授陣がいかに本学の創設に好意を示されたかがわかる。

昭和24年 4 月入学を許可せられた農学科学生が第 1 回卒業生として巣立つ27

年度までの4カ年間に整えるべきものは大学設置基準に則した施設の充実は元よりであるが、何にもまして重視されるべきものは教授陣容であり、その整備に日夜没頭した三宅学長の異常な努力は逐年それぞれの学界における権威者または中堅的優秀人材を網羅することができた。このことは後年の体質改善、ひいては国立移管への途とも相通ずるものがあった。

三宅学長の意図されたものは少くとも旧制の帝国大学の組織に準ずる講座制の確立であり、当初実験講座は教授1、助教授1、助手2の定員の確保に努められた。——これは予算の関係で後には1、1、1となったが。——

なお附記しておきたいことは、草創期4カ年間に採用された助教授、助手のうち、その大部分のものは上席教授の停年退官とともに教授に昇格、或は研鑽の上学位を授与せられたものもあり、当初における人選、せん考がいかに正鵠をえたものであったかが裏づけられる。

更に草創第2—3年目にして学科増設の偉業が遂行されるが、当初の講座設置においてもその色彩があらわれていたことはたとえ県当局の協力はあったとしても三宅学長の深慮にまつところ極めて大であることを強調しておきたい。

即ち当初提出の大学設置認可申請書には専門学科としては農学科のみに止まり、講座数は11で、作物学、育種学および栽培学、果樹園芸学、そさい園芸学、畜産学、農業工学、植物保護学、土壌学および肥料学、農産加工学、食飼化学、農業経営学と可成り広範囲にわたった学科目が網羅されていた。中でも土壌学および肥料学、食飼化学、畜産学などの学科目は農学科課程のみの運営の考え方よりすれば非常勤講師をもっても事足りたであろう。

しかし既存の医科大学予科教官を主軸とする一般教養教授陣の優秀さを考えるとき、単に1学年40人程度の農学科のみでは極めて非能率であり、既に県会においても設置の希望のつよかった農芸化学科、畜産学科の増設も予想されての構想であったことが推測されるのである。（第2—1表参照）

即ち本学開設当時、既に全盛時の兵庫農科大学の3学科を形成すべくその基礎は既に築かれていたといっても過言ではない。

例を一般教養の講座にとってみても化学第1、化学第2、物理学第1、物理学第2、生物学第1、生物学第2という如く、基礎的自然科学の学科目におい

て、既にキメ細かく内容によってそれぞれ1講座を形成し、2学科の増設も当然の成り行きであったともいえる。

一方専門学科教官は或は三宅学長の徳を慕い或はフレッシュな新制大学に奉職して教育、研究に没頭せんとする有為有能の学徒がそれぞれ出身大学または恩師の紹介を通じて逐年本学に赴任してきたが、若きは24—5才より60才前後の年配者に至るまで気力に充ち溢れて教鞭をとった。

また馳せ参じた古参考巧教授（農産製造の浜口教授の如き）は更によき後輩教官の来任を招き、期せずして短日月のうちに豊富な教授陣営を形成した。このことは後年の体質改善の完遂或は国立移管への転換を円滑ならしめる大きい役割を演じたことはいうまでもない。

なお当初年度たる24年度に神戸医大予科より引きつづき兵庫農大職員として就任したものは第2—1表の通りであり、草創期（24—28年度）の教職員の採用状況は第2—2表の通りである。

第2－1表　**神戸医大予科より引つづき就任した職員**（就任年月順）

氏名	就任時職名	就任年月日	氏名	就任時職名	就任年月日
森　為三	教授	昭和24. 3. 26	中川てる子	傭人	昭和24. 4. 1
大安徳蔵	主事補	24. 4. 1	高橋よしの	〃	24. 4. 1
小山正雄	〃	24. 4. 1	小山芳松	守衛	24. 4. 10
森　秀二	〃	24. 4. 1	小島　良	主事	24. 4. 30
足立隆夫	〃	24. 4. 1	石井健三	助教授	24. 5. 31
広石昌代	雇	24. 4. 1	三浦義敬	〃	24. 5. 31
堀毛　昌	〃	24. 4. 1	斎藤義一	〃	24. 5. 31
山本　保	〃	24. 4. 1	竹内賢吉	〃	24. 5. 31
新家泰子	〃	24. 4. 1	高田英夫	〃	24. 5. 31
弓場年子	〃	24. 4. 1	松居　弘	〃	24. 5. 31
三原　栄	〃	24. 4. 1	西羅　寛	〃	24. 5. 31
藤木重藤	守衛	24. 4. 1	山取　博	助手	24. 5. 31
谷田忠次	〃	24. 4. 1	坂井保子	雇	24. 9. 15
畑中徳義	〃	24. 4. 1	山本賢治	助教授	25. 3. 31
（旧加藤）中村民之助	傭人	24. 4. 1	俣野　稔	助手	25. 3. 31
片瀬荘三郎	〃	24. 4. 1	前川円治	〃	25. 3. 31
谷田貞治郎	〃	24. 4. 1			

第２—２表

草創期における採用教官、助手人員

年　度	教　授	助教授	講　師	助　手	計
24	7	6		4	17
25	5	9	1	19	34
26	2	3	6	22	33
27	4		1	8	13
28	1	3		15	19
計	19	21	8	68	116

備考　計が28年度の現員数とは必ずしもならない

第３節　農芸化学科、畜産学科の増設と教職課程の設置

さきに提出ずみの農科大学設置申請書は当初計画として既設県立医科大学予科の自然廃止に伴なってその建物、設備などを転用してそれに適応する規模のものとして農学科一本にしぼってその設置を企図したものである。

後に実現をみた農芸化学科或は畜産学科の増設は当初岸田知事の脳裡には全くなかったのであろうか。

農科大学の設置が本格化して決定をみた23年度最終の定例県会における種継議員の畜産学科設置に関する質問に対する岸田知事の答弁は注目に値する。

これを摘記してみると「この点については同感であるが、新制大学設置に関する委員会は終戦後の経済復興の未だ完全でない現段階においても相当高度の標準を要請しその態度は極めてきびしいものがある。従ってこの際直ちに畜産学科を設けようとすれば、教授陣容ならびに物的施設の点において極めて多額の経費を要する関係上、結局当初にあっては農学科のみの農科大学にしなければならぬ事情に立ち至った。将来なるべく早い機会に畜産学科の設置を具現したいものと考えている。」と近い将来における畜産学科の設置をほのめかされ

ている。

更に2学科新設についての三宅学長の奔走の詳述はこれを省くが、24年9月県会においては、或は農業恐慌対策として或は農産物加工の必要性をも勘案して喫緊事項として遂に農芸化学科と併せて畜産学科の設置促進方を強調する意見書が提出せられたのである。

以上の経緯により、更に関係講座の人的、物的充実が急速に進められた結果本意見書提出1カ年後の25年9月25日学科増設認可申請書を文部大臣宛提出する運びに至った。

畜産学増設に関する種継議員の質問と知事答弁摘録

（昭和24年3月9日）

（種継新議員）

（前略）

次に予算編成の第2の方針は学運の振興という問題をとり上げられておりますので教育関係についてお尋ね致しますが、学制改革が進展致しまして、いよいよ新制大学が設置されることになっておりますが、本県はこの準備を早くより進められまして近くそれぞれ開校をみるということは詢に慶賀に堪えませぬ。篠山に設置される農業大学もいよいよ実現確実という見込みの由でありますが、従来各府県と比較しましてもっとも本県は農業教育機関が遅れておりますのを今回完備致しますことについては詢に欣快に存じます。併し乍らこの大学は他の大学に比較しまして詢に貧弱な感を与えます。内容は農業科のみが設置される。斯ういうことでありますが、本県の実情に即し畜産科を是非設置される要があることを私は強調するものであります。

畜産が国民栄養補給の上からみても、また農業経営の面から申しましても極めて重視すべきものであり且本県は御承知の通り全国一の畜産県であり、殊に但馬の和牛、淡路、氷上の酪農等全国的に既に特色をもっているのでありまして、現在の構想においてはいささか貧弱な感があります。この篠山の農科大学に是非畜産科を設置せられるよう希望してやまぬのであります。知事の御所見をお伺い致します。

（岸田知事答弁）

御承知の通り姫路の工業大学と篠山の農科大学を県会方面でも大きくお採り上げになって実現方に当局も県会方面と一致協力して努力しているのであります。その点に関連して篠山の農科大学に畜産科がないことが不完全であり、また農科大学として無理だという点を指摘されたのであります。

これもお説の通りでありまして、われわれもできれば当初から畜産科も設置したいと考えておったのでありますが、新制大学設置に関する委員会におきましては多数の専門家によって構成されております関係上、大学の設置基準につきましては、この終

戦後の経済復興未だ完全でない現在の段階でもありますのに相当高度の標準を要請されているわけであります。そこでもしこの際直ちに畜産科を設けんとすれば教授陣容ならびに物的施設の点におきまして非常に多額の経費を要する関係上、結局農業科方面の農科大学だけにしなければならぬという事情に立ち至ったのであります。その点は特に御諒承願いますとともに県におきましても今後出来ればなるべく早い機会に畜産科の設置をも具現したいという考えで引続き研究中でありますから、左様御承知を願いたいと思います。

農芸化学科および畜産学科増設の意見書

兵庫県立農科大学に農芸化学科および畜産学科を増設せられたい。

理　由

本年篠山に農科大学設置の当初においては農学科に併せて農芸化学科を設置方申請のところ、その設備の点より考慮して専ら大学新設認可に重点をおく意味において当初は農学科のみを設置したのであるが、全国の農科大学に設置の農学部には農学科の外に必らず農芸化学科が併設しある現状より考え、更に近く来るべきを予想される農業恐慌に対処し、農業の多角経営化に資するため、農産物加工の理論および技術の指導者を養成し、他面本県の全国における畜産上に占める重要なる地位に鑑み、県財政と睨み合わせ適当なる時期に農芸化学科および畜産学科を設置し、これが科学的改良および生産増強を図り、もって農村の改善および輸出上に寄与せられんことを要望する。

右地方自治法第99条により意見書を提出する

昭和24年9月17日

兵庫県会議長　山　田　平　市　郎

兵庫県知事　岸　田　幸　雄　殿

更に増設理由の概要を次に述べよう。

本大学は昭和24年3月25日をもって新制大学として開設を認可せられ、農学科第2学年および第1学年の学生を教育中である。

昭和25年度当初予算において設備費として1,500万円を認められ、講座も17講座あり着々充実しつつあり、更に校舎延3,200坪、校舎敷地10,700坪および運動場3,500坪をも入手、既設建物を改造して新たに農芸化学科および畜産学科を増設する機運に至った。

本県は工業県であるとともにまた農業県としても全国で有力な地位を占めて

おり、戦後日本の再建は農村経済確立のためには農芸化学方面にも重要性が大いに加えられ、特に農産物を原料としてその化学的高度利用の必要に迫られ、一方農村の改善（農業所得の拡大）に役立つとともに他方輸出振興に寄与するためにも農芸化学科を増設して県における農業全般の進歩発達に貢献する目的のため農学の学理を研究、応用し教養高い農学者を養成しようとするものである。既に開設せられた農学科の講座の中には農芸化学の関係講座は3講座設置されており、今回更に3講座増設すれば6講座で農芸化学科の設置は可能である。

次に畜産関係では、和牛約12万頭もあり全国有数の地位にある本県では家畜の改良増産を図り、一方畜産製造特に皮革製造研究のために農芸化学科の設置とともにその重要性に鑑み畜産学科の設置を必要とするものであり、農学科設置に際し既に1講座が認められているので、専門学科として新たに5講座と教養学科1講座を増設する。

なお、この申請によって増設もしくは既設の新設2学科所属講座名は次の通りである。

(1) 農芸化学科　　講座数6　　（増設3講座）
※印

食飼化学	土壌学	農産加工学
※農産製造学	※肥料学	※生物化学

(2) 畜産学科　　講座数6　　（増設5講座）
※印

畜産学第1（繁殖）	※畜産学第2（飼養）
畜産学第3（利用）	畜産学第4（解剖）
畜産学第5（生理）	畜産学第6（獣医）

本申請書の提出により文部省においては大学設置委員会で協議の上、剣木文部事務次官通達により2学科の設置は承認せられるに至った。（別掲）

これにより、昭和26年度より農芸化学科30名、畜産学科25名の入学を許可することとなった。

なお2学科設置には次の4項目の附帯条件がつけられていた。

①建物、備品および牧場の整備を計画通り実施すること

②教員組織の強化を早急に進めること

③教員組織の充実については当分の間、大学設置審議会に協議すること

④大学の目的、使命達成のため、2年以内に必要な整備拡充を行ない、大学としての完成を期すること

本学設置の目的として「兵庫県における農業全般の進歩発達に貢献するため、本学において設置の各学科卒業生をして教養高い教育者たらしめること」も設置の趣旨に則して極めて緊切なことであった。

このため、25年9月に所定項目についての書類を具して教職課程設置申請書が天野文部大臣宛に提出せられた。

この申請書には中学校1級普通免許の理科、職業科（農業）、高等学校2級普通免許の理科、農業の免許教科の設置が要望せられたが、26年11月15日に農業科についてのみ承認せられ、職業科（中学校）、理科に関しては不充分の旨の通知があった。

しかしこの件に関し教職課程の設備その他充実の結果は29年11月18日に至り教育職員免許法第5条別表の規定による免許状授与の所要資科を得させるための課程について教育職員養成審議会の答申に基づいて認定の旨の文部大臣通達があった。

ここにおいて前記の免許状の種類、免許教科が29年4月1日に遡って認められたのであって、正に教職員へ就職志望の学生達にとっては朗報であったに違いない。

（文部事務次官通達の写し）

地管第一九二号
昭和二十六年一月三十一日
文部事務次官
剣　木　亨　弘

兵庫県知事殿

大学学科増設について

昭和二十五年九月三十日付で申請のあった兵庫県立農科大学学科増設のことは、大学設置審議会に協議しましたところ下記（左記）のように増設してさしつかえないことになりましたので、その運営および増設条件の履行については、遺漏のないよう御

取計らい願います。

なお、教職課程設置については目下審議中でありますので、これの設置を申請された向は、左様御了承願います。

記

一　増設学科　　農学部農芸化学科、畜産学科
二　増設学科の修業年限　　四　年
三　増設学科の開設学年　　第一学年
四　増設学科の開設時期　　昭和二十六年
五　増設学科の条件
(一) 建物、備品及び牧場の整備は、計画通り実施すること
(二) 学生入学定員については、農芸化学科は三十名、畜産学科は二十五名とする
(三) 教員組織を更に強化すること
(四) 新たに学部、学科（含専攻）を増設し、または既設の学部、学科（含専攻）を変更しようとする場合は当分の間大学設置審議会に協議すること
(五) 教員組織については、これが充実されるまで当分の間大学設置審議会に協議すること
(六) 大学の目的使命を達成するため、二年以内に必要な整備拡充を行なって、大学としての完成を期すること

以上の事項については、その実施につき報告を求め、また、必要ある場合には大学設置審議会として審査するものとする。

（教職課程認定大臣通達の写し）

地大第166号
兵　庫　県

昭和29年5月31日付で申請のあった教育職員免許法第5条別表第1備考第1号の2の規定による免許状授与の所要資格を得させるための課程については教育職員養成審議会の答申に基いて下記のように認定します。

昭和29年11月18日

文部大臣　大　達　茂　雄

記

1. 課　程　名　　兵庫農科大学の正規の課程
2. 免許状の種類及び免許教科
　中　学　校　　理科、職業
　高等学校　　理科、農業
3. 認定の時期　　昭和29年4月1日

第 4 節　草創期の附属施設その他

①　附属農場

やがて兵庫農大の第 1 農場となった兵舎南側の練兵場は終戦後主として県立篠山農業高等学校の実習圃場として使用せられ（9,767㎡）残りの一部（1,877㎡）は兵庫師範分校によって使用せられていた。

しかし県立農科大学の設置が要請せられ、また大学設置委員として委嘱せられた京都大学農学部並河、香川、榎本、片桐の 4 教授が同圃場を視察し、これを新設農科大学の附属農場として適当として認可の運びとなったのであるが、開学当時農場内には何ら建物らしいものもなく、旧兵舎の改修とともにその一隅に農場事務室兼研究室を区画設置した。

初年度は事務職員 2 名、圃場員 3 名が配置されたにすぎない。

創設当初の農場実習予定地としては 437,218㎡、放牧地・放牧林 予定地として 640,248㎡ が申請されていた。

当初実習農場として考えられていたのは、第 1 章第 2 節に記載の 7 農場であり、その決定はそれぞれの所有権者その他の権限を有する所属長の多大の厚意を示されたことによってもたらされたことはいうまでもない。第 1 農場については篠山農業高等学校長西羅岩太郎氏、第 2 農場については多紀郡指導農場長堀尾弥一氏、第 3 農場については多紀郡東部指導農場長笠井克巳氏の絶大なる農大設置への理解と協力が設置基準による農場の設置をもたらせたといっても過言ではなかろう。

と同時に当時の郡農業会建物1,285㎡、郡公会堂建物522㎡ならびに同農業会および公会堂敷地 7,267㎡ を農科大学用として分譲することの承諾書が獲られたのは当時の郡町村会長山口房次郎氏の協力によるものとみねばならない。

しかるに文部省の定める各大学設置の農場の基準面積は 20 ha となっており、本学の実際運営上利用し得るものとしては前記第 1 農場約 3 ha と本学の約 3 粁西方に位する南河内村東木ノ部の水田約1.5 haの買収契約したもの（**第 2 農場**）のみで本学の近郊には適当の農場を得ることは殆んど不可能視せられたので、演習林をもってこれに代替することとしたのである。即ち本学の東北

方約2粁にある城北村藤岡奥岩屋の坪160の9の個人所有山林約14.5 haを買収してこれに充てることとした。これを第3農場として一応この3農場をもって体制を整えたのである。

この内第1農場は練兵場跡地にできた畑地で赤色酸化したpH 5.4度、燐酸の特に欠乏した重粘瘠薄の劣悪な土壌をもってなり、水利権もなくこれを水田化することは可成り至難とみられたが、25～27年度にかけて農夫全員の奉仕的作業によって約40 aの水田を造成するに至った。これは完成期には更に90 aの水田を形成するに至った。

反当収量も当初は0.8～0.9石であったが、堆厩肥の増施によって後年3.0石にも達した。

かくて創設当初ほとんど不毛にも近いとせられた第1農場には、1 ha近い水田が造成され、また堆厩肥を主とする有機質肥料の投入によって畑地の生産性も漸次向上してきた。

なおこの外、篠山町乾新町の東裏側の個人水田を昭和27年度より4年間借用して学生実習田としたこともある。

第2農場（南河内村木ノ部所在）は面積15,133㎡は25年4月より4回にわたって買収が行なわれたが、裏作利用は全く困難視された湿害田で、わずかな経費による改良は到底不可能であったが、農業土木学教室の手により、ポンプアップの方法で簡易揚水法をとって改良に努めた程の難所であった。結局高畦栽培と有機質肥料施用（肥培管理）で除々に生産をあげていく以外に途はなかった。それでもこの苦心は稔って当初の反収2石足らずは数年後には3石を突破することとなった。

第3農場たる城北村藤岡奥の実習林は個人有山林143,874㎡を大学後援会によって18万円で買収契約せられ26年3月県に寄附せられたもので、全面積の約⅓は地味不良で自然混交林として仕立て、比較的地味良好な地域には26～27年の2カ年にわたり約1万本の杉苗（わずかに桧苗をまじえる）の植林を完了した。更に28年にも3,000本を植えたが、植林地域には可成りの兎害があり、爾後再三ならず補植がなされ、40年頃には成育のよいところでは胸高直径20㎝に達し立派な林相を呈していた。収支その他の数字については別章にゆずる。

（2） 附属図書館

草創当初の図書館は医科大学予科の蔵書約5,000冊を引継ぎ、学生食堂の2階115坪を改造して仮設図書館として発足した。

初代館長は山本賢治教授で草創時代は終始同教授によって運営せられた。

しかし既に40年以上を経過した古い木造建築であり、当分の間の一時凌ぎとしての使用には耐え得たとしても学科の増設、学内講座の充実と対応してこの施設では到底満足すべきものとはいえなかった。防災環境の面よりも、速急に独立した図書館の新築が要請せられ、後年実現をみるに至った。

草創期4カ年間（24～27年）の蔵書の数を比べると（別章、蔵書充実状況参照）24年書籍6.158冊、雑誌338冊　計6,496冊は27年には書籍17,479冊、雑誌3,157冊計20,636冊と増加、書籍において2.8倍、雑誌において9.3倍、総冊数において3.2倍の増加がみられ、顕著な躍進ぶりをみるのである。

この間従事職員数は24～25年の2年間は3名、26年度半ばより4名に増員されている。

（3） その他

以上は附属施設の状況であったが、特に草創期における大学の運営をより円滑にし大学を安泰たらしめたものに大学後援会、父兄会がある。これらについて若干触れてみる。

（i） 大学後援会

当時相ならんで全県民の衆望をになって新設された新制の県立各大学、更には既設の神戸大学の充実を図るためこれに要する資金の一部を広く県民一般ならびに県外有志の募金によるとの趣旨によって県知事を会長とする大学後援会が発足した。

この会の目標は昭和25年1月1日より27年12月末日までの3カ年間に1億円を募金しようとするものであり、本学教官にもそれぞれ相当金額が割当てられ全学その趣旨に賛同したことは元よりである。

本募金は本学草創期において或は第3農場の買収代金、或は篠山農業高等学格農場の買収代金などに充てられ、大きく貢献をしたことは事実である。28年6月16日岸田会長より配分をうけた額は239万1,140円である。

(ii) 父兄会の動き

特に草創期における父兄会の動きは注目に値するものがあった。そこには慈父の如き初代会長山本秀雄氏の存在があり、誰もが見つけるに窮していた教員たちの住居、下宿のあっ旋、入試時の学生の宿舎の世話など、卒先してわがことの如く農大を支援した。（随想録参照）

兵庫県国立公立大学後援会会則

第1条　本会は兵庫県国立、公立大学後援会と称する。

第2条　本会は本県内国立、公立大学の充実を図るため、これに要する資金の募集をなし、以て大学の健全な発展を期するを目的とする。

第3条　本会の本部を兵庫県庁内におく。

第4条　本会に次の役員をおく。

会長　一名　　副会長　三名

理事　若干名　　評議員　若干名

顧問　若干名

会長は、知事をもってこれにあてる。

副会長及び理事は評議員会に諮り、会長これを選任する。

評議員は、会長がこれを委嘱する。

会長は、会務を総理し、本会を代表する。

副会長は、会長を補佐し、会長事故あるときは会長の職務を代行する。

理事は、会務を掌理する。

評議員は、会長の諮問に応じ、重要事項を審議する。

第5条　本会に諮問委員若干名をおく。

諮問委員は、評議員の互選によるものとする。

諮問委員は、募金の配分について審議するものとする。

第6条　本会に監査委員若干名をおく。

監査委員は、評議員の互選によるものとする。

監査委員は、本会の出納、その他会計事務の監督を行ない、その適正を期するものとする。

第7条　本会は、支庁、地方事務所、市および各大学其の他必要な場所に支部をおく。

支部長は、会長これを委嘱する。

第8条　本会に事務局をおく。

事務局に局長をおき、総務、募金、配分の三部を以て構成する。

第9条　本会則に定めるものの外、必要な事項は会長これを定める。

氏は篠山町河原町の歯科医であり、26～32年の7カ年にわたって会長の職にあるとともに格医をも42年度まで担当された。

本学の設備充実には殊更情熱を振り向け、学長始め学校当局とは常に密接な連絡のもとに設備は年とともに充実せられた。特筆すべきは32年度には全学科全講座にわたり学生向きの書籍13万8,000円が寄附せられたほか、目ぼしいものとしては講堂に設置せられたピアノ、学内放送設備などがそれである。

なお可成り巨額に達した体育実技用の用具類なども会長の心づかいによって常に補給せられていた。

また本学卒業生を送り出した28、29年度ごろの学生の就職は世の不況を反映して中々思わしくなく、教官連は就職のあっ旋には自弁をもって東西に奔走せざるを得なかった事情にあったが、父兄会では卒業学生1名当り1,000円の割りで年々10万円の予算を組み可成りの貢献がなされた。

山本会長退会後も当初なされたこれらの好意ある後援は持続せられ、陰に農大の今日の発展に資したことは多言を要しない。

第5節　むすび

草創期における本学の顕著な躍進を象徴する本学の特色ともいうべき事項を摘記してみる。

(1) 農芸化学科、畜産学科の新設とともに講座数36（教養、専門を込め）にも達する巨大な教授組織が5年間に完成して一応教授陣営が整えられた。

(2) 27年度中に専門審議委員によって作成せられた教授会規程ができて大学の運営は教授会を中心としてなされる体制となり、完成期への足がかりが着々整えられた。

(3) 三宅学長は単科大学として特にあり勝ちな一般教養と専門学科の教官の間の和合に力をつくされ、当時の教職員組合の如きも山本賢治教授を委員長としてその名も「親和会」と称し、学長の方針に呼応して親和の実をあげることに努めた。

当時の事務局は25年4月就任の小松局長を中心とし、医大予科からの若手職員によって運営されていた。

第3章　完　成　期

第 1 節　完成充実期の概要

昭和26年に農芸化学科と畜産学科が増設認可となり、開学以来の農学科を加えて3学科となった。更に農大の特色でもある充実した教養課程を含めて講座数は30講座をオーバし、講座定員も教授1、助教授又は講師1、助手2と充実し、外観こそ旧木造兵舎であったが窓枠など化粧がほどこされ、初代三宅学長の方針として講義室こそ質素であったが、研究の場である研究室の内部設備や実験機械器具も整い、名実ともに農大の一応の完成期と見られる時期を画するならば、昭和29年から同36年に亘る時期であろう。

この時期には学生の教育面で、教職課程（昭和27年4月1日認可、理科、農業、職業）についで医学進学課程（神戸医大、現神戸大医学部へ進学）が昭和30年4月1日に開校された。

昭和28年3月6日第1回卒業式が挙行されてより、農大の真価が社会に問われる初期の卒業生が巣立って行ったのもこの時期であって、先輩なき卒業生が大学の伝統を自ら形成する為、建学精神を体し丹波篠山の地から実社会に飛び立って行ったのである。

一方、諸般の情勢から万止むを得なかったとは云え、加古川市にあった県立兵庫農業短期大学が昭和31年4月1日をきして兵庫農科大学短期大学部として併設され、更に廃止合併（昭和32・3・31）になったものの、この事実は教職員の人事面や農場その他の面からも農大を更に強化拡充する結果になった意味も見のがすことは出来ない。加古川関係については平林教授の随想をあわせ参照されたい。

又それに併い、加古川農場が篠山農場と共に附属農場となり、今までなかった果樹園が獲得出来たことは意義深いことである。（昭和32・4・1、農場の項参照）更に、昭和36年4月1日には兵庫県多紀郡今田町に附属牧場が開設され、ここに農大としての重要な附属施設は完成した。

篠山学舎にとって忘れられない施設は昭和34年度に新築された附属図書館が

農大唯一の真新しい近代的建物として出来上り、学生食堂の上の旧図書室から移転し、古い建物の中に伍して一きわ偉容を放ち、教職員、学生のよき勉学の場となった。

附属牧場、附属図書館についての詳細は、附属農場と同様附属施設として別項に記述されているのでそれを参照されたい。

第 2 節　研究業績の開花結実

諸設備の充実とあいまち、周囲山で囲まれた篠山の地においていよいよ各種の研究や業績が事実として以下の如く結実して行ったのもこの完成期においてである。

1.　教員の在外研究状況

兵庫農科大学の学風を形成するに大きく影響したものに教員の在外研究が先ずあげられよう。県費、国費を中心に各種団体の招聘をあわせ第3-1表に示す如き数多くの海外視察、調査、留学が行われ兵庫農科大学の名を内外に高めた。

第3—1表　　教員の在外研究状況

職　氏　名	期　間	経　費	用　務
教授 沢山　智	自昭29. 6.30 至昭29.11.30	業　界	アメリカ合衆国、イギリス国、ドイツ連邦共和国、イリタア国、スエーデン国へ皮革鞣製学研究のため
教授 浜口栄次郎	自昭31. 2.18 至昭31. 3. 8	鹿児島県	黒糖製造に関する指導並びに講演のため、鹿児島県奄美大島へ
教授 望月　明	自昭30. 9. 1 至昭32. 9.30	カナダ政府	麦類及び倍数性甜菜細胞遺伝学研究のためカナダへ留学
教授 桜井芳次郎	自昭31.11.16 至昭31.12.23	琉球政府	果樹園芸の調査研究のため琉球政府へ
教授 佐藤　孝 助教授 高山敏弘	自昭32. 1.15 至昭32. 5.31	公共団体業界	カンボジヤ国学術調査のため
教授 松尾浩気	自昭32. 3.15 至昭33. 3.14	国（外務省）	稲の品種改良研究のためヴェトナム共和国へ
教授 清水俊秀	自昭32. 5.20 至昭32. 7.14	琉球政府	琉球政府工業化基本計画指導のため琉球政府へ

教授 浜田秀男	自昭32. 9. 1 至昭32.12.31	日本民族協会 東南アジヤ調査委員会	東南アジヤ稲作民族文化総合調査のため、ラオス王国タイ王国、カンボジヤ王国ヴェトナム共和国へ
助教授 下田与四雄	自昭33. 3.19 至昭35. 3.31	タイ国政府	肉牛の気候学的研究のためタイ国へ
教授 佐伯秀章	自昭35. 8. 1 至昭36. 5.26	県費	土壌の生産力増強に関する研究のため、ドイツ連邦共和国、オランダ王国、アメリカ合衆国、ウイスコンシン大学、フランス共和国、スイス、イタリア共和国、トルコ共和国、レバノン共和国、ジョルダン、ハシミット王国、インドへ
教授 麦林楢太郎	自昭35.11. 9 至昭36. 2. 8	業界 1部私費	欧米諸国において醸造に関する研究のため
教授 佐藤孝	自昭35.12. 7 至昭37.10. 6	カンボジヤ政府	繊維作物学研究のためカンボジヤ王国へ
教授 岩田久仁雄	自昭36. 3. 1 至昭36. 8. 1	アジヤ協会 コロンボ計画による	昆虫学研究のためタイ国へ
教授 中村直彦	自昭36. 7. 1 至昭37. 6.30	県費	花卉作物の育種、てん菜の育種及び採種に関する研究のためオランダ王国、デンマーク王国、連合王国、ドイツ連邦共和国、ベルギー王国、フランス共和国、イタリア共和国
助教授 永田忠男	自昭36. 7.20 至昭36.11.15	国連FAO （国際食糧農業機構）	大豆栽培学研究のためユーゴスラヴィア連邦人民共和国へ
教授 河本正彦	自昭36. 8.30 至昭37.12.16	外国製糖会社 1部私費	製糖化学並びに家畜飼料の製造に関する研究のため、ドイツ連邦共和国、オランダ王国、デンマーク王国、スイス連邦、イタリヤ共和国、フランス共和国、ベルギー王国、連合王国、アメリカ合衆国へ
助教授 高田亘啓	自昭37. 3.18 至昭38. 6. 5	外国大学 1部私費	昆虫における光週期に関する研究のためアメリカ合衆国へ
教授 川上幸治郎	自昭37. 4.29 至昭38. 3. 1	県費	種馬れいしよの退化生理の研究のため、フランス共和国、連合王国、フインランド共和国、オーストリア共和国、オランダ王国、アメリカ合衆国へ
助手 新家龍	自昭37. 5.30 至昭38. 8.31	外国大学 1部私費	醗酵化学に関する研究のためアメリカ合衆国へ

助教授 沢野 稔 講師 中村 弘	自昭37. 7.10 至昭37. 8.31	私費	亜熱帯地域における作物、果樹の導入と農業立地に関する研究のため沖縄へ
教授 清水俊秀	自昭38. 7.25 至昭38. 8.25	インドネシヤ政府	製糖工業の指導研究のためインドネシヤ共和国へ
助教授 久葉 昇	自昭38. 8.28 至昭39. 8.31	県費	鶏病に関する研究のため、アメリカ合衆国へ
助手 桃井節也	自昭38. 8.25 至昭39. 8.24	外国大学 1部私費	ヒメバチ群の分類学に関する研究のため、アメリカ合衆国へ
教授 佐藤 孝	自昭38.10. 1 至昭39. 1.28	京都大学	農業技術とその改良に関する調査研究のため、タイ国ビルマ連邦へ
教授 清水俊秀	自昭39. 2.19 至昭39. 3.21	沖縄政府	製糖機械に関する技術指導のため、沖縄へ
助教授 佳山良正	自昭39. 5.30 至昭40. 5.15	業界、公共団体	ブラジル農業移民経営実態調査のため、ブラジル合衆国へ
教授 石橋武彦	自昭39. 6. 1 至昭40. 5.11	県費	家畜の甲状腺の生理機能に関する研究のため、アメリカ合衆国へ
助教授 樋口巌	自昭40. 3.11 至昭40. 3.31	私費	兵庫農科大学ワンダーフォーゲル部員の指導のため、沖縄へ
助教授 水野進	自昭40. 5.17 至昭41. 5.16	県費	園芸作物の貯蔵に関する研究のため、アメリカ合衆国へ
助教授 西羅寛	自昭40. 9.29 至昭41.10.15	カリフォルニヤ大学	植物体ロイコアントシアンの化学と生理に関する研究のため
教授 吉村貞彦	自昭41. 7.20 至昭41.12. 7	県費	アメリカ合衆国、連合王国ドイツ連邦共和国へ欧米諸国における農学関係大学、研究所等の実情調査並びに蛋白質分解酵素葡萄糖異性化酵素の研究のため、アメリカ合衆国、カナダ、連合王国、イタリア共和国へ
教授 福島豊一	自昭41. 7.20 至昭41.10.10	県費	欧米諸国における農学関係大学、研究所等の実情調査並びに肉牛の生産生理学に関する研究のため、アメリカ合衆国、連合王国、デンマーク王国、オランダ王国ドイツ連邦共和国、スイス連邦、イタリヤ共和国へ

助教授　奥谷禎一	自昭42. 5.20 至昭43. 3.31	県　費	ハバチ類の分類学的研究およびヨーロッパにおける昆虫学者養成の調査のため、連合王国、フィンランド共和国、ソヴィエト社会主義共和国連邦、スゥエーデン王国、スイス連邦、オーストリア共和国、ドイツ連邦共和国、オランダ王国、ベルギー王国、フランス共和国、アメリカ合衆国、カナダへ
教授佐藤　孝	自昭43. 3.25 至昭43. 4.27	海外技術協力事業団	農業技術の改善と開発に関する調査研究のためタイ国へ
講師一井隆夫	自昭43. 7.24 至昭44. 3.12	県　費	果樹の台木についての研究および外国におけるクリ栽培の調査研究のため、アメリカ合衆国へ
教授佐藤　孝	自昭43.10.16 至昭44. 3.15	京都大学東南アジヤ研究センター	インドネシヤ王国における畑作調査のため、インドネシヤ共和国へ

2.　教員の内地留学

教員の資質向上を図り、併せて大学教育の振興を図ることを目的として、職務に関連ある題目について研究するため、国公私立大学、または研究所等へ留学することが認められている。

兵庫農大卒業生のうち母校に助手として残った方々を中心に内地留学も活潑に行なわれた。（第3-2表参照）

第3－2表　　内地留学状況

職　氏　名	期　間	経　費	用　務
助手星　和美	自昭29. 7. 1 至昭31. 8.31	私　費	皮蛋の遊離アミノ酸の検索について、北海道大学農学部へ
助教授久寿米木朝雄	自昭30. 5. 1 至昭31. 4.30	私　費	原子核物理学の実験的研究のため京都大学理学部へ
助手児島初男	自昭31. 4. 1 至昭33. 3.31	私　費	農産製造における近代工学の研究のため、東京工業大学工学部へ
助手福沢文雄	自昭31. 5. 1 至昭33. 4.30	私　費	原子核物理学研究のため、京都大学理学部へ

助手 山口 禎	自昭33. 5.13 至昭34. 3.30	私費	水稲に関する生化学的研究のため京都大学へ
助教授 高山敏弘	自昭34. 7.10 至昭34. 8.24	私費	農業経営の分析技術及び方法に関する研究のため、北海道大学農業経営研究所へ
助手 氷上雄三	自昭36. 6. 1 至昭36. 8.31	県費 1部私費	組織培養術式の習得及び培養肝組織の脂肪代謝に及ぼすホルモンの影響についての研究のため大阪大学理学部へ
助手 加藤暢重	自昭37. 8.20 至昭37. 9.22	県費 1部私費	哺乳類の組織培養の研究のため、大阪市立大学医学部へ
助手 桃井節也	自昭37. 9.10 至昭38. 3.10	県費 1部私費	昆虫学研究のため、北海道大学農学部へ
助手 岸田忠昭	自昭37.10. 1 至昭38.10.31	大阪大学	醗酵化学に関する研究のため、大阪大学蛋白研究所へ
助手 大嶋俊彦	自昭38. 4. 1 至昭39. 3.31	県費 1部私費	教育心理学及び教育社会学の研究ため、関西学院大学へ
助手 藤井 聡	自昭38. 5. 1 至昭39. 8.31	県費 1部私費	ぶどう糖とアンモニヤの反応生成物に関する化学的研究のため、名古屋大学へ
助手 畑中陽次	自昭39. 1.16 至昭40. 3.31	県費 1部私費	農業簿記利用による経営分析方法に関する研究のため京都大学農学部へ
助手 久保知義	自昭39. 6. 1 至昭40. 3.31	県費 1部私費	皮革の熱分析に関する研究のため、姫路工業大学へ
助手 山口 禎	自昭40. 4.10 至昭40. 7. 9	県費	水稲の節間伸長と倒伏の強弱に関する研究のため、京都大学農学部へ
教授 伊沢恁郎	自昭41. 8.21 至昭41. 9.20	県費	ラジオアイソトープ研修所基礎課程受講のため、日本原子力研究所へ
教授 長島浩二郎	自昭42. 4. 1 至昭42. 7.31	県費	専門課程における英語講読の比較考究および指導方法の研究のため、大阪大学文学部へ
助手 石田 薫	自昭43. 6. 1 至昭43.11.30	県費	農産物の加工に関する研究のため東洋食品工業短期大学へ

3. 県学術振興奨励費、文学省科学研究費の交付

学内数多くの教職員に対し、県学術振興奨励費や文部省科学研究費が交付され、地道な研究が進展し、その結果数々の研究が開花結実して行った。

第3-3表　　兵庫県学術振興奨励費一覧表

年度	委託先	研究担当者	研究題目
28	兵庫県	長谷川　儀　一	作物の葉診断に関する研究
		松　尾　浩　気	山の芋の形態及び受精機構に関する研究
		川　上　幸治郎	丹波黒大豆の栽培に関する研究
		岩　田　久二雄	二種のイナゴの防除に関する研究 特に天敵利用に関する研究
		山　本　和太郎	雲紋竹に関する研究
		桜　井　芳次郎	日本栗と外国栗（支那栗、フランス栗、その他）の交配雑種育成による丹波栗の品質改良
		中　村　直　彦	玉葱の採種に関する研究
		野　中　時　雄	兵庫県農業労働力の調査
		後　藤　定　年	地下穿孔機による篠山盆地の暗渠排水に関する研究
		佐　伯　秀　章	兵庫県下農地土壌の生産力増強に関する研究 燐酸の形態と行動について
		伊　沢　恁　郎	甘藷茎葉のアミノ酸組成が根塊の澱紛蓄積作用に及ぼす影響に関する肥料学的研究
		吉　村　貞　彦	細菌より強力なる蛋白分解酵素の調製について
		麦　林　楢太郎	微生物の生産する Hydrolylase に関する研究
		浜　口　栄次郎 清　水　俊　秀	砂糖の精製に関する研究 特に炭酸法の応用について
		福　島　豊　一	牛の所謂くわず症に関する研究
		沢　山　　智	姫路白鞘の脱毛法に関する研究
		石　橋　武　彦	光の照射による鶏の産卵能率の増進
		下　田　与四雄	あひるの孵化及び育成に関する生理学的研究
		久　葉　　昇	和牛繁殖の障害病理学的研究
		金　子　平　一	丹波地区に於ける縁故使用の社会経済的意義と農民心理に及ぼす研究
		多　河　慶　一	農村児童の知能発達と職業適性
		井上善右ヱ門	カントを中心とする倫理思想の綜合的研究
		大　平　恭　造 松　居　　弘	β線スペクトロスコープによるβ線γ線並びに原子構造の研究

年度	委託先	研究担当者	研　　究　　題　　目
28	兵庫県	石井健三	ペプシンの表面変性について
		上田英之助	日本産ロベリア属植物成分の研究
		森　為三	西日本海において機船底曳網にて漁獲せられ香住港にて水揚せられる魚類の研究
		浜田秀男	内外稲の生理遺伝学的研究 特に内外稲品種の特性に関する比較研究
	計	29名	27件
29	兵庫県	長谷川儀一	作物の葉診断に関する研究
		松尾浩気	山の芋の形態及び受精機構に関する研究
		川上幸治郎	山の芋の貯蔵改善に関する研究
		岩田久仁雄	稲作害虫イナゴの天敵に関する研究
		山本和大郎	Trichoderma 菌の拮抗作用による植物病害防除に関する研究
		桜井芳次郎	日本栗と外国栗（支那栗、フランス栗、その他）の交配雑種育成による丹波栗の品種改良研究
		中村直彦	玉葱の採種に関する研究
		野中時雄	農村労働力に関する研究、公有林野に関する研究
		野中時雄	1. 移民の現代的理念、特に南米を中心とする移民政策の基調 2. 明治史における移民問題
		後藤定年	地下穿孔機による篠山盆地の暗渠排水に関する研究
		佐藤　孝	水稲の穂数並びに稲重の分蘖位別構成に関する研究
		望月　明	小麦属植物の核形態学的研究
		大崎忠一	水田輪作に関する研究
		佐伯秀章	兵庫県下農地土壌の生産力増強に関する研究
		伊沢伍郎	山の芋施肥に関する研究
		麦林楢太郎	微生物の生産する Hydrolylase に関する研究
		吉村貞彦	微生物により強力なる蛋白質分解酵素の調製について
		浜口栄次郎 清水俊秀	砂糖の精製に関する研究特に脱色剤の製造について
		福島豊一	牛の所謂くわず症に関する病因学的研究

年度	委託先	研究担当者	研究題目
29	兵庫県	水野利雄	家畜腸内バクテリアのビタミン代謝
		沢山智	姫路白鞘の脱毛法に関する研究
		石橋武彦	光線照射による鶏の産卵能率の増進
		下田与四雄	アヒルの孵化及び育成に関する生理学的研究
		久葉昇	緬山羊の腰麻痺に関する研究
		多河慶一	農村児童の智能発達と適性
		金子平一	氷上郡における有畜農業（酪農）経営の研究
		松居俊夫	明治6年地租改正条例の成立過程
		大平恭造 松下弘	β線スペクトロスコープによるβ線γ線並びに原子核構造の究明
		石井健三	蛋白質の単分子層の研究
		上田英之助	日本産ロベリア属植物の成分研究
		森為三	西日本海に於いて機船底曳網にて漁獲せられる魚類の分類学的、発生学的生態学的研究
		浜田秀男	内外稲の品種系統学的研究
計		34名	32件
30	兵庫県	大崎忠一	早期栽培による稲作改善の研究
		三宅捷	兵庫県農産物の生産増加と加工の研究
		沢山智	和牛特に但馬牛の生産能力向上に関する研究
		上田英之助	山の芋の増産に関する生化学的及び生物学的研究
計		4名	4件
31	兵庫県	大崎忠一	早期栽培による稲作改善に関する研究
		浜口栄次郎	兵庫県農産物の増産と利用に関する研究
		小野豊	和牛特に但馬牛の生産能力向上に関する研究
		松居弘	ダブルシンレンズ型β線スペクトルメーターによる放射線（β線γ線）並びに原子核構造の究明
計		4名	4件
32	兵庫県	大崎忠一	早期栽培による稲作改善に関する研究

年度	委託先	研究担当者	研究題目
32	兵庫県	伊沢恁郎	県下農産物の増産と加工利用に関する研究
		小野豊	和牛特に但馬牛の生産能力向上に関する研究
		浜田秀男	東南アジヤに於ける野生稲及び栽培稲の分布及び其の特質に関する研究
		佐藤孝 高山敏弘	カンボディア農業綜合研究について
計		6名	5件
33	兵庫県	川上幸治郎	山の芋栽培改善に関する研究
		平林成志	県下農産物の増産と加工及び利用に関する研究
		小野豊	和牛特に但馬牛の生産能力向上に関する研究
		野草俊作	食用蛙増殖に関する基礎的研究
		野中時雄 奥谷禎一	カンボディヤ学術調査報告第二報
計		6名	5件
34	兵庫県	高山敏弘	兵庫県農家の移住振興政策に関する研究
		清水俊秀	ビート糖業育成に関する基礎研究
		福島豊一	所謂牛のくわず症に関する研究
計		3名	3件
35	兵庫県	伊沢恁郎	兵庫県下農耕地土壌の生産力及び主要作の施肥改善に関する基礎研究
		水野利雄	ホルモン剤による肥育促進効果に関する基礎的研究
		松尾浩気	落花生の増収に関する研究
計		3名	3件
36	兵庫県	麦林楢太郎	微生物の生産する加水分解酵素 特にプロテアーゼ、タンナーゼに関する研究
計		1名	1件
37	兵庫県	吉村貞彦	微生物酵素による葡萄糖から転化糖への転換
計		1名	1件

年度	委託先	研究担当者	研究題目
38	兵庫県	下田与四雄	和牛の肥育並びに肉質改善に関する研究
計		1名	1件
39	兵庫庫	望月明	作物の耐性に関する研究
計		1名	1件
40	兵庫県	中村直彦	花卉類および蔬菜類の栽培に及ぼす光線の影響
計		1名	1件
41	兵庫県	清水俊秀	液化ガスによる農産物の有効成分抽出に関する研究
計		1名	1件
42	兵庫県	河本正彦	サクラテングス病に関する化学的研究
計		1名	1件

第3-4表　文部省科学研究費一覧表

年度	委託先	研究担当者	研究題目
25	文部省(各個)	松居弘	空洞共振器内に於けるマイクロウエーブ気体放電
		森本勇	我国に於ける水稲品種の生産力に関する研究
		佐伯秀章	近畿高原性寒冷地農業の土壌肥料学的究明
		西羅寛	新赤色酵母（スポロボミセス属）の超短波照射による人工変異を利用した代謝機作の研究
		岩田久二雄	膜翅目昆虫の産卵能力に関する研究
		長谷川儀一	秋落水田に於ける水稲品種の生産力に関する研究
計		6名	6件
26	文部省(各個)	森本勇	我国に於ける水稲品種の生産力に関する研究
		山本和太郎	媒病菌の研究
計		2名	2件

年度	委託先	研究担当者	研究題目
27	文部省(各個)	森本勇	葉片分析法の研究 特に主要作物生産力の栄養生理学的関連について
		宮田澄男	1. 人為作製半数性蛙幼虫の nonviobitry に関する研究 2. トリパフラビンの蛙精虫核物質に対する阻害作用機序に関する研究
		堀江格郎	植物細胞の細胞膜透過性
		永田忠男	大豆品種の類型特に夏秋大豆型及び蔓化型に関する研究
		伊藤和彦	硫酸ヂメチルアミン脱毛法に関する研究
計		5名	6件
28	文部省(各個)	三宅捷	微生物プロテアーゼの結晶化に関する研究
		中村直彦	玉蜀黍一代雑種採種に関する研究
	〃(助成)	水野進	山の芋に於ける花器構造並びに其の授精結実に関する研究
		岡本三郎	植物体による Ca の吸収に及ぼす水素イオン濃度の影響
		水野利雄	酸化型アスコルビン酸還元酵素の研究
		佐々木豊作	台湾コプラ蛇毒により分離精製した毒成分の構成アミノ酸について研究
		伊藤和彦	水硫化カルシウム脱毛法に関する研究
		宮田澄男	1. 半数性蛙幼生の致死原因に関する生理学的研究 2. 蛙に於ける半数体発生の機構についての研究
		堀江格郎	尿素葉面処理の細胞生理学的研究
計		9名	10件
29	文部省(各個)	三宅捷	微生物プロテアーゼの結晶化に関する研究
		井上善右エ門	カント実践理性批判の研究
	〃(助成)	永田忠男	大豆品種の類型特に夏秋大豆型及び蔓化型の栽培学的育種学的意義について
		田場典治	家畜の通電に関する研究、特にその心搏動、呼吸、血液、成分等に及ぼす影響について
		堀江格郎	尿素葉面処理の細胞生理学的研究
		久寿米木朝雄	空洞共振器による電子の加速

年度	委託先	研究担当者	研究題目
29	文部省（各個）	岡本三郎	牧草中の炭水化物の消長に及ぼす施肥の影響について
		奥谷禎一	農林害虫としてのハバチ類の生態学的研究
		上山泰	葉分析による水稲の各生育期に於ける栄養状態と生育収量との関係
		佐々木豊作	台湾コプラ蛇毒より分離精製せる毒成分についての研究、特に核蛋白質の検出について
		野草俊作	1. 魚類の染色体に関する研究 2. 魚類染色体研究に使用する固定液の改良
		小野一	小麦の量的形質の遺伝学的分析
		伊藤和彦	木醋液による単独鞣製法について
		宮田澄男	半数性蛙幼生の致死原因に関する研究
			1. 半数体の循環系（特に赤血球）の分析と呼吸機態分化との関係について 2. 初期発生阻害2位体幼生と半数体幼生との類似について
計		14名	16件
30	文部省（助成）	久寿米木朝雄	シンチレーションカウンターによる放射能の測定
		水野進	やまのいも（Diasconca Batatas, Decne）の種実不稔に関する生理形態的研究
		奥谷禎一	農林害虫としてのハバチ類の生態学的研究
		岡光夫	溜池潅漑地域の稲作慣行
		田場典治	家畜の通電に関する研究、特にその体重、容積、血液粘稠度及び血色素との関係について
		松林元一	雄性不稔現象に関する育種学的研究
計		6名	6件
31	文部省（助成）	広瀬智久	薬用サフランの不稔に関する研究
		居垣千尋	小型動力開墾機械の研究
		奥谷禎一	農林害虫としてのハバチ類の生態学的研究
		岡本昌雄	土壌燐酸の固定とその有効化に関する研究
		小林潤	湿田土壌の亀裂の性状とその一防止法
		岡光夫	溜池潅漑地域の稲作慣行

年度	委託先	研究担当者	研究題目
31	文部省（助成）	野草俊作	魚類の染色体に関する研究、特に円口類及び軟骨魚類について
計		7名	7件
32	文部省（各個）	野草俊作	Microspectropbotometer（顕微分光分析装置）の組立及び魚類の系統、種間雑種における細胞化学的細胞学的研究
		後藤定年	湿田土壌の亀裂による土壌水分損失とその防止法に関する研究
	〃（試験）	川上幸治郎	適齢種薯による馬鈴薯作の改良
計		3名	3件
33	文部省（試験）	川上幸治郎	適齢種薯による馬齢薯作の改良
計		1名	1件
34	文部省（各個）	川上幸治郎	半数性利用による馬鈴薯の育種学的研究
		宮本雄一	麦萎縮病の研究 特に病源ウィルスの土壌伝播機作について
		大平恭造	α-bocus φ-selection babble を有するレンズ型スペクトロメーターによる放射線の精密測定
計		3件	3件
35	文部省（各個）	大平恭造	α-bocus φ-selection babble を有するレンズ型β線スペクトロメータによる放射線の精密測定
		福島豊一	近親交配が和牛の経済形質発現に及ぼす影響に関する研究
	〃（綜合）	佐伯秀章	根圏の化学的並びにα線による研究
計		3名	3件
36	文部省（各個）	大平恭造	α-bocus φ-selection babble を有するレンズ型β線スペクトロメーターによる放射線の精密測定
		野草俊作	サル類の細胞学的研究
		高山昭康	種バレイショの休眠性に関する研究
	〃（機関）	大平恭造	α-bocus φ-selection babble を有する斉一磁場レンズ型β線分析器による放射線の精密測定

年度	委託先	研究担当者	研究題目
36	〃(綜合)	佐伯秀章	根圏の化学的並びにα線による研究
計			5 件
37	文部省(各個)	水野進	落花生の結実に関する生理学的研究
		奥谷禎一	広腰亜目（膜翅目）の天敵に関する研究
		高山敏弘	部落有林野利用に関する研究
		永田忠男	大豆品種の飼料栽培機械栽培適応性無限伸育性の栽培育種学的意義
	〃(機関)	大平恭造	α-bocus φ-selection babble を有する斉一磁場レンズ型β線分析器による放線の精密測定
計		5 名	5 件
38	文部省(各個)	松林元一	バレイショにおける近縁種の育種的利用に関する研究
		中村直彦	フロックスの花色に関する研究
		宮本セツ	有用蜂類の人工増殖に関する研究、とくに花粉媒介蜂類及び害虫狩猟蜂類について
		久葉昇	ウシの消化管病変の病理学的研究
計		4 名	4 件
39	文部省(各個)	川上幸治郎	種バレイショの月令と種菌価値
		小野一	ムギ類の節間伸長に関する遺伝生理学的研究
		福島豊一	反すう動物のホルモン肥育に関する内分泌学的ならびに生化学的研究
		松居弘	高分解能高立体角スフェロダルコイルβ線分析器による原子核構造の研究
		中嶋千尋(京大) 川那部治良	離島における農家労働力移動の実証的分析
計		5 名	5 件
40	文部省(各個)	小林潤	転圧土壌における膨脹ポテンシャルの予測
		一井隆夫	クリのフェノール性物質に関する研究
		下田与四雄	牛におけるホルモン肥育の脂肪酸代謝に及ぼす影響
		居垣千尋	リーフトラックに関する研究

年度	委託先	研究担当者	研究題目
40	文部省(各個)	久葉昇	鶏の慢性呼吸器病（CRD）に関する研究
		中嶋千尋(京大) 川那部治良	離島における農家労働力移動の実証的分析
計		6名	6件
41	文部省(各個)	児島初男	製糖工業における炭酸法の化学工学的解析及び食品工業の適性について
		西川欣一	アルファルファの生理的特性に関する研究
		中村直彦	Phlox の花色に関する研究
		近藤健次郎	酵素脱毛剤に関する研究
		松居弘	離分解能高位体角スフェロイダルβ線分析器による原子核構造の研究
		望月明	ドルムコムギの momosomies の育成
計		6名	6件
42	文部省(各個)	伊沢恆郎	植物による N_3—N 利用に関する研究
		石橋武彦	家畜の松果体の形態学的並びに生理学的研究
計		2名	2件
43	文部省(一般研究C)	松林元一	半数体利用による自家不稔作物の自殖系育成に関する研究
計			1件

4. 依託研究費

各種団体の依託研究も行われ、特に県立大学の特質が地方産業や業界にも貢献してきた。（第3—5表参照）

第3-5表　依託研究一覧表

年度	委託先	研究担当者	研究題目
34	農林省	中村直彦	暖地甜菜の栽培並びに採種生理に関する研究
35	〃	〃	〃
36	〃	〃	〃

年度	委託先	研究担当者	研究題目
31	氷上郡和田村	居垣千尋	火焔焼土器によるサフラン球根腐敗病菌の撲滅に関する試験研究
32	多紀郡今田村	〃	火焔焼土器による葉たばこの立枯病菌の撲滅に関する試験研究
〃	兵庫庫農林部	佐伯秀章 佳山良正	牧野土壌調査
35	〃	〃	〃
36	〃	〃	〃
37	〃	佳山良正	〃
33	〃	高山敏弘	共有林野利用改善に関する研究
33	〃	川那部治良 高山敏弘	農山漁村振興対策調査
34	〃	〃	〃
35	〃	後藤定年	篠山川沿岸地区土壌調査
34	暖地甜菜協議会	大崎忠一 中村直彦	暖地甜菜栽培研究
35	〃	〃	〃
36	〃	中村直彦	〃 〜気象要素及び施肥量が甜菜の糖分含有量及び根菜肥大に及ぼす影響について
〃	〃	大崎忠一	〃 〜耕種技術に関する事項及び資材に関する事項
〃	〃	林正旦	〃 〜早期水稲跡作としての移植甜菜の多収穫について
〃	兵庫庫企画部	川那部治良	阪神、播磨工業化背後地域経済調査(農林部会)
37	農林省	福島豊一 佳山良正	乳用種雄仔牛による肉資源開発試験
38	〃	〃	〃
37	豊岡市	川那部治良	総合経済調査
〃	〃	佳山良正	昭和37年度草地利用方式調査
〃	兵庫庫企画部	川那部治良	加古川水系地域総合経済調査（農業部門）
〃	商工労働部	浜田秀男 松尾浩気	杞柳素材の品質改善研究調査
38	〃	〃	〃
39	〃	〃	〃
〃	竜野市	川那部治良	総合開発基本調査
38	農林部	後藤定年	地すべり土圧力と防止杭の抵抗力との関係研究調査
39	〃	〃	〃
40	〃	〃	〃

年度	委託先	研究担当者	研究題目
41	農林部	後藤定年	地すべりと防止の抵抗力との関係試験
38	〃	佳山良正	草地開発基本調査
40	〃	〃	〃
41	〃	〃	〃
〃	〃	〃	大規模草地改良調査計画
42	〃	〃	草地開発基本調査
43	〃	塚本正美	なるとオレンジ奇病対策試験研究

33	兵庫庫海外協会	野中時雄	海外移住モデル農校育成
34	〃	高山敏弘	〃
35	〃	〃	〃
36	〃	〃	〃
37	〃	〃	〃
40	神戸市	〃	自立経営農家の経営分析

40	揖保郡御津町	佐伯秀章 川那部治良	経済開発調査
40	加東郡東条町	川那部治良 堂本高明 畑中陽次	農業経営診断
41	多紀郡多紀町	川那部治良 山本修 高山敏明 堂本高明	農業経営診断
41	農林部	川那部治良 山本修 高山敏明 堂本高明	都市化、工業化と農業の関係についての調査
42	神戸市	川那部治良 山本修 他4名	神戸市域農業振興のための基本調査
37	神戸市	後藤定年	外井畑および下畑地区の溜地について
〃	〃	〃	かんがい用水の慣行について
〃	〃	〃	多井畑および下畑地区水田のかんがい用水量について
38	〃	〃	花崗岩流域における降雨の流出について

年度	依託先	研究担当者	研究題目
39	神戸市	後藤定年	須磨アルプスにおける流出と地下水について
40	〃	〃	須磨土砂採取かんがい用水に及ぼす影響について
41	〃	〃	土砂採取が地下水の流出に及ぼす影響について
〃	〃	〃	八多町、長尾町、大沢町の共有林について
〃	〃	〃	岩岡町の溜池について

5. 学位

兵庫農科大学で着々と続けられた開学以来の研究者の研究業績が、ぞくぞくと学位授与の形で結実して行った。今第3-6表に農大着任後学位を授与された方々についてのみ表示しても実にその数は多い。

第3—6表　　学位調査

氏名	授与年月日	授与大学	学位名	論文題目
望月明	29. 8. 14	京大	農	甜菜の細胞並びに遺伝学的研究（甜菜の三倍性種子生産に関する細胞遺伝学的研究）
中村直彦	31. 2. 9	北大	農	玉蜀黍の組合せ能力の統計学的研究
多河慶一	34. 8. 31	神戸医大	医	Observations on the irresponsive phase generated by the positive conditioned stimulus
野草俊作	34. 12. 9	北大	理	魚類の染色体比較研究、特に分類系統的関係についての考察
久葉昇	35. 4. 28	北大	獣医	哺乳動物の日本住血吸虫症の虫卵結節に関する病理組織学的研究
佐々木豊作	35. 6. 1	東大	薬学	台湾コブラ並びに台湾ハブ蛇毒成分についての化学的研究
永田忠男	35. 8. 25	京大	農	日本及び世界における大豆品種の分化に関する種生態学的研究とその栽培、育種学的意義
石井健三	35. 8. 25	京大	理	尿素ウレアーゼ系反応の熱解析的研究
宮本雄一	36. 2. 2	北大	農	ムギ萎縮病の研究
宮田澄男	36. 3. 20	広島文理大	理	半数性蛙に関する研究

桃井節也	36. 3. 25	北大	農	日本産フシダカヒメバチ亜科の分類学的研究
宮本セツ	36. 3. 31	九大	農	日本産花蜂類の生態学的研究
奥谷禎一	36. 5. 18	北大	農	広腰亜目の幼虫の分類学的研究
井上善右エ門	36. 5. 26	広島文理大	文	唯識大乗を中心としたる仏教の倫理学的研究
麦林楢太郎	36. 9. 19	京大	農	穀種子の β-Amulase に関する研究
石橋武彦	36. 11. 25	九大	農	光線照射が鶏の生殖腺の発達に及ぼす影響について
河本正彦	36. 12. 1	九大	農	グルコースとアンモニアの反応生成物に関する化学的研究
伊沢恆郎	36. 12. 1	北大	農	禾本科作物による無機窒素の吸収及び同化に関する肥料学的基礎研究
国枝鉱造	36. 12. 1	九大	農	Erwinia carotovora のストレプトマイシン耐性変異に関する研究
吉村貞彦	36. 12. 15	北大	農	Penicillium chrysogenum Thom. 4626 (Q 176) の一蛋白分解酵素に関する研究
長谷川儀一	37. 2. 13	京大	農	葉分析による水稲の栄養診断に関する研究
福島豊一	37. 2. 13	京大	農	牛のくわず症に関する研究
高田亘啓	37. 2. 13	京大	理	モンシロチョウの寄生性選好に関する研究
堀江格郎	37. 2. 20	北大	理	ムラサキツユクサの開花における花弁の行動に関する研究
吉川三吉	37. 3. 19	北大	農	Alginomonas 属菌によるアルギン酸の分解及びその生成物について
花井七郎兵衛	37. 3. 13	九大	農	薩摩半島南部に分布するコウ層に関する研究
松居弘	37. 3. 31	京大	理	イリジューム 188 のエネルギー準位
大平恭造	37. 3. 31	京大	理	パラジューム 105 の励起準位
苅田淳	37. 3. 31	九大	農	家畜の副腎質における脂質の機能組織学的研究
西羅寛	37. 3. 31	九大	農	糸状菌のタンニン酸分解酵素に関する研究
松林元一	37. 3. 31	京大	農	馬鈴薯近縁種における細胞遺伝学的研究
中原達雄	38. 9. 30	九大	農	神経分泌と前葉細胞
佳山良正	39. 3. 25	北大	農	植物共同体の数的表示法ならびに傾斜草地の牧養力の推定に関する研究

水野利雄	39. 6. 30	北大	農	雄鶏に対する合成発情ホルモンの肥育促進効果に関する基礎的研究
小野一	39. 9. 29	京大	農	徒長性大麦の遺伝生理学的研究
水野進	40. 3. 25	北大	農	落花性の結実におよぼすカルシュームの影響
田場典治	41. 3. 7	東大	農	骨格筋の疲労に関する筋電図学的研究
佐藤孝	42. 3. 23	京大	農	外国における穀物栽培の研究
後藤定年	42. 7. 24	京大	農	湿田の特性に関する研究（特に篠山盆地における）
丹下宗俊	42. 9. 4	九大	農	稲麦分けつの独自生長に関する研究
伊藤和彦	42. 12. 25	北大	農	ノンピックルクロム鞣製に関する研究
高山昭康	43. 3. 20	東京農業大	農	種バレイショの休眠性に関する研究
名武昌人	43. 12. 25	北大	農	Escherichia intermedia, Strain HN-500の核酸要求性グルコース異性化酵素に関する研究
一井隆夫	43. 12. 25	北大	農	クリの栽培に関する植物栄養的基礎研究

6. 授賞の数々

完成期には学会賞、兵庫県文化賞、同科学技術賞、文部省社会教育功労賞等の授賞の栄に輝く名誉ある実績が兵庫農科大学から生まれて来た。

第3—7表　兵庫県教育、文化、科学賞その他授賞者一覧表

氏名	授賞年月日	授賞部門	授与機関	摘要
森為三	昭和26. 11. 3	教育功労賞	兵庫県	兵庫庫教育功労者選考基準による
三宅捷	〃	〃	〃	〃
〃	29. 10. 1	産業教育功労賞	文部省	産業教育70周年記念表彰要項による
林正旦	30. 5. 3	教育功労賞	兵庫県	兵庫庫教育功労者選考基準による
浜口栄次郎	32. 4. 11	鈴木賞	日本農芸化学会	
居垣千尋	32. 5. 29	知事賞	兵庫県	産業の振興の貢献者として地下火炎放射装置の考案による
浜口栄次郎	33. 2. 12	科学賞	兵庫県	兵庫県科学技術者表彰要領による。精製糖化学技術の確立
沢山智	33. 5. 3	平和賞第二部文化賞	神戸新聞社	神戸新聞平和賞内規による皮革鞣製技術の確立
山本寅雄	〃	教育功労賞	兵庫県	兵庫県教育功労者選考基準による

佐伯　秀章	34. 5. 3	教育功労賞	兵庫県	兵庫県教育功労者選考基準による
三宅　捷	36. 5. 3	〃	〃	〃
〃	36.11. 3	文化賞	〃	兵庫県文化賞表彰規則による
小野　豊	〃	科学賞	〃	兵庫県科学技術者表彰要領による 牛肝蛭症集団検診法の確立
中村　直彦	39.11.25	全国普及協会賞	全国普及協会	玉蜀黍交雑種普及10周年記念表彰要項による
吉村　貞彦	40.11. 3	科学賞	兵庫県	兵庫県科学技術賞規則による。 優良な蛋白分解酵素の発見による食品加工技術の新開発
佐伯　秀章	40.11.10	産業教育功労賞	文部省	産業教育80周年記念表彰要項による
林　正旦	40.11.20	〃	兵庫県産業教育記念会	兵庫県　〃
塚本　正美	〃	〃	〃	〃
佳山　良正	41. 4. 2	日本草地学会賞	日本草地学会	
佐藤　孝	42.11. 3	科学賞	兵庫県	兵庫県科学技術賞規則による。 東南アジアの農業開発を進めるための基礎的農業技術の確立

第3—8表

学内刊行物一覧表

（A）　兵庫農科大学紀要

発行月日	号数	紀要題目	氏名
昭 25.10.20	第　1　号	我が国における水稲の生産力について	森本　勇
26. 1.10	第　2　号	昆虫による媒病菌の伝播に関する研究	山本　和太郎
26. 3.15	第　3　号	カントに於ける実践的自由の構造	斉藤　義一
〃	〃	自覚の倫理構造	井上　善右ヱ門
27. 8.25	第　4　号	朝鮮魚類目録	森　為三
28.11. 1	第　5　号	馬鈴薯種芋の生理学的知見	川上　幸治郎
31. 3.15	第　6　号	玉蜀黍の組合せ能力の統計学的研究	中村　直彦
31. 5.25	第　7　号	山陰地区隠岐群島を含む及びその附近海域の魚類について	森　為三
35. 3.25	第　8　号	魚類における染色体の比較研究	野草　俊作
35. 3.25	第　9　号	日本及び世界における大豆の相異点についての研究	永田　忠男
36. 3.25	第　10　号	哺乳動物の日本住血吸虫症虫卵結節に関する病理学組織学研究	久葉　昇

37. 3.25	第 11 号	葉分析による水稲の栄養診断に関する研究	長谷川 儀 一
37. 3.25	第 12 号	禾本科作物による無機窒素の吸収及び同化に関する肥料学的基礎研究	伊 沢 恁 郎
37. 3.25	第 13 号	一蛋白分解酵素に関する研究	吉 村 貞 彦
37. 3.25	第 14 号	むらさきつゆ草の開花に関する研究	堀 江 格 郎
37. 9.30	第 15 号	家畜の副腎皮質における脂質の機能組織学的研究	苅 田 淳
38. 7.30	第 16 号	タンニン、蛋白質、コンプレックスの形成と溶解	西 羅 寛
39. 7.30	第 17 号	徒長性大麦の遺伝生理学的研究	小 野 一
40. 7.30	第 18 号	落花性の結実におよぼすカルシウムの影響に関する研究	水 野 進
42. 3.30	第 19 号	湿田の特性に関する研究（特に篠山盆地における）	後 藤 定 年
42.12.25	第 20 号	稲麦分けつの独自生長に関する研究	丹 下 宗 俊
42.12.25	第 21 号	ノンピックルクロム鞣製に関する研究	伊 藤 和 彦
42.12.25	第 22 号	枯草菌プロティナーゼによる脱毛に関する研究	近 藤 健次郎
44. 3. 1	第 23 号	クリの栽培に関する植物栄養的基礎研究	一 井 隆 夫

（B） 兵庫農科大学研究報告

発行年月	研究報告巻号	編名	記載論文数
昭28. 12	第1巻第1号	農学編	13
〃	〃 〃	農芸化学〃	9
〃	〃 〃	畜産学〃	3
〃	〃 〃	人文科学〃	4
〃	〃 〃	自然科学〃	7
昭29. 12	〃 第2号	農学〃	21
〃	〃 〃	農芸化学〃	13
〃	〃 〃	畜産学〃	9
〃	〃 〃	人文科学〃	7
〃	〃 〃	自然科学〃	6

昭 30. 12	第 2 巻第 1 号	農　学　編	26
〃	〃　〃	農芸化学　〃	13
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	7
〃	〃　〃	人文科学　〃	5
〃	〃　〃	自然科学　〃	4
昭31. 12	〃　第 2 号	農　学　〃	13
〃	〃　〃	農芸化学　〃	15
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	14
〃	〃　〃	農業生物学〃	8
〃	〃　〃	農業経済学〃	3
〃	〃　〃	人文科学　〃	7
〃	〃　〃	自然科学　〃	4
昭32. 12	第 3 巻第 1 号	農　学　〃	14
〃	〃　〃	農芸化学　〃	13
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	12
〃	〃　〃	農業生物学〃	8
〃	〃　〃	人文科学　〃	6
〃	〃　〃	自然科学　〃	3
昭33. 12	〃　第 2 号	農　学　〃	17
〃	〃　〃	農芸化学　〃	16
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	7
〃	〃　〃	農業生物学〃	5
〃	〃　〃	農業経済学〃	1
〃	〃　〃	人文科学　〃	5
〃	〃　〃	自然科学　〃	4
昭34. 12	第 4 巻第 1 号	農　学　〃	14
〃	〃　〃	農芸化学　〃	13
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	9
〃	〃　〃	農業生物学〃	5
〃	〃　〃	農業経済学〃	1
〃	〃　〃	人文科学　〃	7

昭34. 12	第4巻第1号	自然科学　編	4
昭35. 12	〃　第2号	農　　学　〃	19
〃	〃　〃	農芸化学　〃	12
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	9
〃	〃　〃	農業生物学〃	2
〃	〃　〃	農業経済学〃	1
〃	〃　〃	人文科学　〃	2
〃	〃　〃	自然科学　〃	2
昭36. 12	第5巻第1号	農　　学　〃	12
〃	〃　〃	農芸化学　〃	14
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	5
〃	〃　〃	農業生物学〃	2
〃	〃　〃	農業経済学〃	1
〃	〃　〃	人文科学　〃	6
〃	〃　〃	自然科学　〃	3
昭37. 12	〃　第2号	農　　学　〃	11
〃	〃　〃	農芸化学　〃	7
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	9
〃	〃　〃	農業生物学〃	5
〃	〃　〃	農業経済学〃	4
〃	〃　〃	人文科学　〃	3
昭38. 12	第6巻第1号	農　　学　〃	16
〃	〃　〃	農芸化学　〃	8
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	6
〃	〃　〃	農業生物学〃	5
〃	〃　〃	農業経済学〃	4
〃	〃　〃	人文科学　〃	3
昭39. 12	〃　第2号	農　　学　〃	15
〃	〃　〃	農芸化学　〃	11
〃	〃　〃	畜 産 学　〃	8
〃	〃　〃	農業生物学〃	5

昭39. 12	第6巻第2号	農業経済学編	4
〃	〃 〃	人文科学 〃	1
〃	第6巻第1・2号	自然科学 〃	3
昭40. 12	第7巻第1号	園芸農学編 第Ⅰ部 農学	7
〃	〃 〃	〃 第Ⅱ部 園芸学	5
〃	〃 〃	〃 第Ⅲ部 農業経済学	6
〃	〃 〃	植物防疫学 編	9
〃	〃 〃	農業生産工学〃	7
〃	〃 〃	農芸化学 〃	4
〃	〃 〃	畜 産 学 〃	8
〃	〃 〃	人文科学 〃	2
昭41. 12	〃 第2号	園芸農学編 第Ⅰ部 農学	7
〃	〃 〃	〃 第Ⅱ部 園芸学	4
〃	〃 〃	〃 第Ⅲ部 農業経済学	6
〃	〃 〃	植物防疫学 編	3
〃	〃 〃	農業生産工学〃	7
〃	〃 〃	農芸化学 〃	6
〃	〃 〃	畜 産 学 〃	6
〃	〃 〃	人文科学 〃	1
〃	〃 第1・2号	自然科学 〃	2
兵庫農科大学、神戸大学農学部（合併号）			
昭42. 12. 25	第8巻第1号	園芸農学科	5
		植物防疫学科	1
		農業生産工学科	3
		農芸化学科	1
		畜産学科	1
43. 12. 25	第8巻第2号	園芸農学科	7
		植物防疫学科	1
		農業生産工学科	4
		畜産学科	3

7. 研究論文の刊行

研究の成果は各学会誌に報吉されると共に、農大独自の学術雑誌が発刊された。昭和28年12月に1巻1号を発行した兵庫農科大学研究報告はその後毎年12月に刊行された。一方、昭和25年10月に第1号の発刊をみた兵庫農科大学紀要は学位論文を中心に学術的に優れたまとまった論文を順次刊行した。（第3—8表）

第3節　海外調査団の派遣

完成期に特筆すべきことは、農大単独の事業として、後進国農業開発の目的をもって、カンボジヤ調査団が各方面の協力を得て組織され派遣されて、多大の成果をおさめ熱帯農業の研究に貢献し、農大標本室に貴重な資料が加えられた。更に移住地農業研究会の学生と教職員のタイアップによる石垣島の調査、そしてこれら2調査の経験が、ブラジル移民実態調査団の派遣にまで発展し、その調査報告は高く評価され、ブラジル報告書3巻と『ブラジルの日系農家』として刊行、広く配布された。以下に3つの海外調査報告を佐藤孝、沢野稔、佳山良正の3氏に記述してもらった。

1　カンボジア農業学術調査　　佐藤　孝

カンボジアの農業学術調査が企画されたのは昭和31年正月、岩田教授が木旺会（農学科の職員の会）の席上で提案されたことに端を発するが、それは、昭和30年の秋カンボジアの王子シヤヌーク首相が我国を訪問された際、大量の日本人移民を受入れたいと声明されたためである。

当時は海外への学術調査はほとんど行われておらず、私の記憶では木原博士を団長とするヒンズークッシへの大がかりな学術調査があったくらいである。まして東南アジア方面の学術調査は全く行われていなかった。それが10年後の今日では、政府、民間、大学等の大小の調査団が東南アジアの各地にひしめき合っておしよせていく。

東南アジアの学術調査の先鞭をつけた点では本学のカンボジア調査は確かに意義深いものがあったと思うので、当時の模様を述べてみたい。

先ず各学科及び事務から委員が選ばれた。委員は次の方々であった。

野中時雄、清水俊秀、福島豊一、山本賢治、幹事は奥谷禎一、上山泰、小島良であった。

この委員会のもとで計画が立てられ、学術調査が遂行された。

第1回の派遣員として農業経済（移民学）の高山助教授と私が選ばれた。

学長より文部省大学学術局長に宛てられた文書をここに引用すれば、その目的及び計画の概要が明らかになるだろう。

昭和31年6月

文部省大学学術局長殿

兵庫農科大学長

カンボジア農業学術調査の件

首題の件について本学においては熱帯農学研究の一環として今春以来計画いたし着々準備を進めているのであります。すでに外務省では移民入植予定地についての調査も行われましたが同国の農業を振興するためには更らに根本的調査と試験研究機関などの施設を必要とするやに伝聞しております。

しかるに本学には外国農業に経験を有するもの多く、カンボジア農業開発についても特に関心深く、これ等の研究陣を組織的かつ積極的に活動せしめて同国農業進歩に貢献するはもとより、将来有為の農学士技術移民の送出と農業移民一般に対して熱帯農業教育に役立てたい念願であります。

本計画の調査は小人数、かつ短期間ではありますが現地資料の蒐集に主力を注ぎ、これらについて本学において更らに精細な研究を加えんとするものであります。

別紙調査要項によって第1回調査員2名を9月中旬から12月中旬まで往復3ケ月派遣の予定であります。

なお本学ではかねてから熱帯農業について特にその研究に関心をよせ、すでに桜井教授による奄美大島のバナナ、パインアップルの改善のために数回にわたる実地指導と企画、浜口教授による奄美大島、沖縄の糖業改良について実地指導によって見るべき実績を挙げ、本学卒業生数名は該業に貢献しつつあって、首題の計画についてもいささか期するところがあります。（以下略）

派遣要領は次の通りであります。

カンボジア農業調査員派遣要領

1. 目 的

熱帯農業は温帯農業とは技術的には別個のものであって、戦後日本における斯学の技術者は激減した。近年東南アジア諸国との友好関係が漸次回復しつつある時、斯学に多大の経験をもち、戦前の研究の継続完成を期待する本学の研究陣は、この際最も

近接していて友好であるカンボジア国に、まず調査研究員を送り、資料、標本の蒐集を行い、それによって熱帯農学に貢献するとともに技術者の養成に資したいと思う。

2. 派遣計画

(1) 派 遣 員　　2名

(2) 派遣期間　　約3ケ月

(3) 所要経費　　120万円（兵庫県庁と有志にて拠出）

3. 調査計画

(1) 気象状態調査

従来の気象記録にみると、カンボジア国は東部ジャバに似ているが、両地の開発程度は全く対蹠的であって、現地における詳細な従来の観測記録を得て、一般資料とともに対比分析すれば熱帯地水利学、作物栽培、農業経営上の興味ある結論を得るであろう。

(2) 土壌標本の蒐集

従来同国の土壌記録は乏しい。本学の佐伯教授は東南アジア諸島嶼、台湾、比島、海南島等の土壌中の燐酸状態の研究を行なっているが、近接せる大陸の土壌の供試材料を切に期待している。

(3) 稲品種の採集と分布調査

稲の品種研究と栽培には本学は有力な研究陣を有し、同国各地の稲蒐集によって、浜田教授の品種研究により我国水稲の起源を究め、ひいては松尾教授、大崎農場長、佐藤助教授等の栽培研究によって同国の水稲改善に大いに貢献するであろう。

(4) 現地熱帯作物の栽培様式の調査

カンボジアは乾雨期が画然としているが、その中間期もあり、必ずその期間の好適の短期作物があるはずであって、諸地方の踏査によって適作物は発見されるであろう。現地において諸熱帯作物の生育状態を詳細に調査記録撮影して標本を蒐集することは、今回の最も重要な目的であって、また従来熱帯作物の著書に欠けている形態記載を完成して教育資料にしたい。また仏印の農具に関する若干の著書はあるが従来欠けていたカンボジア国の諸農具に関しても多くの資料を集め、送出すべき農具の改良及びその技術者の養成に役立てる。

(5) キリロム高原における植物調査

キリロムは同国の最も切実な開拓予定地であって必ずや諸種の果樹、蔬菜の導入を急ぐであろう。それで現在の環境調査は特に必要であって、本学の桜井教授は多年台湾、南支、海南島において果樹栽培研究に第1人者として成果をおさめているので、必ずや本調査に基ずいて有力な進言をなしうると信ず。

(6) 農林病害虫に関する資料標本の蒐集

本学の山本教授と岩田教授は台湾、海南島の農林作物の病虫害の調査研究をしてきたので、カンボジアにおける資料標本を入手し、その対策を考えたい。

(7) 各種家畜、家禽の写真と生皮の蒐集

カンボジア国の畜産及び加工は極めて低調といわれているが、本調査によって製鞣法の改良、繁殖上の問題を明確にするであろう。

(8) 農林経済調査

特に農産物流通状態に介在する華僑について、並びに現地農村生活の実態を把握し東南アジアにおける比較農業の資料を得たい。

以 上

同時に学界有力者でこの方面への理解の深い並河功博士、木原均博士等に宛てられた“南方農業学術調査理由書”も文部省大学学術局長への文書と重複する点はあるがここに掲げよう。

南方農業学術調査理由書

兵庫農科大学

1. 調査計画立案の理由

日本の農業技術、特に稲作技術の優秀さは世界の注視するところとなり、殊に新しく独立したインドをはじめ東南アジアの諸国は挙って之の導入を計っている。

一方日本の農業技術はすでに頂点近くに達し、また農業技術者も飽和状態にある。日本の稲作技術のみならず一般農業技術の海外発展に格好の機会であり、またこのことは農業技術者に課せられた責務でもある。

兵庫農科大学は教授の陣容並びにその経験からして日本の農業技術の海外発展と東南アジアの農業指導の任に当たる最も適したものと思う。以下略す

今回の学術調査は現地における調査はもちろんのこと、集められた資料はこれら多数の教授によって分析解明されることが主な目的である。これによって戦後はほとんど中絶されていた熱帯農業の研究の端緒となることを信じる。

2. この調査結果のもたらす効果 (略す)

以 上

これらの文書は実に今から12年前に作成されたものであるが、その内容は誠に立派であり、今日読んでみてその先見の明のあったことに驚くと共に敬服に値する。

当時は一般旅券の下附は申請書にもとずいて厳重な審査が行なわれ、外貨の国外持出しの許可が下り、同時に旅券が下附される仕組みであった。この審査は大蔵省、外務省、通産省科学技術庁等の審議官によって行なわれるので、8月には私が東上して各審議官に陳情して回り、また有田代議士から外務次官へ

特別の口添えもいただいた。幸い申請が認められ、調査期間80日、70万円の外貨割当が許可され、旅券も下附された。しかしカンボジア大使館に提出したビザ申請が本国紹介となったため遅れ、何日出発出来るものか全く見当もつかなかった。丁度帰国中の吉岡カンボジア大使にお願いした。このおかげで12月下旬ビザが下りた。一方調査に必要な資材の準備も進み新しいオート三輪車もダイハツの好意で借用出来ることになり2人の隊員は練習に励んだ。

昭和32年1月16日飯野海運の宮島丸で神戸港を発つことになった。学長はじめ多くの学内有志、卒業生、県からは池原教育課長等の見送りを受け、ミス神戸から花束を受けて出帆したことは永久に忘れられない。

1月30日バンコックに着き、2月5日バンコックを発ちオート三輪車を駆って国境を越えカンボジアに入った。3ケ月余りカンボジアの全県を踏査した。オート三輪車はタイでもカンボジアでも珍しく、その姿は人気の的になったようである。

5月8日700トンの小さな貨物船　　丸に乗ってメコン河を下り、香港に到着、ここよりリベリアの貨物船レンエベレットに乗り換え5月29日4ケ月半ぶりに神戸港に帰ってきた。

オート三輪車いっぱいの蒐集資料はそれぞれ専門の立場から研究された。研究結果や隊員の報告を集めて“兵庫農科大学カンボジア農業学術調査報告書”第1号は昭和33年6月に，第2号は34年3月に発刊された。

これらの報告書は期待以上の好評を博した。この方面の調査が盛んになるにつれ、これらの報告書の内容はだんだんと古いものになってきたとはいえ、学術調査の一つの古典としての価値は高くなっているようだ。今日なお分譲を依頼してくることがあることはこれを立証しているようである。第3報を求めてくる場合もある。最初の計画では第2次、第3次のカンボジア調査隊を送る予定であったがただ1回だけに終ったことも、第3次のカンボジア調査隊を送る予定であったがただ1回だけに終ったことも、第3報の出せないことも残念である。しかし、これを契機として本学が熱帯農業に目を向け、ブラジルの農業調査、あるいは職員のコロンボプランの専門家その他の資格による熱帯の農業開発や指導への貢献、多くの職員や卒業生の移住者としてブラジルの天地にお

ける活動、海外青年協力隊員として東南アジアやアフリカにおける活躍、近くは熱地蔬菜栽培のためガム島への進出計画等本学の大きな特色の一つが出来上ってきているようであり、これはさらに神戸大学農学部に受けつがれてゆくことだろう。

最後に本計画の遂行に大きな力を尽された故三宅学長、故野中名誉教授をはじめ学内の教職員、学生、卒業生、父兄会、池原教育課長はじめ県職員、資金や器材を寄贈された方々、吉岡カンボジヤ大使はじめ大使館員、商社の方々、現地の人々から与えられた数限りない援助や協力に深く感謝する次第である。

2　南西諸島調査　　沢野　稔

昭和37年7月1日から8月30日までの約2ケ月間、南西諸島における作物および熱帯果樹の立地に関する調査と植物の蒐集を兼ねて、栽培学講座の中村弘氏と琉球・奄美大島に派遣された。

当時、熱帯農業に対する関心は学生間にも大いに盛上り学生の団体である兵庫農大移住地農業研究会は前年に8名の農業調査団を石垣島に送ったが、翌37年には更に調査を進めるために11名の学生からなる第2次調査団が組織された。我々はこの第2次調査団と石垣島まで同行した。

7月1日に神戸を出港し、最初1週間は沖縄本島を、次の約1ケ月間は石垣島を根拠地として与那国、波照間、西表の島々を調査し、最後の20日間は奄美諸島をと、出来るだけ広く農業事情の概略を見聞することに重点を置いたために、文字通りの走り歩きの日程となった。その上時期は丁度台風シーズンでもあり、この期間の約4分の1は船の連絡がとだえる状態にあったが、地元の協力と現地にあった本学卒業生諸氏の助力により予定のコースを廻り資料の蒐集を終え一応の調査目的を達することが出来た。

一方移住地農業研究会の学生による調査隊は石垣島の農業経営調査と西表島の未開地の農業立地に関して調査を行った。この2次にわたる地味で精力的な調査結果は「石垣島農業調査報告」として37年、38年の2回にわたって出版された。この石垣島において行った調査活動を通して得た経験と自信が後日佳山博士を団長とする「ブラジル移民実態調査団」に発展する手がかりとなったことを附記しておきたい。

3　ブラジル移民実態調査　　佳　山　良　正

調査の動機と調査団の結成

本学がブラジルに調査隊を派遣しようという意図はかなり以前からあったようだ。とくに移民学研究室という独自の講座が故野中教授のもとで開かれていたために、移住に関する貴重な研究報告も幾つかみられるし、関連論文、図書もかなり収集されている。従って単に神戸移住センターで乗船を待つ人々を対象にしたり、ブラジルで働く農業移住者にアンケート式通信連絡による調査の範囲を出て、自ら現地で詳細に調査したいという欲求は強いものがあった。しかし海外調査とくに1年以上にわたる長期間を予想されるこのような場合、資金面のみならず、調査員側にも種々の問題があった。すなわち1年間の調査旅行ということは、旅行準備、調査記録の整理出版を含めると優に3年以上をこの問題にさかなければならないから、論文作成中あるいは研究に多忙な研究員には無理であった。とくに本学の神戸大学農学部に国立移管の実現性が増大するにつれて職員の身辺にもあわただしさが加わっていった。そして一方戦後のブラジル移住者数は昭和35年を境として急速に減少し、昭和38年には僅か1230人を数えるにすぎず、ブラジルへの国民の関心も次第に低下したのである。このような時に学生の研究グループである移住地研究会のメンバーが、職員とは別個に長期計画としてブラジルの日系農家の営農調査を夢に画いていたのである。移住地研究会のメンバーで既に渡伯している卒業生は研究会のよき情報提供者になり、“夢の調査計画”実現へ大きく精神的に貢献したとみられよう。また彼らはブラジルにおける調査を本調査として予備的意味をもたせて石垣島（沖縄）の農家の経営調査を2夏にわたって実施していたからこれが後に大きく役立ったのである。従って初期には教職員により熱望されていたブラジル調査は、研究報告などの業績はみられたが、調査の実現をみるに至らず、国立移管の旋風にまきこまれてしまったが、一方学生による運動が徐々に効果を示し始めてきだした。学生達は石垣島の場合と同様に彼らのみによる調査団を立案し、旅費の全額を寄附に依存しようとし、昭和38年春より各種会社、団体に寄附の依頼を開始したのである。しかし学生のみからなる学術調査計画に対する会社、団体側の風当りは強く、万の金を集めるにも非常な困難を経験し、到底

500万円あるいは600万円という目標の金額は望むべくもなかったのである。しかし他面において学生達のこのような行動と熱意に感銘を受けた人々もおり、なかでも県庁外務課の職員は種々の面で便宜を与え、協力的であった。また学内の教職員中でも学生達の力になってくれる人達もいた。しかし昭和38年も暮れようとしていたにもかかわらず募金はいっこうに進まず、学生間にはようやく焦燥の色が濃くなってきた。これよりやや早く当時の学生部長長嶋浩二郎教授はよく学生達の立場を理解し、佐伯学長を動かして、県庁外務課を通じて“兵庫農科大学ブラジル移民実態調査団”に対し、県会へ予算の計上を申請したのであるが、これが内では長嶋学生部長、山中慶次事務局長の活躍と外では県庁外務課の西尾課長をはじめとする職員や県会議員の方々の尽力によって、100万円の令達をみるに至ったのである。このようにして正式に県会で承認されたためもはや学生グループの研究調査の枠ははずされ、兵庫農科大学の事業としてこの壮挙を稔りあらしむるべく職員と学生からなる調査団の結成を急いだのである。その選出については教授、助教授よりなるブラジル移民実態調査団派遣委員会（14名）によってなされた。

選出決定された氏名は次のようである。

団長　佳　山　良　正　（助教授）
　　宇治　日出二郎　（移民学研修生）
　　谷　口　明　浩　（畜産学研修生）
　　藤　田　豊　英　（農学科卒、大阪府立大学修士課程）
　　宇佐美　暘　一　（農学科　3年目）
　　恒　木　忠　昭　（農芸化学科　3年目）

調査団員の決定をみてから、募金活動は大学をあげて行なわれ、派遣委員会の方々の非常な尽力により、調査団が神戸埠頭を離れるまでにほぼ目標額に近い金額に達したのは実に驚異的であった。次に調査団派遣委員会のメンバーを掲げたい。

顧　　門	（学　長）	佐　伯　秀　章
委 員 長	（学生部長）	長　嶋　浩二郎
副委員長	（化学工学教授）	清　水　俊　秀

会　員	（事務局長）	山　中　慶　次
	（植物学教授）	浜　田　秀　男
	（工芸作物学教授）	松　尾　浩　気
	（昆虫学教授）	岩　田　久二雄
	（栽培学教授）	佐　藤　　孝
	（農業経済学部助教授）	川那部　治　良
	（家畜生理学助教授）	下　田　与四雄
	（昆虫学助教授）	奥　谷　禎　一
	（栽培学助教授）	上　山　　泰
	（移民学助教授）	高　山　敏　弘
	（栽培学助手）	中　村　　弘（その後他に転出）

調査の目的

ブラジルにおける日系農家が、いかに営農し、生活しているのか、また一応の営農確立を得るまでは、どのような過程を経、またその年数あるいは資金面の実態はどのようであろうか、日本で得られる資料の多くは、現地紹介、主として紀行文的なものにすぎず、ただ斉藤広志および鈴木梯一らの“ブラジルの日本人”あるいは“ブラジルの日本移民”に彼らの農業階梯の上昇や移動の歴史、主要農産物の変遷について知ることができる程度である。従って移住者が現地に赴いて合理的に営農するための十分にして、しかも比較的簡単な資料を得ることは不可能であるといってよかった。前述のように昭和35年まで増加の一途を辿っていた移住者数も昭和38年には1,000人台に減少してしまったが、しかしその内容をみると資本と技術を身につけた有能な人々の移住が目立ってきている。このような人々がより正確にブラジルの農業を脳中におき、ブラジルに多い偶然性の余地を予め縮小させて渡伯することができれば幸いなことである。また一方現地で営農する人々の多くは、自己の農地を中心とした郡の自然的あるいは社会的条件より知らず、ブラジルに広く浸透している同胞の姿を知ることも少ないし、また営農技術についても経験的な方法に頼って同一方法を繰返えしている場合が多く、これらの人々になんらかの有効な指針の幾つかを示したいと強く望んだのである。

調査の内容を述べると次のようである。

① ブラジルにおける日系農家の地位上昇過程
② 日系農家の営農規模とブラジルでの位置
③ 営農類型別にみた済農技術
④ 地域別農家の経営分析
⑤ ブラジルにおける共同経営の実態
⑥ 日系農家の家計費とくに、栄養摂取量
⑦ ヨーロッパ系移住者の営農の実態
⑧ ブラジル農政とブラジル経済
⑨ アルゼンチンにおける日系農業移住者の経営の実態

調査期間と日程

横浜の岸壁を離れたのは昭和39年6月2日で、7月22日にブエノスアイレスに上陸、以来8月5日までアルゼンチンのミシヨネス州にあるグアルアペ移住地とブエノス周辺のウルキツサ植民地と花卉栽培者を調査し、8月6日再びブエノスアイレスより同船でサンストに向った。ブラジルにおける調査は、8月14日から翌昭和40年（1965年）3月27日までで、その調査日程はつぎのようである。

調査はほぼ2班に分れて行なったが、8月27日—10月8日、A班はマットグロッソ州ドラードスとカンポグランデ市周辺地区を調査後サンパウロ州に入りノロエステ線沿線、B班はロンドノポリスを調査したが、さらに佳山は、マットグロッソ州の首都クイアバ周辺およびカセレスを調査し、ついでパウリスタ延長線地方に当った。

10月15日—11月8日、A班はプレジデンテ・ベンセスラウ、プレジデンテ・プルデンテ、オウリニヨスを調査（ソロカバナ地方）、更にパラナ州北部ウムアラマとグアイラを調査してイグアス地方に至り、サンパウロ市に帰えった。B班は始めよりパラナ州北部に入り、ウライ、アサイを調査し、コーヒー地帯ローランデアおよびマリアルバを調査して帰聖。

11月26日—12月25日、グアタパラ移住地、バレットス、モンテアルト、ジアーレスを調査。

12月27日—30日、イタリア人移住地のペドロニアスを調査。

1965年1月5日～25日、A班はレジストロ、タピライ、中央線沿線地方、B班はサンパウロ市近郊としてインダイアツーバ、イタチーバ、アッチバイアを調査。

2月3日—18日、A班パラナ州南部クリチーバ市近郊とカストロ市周辺、リオグランデドスール州サンタローザ地方とポルトアレグレ市周辺の調査をしてサンパウロに帰えった。B班はアマゾニアの調査のため2月2日—3月15日にわたって、主としてトメアス、グアマ、マナウス周辺について行動した。A班はさらに2月21日—3月12日にわたり東北伯のレシーフエとサルバドール市周辺の調査を行なった。以後は3月27日さくら丸でサントスの岸壁を離れるまで帰国準備その他に費やされた。

調査の成果

調査団の各地域における調査終了のつど、日系新聞は兵庫農科大学調査団の成果を報じたが、とくに酒井孝雄氏（神戸出身で筆者の友人）が主筆を担当しているパウリスタ新聞農業欄には大々的に報道された。そして3月27日の帰国を前に、サンパウロ市の日本人文化会館で、総領事館、各農業協同組合、県人会、その他有力者を招待して、各団員より担当部門の調査成果について発表会を行ない、さらに8㎜で約2時間のブラジル奥地の紹介を行ない、好評を博した後、調査団が用意したビールパーティを開き、調査に際して様々な便宜を与えて下さった在伯関係者に感謝の気持を表わした。

さて、ブラジルにおける日系農家を論ずるときその分布がサンパウロ州（77%）とパラナ州(18%)に厚く、中部、北部、東北部に薄いためにどうしても南部中心になる傾向がある。こうした点もある程度やむを得ないと思う。ブラジルの総面積は8,513,844㎢、陸地面積8,469,885㎢あり、日本の22倍に当る広大な国土では、ブラジルの農業問題を簡単に論ずるわけにはいかない。しかし我々が日系農家の経営分析をしてみて明確にいえることを2、3述べて結論にかえたいと思う。

経営不振の農家の考えられる要因

コーヒ：調査年度が1963年に当り、この年あるいは前年の霜によるコーヒー部門の収入の激減により、日系農家の代表作物の一つについての記録に正常性

を欠いたのは事実である。しかしこうしたコーヒー地帯の不運は、歩合作農、コロノ（家族ぐるみ労働者）および自作農にも一様に見舞っており、その中でも経営の巧拙によって、被害額に大きな差を示しているのであって、災害地帯として調査からはずしてしまうわけにはいかない。一般にいってコロノや歩合作農は手軽に経営費を切りつめて調整することが可能であるが、自作農は労賃と肥料費（所得的支出の85.4%を占める）に追われている。とくに肥料費と労賃を大きく支出し、飛躍的増収を目論んだ農家の被害額が大きかった。この降霜がなければ大きな発展が予想された歩合作農や自作農もかなりみられた。こうしたところにブラジル農業に運、不運があるのである。しかし降霜の被害を最小限に止める方策は皆無ではない。例えば霜は微地形によってかなり左右されるのであるから結霜の少ない丘地にコーヒーを、低地にラミーあるいは牧草を栽培して畜産をとり入れた経営を考えることが必要と思われる。コーヒーの価格が政府によって保証され、その収入の確実性大であることが、恰も日本の米のような状態にあるために、日系農家は1アールの土地にもコーヒーに期待をかけたくなるのであろう。降霜被害の著しかったマリアルバのコーヒー地帯の農家で、4,358,400クルゼーロス、（邦貨かん算871,600円）の多額の農業純収益を出している例があったが、この場合は、コーヒー部門の収入は皆無で、収入の大部分は養豚部門よりであった。この例なども今後のコーヒー地帯の経営に一指針を与えるものと思われる。

バレイショ：サンパウロ市近郊のイタチーバのバレイショ栽培農も経営が著しく不振である。前者が天災による不振とすれば、これは農産物の低価格による不振で、いわば人為的あるいは経済的不況に起因する被害とでもいえよう。分析した農家の10%が黒字を示し、他は悉く赤字経営であった。バレイショ栽培の場合は、その異常なまでの多肥栽培が所得的支出を増大させている。この肥料依存の強い農家ほど不況に弱いことが今回の調査でも明らかである。同様のことがトマト栽培農にもいえ、バレイショ、トマト栽培者の施肥量は大量に過ぎ、とくにリン酸の施用量は常識の範囲を遙かに超えているのは、著者のカストロ、グラシオザその他の採集土壌分析結果より、そのリン酸吸収係数および活性アルミニウムの量からみても明らかであって、もし聴きとりの施用量に

間違いがなければ多くを無駄にしているように思える。

今回の調査では必ずしも施肥量と収量間に強い相関を認めていないため、むしろ適正な施肥量に止めてそれ以上の投入は控えるべきである。こうした点における営農指導の適正化が必要であって、肥料の販売成績を上げるためにリン酸の必要性を強張する指導の方法は慎しむべきである（註・ブラジルの場合、営農指導に当るのが産業組合の技師や肥料あるいは農薬会社のセールスエンジニアが主であり、日本の農業改良普及員に相当する指導員がいない）またバレイショ栽培者の経営費中に大きく占める償却費はトラクターおよびその附属機械、ポンプ、発動機（主として灌漑用）、トラック、乗用車などの所有によるもので、これらの利用効率をできるだけ高めなくては、機械に使われる経営となるであろう。

ソサイ：一方サンパウロ市近郊のソサイ農としてスザノおよびジャカレーを主として調査したが、ソサイ農においてトマトを栽培しているかいないかによりかなり農家の収入に影響しているようである。例えばトマトを組み入れている農家のソサイ1本当り粗収益は232～247クルゼーロスであるのに対して、トマト無耕作農の場合は1本当り103クルゼーロスであった。近郊農業は面積に制約を受け、必然的により集約的農法で面積不足の補充をみるようになるから当然多肥料栽培をなしている。しかし亜熱帯農業における施肥技術をより研究して、経済的有効量と施肥個所、時期、配合を知るべきである。迅速な分解速度から考えて、有機質肥料とくに自給可能な鶏糞などの利用率を高めることが現在のブラジル農業において最も必要なことである。思うにブラジルの農業における施肥料と施肥法は今後真剣に考えなければならぬ問題であろう。とくに施肥の時期と量および有効な施肥個所の決定が雨季と乾季に分れているブラジル農業では、生産費の節減と生産量増大のキイポイントになると考える。現調査では、施肥農家中のある農家（バレイショ、トマト栽培農）は異常に大量投入し、ある者は施肥効果の期待できぬ程少量の施用に止まっている。なお奥地農業では無肥料栽培農が多く、従って所得的出費の内容も変わり、養豚、養鶏などの飼料費が大きく占めている。

奥地の安定した農家は経営規模も広大で、例えばアリアンサでは平均経費面

積が160haであって、コメ作、ワタ作などが主で、トラクターその他の大農機械の導入の他トラック、乗用車の所有率も高くなっており、償却費の増大も従ってみられた。所有面積が160haを超える農家の多くは、大なり小なり畜牛の飼養をみており、次第に牧草地の造成をしながら牛の増殖に踏み出している。これは土地の利用率を高めるためと、最低賃金の上昇によって雇用者数に制限を受け、労賃の嵩むワタ作、ラッカセイ作などを縮小して、たとえ ha 当りの収益が減少しても労賃の少額ですむ肉用牛経営部門の拡大をはかって経営を安定化させようという傾向がみられた。こうした動きはノロエステ地方の他に奥ソロカバナ地方、パウリスタ延長線地方あるいは南パラナ州のカストロ地方にみられ、既に大型の牧場家が出現している。

なお調査団の持ち帰えった資料は2年6カ月を経て整理、検討、取纏めを行ない“ブラジルの日系農家”383頁の報告書として既に昭和42年10月10日に兵庫農科大学ブラジル移民実態調査団派遣委員会から出版され、内外から強い反響を得ている。

第4節　むすび

以上のように、農大の充実と研究成果の進展の反面、開学以来その創設に、又伝統の形成に、研究の指導と進歩に努力を尽された教授方（森、浜口、沢山野中、桜井、浜田各教授）が育て、指導した若き研究者にすべてを託し、停年内規により退職して行かれた。県、農大はこれを遇するに名誉教授の称号を与えてその名誉をたたえた。

特に創立以来初代学長として一心に努力された三宅捷学長が学内外各層から惜しまれつつ退職された。長年苦労された学長がお歳のためとはいえ退職を決意された理由の一つには、『本学も開学以来10年、これで一応一本立ちが出来る農大に仕上がった』と云うお考えがあったのではなかろうか。

世に完成と云う言葉はあっても、これで万事良いという完成はあり得ないだろう。苦難の草創準備の時期を終えて一応農大の充実期とみなしてもよいこの時期は三宅学長の勇退という一事が何かを物語っているように思える。

このように関係各方面の協力のもとに目ざましい充実をして来た事実の底に

は、静かにしかも着実に流れつつあった国立移管という客観的事実もみのがすことはできない。そしてこの国立移管への動きが教職員の研究業績やその他諸般の充実完成を早める効果にも作用したのではなかろうか。かくして次の体質改善から国立移管期へと農大は進展して行ったのである。

第4章　体質改善と国立移管

第1節　経過のあらまし

本学の国立移管が文部省においても取りあげられ調査費の名において予算化せられたのは昭和38年度であって、爾後活潑な運動が展開されたのであるが、そのハシリともいうべき論議が29年3月11日の教授会において既に取り交されている。

その教授会において三宅学長は「先般森脇教育課長、竹内大学係長が来学され、県財政の都合上神戸医大と兵庫農大の二校を国立に移管することを県会にはかることとなったという。これが実現に伴ない、教養、事務などは大きい影響をうけるものとおもわれるとともに専門学科の講座数も可成りのものが削減考えられるので、今後これに対していかに善処していくべきかを研究する必要されることもがあるとおもう。」と述べ、この移管の方針について異議の有無を問われたが教授会は一応全部賛成という結果になった。

なお席上国立移管対策委員会をつくる必要性につき論議されたが、結局少数委員による対策委員会を結成することに決定した。

つづいて同年3月19日の教授会において次の通り正式に委員の選考を決めた。

		正	副
農学科	（2名）	野中、金子	森本教授
（教職を含め）		2教授	多河助教授
農芸化学科	（1名）	佐伯教授	吉村教授
蓄産学科	（1名）	下田助教授	福島助教授
教養関係	（1名）	石井教授	山本（賢）教授

× × × ×

昭和29年度に入り、副知事上京の際に文部省当局に県として県立である医大農大の国立移管を正式に申し入れている。

また受け入れ側の神戸大学にあっても医、農の2学部について特に移管、新

設を希望している旨の表示がなされた。

越えて昭和30年度を迎え、当時財政難に喘いでいた県は、大学の発展のためには国立移管によって医、農の2学部を創設することが最善であるとの結論に達し、知事名をもって神戸大学長および文部大臣に移管の要請をなした。また同時に県立大学連合協議会において、2短期大学（姫路工、加古川農）の姫路工大、兵庫農大への統廃合と県立2大学（医大と農大）の国立移管についてのつよい体制を堅持することを示した。

30年7月21日の教授会では三宅学長は国立移管に対する各教授の意見を徴するとともに「聞くところによれば、県会公正会にあっても医大、農大の国立移管に賛成しているが、県庁側は学長会議の結果による所産だとうまくかわしているようだ。」と語っている。更に語を次いで「岸田知事は6大学をつくってお得意だったが、阪本知事は特に医大、農大の移管を一刻もはやく実現に移す考えをつよくもっていられる。情勢も変るもんだ。しかしその実現には少くとも5～6年はかかるものとおもう」と結んでいる。

当時の見通しとしては、地方再建整備法案が実施の運びになれば国立移管も必ず促進されるであろうとされていた。

33年に入り、文部省は国立移管を前提として公立各大学の現状を調査することとなり、移管運動下にあった10大学を対象として踏みきることとし、文部省に公立大学調査会がつくられ、本大学にも同年11月吉田、田中の2委員が来学調査した。

次いで34年2月26日の教授会では、三宅学長は国立移管問題についての県より通達の結果を次のように報告し懸案されている。

「文部省の話によれば、現在農学士は過剰気味であり、就職状態もおもわしくない。従って普通の学科編成の形では文部省は受け入れて呉れない。この際特色ある農学部の形態に脱皮しなければならないとおもう。ついては何か体質改善の名案はないものだろうか。」

当日種々意見が出て取り沙汰されたが、その主なものとしては、「開拓農学科、農業工学科、移民研究所の新設」（中村）「高冷地農業、熱帯農業の研究を重点的に考える」（桜井）「就職率のよい農業工学関係講座の増設」（後藤）

「開拓研究所の必要性」（川那部）「醸造関係講座の強化」（吉村）などがあった。

なお当日国立移管対策委員として農学科中村教授、農芸化学科吉村教授、蚕産学科小野教授、教養石井教授を決定した。

この国立移管対策委員によって、数次の会合により、農学部としての特色を出すための結論として、農学科は移民、農芸化学科は農産製造に重点をおき、これらに関連する附属研究所の設置も強調することが決定せられた。

即ち、かくして国立移管に対応した体質改善策が真剣に取り組まれることとなったのである。

一方同じ34年に、国立移管の暁、そのもっとも有力な候補地となる六甲台県有地（いわゆる六甲ハイツを包含する）処理についての審議を主目的とする六甲台県有地処理審議会（矢野会長）は数次の検討の結果、「県立大学を速やかに国立に移管されることをつよく要望し、その関連において妥当な代償をもって六甲台県有地を神戸大学用地として国に譲渡することを適当と認める」との答申をなして県立大学（医大、農大を対象とする）の速やかな国立移管を要望している。正に側面よりの速射砲の役割を果たしている。

なお県会において取り扱われた国立移管問題ついて記述して、34、35年頃の県としてこの姿勢更に次節に述べる学者グループへの調査委嘱への経過を首肯して頂きたい。

即ち34年3月には「県立大学の国立移管に関する意見書」が県会議長細見達蔵の名をもって提出せられ、国立移管の促進は更に拍車をかけられた。（意見書別掲）

兵庫県立大学の国立移管に関する意見書

本県は医、農、工、商の4大学を設置し、爾来設置者として多額の経費を投じてその充実を図るとともに大学教育につき国立大学の補完的役割を果してきたところでありまして、逐年他府県からの入学者が激増しつつあり、更にまた就職者も全国的に進出してひとり本県のみならず広く全国的にも大なる貢献を果している現状であります。

しかして県は今日まで県立大学の人的、物的整備に全力を傾注してきたのでありますが、県財政の現状および将来の地方財政の見通しの上に立って種々検討した結果、

県立大学を今後維持運営し且つ大学としての機能を更に伸張せしめ充分なる教育効果を挙げ得ることは到底至難であると思料されるのであります。

他方県内の国立神戸大学は現在文、理、教育、法、経済、経営、工の7学部を有していますが、医、農の両学部を欠除している現状よりみて、この際神戸医科大学および兵庫農科大学を神戸大学の医学部および農学部とし、県立神戸商科大学および姫路工業大学を現地において国立移管し、神戸大学を名実ともに綜合大学として完成されることは県民が久しく熱望してきたところでありまして、これが実現により一層の総合的一体的運営をはかり、もって教育効果の向上に資せしめられることは極めて重要であると確信するものであります。

幸に本県は眺望絶佳にして教育環境もっとも秀れ、しかも神戸大学本部の所在地六甲台に隣接した位置に用地3万坪を有していますが、神戸大学としては同大学学舎集中計画上不可欠の絶好の地としてこれが提供を熱望されているので、県立大学の国立移管により神戸大学が名実ともに総合大学として整備されるためには同用地の提供、各学部の充実等、同大学発展のため最善の協力を惜しまないものであり、この意味からいたしましても県民の念願である県立大学を国に移管することは緊急不可欠な措置と確信する次第でありますので、速やかにこれが実現せられるよう強く要望いたします。

右地方自治法第99条により意見書（陳情書）を提出いたします。

昭和34年3月16日

兵庫県議会議長　細　見　達　蔵

内閣総理大臣　殿
大蔵大臣　殿
文部大臣　殿
自治庁長官　殿
衆議院議長　殿
参議院議長　殿
宛

同県会における阪本知事の説明を摘記する。

「文教政策について説明申上げる。

県は県立大学4校に年間4億4,000万円の純県費を計上せざるを得ず、然るに県単独事業総額7億4,000万円に較べるとき、いかに県立大学の経営が県財政の重大負担となっているかが分り、貧弱な県財政をもっては到底各大学の内容の充実を企図することは至難であり、いよいよ34年度より県立大学の国立移管について本格的運動を展開したい。

なお県有六甲ハイツを本県として不利とならぬ条件をもって国立神戸大学に提供、そこに総合大学を建設しようとする神戸大学当局長年にわたる希望に沿いつつ国立移管を進めようとおもう。」

同知事は持論として大学は国家が経営すべきものとの意見をつよく主張されている。

これに対し元原議員はこれに賛成するとともに、香川、愛媛などの大学の移管に比して立ち遅れの本県として更に猛運動の展開を希望した。

同県会における野瀬議員の質問「なぜ医大と農大の2大学に限定して移管をしようとするのか」に対する阪本知事の答弁を掲記する。

「現在の国立神戸大学に欠けているのは医科と農科であるから総合大学にするためにはこの二つを加えねばならないという意味合いで一応この二つが出ているのである。鳩山内閣のとき或は清瀬文相の頃は地方大学の国立移管は一切受けつけられなかったが、時勢は明らかに変り、多少の可能性が生れてきたので特に踏みきるに至ったのである。なおこれに伴なう財源的な措置も十分考えており、決して手ブラでやろうとは考えていない」と述べた。

更に34年9月県会には移管促進を目標とし移管に必要な事項を調査する目的をもって「県立大学国立移管促進に関する特別委員会」が設置された。

これによって委員として太田垣敏雄、佃良一、丹羽栄一、木下顕太郎、中川光太郎、奥五一、中沢栄二、金沢万次郎、寺井弥三市、真鍋又治郎の諸氏が選ばれた。

この委員会による中間報告は35年7月の第82定例県会において木下委員長によって行なわれたが、この時限における県当局の考えや動きを方向づける好資料とおもわれるので摘記する。

木下委員長報告の概要

昨年3月第76定例会において議決された「県立大学国立移管に関する意見書」の趣旨に則して調査ならびに運動を進めてきたが、文部省では「既存の国立大学整備充実のため地方大学は当分の間国立に移管しない」方針を打ち出すとともにこれを堅持してきた。

しかし山口、岐阜など国立移管希望県の実情を調査した結果、これらの県では文部省の叙上の如きつよい方針にもかかわらず、数年前より国立移管の運動を根づよく展開継続していることが明らかとなったので、慎重検討の結果、単に県立大学の国立移管ということでは到底実現は困難であり、六甲ハイツ跡の処理問題ともかみ合わせて「兵庫県立神戸医科大学、同兵庫農科大学を国立神

戸大学の医学部、農学部として吸収合併することにより神戸大学多年の宿望である総合大学の実現を図る」という基本方針をもって移管を促進することとなった。

なお一方県議会の意見書議決に呼応して県選出の国会議員全員をもって「県立大学国立移管推進議員同盟」が結成され、会長に清瀬氏、副会長河上氏、常任幹事として中野、堀、松沢、渡海の各氏が選ばれて、ここに県議会、県当局とともに文部省その他の関係先に陳情するなど移管推進の協力体制が整えられたのである。

かように体制は先ず軌道に乗ったという形で、われわれ特別委員会としては県当局は元より各機関とも常に緊密な連絡をとりつつ上京、各政党幹部、国会文教委員会、文部、大蔵当局更には神戸大学同窓会幹部に至るまで各関係方面にも波状的に陳情運動を続けてきた。

昨年11月の35年度政府予算編成に際し、猛運動を展開した結果、地方大学の国立移管反対の厚い壁を打ち破って本年1月、35年度予算として兵庫、山口、岐阜の3県立医科大学の移管の前提として調査費が計上せられたことは大きい収獲といわねばならない。

しかし本県では他県と異なり「国立神戸大学に県立医大、農大を吸収合併をすることにより総合大学の実現を図る」という基本方針があり、引き続き農大の調査実施をつよく要望するとともに両大学の移管についての速かな確約を得るよう努力している。

なお県当局として残された問題は総合大学の一環としての新たな農学部の在り方などについて具体的な構想を打ち立てることが肝要であり、そのためにはその道の権威者に研究調査（新らしい体質への）を委嘱するなどの積極的対策を進める必要が大いにある。

この医大調査費の計上された好機を逸せず一層積極的に移管の促進に運動を進めねばならないと考える。

この木下委員長の報告により、特に35年度に3医大の移管調査の計上がなされ、従来地方大学の国立移管への厚かった壁に光明が射し込み、兵庫農大の国

立移管も有望視されるに至ったことは事実である。

当時の県教育課長はこれについて、「県としては初めから医大と農大とを同時に移管して3万坪の用地の無償譲渡を条件としていた。もし医科だけというのなら、話を白紙に返して今後、2大学同時移管の線で交渉を進める方針である」といっていたが、結局は他大学との振り合いもあり年次を逐うて実現させる以外に途はなかったのであろう。

元より兵庫農科大学の国立移管は総合大学としての神戸大学の実現への理想達成であり、経営、経済、文、法、理、工の各専門学部と隣接して存在した県有地六甲ハイツを候補地として農学部学舎を新設するという構想であったことは言をまたないところであった。

移管の暁における神戸大学農学部が多紀郡の地から去っていくことは郡民にとっては、単に町村財政、私経済の面からも多大の打撃を蒙むるのみならず、地方大学として地元子弟の教育上からみても深刻な影響をもたらすことが必至とみられ、農大存置郡民大会が開かれ、多紀郡発展対策協議会との連名のもとに決議書が提出せられた。

誰か兵庫農大が篠山の地に設置されて10年を経過したかしないかの時点において、早くもその存置運動を展開せざるを得ない事態に追い込まれることを予期したであろうか。

ここで国立移管の前提要件として何故体質改善が要請されるに至ったかを一応説明しておかなければならない。元より初代学長たりし三宅先生は旧制大学農学部に比肩しても何ら遜色なき新制農学部を築いていられたがために、そこには非難すべき何ものもなかったとみてよい。しかし上に述べ来たったように工業の異常なまでの発展は理工科系統技術者の不足を告げ、一部の識者は農学就職の場の少いこと（これにも疑問はあった）を理由に農学部の縮少論さえ全国的に唱えられるに至ったのである。これらのことがたまたま農業基本法農政が発足したばかりの時点において如何に本学がよき学科、教員組織のもとに遠大の理想をもって運営されていても国立移管の完遂のための条件を完全に具備されていると文部省を認めさせることは可成り困難であることが判然としていたのである。ここで次節に掲げるような第3者の立場から農大の組織、内容を

再検討すべき二次に亘って学者グループの答申を得ることに努めることになったのである。

第 2 節　学者グループによる答申と体質改善の実施

本学が昭和24年の創設以後、着々重要講座の増設とともに25、26年度には農芸化学科、畜産学科を新たに設置して近代農業の発展に対応すべく努力が払われつつあったことは充分理解し得るところである。しかし農業的立場からみた近畿圏今後の発展、変貌に包含される諸問題に対処するためには既設の3学科制を踏襲するのみではそこにはなお多くの再検討の余地あることを感ぜざるを得ない状態となっていた。即ち単に講座数は充分数を具備していたとしても、教官組織、学科組織を総合的に通観するとき、まして国立移管との対応関係においても必ずしも検討の余地は絶無とはいえず、更に大学本来の目的、使命を円滑かつ効果的に発揮して農学、農業への寄与貢献上万全を期するためには何としても既設の兵庫農科大学の3学科では可成り不充分であり、可成り現状から脱皮した組織機構を要請するに至ったことは当然である。

かような事態に直面して県は何としても二大学の国立移管を達成するため最善とおもわれる方途を講ずる必要に迫られた。特に目まぐるしく展開される農業の変貌情勢に即応して、且既設各講座の機能をも活用した上での体質改善を強行すべく、先ず打たれた施策としては極めて至公至平とみられる第3者的学者グループによる体質改善案の作成であった。

即ち県は前東京農工大学長吉田正男博士を主班とし東京農業大学教授大槻正男博士、東京大学教授戸苅義次博士の3名からなる学者グループに体質改善案の答申を委嘱したのである。

その答申は次の通りである。

兵庫農科大学の体質改善に関する学識者の答申要旨

第 1 次 答 申（昭和35年 9 月）

調査委員　農学博士（前東京農工大学長）吉田　正男
農学博士（東京農業大学教授）大槻　正男
農学博士（東京大学教授）　戸苅　義次

(1) 兵庫農科大学を神戸大学に移管することについて

兵庫農科大学を神戸大学農学部として移管するに当たっては、研究並びに教育上必要に応じ、他学部とよく連けいのとれるようにし、総合大学の1学部として移管の実を充分あげ得るように努めなければならない。

また神戸大学の立地条件の特徴を発揮し、同時に兵庫農科大学の現在の教官構成において特色ある点をなるべく生かし、かつ、移管の経過を円滑ならしめることも考慮に入れる必要がある。

以上の諸点をあわせ考えれば、神戸大学に設けられる農学部としては、次の5学科24講座をもって編成することとしたい。

農学科	{果樹園芸学、花卉園芸学、飼料作物学、栽培学、作物保護学、土壌肥料学、計6講座}
畜産学科	{家畜育種学、家畜飼養学、畜産製造第1（食品）、畜産製造学第2（皮革品）、家畜解剖学及び生理学、計5講座}
農芸化学科	{応用微生物学、醸造学、栄養化学、食品化学、計4講座}
農業機械学科	{農産加工機械学、圃場機械学、農業機械原動機論、農業工学通論計4講座}
農業経営学科	{農業経営学、農場管理学、農業計算学、移民学、農業地理学計5講座}

(2) 以上の学科構成の再編に伴って、施設については、次の通り整備する。

(ア) 校舎多紀郡篠山町の現校舎を神戸市六甲台の神戸大学本部に隣接して移置することが、移管の趣旨に沿うものとして必要である。農学部用地は、校舎建坪1,000坪（延5,000坪）と、構内の実験圃場3,000坪（有効面積）を含め約10,000坪面を必要とする。

(イ) 附属農場

篠山町所在の農場は、これを整理し、加古川市所在の加古川農場を拡充する。その拡充に当っては、第1または第2農場に接続して用地を確保する。農場の総積合計は、最低30町歩とすること。

(ウ) 農産加工場

附属農場の一部に、農学科及び農芸化学科の実習施設として農産加工場を設置する。

(エ) 附属牧場

多紀郡今田町所在の牧場は、山地牧畜の研究用として、そのまま利用する。なお、加古川農場内に家畜飼育場を設け、耕種と畜産との相互連けいを図ること。

(オ) 農牧場における研究並びに実習施設

本学の方針としては、特に学理と実技の調和を重視することとし、圃場に関係の深い研究室を農牧場に設置するとともに、学生教育上必要な宿泊及び厚生施設を整備するものとする。

(3) 以上に要する専任の専門教官の所要数は、次の通りである。

区　分	教　授	助教授	助　手	計
学　部	24	24	45	93
附属施設	0	3	10	13
計	24	27	55	106

この案は既設の国立大学農学部の学科編成から全く脱皮して特色ある学科編成を狙ったものとして一応可成り異色性あることは認められるものの、兵庫農科大学教職員の身柄のことは全然考慮の外にあり、近代農業の進展に対処し得る全く新らしい内容の農学部を目指して立案せられたものであった。しかもその特徴ともみるべきは研究より教育に重点をおくという意図の下に、学科編成についても農業政策と機械化農業を過大重視した関連学科を新設し、既存の農大独自の講座を相当数廃止するという、いわば理想論的な内容のものでもあった。

これらの事情により県当局は折角設置した農大内部の紛糾にも留意する要あり、また上記3委員に立案を依頼した関係もあり、この取扱いには極めて慎重であったことは事実で、そのまま農大当局に受諾を強いる如きことはせず、結局3委員と農大の間に双方納得のできる折衷案が作成されることに大きい努力が払われた。特にもっとも関心のもたれたのは現存講座の廃止によって起る出血で、これをいかにして阻止するかが大きい問題点であった。結局、3委員の計画案に含まれなかった農大現存の講座を加えた32講座案以外には解決方策はなきものとの判断のもとに、三宅学長は3委員の諒承を得るために並々ならぬ努力をされたのであったが、不調に終った。

三宅学長がこの会談後、足部を捻挫されたというアクシデントが起ったが、これも先生の極度の緊張によるものとおもわれる。

しかし当時公立大学実情調査員として文部省から派遣された当時の東京農工大学学長井上吉之博士の農大を国立に移管するに当っての助言と特に同博士が文部省において極めて信望の厚かった点と農大が上記3委員の案に対するつよい難色をもったことなどを勘案して、県当局は更に井上博士に現実的に農大を

国立に移管することを前提としてその改組案についての再検討を要請したのであった。

即ち第2次体質改善案の答申に当たられたのは東京農工大学長井上吉之博士を主班とし、愛媛大学長香川冬夫博士、日本大学教授斎藤道雄博士の3名をもってする調査団であり、数度にわたる調査の結果によって答申がなされた。

その原文は別掲の通りであるが、その主な狙いは「農業の近代化、合理化のため農業生産の選択的拡大、農業生産性の向上、農業構造の改善、農産物の流通の合理化および加工の増進」などに適応することが中心的課題とせられ、36年公布せられた基本法農政のワクに添うべく農業指導者ないしは技術担当者の養成を目標としていることが掲げられている。加うるに地域性に基づく特色ある教育を目ざして現行講座数の範囲内で農学科7講座、園芸学科4講座、植物防疫学科4講座、農芸化学科5講座、畜産学科5講座、計5学科25講座が計画立案せられたが、これにも更に検討が加えられた。

第 2 次 答 申 （昭和38年3月）

調査委員　農学博士（東京農工大学長）　井上　吉之
農学博士（愛媛大学長）　香川　冬夫
農学博士（日本大学教授）　斉藤　道雄

第1 体 質 改 善 の 方 向

わが国農業の近代化、合理化のため、農業生産の選択的拡大、農業生産性の向上、農業構造の改善、農産物の流通の合理化及び加工の増進などが中心の課題とされている。この農業発展の方向に対応して大学における農学教育は、農業の指導育成を担当する者、農業関連産業の技術者及びこれらの技術開発の研究者を養成することを目標とし、また農業構造改善の進展にともなう農業経営者、農業生産企業体における技術者の養成を必要とする。

他面農業は、地域的自然条件への依存度が高いので、農学部においては、地域性に基づく特色ある教育、研究の体制を整備することが必要である。かかる一般的方向づけのもとに、兵庫農科大学においては、国立移管を前提として理想的な体質改善を図るべきであるが、現在の教員養成の特色を考え、円滑かつ速やかに改善の実をあげるために、現行講座数の範囲内で当面次の学科に再編成することが適当である。

(1) 農　学　科｛作物学、育種学、機械栽培学、農業土木学、農村計画、土壌学、肥料学、計7講座

(2) 園芸学科 {果樹園芸学、花卉及び蔬菜園芸学、保蔵加工学、農業及び園芸経営学、計4講座

(3) 植物防疫学科 {農業昆虫学、植物病理学、農薬学、防疫遺伝学、計4講座

(4) 農芸化学科 {生物化学、農産製造学、食品及び栄養化学、醗酵生産学、農産加工機械学、計5講座

(5) 畜産学科 {家畜育種学、家畜繁殖学、家畜飼養学、畜産製造学、家畜管理学、家畜衛生学、計6講座

しかしながら農業発展の方向に対処する農業生産基盤の開発強化及び農業の機械導入の要請に応えるためには、農業工業科ないし農業機械学科を、また農業経営の合理化、近代化の要請に応えるため、更には神戸が海外貿易ないし移住開発上に占める特性を考え、これらの分野において農業関連事業を担当すべき人物を将来神戸大学の他学部との連けいの下に養成するために農業経営学科を設置することが考えられる。このためには、将来既設学科、講座の転換、統廃合及び他の試験研究機関との間の人事の交流等についても検討すべきであろう。

第2 施　　設

国立移管を考慮し、更に農学教育の体質改善にともなう必要な施設は、次の通り整備することが適当である。

1. 校　　舎

神戸市六甲台の県有地に移築し、構内に実験圃場を設けること。

2. 附属施設

(1) 実習農場

本部より行程1時間以内の距離にある最低10町歩の農場（田、畑）を含め、総計25町歩の面積を確保すること。

(2) 牧　　場

現在の今田牧場を拡張整備するとともに畜産加工場を設けること。

(3) 農産加工場

本部の実験圃場に隣接して設けること。

第3 教員組織

講座を担当する教員定数は、教授、助教授及び助手各1名とし、必要により講師を置く。

附属施設に属する教員は、農場にあっては、助教授1名、助手3名とし、牧場にあっては、助教授1名、助手2名とし、農産加工場にあっては、助手3名とする。

第4 学生定員

講座数と卒業生の社会的需要関係を考慮し、各学科の入学定員は、次の通りとする。

(1) 農学科	30名	(4) 農芸化学科	40名
(2) 園芸学科	20名	(5) 畜産学科	30名
(3) 植物防疫学科	20名	計	140名

即ち農業基本法に源を発する農業構造改善の施策が推進されるに従って、近代化された高度のこれに関連する技術者、指導者を要請する傾向に対処するため、農業土木学と農業機械学第1、第2と農業化学機械学の4講座をもって農業生産工学科を独立せしめる案が浮び上ってきたのである。（第8章後藤定年随想参照）

そして園芸学本来の花卉およびそさい園芸学、果樹園芸学、保蔵加工学と、農学科本来の作物学、育種学とを合流せしめるとともに農学科中の「農村計画」をその原流たる基礎学科「農業経済学」とし、園芸学科中の「農業および園芸経営学」を一本の「農業経営学」としてこの2講座を加えた7講座をもって「園芸農学科」とすることとなった。

なお農学科内とせられていた土壌学、肥料学はともに土壌学、植物栄養学として農芸化学科6講座の内に入れられることとされた。

結局、園芸農学科7講座、植物防疫学科4講座、農業生産工学科4講座、農芸化学科6講座、畜産学科6講座、計5学科27講座で構成されることで本決まりとなった。

かくて井上博士の第2次案の再検討と最終決定の内容をみるとき、農大の現存教官の出血を全く起さないことを第1条件としたことは肯定できるが、同時に他大学農学部には到底みられない特徴を具備していることも注視すべき価値がある。いわばわが国当時の農業の事情を充分勘案してこれに対処することにも腐心がなされ文部省の受け入れ易い体制をとり得たことに注目すべきである。

県当局は県議会の議決を経て、国立移管には可能な限り文部省および神戸大学の希望を容れ、たとえ結果からすれば決して充分とはいえなかったとしても12億円近くの予算をもって迅速にしてかつ円滑な推移の裡に移管を遂行することができたことは高く評価すべき適切な措置であったといえる。

この間にあって農大側も県の方針に従うのはやむを得ないこととして、常に県側と協力体制にあり、しかも移管によって惹起される教職員の脱落、講座数の減少を絶対防止することを大前提として移管対策の樹立にもっとも苦心した。また講座の性格の変転によって研究内容の大巾な転換をみることとなった

ものも学科構成の変化に伴なって当然一二に止まらなかったが、関係講座の大乗的立場からの格別な理解と協力が惜しまれずなされてそこには何らの動揺紛糾のあともみられず、有終の美を発揮できたことは欣ぶべきである。

次に国立移管の現状を略述しておこう。

移管は実質的には41年度より行なわれ、神戸大学農学部学生として学生定員155名により新入学生を許可したに始まるが、教官個々の移管はこれら学生の2年目となる42年度より3年次に分け、次の順序により行なわれた。

第1年次（42年度）

農業経営	植物病理	農産化学機械
食品及栄養	家畜衛生	保蔵加工
醗酵生産	畜産製造	農業土木

第2年次（43年度）

農産製造	家畜飼養	農業機械第1
農業経済	防疫遺伝	作物
農薬	植物栄養	家畜繁殖

第3次（44年度）

生物化学	農業昆虫	作物育種
農業機械第2	果樹園芸	家畜管理
花卉そさい園芸	家畜育種	土壌

41年度新入農学部学生は教養部学舎にて学び、兵庫農大学生は2、3、4年目で従来通り篠山学舎において就学、同年度兵庫農大学舎における最後の（第15回）卒業式が行なわれた。

42年度前期は神戸大学は新入学生を込めて1、2学年（定員310名）は教養学舎にて、兵庫農大学生3、4年目は篠山学舎で勉学、別掲の移転とともに神戸大学学舎に移り、後期授業からは全面的に神戸大学で集中実施せられたことは当然である。

また兵庫農科大学第16回卒業式も神戸大学舎C101号室で厳かに行なわれた。

43年度は兵庫農大としての最終年次に当り、4年目154名を残すのみとなり

農学部学生は1、2、3年目合計学生定員465名となった。

しかし、神戸大学学生と兵庫農科大学学生は常に同一学舎の中にあって同一学科、同一講座内において相互に和気溢れる裡に学究生活をつづけている。

なお兵庫農科大学同窓会について若干触れてみると、44年4月1日（移管完了後）以降は神戸大学農学部同窓会の名に代わり、県立も国立も含めた一本化したものとなり、同窓会名簿は県立時代の会員と国立になってからのものとの区別がされるようになるだけで、いわば全くの兄弟関係にあるものといえるであろう。

また学籍簿にしても、国立移管後も、農大、農短大の卒業生の学籍簿もすべて神戸大学農学部教務掛に引き継がれ、永久に保管されるのであり、兵庫農大の卒業生でも神戸大学農学部教務掛の窓口で卒業証明書や成績証明書の作成を願い出ることができるのである。

結局神戸大学農学部が兵庫農大卒業生の母体となるものとみて差支えない。

第3節　むすび

国立移管を目指した5学科編成の体質改善は昭和39年度より実施せられる運びとなったが、当初40年度からといわれていた国立移管は大蔵省との接衝の関係などによって1カ年遅れて41年度より実施となった。

待望の農学部新学舎は41年10月起工、同42年11月竣工した。この建築を請け負ったのは銭高組であった。

42年10月上中旬を期して移転の準備が着々と全職員、学生協力のもとに手廻しよくなされ、8月下旬には荷造りが完了、篠山―三田―六甲台のルートを日日10余台の大型トラックの往復によって極めてスムースに10月20日には全部の運搬が終了した。

正に昭和24年4月から18年6カ月に垂んとする一農科大学の蓄積で、講座数を25とし年間1講座40万円としても1カ年1,000万円となり実に2億円に近い諸施設設備の集積ともいえる。

42年9月19日兵庫農大は篠山学舎の終焉を告げるとともに農大創始以来地元を始め関係のお歴々に対する感謝の意を表わすための篠山学舎移転式を挙行し

た。式は午後1時より講堂において厳粛に、しかも感慨ふかい裡に行われた。順序次第は次の通りであった。

1. 開式の辞
2. あいさつ
   佐伯学長
   金井知事
3. お別れのことば
   県議会議長
   多紀郡町村長会長
   篠山町長
   篠山町議会議長
   岸田元知事
4. 学歌斉唱
5. 閉式の辞

特筆すべきことは本学の創始者ともいうべき元知事岸田幸雄氏の出席であり同氏の追憶を込めた別れの言葉は万場出席者の胸を打つものがあった。

そのあと想い出ふかき花なき桜並木の下で最後の懇談パーティが楽しい雰囲気の裡に開かれた。

なおこれに引き続いて3時から町その他地元各種団体主催をもって兵庫農大お別れパーティが篠山城趾公園において繰り展げられた。農大教官たち、在学3、4年目学生、県当局主脳、地元有志たちは歓を共にし、急造の舞台に展開されるデカンショ踊り（地元青年男女による）その他の余興によって時の経過を忘れて別れを惜しんだ。絶えず打ちあげられる花火とともに宴は午後9時ごろまでもつづけられた。

町商工会はこれと相前後して兵庫農大へのお別れ奉仕サービス週間と称して大売出しを行なった。

兵庫農科大学の去ったあとは建物、敷地は県管財課の管理に移されたが、44年1月に至り町当局の熱意と地元県議植田八郎氏の肝入りによって、尼崎市の大日本金属ＫＫと大阪機工ＫＫの系列につながる篠山鋳鉄ＫＫが鋳物工場として

誕生、或る程度は既設の建物が利用されて発足する見込みが立った。

最後に一地方大学が国立大学農学部としてそこに可成りの迂余曲折はあったとはいえ、無事移管された要因を探ってみよう。

(1) 国立移管への体制としての学科編成体質改善に既に39年度より踏み切ったこと。

この改善は過去数年にわたり研究の上充分時流に即応したものであり、文部省においても是認されたものであった。

しかも第2章において記述したように、三宅学長によって行なわれた10ないし15年後を見越して整えられた教授陣の整備と少壮教官連の成長があったことであろう。

(2) 神戸大学を総合大学としての実をあげしめるためには医学部、農学部の新設が絶対必要であったこと。しかもその隣接地にいわゆる六甲ハイツという格別の県有候補地があったことであろう。

(3) (1)、(2)の要因の他に県ならびに県議会の終始堅持した県立2大学の国立移管への積極的体制があげられる。

県当局は県議会において設置の県立大学国立移管促進特別委員会の意見ないし報告に基づいて或は学者グループによる移管を前提とした体質改善案の検討、或は他府県における地方大学の国立移転の情勢の調査、或は中央官庁の意向打診ないしは陳情などを逐次手を打って、周到かつ熱心に運動を展開したのである。国立移管の完遂はこの県当局の終始一貫した積極的姿勢によったものということができる。

(4) 以上は兵庫農科大学そのものよりみれば外縁的要因といえるが、農大自身の体制もまた極めて積極性をもち、移管が具体化した36年頃より佐伯2代目学長を中心として移管対策委員会は常に文部省、県、県議会、神戸大学とも密接な連絡を保ちつつ円滑な進展体制を維持しつづけたことである。

昭和34年2月以来の本学国立移管対策委員会委員氏名を第4－1表に掲げておく。

第4－1表　　国立移管対策委員会委員

学科区分	43. 2. 27 ～34. 9	34. 9 ～39. 3	39. 4 ～40. 3	40. 4 ～42. 3	42. 4 ～44. 3
農学科、園芸農学科	望月教授	望月教授	中村教授	中村教授	中村教授
農芸化学科	吉村教授	吉村教授	吉村教授	吉村教授	吉村教授
畜産学科	小野教授	小野教授	小野教授	小野教授	小野教授
植物防疫学科	—	—	望月教授	望月教授	望月教授
農業生産工学科	—	—	後藤教授	後藤教授	後藤教授
一般教養関係	石井教授	山本教授（賢）	山本教授（賢）	野草教授	—

第5章　附　属　施　設

農科大学の附属施設としては、附属農場、附属牧場および附属図書館がある。中でも附属農場、牧場は農学部には絶対不可欠の施設であり、大学設置基準においてもきびしく規制し、また大学当局もこれを重視すべきことは疑いの余地がない。

本学設置に当っても将来は種々の事情のために農大の附属とはならなかったものまでも申請の段階では一応兵庫農科大学の附属施設として申請書の内訳とされたこともあったくらいである。

ここに一章を設けて本学農場、牧場および図書館がいかなる経緯をたどり発展しまたいかなる方針のもとに運営せられ来たったかを記述することとした。

第1節　附　属　農　場

（本来の兵庫農科大学に属するもの）

1　開設以来の年次別収支

篠山第一農場（336・10a）が昭和24年に開設されて直ちに圃場の整備に取り掛り、続いて第二農場（151・33a）が同25年初めに買収されて、第一農場と共に生産に発足したが、その後の年次別収支は第5-1表の通りである。なおこの他第三農場（1438・74a）は同26年初めに買収され直ちに植林され、山林資源として大きく蓄積中である。

色々の条件から判断して、農場定員も昭和26年度には一応完備して、その運営も軌道に乗りかけた年を昭和28年と見て、同28年度と最終年次の昭和42年度とを比較して見ると、収入面ではその比率は6.02倍となり、米作は6.16倍、又蔬菜類は4.05倍の収入増になっていた。なお米作の反収によって地力を見ると第一農場は3.6倍に、第二農場は1.9倍となっていた。

(2)　職種別人員数

草創期とみられる24年4月より26年度までの3年間に第5—2表の通り、農場長1名、助教授（兼任）1名、助手3名、事務職員（主事補）2名、圃場技

第5-1表

篠山農場収入表

（単位：　円）

年度＼項目	支出(円)	収入(円)	米（円）	麦	雑穀	蔬菜	果樹	畜産	その他	備考
昭和24年	0	0								
25	50,560	115,180	112,000	—	—	3,180	—	—	—	—
26	350,000	135,221	129,000	—	—	6,221	—	—	—	—
27	220,000	205,995	195,500	—	—	10,495	—	—	—	—
※ 28	310,000	283,656	262,340	—	—	21,316	—	—	—	第一農場 (反) 9斗6升0合 第二1石788
29	360,600	311,130	257,545	—	—	53,585	—	—	—	第一1石45 第二2石30
30	520,000	451,674	392,405	8,690	4,100	39,500	—	6,979	—	第一2石35 第二2石97
31	567,100	464,205	301,460	—	13,448	63,363	—	85,934	—	(反) 2石36
32	630,800	737,780	356,146	20,012	20,358	55,329	—	285,935	—	(反) 2石23
33	913,300	799,588	391,380	—	23,023	76,153	408	304,689	3,935	10a当332.1kg
34	1,378,000	1,188,750	665,831	14,739	37,975	95.503	1,384	370,568	2,750	432.8kg
35	1.283,500	1,093,457	596,137	14,148	13,797	95,803	1,386	369,756	2,430	409.4kg
36	1,287,160	1,097,285	649,340	40,034	15,000	215,501	—	177,410	—	403kg
37	1,246,789	1,268,934	719,126	30,510	5,565	269,189	—	241,544	3,000	415kg
38	1,255,474	1,121,255	740,420	—	—	380,835	—	—	—	406kg
39	1,634,200	1,519,474	945,531	33,277	—	540,666	—	—	—	431kg
40	1,341,000	1,284,415	799,887	38,436	1,920	268,512	660	175,000	—	352.8kg
41	1,456,100	1,394,189	1,152,487	17,194	—	221,408	3,100	—	—	460.2kg
※ 42	1,771,620	1,708,284	1,616,194	—	—	86,340	5,750	—	—	520.8kg
比率		42年/28年 6.02倍	42年/28年 6.16倍			42年/28年 4.05倍				

能員（農夫）12名、計18名（兼任を除く）を整備することができた。

しかし29年阪本知事の就任とともに、国立移管の問題も抬頭して30年度には圃場技能員の減員が実現、また職場にも若干の動揺もみられ、従来の定員数に変化をみつつ今日に至った。（第5—2表年次別職種別人員数参照）

第5—2表　　職種別人員表

年次	農場長	農場教官			事務職員			圃場員	計
		助教授	講師	助手	事務長（主査）	主事	主事補（雇）	技能員（農夫）	
昭和24年	0	0	0	1	0	0	1	3	5
25	1	(1)	0	3	0	0	2	9	15
26	1	(1)	0	3	0	0	2	12	18
30	1	(1)	1	2	0	0	2	9	15
40	(1)	1	0	2	0	2	1	10	16
42	(1)	1	0	2	1	1	0	6	11

（ ）は兼任を示し、農場長は昭和37年4月より講座教授が兼任した。農場の事務長制は昭和41年4月に始めて施行された。なお同43年3月篠山農場閉塞まで居た職員は農場長（松尾）助教授（長谷川）助手（松井、石田）事務長（藤田）及び技能員（山田、矢尾、畑、佐藤）の9名であった。

2　農作物の年次推移

次に作付面積を年次別にみると第5—3表の通りであるが、第一、第二農場の各圃場の性状からして、第一農場は主に水田の造成に力を注いだ結果米作の面積は著しく増加して来た。かつ畑作の蔬菜栽培面積も漸増している。なお裏作の麦作面積が不規則な増減を示しているのは、第一農場の一部と第二農場が湿田地帯でこれらの栽培管理に冬期の降雨量等で無理な点が時々生じたことによる。なお毎年各講座は平均5ａ宛計50～60ａ研究用に借用できる様にされていた。

昭和42年度の最終年次には、同9月迄に神戸市六甲台に学舎が移転することに決定していたため、その頃までに栽培収納の出来るもので人員不足による労力の節約とその集中を考え、かつ予定の収入をあげ得る作物を栽培することとし、米作に主力を注いだ作付面積割となった。

第三農場の山林は昭和42年度においては次の数字が示すように、杉200ａ、

第5—3表　　農作物別作付面積年次表　　（単位　a）

年度＼項目	区　分	実測面積	作付面積	米	麦類	雑穀類	そ菜類	果樹	飼料類	購座研究用
		a	a	a	a	a	a	a	a	a
昭和24年	第1農場	336.10	—	—	—	—	—	—	—	—
25	第1農場	336.10	—	—	—	—	—	—	—	—
	第2 〃	151.33	150.00	145.00	—	—	—	—	—	5.00
26	第1 〃	〃	10.00	—	—	—	10.00	—	—	—
	第2 〃	〃	150.00	145.00	—	—	—	—	—	5.00
27	第1 〃	〃	50.00	—	—	—	20.00	—	—	30.00
	第2 〃	〃	150.00	140.00	—	—	—	—	—	10.00
28	第1 〃	〃	89.00	25.00	—	—	29.00	—	—	35.00
	第2 〃	〃	150.00	133.00	—	—	—	—	—	17.00
29	第1 〃	〃	93.00	20.00	—	—	43.00	—	—	30.00
	第2 〃	〃	150.00	133.00	—	—	—	—	—	17.00
30	第1 〃	〃	49.00	10.00	2.00	6.00	11.00	—	—	(10.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	110.00	—	—	—	—	—	40.00(田)
31	第1 〃	〃	260.00	40.00	—	5.00	85.00	17.00	70.00	(33.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
32	第1 〃	〃	264.00	36.00	30.00	21.00	44.00	17.00	50.00	(56.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
33	第1 〃	〃	368.00	41.90	—	35.50	121.40	16.20	93.00	(50.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
34	第1 〃	〃	342.00	58.00	27.00	33.00	102.00	16.20	46.00	(45.00(畑) \15.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
35	第1 〃	〃	282.40	62.20	22.50	55.00	63.50	16.20	3.00	(45.00(畑) \15.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
36	第1 〃	〃	307.00	70.60	45.00	20.30	99.90	16.20	5.00	(40.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
37	第1 〃	〃	288.23	68.00	42.43	5.00	106.60	16.20	—	(40.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
38	第1 〃	〃	265.30	62.00	—	—	110.80	3.50	39.00	(40.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
39	第1 〃	〃	274.30	68.00	39.00	—	99.80	3.50	14.00	(40.00(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
40	第1 〃	〃	296.19	68.00	41.43	4.00	131.36	3.50	—	(37.90(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
41	第1 〃	〃	252.72	64.80	18.20	—	117.80	3.50	—	(38.42(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—
42	第1 〃	〃	155.90	90.98	—	—	13.00	3.50	—	(38.42(畑) \10.00(田)
	第2 〃	〃	150.00	150.00	—	—	—	—	—	—

桧44 a 及び雑木 477・48 a その他原野 717・26 a 、計1438・74 a となっている。この広汎地区の下草刈、管理等には相当の労力を年々要して居り、植林後の2年間は圃場員は勿論、事務並びに研究室職員の全員で補植並びに雑草木や蔓草の除去等の手入れをやり、その後も圃場員の労力を投入し、次第に成長するに及んで、下枝打等の整枝作業を毎年行なった。それに伴なって西垣講師は林学の講義をやられていたので、数年間一日その杉の手入れに4年目学生を主体に特別実地指導をせられたこと等、多年に及ぶ労力費の蓄積は大きな宝となって現在15〜16年生の杉樹が約 140 a も栽植され、すでに直径 20㎝内外にもなっており、評価すれば、少なくとも何千万円にもなるであろう。

昭和42年次始めの造林内訳は

(杉)	16年生	50.00 a
	15 〃	92.00
	7 〃	10.00
	6 〃	10.00
	5 〃	8.00
	4 〃	11.00
	3 〃	19.00
(計)		200.00 a

(桧)	5年生	10.00 a
	4 〃	14.00
	1 〃	20.00
(計)		44.00 a
(雑木)		477.48 a

3　学生の農場実習

年次別の学生実習動員数をみると第5—4表の通りである。

同表を説明すれば、農学科第1回の昭和24年入学生については、圃場整備、造成のため農場実習は昭和24年および同25年には実施出来ず、同26年(3年目)から始められており、○内の数字は、それぞれの単位数を示し、それが7を示しているのは、当時の3年生は相当無理な実習がなされたことになり、また当時の農学科3年生29人中15人が農芸化学科（C）に分科し、4単位を修得したことを示している。また第2回の昭和25年入学生も同25年には実習が出来ず、同26年（2年目）から実習を始めており、単位所○印は3を示し、同27年（3年目）の○印も3を示し、計6単位の実習を修得している。更に第三回の昭和26年入学生は同26年（31人)、同27年（26人)、同28年（26人）のそれぞれに○印の①、③、③計7単位を正常に修得出来たことが理解され、かつ1年生から

第5—4表

年次別学生実習動員数

年次＼学科＼学年	農学科 一年目	農学科 二年目	農学科 三年目	農芸化学科 一年目	農芸化学科 二年目	畜産学科 一年目	畜産学科 二年目	畜産学科 三年目	植物防疫学科 二年目	植物防疫学科 三年目	医進課程 一年目	年計
	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
昭和24年	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
25	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
26	① 31	⑧ 19	⑦ 14(A) ④ 15(C)	① 27	⑧ 19	① 6	—	—	—	—	① 38	169
27	① 33	⑧ 26	⑧ 15	① 26	⑧ 22	① 21	⑧ 5	—	—	—	① 38	186
28	① 36	⑧ 27	⑧ 26	① 38	⑧ 23	① 25	① 18	⑧ 5	—	—	① 30	228
29	① 28	⑧ 23	⑧ 21	① 32	—	① 26	—	—	—	—	① 29	159
30	① 36	⑧ 21	⑧ 22	① 28	—	① 21	—	—	—	—	① 40	168
31	① 41	⑧ 31	⑧ 21	① 25	—	① 30	—	—	—	—	① 40	188
32	① 47	⑧ 41	⑧ 28	① 36	—	① 25	—	—	—	—	① 39	216
33	① 45	② 44	② 36						—	—		125
34	① 41	② 41	② 41						—	—		123
35	① 42	② 35	② 37						—	—		114
36	① 42	② 36	② 34						—	—		112
37	① 50	② 33	② 34						—	—		117
38	① 52	② 40	② 32						—	—		124
39	① 40	② 33	② 40						—	—		113
40	① 41	② 35	② 28						—	—		104
41	—	② 38	② 35						① 26	② 19		118
42	—	—	② 38						—	① 26		64

3年生までの間の人員の変動が明示されている。従って左側の年次数が入学時の年次とすれば、修得単位は○印の数字を斜めに右下に合計すれば、その年の入学生は何単位修得したかが判ることになり、かつそれぞれの人員変動が判ることになる。なお同26年次の各1年生（31人）、2年生（19人）、3年生（14人）それぞれの同じ1年間の延実習人員は農学科においては、31人＋19人＋14人＝64人ということを示している。

実習を沿革的にみれば昭和24年に篠山第一農場が当大学の附属農場として借用（篠山農業高校）設立を見て、同25年に第二農場が開設され、作業を開始可能に到り、第一、第二農場ともに整備され、作付けも可能となり、同26年より学生の農場実習が課せられる様になった。設立当初の農場実習単位は6単位で文部省へ申請したが、これを7単位にせよとのことで、第1回の卒業生は事実その半分もできなかった様に思われ、且つ実習内容についても草刈りとか、圃場整備の様なことがたびたびで、作物を作ることより、土を作る（肥沃化）ことが多かった。

昭和26年度より一応実習の学年割当ができた。初め農学科は同26年から同32年までは、昭和34年卒業の学生までは、1～3年間に1：3：3計7単位が認定され、同33年以降は1：2：2計5単位となり今日に到った。農芸化学科は同26年から同28年まで1：3計4単位（1単位必修）、同29年から32年までは選択の1単位のみで、その後は農場実習はなくなった。同学科の学生も農学科学生と同様に第2回生も1年目の実習は出来ず、従って2年次の3単位のみの修得であった。即ち第4回生までは4単位を習得した。なお選択になっても殆んどの学生は実習を修得した。畜産学科は農芸化学科と同調で、同33年より牧場実習（同36年に今田牧場創設）に切り替えられた。その昭和30年（第1回）卒業生は牧場並びに畜産実習がなかったので、農学科と同様に1：3：3計7単位を修得した。又第2回生は2単位を修得し、以降は1単位である。

昭和32年までの実習中、1年目は農学科、農芸化学科、畜産学科、更に医学進学課程の全学生が3月の学年末試験終了後3日間藤岡奥の山で植林実習を農場からの昼食（弁当）の給与により実施され、結果的に紀念植林の歴史を作った。その後は農学科の1年のみがこの実習を続行し今日に至った。又農学科2

年目の学生は同32年までは6月、7月．10月の各月に、それぞれ3日間宛いわゆる終日の集中実習を行なって来た。その後同33年からは時間表に組込み毎金曜日の午後これを行なう事になり2単位を修得せしめた。なお農学科3年目は同29年から木曜日の午後の時間表に組入れられ、2単位を修得できた。

その後同38年から作物とその作業の性質内容の都合により、この3年目は春作蔬菜の栽培関係を5月上旬の1週間午後の時間を割愛してもらい、又7月夏季休暇に入る3日間前に加古川果樹園で主として果樹に関する実習を園芸関係の職員を始め果樹園芸学教室の教官の応援指導を得て実習し、10月下旬の午後の1週間を秋作蔬菜栽培についての実習を集中的に行なった。即ち3年目は主として園芸関係の技術を修得せしめ2単位を与えた。なお体質改善に伴ない植物防疫学科の新設により同41年度から植物防疫学科2年目は火曜日に実習を施行し、更に3年目は夏季と冬季の休暇に入る前後3日間宛計6日間の実習を加古川果樹園芸学講座の応援を得て2単位を修得せしめた。

以上の事項は神戸大学への移管により、篠山農場が昭和43年3月で完全に閉塞され、又加古川農場並びに今田牧場も共に同44年3月に完全に閉塞されてすべて兵庫県加西市鶉野町堂ノ本の旧海軍飛行場跡約 40ha の平坦広汎な綜合農牧場に統合されて、神戸大学農学部農場として発足するに到り、その後の神戸大学農学部園芸農学科の農場実習は新設の加西農場での2年目後期から毎週金曜日の終日実習と、3年目前期の毎週木曜日の終日実習により計5単位を修得出来る様になるが、加古川農場が同44年3月まで存在するので、それまでは、神戸大学農学部の学生にもここで実習が課せられている。また植物防疫学科の学生には4月8、9、10日頃及び7月8、9、10、11日頃、更に12月23、24、25日頃にそれぞれ合宿実習を課することになっている。更に牧場実習は7月の中旬頃約10日間の予定でこれも合宿実習を課することになっている。この新設の綜合農場が整備充実され、色々の機能が発揮される様になれば、これらの農場実習以外に特殊な実習が色々と行える様になるであろう。

4　附属農場運営の基本方針並びに農場制度

大学附属農場運営の基本は農場が果さねばならないその使命と目的により方向づけられることとなるが、その使命と目的は農学の理論を農業の実際に応用

して技術化するとともに、更にその技術を総合化する方法を研究し、かつ指導するところにある。従ってその運営の基本方針もその線に添って行なわれ、その実践の場がその質と量において近代的な設備と人材を擁し、常に当該地方農業の進歩発展を助長するという重要な使命があり、斯かる方針で農場の運営は計画され進められて来たが、実際上それぞれの農場においては予算措置上近代化に色々の段階があり、結局は農場の具備してきた特性、環境、場所によりそれぞれの特色を生かさねばならなかった。斯かる意味において、篠山農場は予算面では貧弱で近代的設備にも欠けた点が多かったので、それぞれの特色を生かすため、本当の正門前の第一農場は主体を研究圃場に置き畑地に¼の水田を作りやや傾斜地に果樹園を作り、小面積ながら一応米、麦、蔬菜、果樹園、飼料園等としての研究調査可能な圃場、並びに実習栽培及び生産圃場をも兼ねられる所の圃場としての運営方針を定めた。それに対して第二農場は水田が主体であり、わが国一般の稲作経営の農業を主体とした経営方針を取り、更に第三農場は山林を特徴とした農場とし、且つ加古川農場の第二農場は果樹に特殊性をもたせた農場としての目的を果たす様に開設以来努力して来た。なお実際農場運営のための命令系統は次の通りである。

農場長
- (教育研究) → 農場の助教授 → 同助手
- (圃場管理) → 同 助教授 → 同助手
- (行政事務) → 同 助教授 → 同助手
- (行政事務) → 同事務職員 → 農場員

なお農場運営のためには、研究、経営、並びに実習教育の各目的が達成されるように、独自の施設、設備、規模を所有し、これら第三部門の統合活動により、農場の研究部門では、研究室との関連と農場経営上の技術の改善と普及を意図した研究を主体とし、経営部門においては、研究部門の改善開発、研究した農業技術を充分に採択し得る高度の農業技術の実施を行ない、農業経営の目的を達成する。又学生実習教育部門では、研究、経営2部門に亘り実習教育を修得せしめ研究心の昂揚、技術の修得、営農技術の練磨を行なえるよう組織し、設備施設を整え運営することを望んで来たが、今後は新設の 40ha の加西農牧場において、斯かる目的、使命を以て運営して行けることを大きな喜びとするものである。

（付記）　これまでに加古川農場において行なって来た学生実習は宿泊実習で、篠山農場で行ない得なかった果樹に関する実習を補強し、次の如く施行して来た。

昭和33年から40年の間は1月8日から10日まで果樹剪定実習を行なった。当初この冬季の実習は専攻教室の学生を主体とした実習であった。従って希望者の農学科3～4年目で30名内外であった。更にこの年間の7月11日から13日までの夏季の果樹園管理実習は農学科3年目の必修とした。なお41年1月8日から10日までの果樹剪定実習は従来通り希望者の農学科3～4年目の専攻教室の学生を主体としたが、昭和41年夏季以降は正規の実習となり、次表のようになった。

第5—5表　　41年度以降の果樹園管理実習

年　次	実習期間	主なる実習	実　習　生
昭和41年	7月8日～10日	果樹園管理	園芸農学科3年生
〃	12月22日～24日	果樹剪定	同　上
同　42年	1月9日～11日	果樹剪定	植物防疫学科3年生
〃	7月10日～12日	果樹園管理	園芸農学科3年生
〃	10月29日～31日	一般実習	同　上
〃	12月23日～25日	果樹剪定	植物防疫学科3年生
同　43年	1月8日～10日	果樹剪定	園芸農学科3年生
〃	7月8日～10日	果樹園管理	植物防疫学科3年生

実際篠山農場は、その目的、使命を果たし、その運営を円滑にするために、次の如き職制がとられていた。即ち篠山農場は兵庫農科大学の附属農場であってすべて学長の権限に属していて、農場長はその直下にあって農場を総括し、管理運営にあたっていて、かつ農場長は専任の教授又は助教授によって、学長の指名により、教授会の議を経て、県知事により任命されていたが、昭和37年4月からは講座教授が同様方法により、併任することになった。

一方では兵庫農科大学の処務細則により、農場に関する事項として、昭和38年6月1日に、地方機関処務規程第4条の一部改正により、従来農場長には専決事項がなかったが、学長の権限に属する一部が改正になり、篠山農場は本部

に直結していたため、学長の権限の一部が事務局長に委譲され、事務局長の専決事項が決った。同時に遠隔地の加古川農場については、篠山農場において、事務局長によって行われている権限の専決事項が、そのまま加古川農場長に与えられた。従って加古川農場と異なる所は加古川には事務長制がしかれていたが、篠山にはなかったのである。かつ農場の収入に関しても加古川のように分任出納員が置かれてなく、農大本部の経理課内において、この仕事は施行されて来た。その他については両農場の違いは殆んどないが、篠山農場は庶務会計関係の職員が各一名と、10名の圃場員で、第一、第二、第三農場の事務、作業が行なわれて来た。他に篠山農場には助手が2名いて、研究室もあったが、主体は圃場の管理運営にあって、水田作（米作）と畑作（蔬菜作）に大別して行なわれて来た。国立移管に伴ない、昭和42年4月1日から加古川農場と同様に篠山農場も同じく農場長の専決事項が適用されることとなり、9月7日から施行された。斯くして篠山農場は同43年3月末を以て完全に閉塞され、同県職員は各所に配置転換されるに到った。われわれは次代の新農場が近代化した農場運営の基本方針の樹て直しを、決意と希望に燃えて実施すべき任務を負っていることを特に強調しておきたい。

5　開設以来農場において行なわれてきた諸試験について

昭和25年から篠山農場の作付が可能になって、いよいよ個々の試験に着手出来る様になったのは同26年からであった。当農場において主として農場職員によって行なって来た試験は第5—6表のとおりである。

第5—6表

年　度	氏　名	試　験　研　究　題　目　数
昭和28年	松尾浩気、広瀬智久	落花生の一増収法（I）　外2題
昭和29年	水野　進	薯類の花器形態に関する研究— (2)　大和、黒皮種における胚嚢発達並に授精結実について—　外4題
昭和30年	上野慶一、水野　進	茶樹に於ける授精結実に関する研究— 第1報　不完全種子の出現について　外2題
昭和31年	小早川利次、 上野慶一	山の芋 Dioscorea Batatos DECNE における生態学的研究— （I）　催芽栽培について　外1題

昭和32年	上野慶一	茶樹に於ける授精結実に関する研究一 第2報　一顆中の胚嚢形成及授精完了の順位並に開花期と授精結実について　外3題
昭和33年	小早川利次	ケシ栽培の基礎的研究一 （Ⅱ）葉片切除及び朔の薬剤処理　外4題
昭和34年	上野慶一、小早川利次、石田　薫	甜菜の糖含量低下防止に関する研究一 （Ⅰ）MHの抽苔抑制効果について　外4題
昭和35年	上野慶一、石田　薫	夏播甜菜における生育と成分の変化　外6題
昭和36年	石田　薫、上野慶一	胡瓜の収量に関する研究一 （Ⅰ）日長処理が収量に及ぼす影響　外1題
昭和37年	石田　薫	環境制御に関する研究一 （Ⅰ）胡瓜の保温育苗
昭和38年	石田　薫	環境制御に関する研究一 （Ⅱ）胡瓜の保温育苗
昭和39年	石田　薫、松尾浩気	茄子の花成に関する条件の研究一 （Ⅰ）播種期と初節位との関係　外2題
昭和40年	居垣千尋、松井範義	ニプロ・プラウローターの作業性能について　外2題
昭和41年	石田　薫	茄子の花成に及ぼす日長と温度の影響　外4題

第2節　後年追加編入された加古川農場

1.　加古川農場の沿革

兵庫農科大学附属加古川農場として設立をみたのは、昭和32年4月に旧県立農業短期大学が廃止となり、その施設全体が本学附属農場として、加古川市平岡町新在家風呂の下902番地の1に建物敷地279.01aと最近（42年）まで借用中の70.55aを買収し、更に県有地270.95aの計620.51aが第一農場（横蔵農場）として設定され、同時に第二農場として加古川市野口町水足字広辻1984番地にあり、建物敷地は県有3.66aと錦江会からの借用2.02aと圃場としては錦江会から505.06aを借用地を込め計510.74aが第二農場（稲美農場）となった。両農場共小松林を開墾したもので、その土壌は何れも洪積層の走褐色瘠薄な埴質土壌である。この各農場の沿革概要は次の如くである。

第一農場は昭和15年9月に兵庫県立青年学校教員養成所の校舎の一部が完成し、同生徒の一部が県立農学校より移転して来てよりここに始まり、翌年4月

に校舎の完成に伴ない、水田 77a、畑 10a の圃場の借入を行ない、同19年 1 月より 6 月の間に多木氏所有の山林、小松林を同校教員養成所は西より東へ、他方県立農学校は東より西へ、それぞれ伐採開墾し、畑地 332.13a を造成した。同19年 4 月に同校教員養成所は兵庫青年師範学校に移管され、同22年10月同校生徒寮が建築され、同24年 4 月青年師範学校の姫路移転により兵庫県立農業高校が経営するところとなり、同26年 4 月兵庫農業短期大学が創設されるにおよび、農場に農場長（1）、農場主任、助教授（1）、助手（3）、技術職員（1）、嘱託（1）、作業員（2）、配置された。同26年10月校舎増築（研究室、実験室、階段教室等）。同28年 6 月講堂建築。同 8 月生徒控室建築。同10月 井戸の堀さくあり。同28年12月多木氏より学校農場として、先に開拓された畑 332.13a 及び山林 24.69a と水路 2.47a の寄付があり、同32年 4 月兵庫農業短期大学廃止により、兵庫農科大学付属加古川農場として移管され、桜井芳次郎教授農場長となり、この学校農場（横蔵農場）は付属加古川第一農場と改称された。圃場主任（第一、第二農場）1 名（林助教授）、助手 2 名、作業員 2 名、その他研究室は 6 室で助教授 6 名、講師 1 名、助手 3 名であったが、同35年より逐年減員し、同41年 5 月に研究室は閉鎖するに至った。事務室は事務長以下 5 名で同35年以降は 3 名となる。引継当時、当農場は 429.99a を実習圃場として管理し、建物は 4,128.74㎡ の内、当農場使用分は 1,414.57㎡ で、全敷地の北側を専用し、他は県立農業高校へ 1,858.32㎡ 、又農業協同組合講習所へ 855.85㎡ 、それぞれの申出により貸付することとなった。但し農業協同組合講習所は既に短大時代より上記855.85㎡（寄宿舎、教室、食堂並びに炊事場等）の建物を借用し、引継き借用するに至ったものである。又県立農業高校（定時制）は昭和32年 4 月 1 日より本館、教室、その他計 1,858.32㎡ を同37年 3 月31日まで借用していた。同36年 4 月桜井教授定年退職により、松尾浩気教授農場長となる。同37年 4 月12日より同38年 3 月31日まで、即ち新設の国立明石高専の完成まで、県立農高定時制が借用使用していた建物本館他計 2015.01㎡ を貸付けた。従って農業協同組合講習所へ貸付中の一部教室（78.04㎡）も上述の全建坪に含まれ、同講習所は同37年 4 月から 795.76㎡ の借受けとなったが、その後同 39 年 3 月をもってこれ等を返還し貸借関係は完了した。同 37 年 9 月事務室（99.00

㎡)、収納舎（39.60㎡）が新築された。

同38年11月多木氏より寄付を受けた畑の一部87.9aを多木氏に分譲した。同39年2月5日より同40年3月31日まで、即ち新設の県立東播工業高校の完成まで、明石高専が借用していた大部分の本館その他の建物計1702.99㎡を貸付け、同40年10月1日より県立農業高校寄宿舎として、本館等計1320.85㎡を貸付けた。同41年3月頃旧生徒寮2階建の2棟を撤去した。（建面積271.67㎡×2×2＝1086.68㎡）。

従って現在の全建物面積は3,193.10㎡で、内県立農業高校寄宿舎1320.85㎡で、農大として管理経営している建物面積は1872.25㎡となった。昭和43年10月現在の職員は農場主任（林助教授）、圃場教官（石田助手）、事務職員1名、臨時職員2名の計5人であって、350.96a（水田61.41a、畑141.74a、山林原野103.99a、その他43.82a）の学校実習地を経営、管理していた。国立移管により昭和44年4月より新農場（加西市鶉野）への移転の前段階として、職員の移動が激しくなって来たので、農場運営に支障を来さない様に併任その他の方法等により応急臨時的処置を取って生産面の進展に苦慮してきた。

第二農場は通称その地名によって稲美（いなみ）農場ともいわれ、昭和10年10月に創設された県立青年学校教員養成所と県立農学校と共同で経営されていた。当時の農場主任は黒田忠雄氏であった。同11年1月に県立農学校同窓会即ち錦江会がこの土地の買収を完了した。同4月に同農場主任は宮川綱三氏となり他に教諭1名と作業員1名が任命されていた。同11年～12年に鶏舎建築され鶏、豚の飼育が始められた。同12年には生徒宿泊訓練寮が建築された。

時あたかも戦時体制に突入、植栽せられていた梨・ぶどうなどの樹園地は整理せられて食糧増産に供せられるに至った。

終戦の年10月青年学校教員養成所は青年師範学校に移管され、更に同24年4月に青年師範学校の姫路移転により県立農業高校の単独経営となった。同25年12月に桃園を整理した。同26年4月に兵庫農業短期大学が創設され、県立農業高校より当農場を引きつぎ単独経営を7月より開始、豚、鶏等を飼育した。主任、助教授(1)、助手(6)、技術職員(1)、作業員(6)、同26年12月に柿・梅の間伐を施行し、桃園の整理を行い、同27年1月に梨(20世紀他5品種12a)、

桃（白桃他3品種22a）、葡萄（デラウエヤー他1品種8a）を栽植した。（梨・桃は現在生育旺盛である。）同28年3月に梨・葡萄の棚作りを完了、同29年8月に灌漑用水路の整備なった。同30年2月～5月に梨・葡萄・桃園の暗渠排水施設竣工、同31年1月～4月に畑10aを水田に造成転換す。同31年10月に梨・葡萄・桃園の有刺鉄線棚を作る。同32年4月に兵庫農業短期大学廃止により兵庫農科大学付属加古川農場第二農場となる。当時実習農場として、財団法人錦江会（農学校卒業生同窓会）よりそのまま505.94aを借用し、経営した。建物は569.64㎡（内202.95㎡は錦江会より借用）を使用管理することになった。当時の職員は農場主任（第一農場と兼任、林助教授）、助手2名、農夫3名であった。同33年2月に梅（林州白加賀18a）、柿（平たねなし、7a）を栽植した。栽植孔掘りにダイナマイトを使用した。（農大農業土木教室職員指導による。）同33年2月～3月に柿園の暗渠排水施設成り、同33年3月には場内防空壕が整理された。同34年11月に豚舎の鉄柵を作り、鶏の飼育を中止し、同35年10月に新植葡萄園の暗渠排水施設が竣工した。同12月に葡萄（8a）及び桃園の一部（5a）を整理し、梨園にし、同36年2月に葡萄（ベーリーA他3品種27a）を栽植した。同2月に梅(青軸)を整理し、梨（20世紀8a）、桃（大久保5a）を改植した。同37年1月に旧農舎及び甘藷貯蔵庫を解体整理した。同2月に栗（つくば他2品種21a）、柿（平たねなし15a）を栽植した。同3月に新農舎（145.45㎡）建築され。葡萄園の棚作り、有刺鉄線の柵もできた。同3月にトラクター（ホードソン）及び付属品購入された。同9月に電話架設され、同38年3月に豚舎運動場鉄柵作り成る。同38年10月～同39年3月に灌漑施設の整備及びポンプ小屋の改築成る。同40年2月に梅（南高）補植し、同41年3月に気象観測設備完成。同42年5月に豚の飼育を中止した。同43年3月に新農舎（145.45㎡）を加西農場へ移築した。

当初錦江会より借用の学校実習地505.94a（水田78.83a、畑129.62a、果樹園167.56a、山林原野42.61a、その他87.32a）のみで運営して来た。建物面積は424.44㎡（内県有は221.49㎡）を使用管理して来た。現職員は農場主任の林助教授が兼任し外に助手1名、臨時職員1名で運営し新農場への移転の体制を整えつつある。

2. 合併以後における加古川農場の運営と年次別生産

昭和32年4月より加古川農場が兵庫農科大学の農場として運営されるに至って以来特に注目すべきことは篠山農場で果し得なかった果樹に関する経営、技術、実習並びにそれに関する諸作業面であり、特に園芸関係の実習に果樹の剪定、整枝、誘引、摘果等その他薬剤散布等の果樹園芸の技術面の実地指導が得られたことで本農場の特性とされ、この方面を生かした運営を殊に第二農場で行なうことのできたことは幸であった。

合併後の人事の面については、当農場は県立農業短期大学の廃止によって、未だ多くの人材が残っていたので、これ等の整理のために当農大への吸収は勿論、県内外への転出に8年を要している。特に残存各講座を農場研究室と名称を変更して、それぞれの各研究室は、作物、育種、園芸、畜産、病理昆虫、土壌肥料、等の名称で各研究室に助教授が研究主任として残っていた。例えば作物には長谷川助教授、育種には竹崎助教授、園芸には笹岡助教授、畜産には三宅助教授と南条助手、病理昆虫に国枝助教授と石田裕助手、土壌肥料には花井助教授等である。

これらの研究室の廃止に至ったのは昭和39年末で、笹岡助教授が定年退職となり、国枝助教授は九州の女子短大の筑紫学園へ栄転し、花井助教授が最後に姫路短大に教授として栄転することにより、全員の転出により各研究室のメンバーは完全に昭和40年度を以て名実ともに解消し、それまでには各研究室には研究費としては3万円位が支給されていた。従って充分な研究活動は無理とされていたが、可成りの実績をあげることができたことは全員の研究欲に負うところが大である。

一方農場事務所は事務長の下に主事を置き更に分任出納員を置いて金銭の出納に関する一切を処理せしめた。なお事務には見習員がいて事務所は計4名で事務一切を処理していた。年次別の職種別人員数は第5—7表の通りである。

更に圃場は開設以来主任として林助教授によりすべてが管理されて来て、第一、第二の各農場に助手各1名と農夫各3名宛配置されていた。第一農場は篠山農場と異なり畑地が主体であって農場の生産物は甘藷、南瓜等は特に甘味がつよいとされ加古川、姫路市場では評判がよかった。畑地は多木肥料会社の山

第5—7表　　加古川農場人員の推移

項目／年次	教授	助教授	講師	助手	主事	嘱託	技師	技師補	農場員	その他臨時的職員	計
昭和32年	(1)	7	1	5	2	1	1	1	5	0	23(1)
33	(1)	7	1	5	3	1	1	1	5	0	24(1)
34	(1)	7	1	3	3	1	1	0	5	0	21(1)
35	(1)	7	0	4	2	0	1	0	5	0	19(1)
36	(1)	6	0	3	3	0	1	0	5	1	19(1)
37	(1)	5	0	3	3	0	1	0	6	1	19(1)
38	(1)	4	0	2	2	0	1	0	5	1	15(1)
39	(1)	3	0	2	2	0	1	0	6	1	15(1)
40	(1)	2	0	2	2	0	1	0	6	1	14(1)
41	(1)	1	0	2	1	0	1	0	5	2	12(1)
42	(1)	1	0	1	1	0	1	0	3	2	9(1)
43	(1)	1	0	2	1	0	1	0	0	3	7(1)

注　(　) は農場長の併任を示す。

林を戦後青年学校教員養成所の生徒等が開墾，造成したものの寄付を受けたものであり、当初は瘠薄地で反当り麦が1俵位しか取れなかった様である。しかし有機質肥料を相当量施用することにより、殊に姫路からのコンポストの配布施用のお蔭も大きく、今日では麦作は反収5俵までになっている。これらの畑地は20aに区画されて居て篠山農場よりは機械化を早目に施行できて、畑作には大豆、南瓜、甘藷、大根、小麦等をそれぞれ50a以上毎年栽培することにより収入をあげて来た。第二農場は前にも述べた様に特に果樹（柿、梨、ブドウ桃、梅、栗）に力を注いでいた。当農場の果物は甘味が強いとの評判であるが現在桃、梨、柿、更にブドウ、梅、栗等は最盛期に入るものばかりでこれを手放すことは惜しい気がする。この他に第二農場では豚の飼養にも力を入れ多産系の良質の親豚が3～4頭おり収入に大きく活躍したものである。また豚の人工授精にも去勢にも可成り力を注いでいた。

当農場が農科大学農場として開設以来今日までにあげて来た農産収入を第

第5—8表　加古川農場における昭和32年度以降年次別収支表

年度 / 項目	昭和32年	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	42/32 比率
	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	円	倍
支出	798,085	1,967,720	2,080,855	1,976,754	2,316,714	1,964,580	2,534,417	2,793,308	2,789,119	2,546,307	2,420,618	3.03
収入	685,233	840,760	978,291	1,215,874	1,364,211	1,264,387	1,467,460	1,626,142	1,584,690	1,878,284	2,347,094	3.42
米	277,752	296,400	387,210	316,508	313,587	384,873	436,225	362,405	451,138	741,152	899,026	3.23
麦	50,438	81,922	98,865	58,168	49,665	34,607	22,330	45,379	101,019	104,643	57,150	1.13
雑穀	76,810	8,462	43,517	114,504	53,338	19,156	0	137,175	49,108	32,900	37,960	0.49
そ菜	124,405	227,944	155,940	277,765	606,375	441,982	482,700	577,930	555,417	617,252	613,758	4.93
果樹	62,613	144,700	175,737	233,288	141,818	221,864	195,973	273,052	77,688	251,720	562,591	8.98
畜産	89,727	78,613	94,719	215,024	187,738	121,000	321,600	211,250	328,000	118,600	168,000	1.87
その他	3,488	2,719	22,303	617	11,690	7,905	8,632	18,951	22,320	12,017	8,609	2.46
米収 10a当	kg 363.05	327.59	408.69	365.54	354.15	379.95	378.90	324.90	339.75	457.63	503.37	1.46

5—8表に示す。

なお果樹の年次別生産状況を第5—9表に示す。

第5—9表　　果樹種目別年次生産状況

種類／年次	梅 kg	桃 kg	葡萄 kg	柿 kg	梨 kg	栗 kg	備考
昭和32年	113	325	76	687	562	—	
33	146	636	147	1,879	1,217	—	
34	60	1,265	276	2,526	1,565	—	梅の減収は3月の低温による被害による
35	297	1,460	106	3,460	1,813	—	
36	258	736	—	1,797	1,665	—	桃、柿、梨の減収は5月の台風9月の第2室戸台風の被害による
37	145	833	—	2,153	1,665	—	梅桃の減収は前年の台風の枝幹の損傷による
38	304	1,216	—	1,230	1,050	—	梨柿の減収は春季の長雨（特に開花期）の被害による
39	31	1,268	86	2,943	1,884	—	梅の減収は3月の気温低下特に降雪の被害による
40	21（2）	580	146	297	1,395	—	梅の減収は同上、特に降雪の被害／桃の減収は開花期の降雨の被害／柿の減収は台風13号による落果　のため
41	133（33）	452	364	2,104（11）	982	11	梅の増収は新植梅の収穫開始による。桃、梨の減収は前年の台風の枝による幹の被害による
42	535（121）	1,261	1,168	3,501（165）	3,381	130	（　）は第1農場生産数量

更に参考として家畜家禽の年次別飼育状況を第9—10表に示す。

第5—10表　　家畜、家禽の年次別飼育状況

項目／年次	和牛	豚		鶏		鵞	
		成豚	仔豚	成鶏	雛	成鵞	雛
昭和32年	2	1	13	0	120	6	0
33	2	3	12	33	0	7	0
34	2	3	11	0	0	10	0
35	2	3	17	0	0	3	0
36	2	4	8	0	0	0	0
37	1	3	20	0	0	0	0

38	0	4	11	0	0	0	0
39	0	4	16	0	0	0	0
40	0	2	6	0	0	0	0
41	0	2	21	0	0	0	0
42	0	0	0	0	0	0	0

3. 加古川農場教職員が行なった試験研究

加古川農場教職員が32年以降において、与えられた経費において遂行した試験、研究は第5—11表の通りである。

第5—11表　　加古川農場教職員が行なった試験研究

年度	氏名	研究題目数
昭和32年	長谷川清三郎、山口道徳	潮風が農作物に及ぼす影響についての試験 外19題
昭和33年	長谷川清三郎、野田　執	畑土壌による水稲の栽培試験 外21題
昭和34年	長谷川清三郎、野田　執	井水潅漑が水田地温に及ぼす影響の試験 外24題
昭和35年	笹岡恒太郎	人繊パルプの農用用途開拓に関する試験 外10題
昭和36年	竹崎　通善	工場緑化樹に関する基礎的研究 外14題
昭和37年	国枝　鉱造	細菌突然変異株分離法における再検討 外11題
昭和38年	笹岡恒太郎	人繊パルプの農用用途開拓に関する試験 外13題
昭和39年	花井七郎兵衛	船場川尻湿田の乾田化に伴う土壌変化についての調査 外9題
昭和40年	林　正且、尾崎　武	小ガラス室におけるマスクメロンの箱栽培に関する試験 外5題
昭和41年	林　正且、秋田謙司 尾崎　武	加古川農場における気象と桃、梨の Brix に関する調査 外6題
昭和42年	林　正且、秋田謙司	B-995 の Neo-Muscat 及び巨峰の新梢抑制に関する試験 外4題

第3節 附属牧場

1. 沿革

農大附属牧場の設置については、昭和30年来佳山良正助教授が、前三宅学長の命によって鋭意努力した。今田町の附属牧場の開設までには色々と迂余曲折があった。即ち、城東町後川(しつかわ)の約40ha、或は、今田町和田寺山麓地帯約50ha、円南町当野にある10haの部落有地等の永久貸与については、いずれも、兵庫県側の意向では土地の寄附を受けなければ施設に要する予算の支出はできないという見解があって立消えとなった。昭和35年に現在の森田建二町長が選出され、農大附属牧場設置について協力方を依頼したところ、新町長の方針である酪農振興の線に合致し、早速町側で候補地を提示し、その寄附を約束するに至った。

これが兵庫農大附属牧場10ha（5haは県に寄附、5haは永久無償貸与）であって当時町有地であった。従って、農大附属牧場設置については、森田町長及び当時の町議の方々、特に、木津地区区長であり、町会議長であった故原田庸氏に負うところも多い。

これによって、県は、牧場設置のための草地造成、管理舎、畜舎等の予算を昭和36、37、38年度にわたって計上した。

2. 牧場全域の地目別面積

1) 位　　置　　兵庫県多紀郡今田町木津字前山190～192番地

2) 地目別面積

種　別	面　積		
牧草地	141.81a		
畑　地	19.83a		
山林原野	971.89a		
その他	43.64a→	建物敷地	7.93a
		家畜運動場	3.97a
		道路排水溝	31.74a
計	1,177.17a		

3. 家畜種目別頭羽数出荷生産物数量金額

第5—12表　　附属牧場における家畜種目別出荷販売金額

年度＼種別	乳牛						豚			鶏					計
	飼養頭数	搾乳牛			出荷牛		飼養頭数	出荷豚		飼養羽数	卵		肉鶏		金額
		頭数	乳量	金額	頭数	金額		頭数	金額		数量	金額	羽数	金額	
			kg	円		円			円		kg	円		円	円
37	4	3	7,275.7	207,536	3	14,492	—	—	—	676	2,287.6	471,729	× 97	25,506	719,263
38	9	4	9,285.1	307,774	○1	95,000	10	15	305,128	558	4,259.8	803,135	×343	99,985	1,611,022
39	8	5	12,293.4	485,715	○1 3	55,400 13,173	55	35	724,858	535	4,342.0	708,111	×357 △187	59,122 57,723	2,104,102
40	8	5	10,623.3	450,701	4	27,434	62	46	919,122	637	4,327.0	862,443	×212 △196	43,136 74,107	2,376,943
41	11	7	22,737.0	925,231	○1 2	60,000 14,028	77	68	1,182,417	676	5,017.0	951,750	×187 △181	37,250 71,535	3,242,211
42	10	7	19,321.5	959,355	○2 4	409,000 11,788	56	39	741,862	515	4,921.0	946,090	×170 △185	22,933 78,000	3,169,028

（注）　出荷牛　○は成牛　他は子牛
　　肉　鶏　×は廃鶏　△はブロイラー

4. 附属牧場運営の基本方針

山麓傾斜地利用による畜産の総合的な研究と、技術指導を目的とするとともに、学生の基礎的技術の勉学の場としている。繋養家畜は乳牛、豚、鶏である。

酪農経営では乳牛を飼養育成するうえに、最も重要なことの一つは、粗飼料自給の確保と自然環境下での家畜の運動であって、このためには、放牧採草地或は飼料畑の造成が必要である。

乳牛、豚、鶏を飼育し、その生産する堆厩肥を牧草地及び飼料畑に入れ、良好な牧草と飼料作物を作り、又、大、中、小家畑飼育の関連を考慮し、牧場の総合的な経営の合理化を企図してきた。

5. 開設以来の年次別学生実習動員数

開設以来の年次別学生実習動員数は第5—13表の通りである。

第5—13表　附属牧場における年次別学生実習動員数

年次	学生数	期間	作業及学生動員数				備考
			乳牛舎	豚舎	鶏舎	草地	
昭和 39	20	6.29〜7.11	5	5	5	5	各畜舎3日毎に交替
40	23	〃	5	6	6	6	
41	28	7.11〜7.23	4	7	7	7	
42	32	10.16〜10.28	8	8	8	8	
43	21	7.8〜7.20	6	5	5	5	

(注) 43年度は神戸大学農学部畜産学科学生

作業内容

1) 乳牛舎　搾乳、給餌、清掃、草刈、其他飼養管理
2) 豚　舎　給餌、給水、清掃其他飼養管理
3) 鶏　舎　給餌、給水、清掃、産卵記録、其他飼養管理
4) 草　地　牧草地管理

6. 牧場で行なった主な試験、研究の題目と、その大要

1) 肉豚の発育に対する塩化カルニチン添加の効果

（大要）豚の発育に対し、塩化カルニチン添加が栄養的に意義を有するや否やについて試験を行なった。

塩化カルニチンの給与量（25㎎と15㎎）を継続的添加区と、断続的添加区に区分し、別に対照区を設けて試験を行なった結果、飼料の経済性についてはあきらかではないが、添加区が、発育のよいことがわかった。

2) 豚に対する、セフトアミンの効果

（大要）豚に対し栄養素として重要な、リジン（セフトアミン）を飼料中に添加し、その発育試験を農大附属牧場、北条高等学校及び有馬高等学校と共同で試験を行なった。

セフトアミン0.3%添加区と、セフトアミン0.3%＋ビタミン$D_3$0.1%添加区、及び対称区の各区の豚の発育には顕著な差異は認められなかった。しかし各臓器及び骨格を剖検し、組織的鏡検の結果では、セフトアミンに含まれるCoによる影響があるとの疑問がもたれた。

3) 肉用鶏に対する、ラッシャン、コンフリー緑餌の効果について

（大要）鶏の緑餌として、多収、永年性、高蛋白の飼料作物として注目されている、ラッシャン、コンフリーを鶏の緑餌として利用する試験を行なった。ラジノクロバー区、アルファルファミール区、ラッシャン、コンフリー区及び無緑餌区としそれぞれの緑餌を給与し、比較試験を行なった結果では、発育解体成績、皮膚の黄色度、健康状態は、いずれも無緑餌区より緑餌給与区がすぐれていたが、緑餌の種類による相違は明かには認められなかった。

4) 産卵鶏に対する、ラッシャン、コンフリーの緑餌としての効果について

産卵鶏（ハイライン）に対し、緑餌として、ラッシャンを給与し、その栄養的効果を検討した。各区、66羽とし、コンフリー生葉を緑餌とした20%給与区と無緑餌区（対照区）とし、その、産卵率、卵重及び卵質（卵黄及び卵白の黄色度及び粘稠度）、生存率等について、昭和42年5月12日～12月22日まで試験を行なった。その結果、産卵率は緑餌給与区は無緑餌区に比し良好で、卵重については両互間に有意の差は認められなかった。又、卵の黄色度及び粘稠度には明瞭な差が認められた。生存率においても、コンフリー区の95%に対し、無緑餌区は83%を示し、両者間に差が認められた。

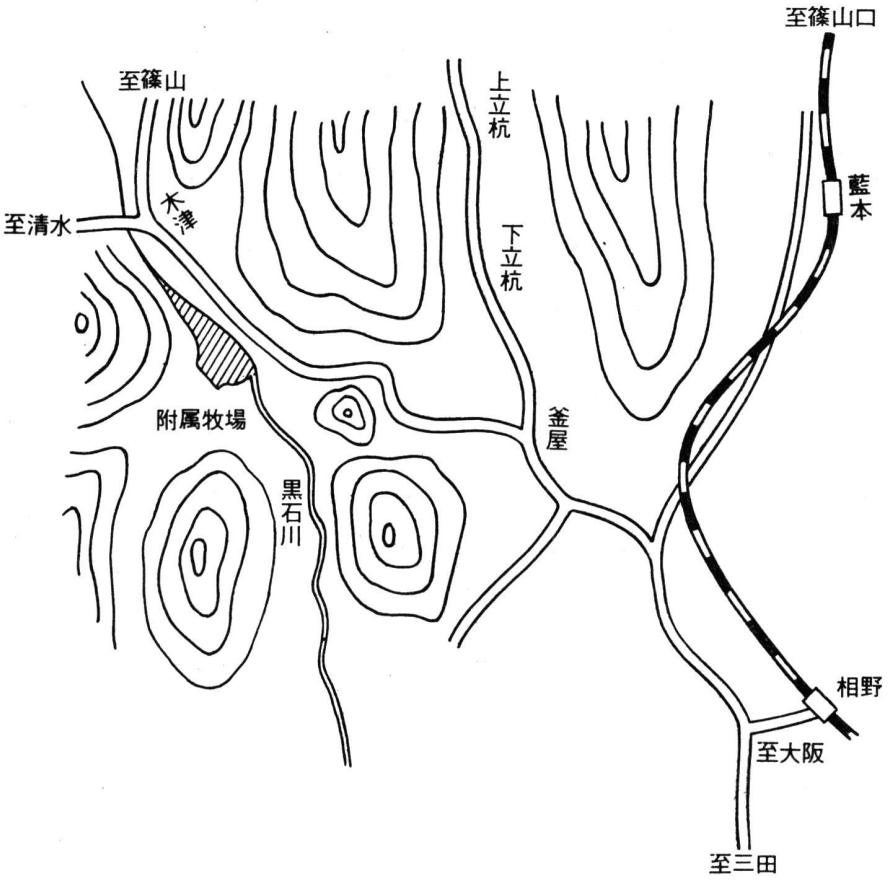
7. 創始以来の職員氏名と在職期間、年限

牧場長	助教授	三宅睦男	36.10. 1～44. 3.31
	助手	南条巌	36.10. 1～44. 3.31
事務主任(兼)	主事	足立隆夫	36. 4. 1～41. 7.30
	主事補	佐藤陞	36.10. 1～41. 1.31
	主事	田村幸夫	37. 4. 1～40. 1.31
	〃	卯野耕造	39. 4. 1～40. 3.31
	〃	中西政弘	40. 2. 1～41. 1.31
	〃	川崎義明	40. 4. 1～41. 3.31
	〃	小島俊彦	41. 2. 1～42. 1.31
	〃	小畠一夫	41. 4. 1～42. 3.31
事務主任(兼)	〃	市内繁清	41. 8. 1～42. 4.30
	主事補	河原巌	41. 2. 1～43. 5.31
	主査	日置貞正	42. 4. 1～44. 3.31
	動物飼育員	今西昌夫	37. 7. 1～44. 3.31
	〃	西嶋琢磨	37. 7. 1～43. 1.31
	〃	山本実	37.11. 1～44. 3.31
	〃	今西すみ	38. 4. 1～44. 3.31
	〃	松本三千夫	40. 7. 1～44. 3.31
	〃	山田兵吉	43. 2. 1～44. 3.31

8. 附属諸施設の建設年月日と建設費

所在地	名称	面積	年月日	金額
		㎡		円
今田町木津	管理舎	118.8	36. 8.29	1,500,000
	橋	81.68	37. 3.31	1,300,000
	畜舎	81.68	37. 3.31	1,730,000
	倉庫	66.0	37. 3.31	904,000
	堆肥舎	40.0	37. 3.31	400,000
	鶏舎	92.4	37. 3.31	966,000
	斎舎	66.83	38. 3.30	1,300,000
	豚舎	99.0	38. 3.30	1,650,000
	宿泊施設	60.6	38. 3.30	1,450,000

附属牧場位置図



第4節　附属図書館

1.　人事の推移

(1)　図書館長

草創時代を終始館長であった山本賢治教授はその完成期初期に入っても適材が認められて32年5月末まで8カ年を勤めあげた。

32年6月より2年間農業経済学野中教授に引継がれ、同教授停年退職後の残任期間2カ月間は三宅学長によって事務取扱いがなされたが、34年6月より吉村教授が選ばれ、1任期（2カ年）後再び山本教授が選ばれ、同教授停年退職の41年3月末日まで約5カ年在勤、41年4月より小野豊教授に引継がれ今日に及んでいる。

(2)　一般人事

図書館職員は草創期の24—26年の2カ年余の間は主任の外に2名の女事務員をもって充てられていたが、26年度に入り図書内容の充実、講座の整備せられるにおよび3名となり、つづいて29年度よりは更に男子1人を女子に替え、更に31年度より男子1人を増員して常時5名の従業員を算えるに至った。

35年度には古参主任大安徳蔵の退職に伴ない、県教育課より日置貞正を迎えまた学内移動によって久合田清、石田栄代を迎え、また神戸商大より岩森嘱託を迎えて本学の全盛期における図書館の陣容も相当充実するに至った。

なお特記すべきは久合田清をほとんど図書館常置の司書的存在として、長期研修をも受けしめ、図書館の実質的運営に力が注がれたことであろう。

なお主任としては日置貞正のあと、和田正、久合田清があげられる。

また学科体質改善の実施に伴なって、5科編成がなるにおよび、常時6ないし7名の線を堅持、国立移管年度に入るや、漸次国費による事務員に交替せしめることとなった。

2.　図書の充実

図書館蔵書の数の推移は第5—14表の通りであり、これによれば年々約3000〜4000冊の増加がみられる。ただ30年度に約5,500冊の減少をみたのは整本或

は厳密な査定（創設当初徒らに冊数を殖やすための無理をしたことにつき、厳正に評定削減したことによる）によったものであり、また32年度13,000冊を上回る増加は加古川農業短期大学との併合によりもたらされたものである。

更に41、42年度の減少は国立移管の進捗とともに県の要請によってもたらされた一部蔵書（主として教養関係書籍）の他の県立大学即ち神戸商科大学、姫路工業大学、姫路短期大学への保管転換による冊数減である。

それにしても移転年度において図書館書庫の収蔵能力冊数（約6万冊）を整え得たことは大きい実績とみなければなるまい。

33年以降貸出冊数は第5—15表の通りである。

第5—14表　　図書館蔵書充実状況

年度	和書	洋書	図書小計	和雑誌	洋雑誌	雑誌小計	総計	年間増加数
昭和	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊
24	3,356	2,802	6,158	293	45	338	6,496	6,496
25	5,554	3,281	8,835	895	120	1,015	9,850	3,354
26	8,875	4,964	13,839	1,768	333	2,101	15,940	6,090
27	10,672	6,807	17,479	2,528	629	3,157	20,636	4,696
28	12,638	7,983	20,621	3,391	1,080	4,471	25,092	4,456
29	14,282	9,074	23,356	4,158	1,432	5,590	28,946	3,854
30	14,201	7,591	21,792	1,086	566	1,652	23,444	(1)△ 5,502
31	15,822	8,854	24,676	1,309	660	1,969	26,645	3,201
32	26,647	11,116	37,763	1,433	792	2,225	39,988	(2) 13,343
33	28,978	12,265	41,243	1,590	1,038	2,628	43,871	3,883
34	32,566	12,896	45,462	1,663	1,184	2,847	48,309	4,438
35	35,320	13,258	48,578	1,697	1,265	2,962	51,540	3,231
36	37,879	13,640	51,519	1,843	1,384	3,227	54,746	3,206
37	39,875	14,014	53,889	1,996	1,535	3,531	57,420	2,674
38	41,874	14,320	56,194	2,036	1,615	3,651	59,845	2,425
39	43,788	14,693	58,481	2,469	2,256	4,725	63,206	3,361
40	45,902	15,071	60,973	2,905	2,648	5,553	66,526	3,320

41	43,860	14,636	58,496	3,203	3,023	6,226	64,722	(3)△ 1,804
42	39,633	12,885	52,518	3,295	2,891	6,186	58,704	(3)△ 6,018

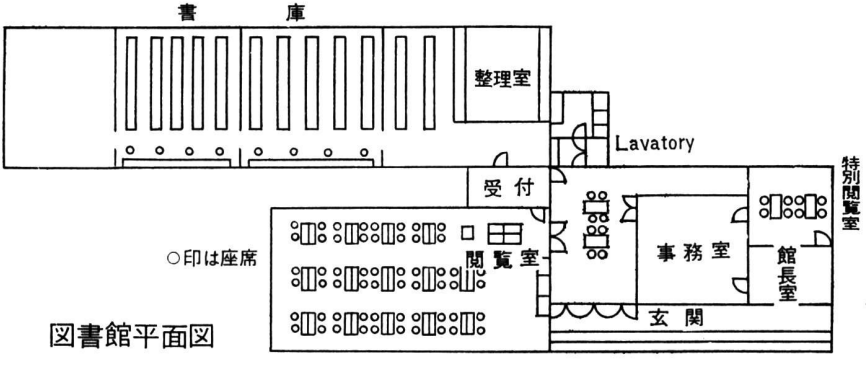
(注) (1) 30年に5,502冊の減少を示したのは整本のための実数減である。
(2) 32年に13,343冊の増加をみたのは短期大学部の併設に伴なう増加である。
(3) 41、42年に冊数の減少をみたのは一部蔵書を神戸商大、姫路工大、姫路短大へ保管転換したためである。

第5—15表

年次別図書貸出冊数

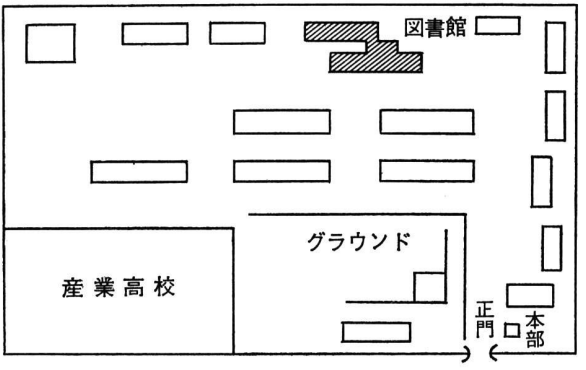
年度	館内	館外
	冊	冊
昭和33	18,296	3,487
34	17,120	2,792
35	8,627	3,225
36	6,494	4,710
37	8,702	6,668
38	19,616	6,895
39	18,563	4,802
40	12,382	5,819
41	10,534	4,332
42	10,716	4,051

(図書館全図)



図書館平面図

（学内位置図）



3. 図書館新築

昭和24～27年の草創期を過ぎ、28年以降の27講座の充実とともに創設当初そのままの学生食堂二階の図書館のみでは極めて不充分であり、また図書の激増によって狭隘を感ずるとともに防災環境の面からも独立した図書館の新設がつよく要望せられていた。そこで遂に県予算にも計上せられて、33年度その第1期工事として370万円をもって書庫および閲覧室の新築をみるに至った。更に翌34年度には第2期工事として208万円をもって事務室その他の増築をみ、これで懸案の独立図書館は完成したのである。

当時の農大として最高に誇り得る近代的建築ということができる。

その規模は次の通りである。

木造平屋建モルタル塗　総面積		236坪
内訳	閲　覧　室	50坪（56席）
	新聞雑誌閲覧室	19坪（12席）
	特別閲覧室	9坪（10席）
	書　　庫（収蔵能力6万冊）	89坪
	館長室、事務室その他	69坪
第1期工事	起工　34年2月15日	161坪
	竣工　34年4月25日	

第２期工事　起工　34年９月10日　　75坪
　　竣工　34年12月16日

図書閲覧規定

1. 学生は図書館においての規程に従い、所定の時間内は何時でも閲覧することができる。

2. 開館時間　　平　日　午前９時～午後５時
　　土曜日　午前９時～正午

3. 休館日

日曜日、祝日、年末年始、その他臨時休館時間変更の際は、その都度掲示して予告する。

4. 館内閲覧

館内閲覧簿に所定の事項を記入し、係員に提出して図書を借り受け定められた室内で閲覧しなければならない。

5. 館外貸出

図書館備え付けの図書、館外貸出請求票に所定の事項を記入して係員に提出し、図書を借り受けるが、期間、冊数、その他は次のとおりである。

(1) 図書貸出冊数は１人一時に２冊以内。

(2) 期間は、貸出日と返却日を含めて５日間。

(3) 引き続き借りることを希望するときは、規程の期間中に認印を持参の上係員に期間延長の手続をすること。

(4) 図書をなくしたり、はなはだしく汚損した場合は弁償しなければならない。

(5) 借りた図書は、又貸を認めない。

6. その他利用上の注意

図書館は多数の人が静かに読書し、研究する学習の場であるから、周囲の迷惑にならないよう静かな雰囲気を保つこと。

(1) 閲覧室では静かに読書し、清潔を保ち、脱帽のこと。

(2) 閲覧室では飲食、喫煙、ならびに下駄ばきは禁止する。

(3) 図書は大切に取り扱い、切り取り、書き込み、汚損などしないこと。

(4) 閲覧室出入の際は特に掲示に注意すること。

(5) 図書館に備え付けを希望する図書があれば、所定の用紙に記入の上、申し込むこと。

(6) その他、利用上疑問あるいは希望があれば、遠慮なく係員に申し出るか投書箱に投書すること。（責任ある投書には図書館で及ぶ限りの回答をする）

第 5 節　国立移管後の帰趨

——農場と牧場について——

兵庫農科大学は昭和41年 4 月 1 日より神戸大学農学部としての移管が決定し愈々同42年 4 月より、前章において記述した如く全27講座が毎年 9 講座宛三年間が移管を完了することになり、神戸市六甲台に42年 9 月に学舎が完成し同10月には本学部が移転を完了した。従って篠山の学舎は空虚となり、それに伴なって篠山農場も研究並びに実習用圃場としての使命は失なわれたこととなる。従って従来施行してきた各教室研究専用の圃場は神戸大学農学部六甲台において、篠山の如き附属農場の施設が得られなく、農場とは全く関係なく単独に各教室専用の区劃された圃場が学舎のあちこちに設定される結果となった。それで従来の篠山農場は遂に昭和43年 3 月末を以て完全に閉ざされ県管財課の所管となって現在は旧職員 2 名に管理が依嘱されている。篠山農場に関しては隣接の産業高等学校が第一農場の管理者となり篠山農協に委托し、従って農協は近接の郡家、東浜谷、西浜谷、東岡屋、及び西岡屋の各部落にそれぞれ栽培を委托している。また第二農場は附近西紀町西木之部の部落に共同栽培をゆだねている様である。一方加古川農場も昭和44年 3 月末を以て廃止されるので、篠山、加古川、今田等の各農牧場は兵庫農科大学の移管、廃止に伴なって同様廃止され、一方では綜合農牧場が加西市鶉野町堂ノ本に 399,231㎡の耕地（内訳は水田116,806㎡、畑 34,564㎡、宅地420㎡、山林 153,399㎡、原野41,936㎡、公衆用道路36,084㎡、その他 16,022㎡）を 157,049,830円で買収されて昭和42年に県費で畑地の造成がなされ、同 43～44 年度にわたり、国費で水田造成と建物（4,855.15㎡）が建設されるに至った。他方各旧農牧場の跡地利用については

現状においては色々と複雑な事情があって未決定であるが篠山の農科大学跡は日本大学或は関西学院大学等の引継の問題もあったが、立消えとなったので、既に述べた如く、篠山第一農場は現在は近接の各部落の分割栽培地となっている。同第二農場も既述の通りであり、同第三農場はそのまま県管財課の直接管理する所となっている。加古川第一農場は短大時代より存在する校舎の大部分はこれまでに他学校新設関係の施設に一時貸付利用されて来たが現在なお県立農業高等学校の寄宿舎として貸付けられているが、農場全体の今後の利用は国立の職業指導訓練所とか、その他色々の利用の話しもあった由であるが、もっとも有力なのは県立老人大学の設置候補地となっていることである。

なお44年1月地元県議、岡沢県議と県農業高校長話し合いの末、第二農場は県教育委員会で従来通り年50万円で借用、県農業高校が借用運営することとなった模様である。

なお今田の附属牧場は 10ha の全域の土地、建物ぐるみ兵庫県教育委員会の管理に属することとし、県下公私立小学校4年生以上の児童および中学校生徒を対象として大自然の中での実地学習を通じて活動性、独創性を育てるとともに少年少女のもつ自然への関心、情緒性を大切にして自然の与えるもの、教えるものをありのままに感得せしめようとの目的をもって既に43年度より開設済みである。

今後も恐らくこの牧場跡地は少年少女の「自然にかこまれた健全な心身練成の場」として特異な存在となるであろう。

第6章　学生のあゆみ

以上第1章より第4章にわたって本大学の誕生からその終焉たる国立移管に至るまでの大学としての移り変りの姿を記述したのであるが、本学学生、卒業生に関しては未だに触れていない。

本章では各期を通じて学生ならびに卒業生の動向に関して種々の面から記述することとする。

第1節　入学試験の推移

1.　入学定員の推移

開学当初年度たる24年度は農学部のみで50名の入学を許可したにすぎなかったが、25年度には更に農業化学科30名、一般教養課程（後に医学進学課程）40名を込め115名とし、更に26年度よりは畜産学科の新設による25名を加えて140名とした。

また完成期32年度より農芸化学科35名として総定員145名となった。

昭和39年度に入り、学科編成の体質改善の実現に伴ない、園芸農学科40名、植物防疫学科20名、農業生産工学科25名、農芸化学科40名、畜産学科40名、医学進学課程45名計200名の入学許可をした。

40年度には神戸医大の国立移管実現により、医学進学課程の入学許可を停止して155名となり、41年度には本学の国立移管年度に入り、兵庫農科大学としての入学試験は行なわれなかった。（第6—1表参照）

従って実質的には40年度入学者（44年3月卒業）をもって兵庫農科大学学生としての入学は最後とされたのである。

昭和24年入学者を第1回とすれば、最終入学年度は40年度で、通算17回の卒業生を世に送り出したこととなる。（第6—2表参照）

2.　入学志願者の推移

入学定員に対する年次別志願者数は第6—1表によってみられる如く、合格者に対する志願者の倍率は24年の1.5倍より年とともに急激に上昇し、30年に

第6—1表

学生入学定員、志願者、入学者数の推移

年度	A 入学定員	B 志願者	C 受験者	D 合格者	E 入学者	志願率 B/A	合格率 D/C	備考
昭24	45	70	65	50	50	1.55	76.9	農学科
25	115	213	190	103	102	1.85	54.2	農学科45、農芸化学科30、医進課程40
26	140	417	377	110	110	2.97	29.1	農学科45、農芸化学科30、畜産学科25、医進課程40
27	140	406	365	119	119	2.90	32.6	
28	140	514	458	128	124	3.67	27.9	
29	140	650	605	123	111	4.64	20.3	
30	140	1,265	1,148	135	121	9.04	11.7	
31	140	1,070	964	161	128	7.64	16.7	
32	145	1,121	1,033	142	141	7.73	13.7	農芸化学科定員35名となる（県定員）
33	145	1,463	1,336	144	144	10.08	10.7	
34	145	1,128	1,033	147	142	7.78	14.2	
35	145	1,566	1,398	150	140	10.80	10.7	
36	145	1,739	1,520	148	134	12.00	9.8	
37	145	1,774	1,515	175	155	12.23	11.6	
38	145	1,602	1,369	167	157	11.00	12.2	
39	200	2.345	1,950	200	153	11.73	10.2	園芸農学科40、植物防疫学科20、農業生産工学科25、農芸化学科40、畜産学科30、医進課程45
40	155	2,586	1,980	216	165	16.68	11.4	医進課程、入学者を停止
41	155	546	478	155	(144)	3.52	32.4	入学者欄の（ ）は神戸大学へ入学したもの

第6—2表

卒業生就職状況 (44年卒業生を省略)

卒業生別 / 職業分類・性別	昭和28年		29		30		31		32		33		34		35		36		37		38		39		40		41		42		43		計
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
農林水産					1		1		1		1		10		16		15		1		1				3		4	1	5		11		71
化学工業	1		3		5		4		4		3		13		11		13		17		14		21		23		18		15		15	2	182
食品工業	12		6		6		13		9		12		12		11		21		15		19		21		17		27		27		29		287
機械工業											2		3		3		2		7		3		5		3		3		7		13		51
皮革工業	1		1		2		2		4		4				3		3								1				1		1		23
通信報道			1																				1										2
商事会社					1		1		1		1				6		10		4						1		1		5		6		37
銀行	1																						1										2
証券業													3																				3
百貨店																					1		1		1		1		1		5		10
卸売業					1														2		2		3		5		3		4		2		22
小売業					1														2		2		1										6
団体	4		1		1		6		7		4		5		6		3								3		1		4		7		52
官公庁	1		4		5		8		11		6		9		14		4		17		11		11		11		15		15	1	23		165
学校	8		12		24		13		11		7		6		9		15		8		4		5		11	1	18		15		20	1	189
その他			2		3	1	12		9	1	13	1	3				7		5		11						1				4		73
計	28		30		50	1	60		57	1	53	1	64		79		93		78		68		70		79	1	92	1	99	1	136	3	1,145
卒業者数	29		30		51	1	60		64	1	56	1	68		86		97		84		79	1	79	1	81	1	93	1	100	1	139	3	1,207
就職志望者数	28		30		50	1	60		57	1	53	1	64		79		93		78		68		70		79	1	92	1	99	1	136	3	1,145
就職希望に対する就職の率	100		100		100	100	100		100	100	100	100	100		100		100		100		100		100		100	100	100	100	100	100	100	100	100

は神戸医科大学への医学進学課程設置の関係もあり一躍9.0倍、1,265名に達した。しかも教授陣の充実、卒業生就職状況の好調などの要因によって本学の存在はより高く評価され、39年には、2,345人11.7倍、最終の40年には2,586人16.7倍を示すに至った。

この間、篠山町としての宿泊者収容能力はかつての連隊所在地として比較的多くの旅館があり、当初の28—29年頃までは賄い得たが、その激増により旅館のみによる収容は不可能となり、地元各町婦人会の肝入りによって一般民家にも宿泊のあっ旋をなし、更に遠くは八上新、篠山口駅前、古市或は三田市内の各旅館をあっ旋した。

志願者の出身地も本学教授陣内容の充実とその研究実績が高く評価せられ、遠くは北海道、九州にもおよんだ。

3. 本学学生の出身地別考察

本学に在籍した学生1,363名（卒業生のみの集計で中途退学者はこれを除く）の内1,018名（74.7%）が本県出身者であることからも本学が地方大学としての役割を充分果してきたことが立証される。更に近畿7府県出身を込めると1,221名となり実に89.6%と9割近くとなる。（第6—3表）

近畿以外では中国5県の49名、九州の32名、中部30名、四国20名などがこれに次ぐが、東北、北海道なども含まれており、全国より本学を目指して入学したことが判然とする。

なお本県内の内訳を第6—4表によってみると大きく市郡に分けると、市部665人、郡部353人であり、市部中いわゆる阪神間と背後衛星都市を入れると神戸市248人を筆頭とし尼崎市69人、西宮市58人、芦屋市16人、伊丹市26人、宝塚市34人、川西市9人を加えると460人となってあとば西播姫路市50人と地元ともみられる三田市39が主で他は微々たるものである。

一方郡部をみるときは多紀郡192人、氷上郡49人、計241人と全郡部のほぼ7割を占め、既に前述した如く地方大学としての地元への貢献度を大きく表わしている。

第6—3表　兵庫農科大学卒業生出身地別調

府県別＼年次別＼卒業		昭和28年	昭和29年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年	昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年	昭和38年	昭和39年	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	計	地域計
北海道										1				1			1			3
奥羽	青森																			
	岩手														1				1	1
	宮城																			
	秋田																			
	山形																			
	福島																			
関東	茨木													1					1	7
	栃木																			
	群馬																		1	
	埼玉									1		1							1	
	千葉																			
	神奈川																			
	東京							2				2							4	
中部	新潟										1						1		1	30
	山梨																			
	岡山										1		1				1	1	3	
	静岡																			
	富山																1	1	1	
	石川						1												3	
	福井																1	1	1	
	長野																		6	
	岐阜				1					1									1	
	愛知					1		1							2	3	1	2	6	
	三重							1				1		1	1	2		1	7	1,221
近畿	大阪		1	5	2	3	4	4	2	13	8	7	7	11	11	14	15	32	139	
	滋賀			1							1	1			1		1		4	
	京都		3	5	2	3	1	1	2	3	2	4	1	1	2	3	1	4	38	
	奈良			1										1		1		4	7	
	和歌山			1										1		1		3	8	
	兵庫	1	26	36	53	56	49	55	79	78	64	60	64	62	70	60	107	73	1018	
中国	鳥取	1			1	1					1				1	1		1	6	49
	島根					1					1			1		1	1	4	4	
	岡山										1		3	1	2	3	4	5	9	
	広島			2	1	1	1	1	1		2		1	1	2	5	1		28	
	山口																		2	
四国	徳島										1		1		1		1	3	8	20
	香川							1								2		2	5	
	愛媛											1	1	1	1	2			6	
	高知															1			1	
九州	福岡	1					1	2	1		1	1	1	1		1	2	4	16	32
	佐賀											1				1		1	2	
	長崎								1							1	1	3	4	
	熊本																	1	3	
	大分																1	3	4	
	宮崎																	1	1	
	鹿児島										1								2	
沖縄																				
その他	韓国民																			
	大華民国																			
	中国																			
計		29	30	52	60	65	57	68	86	97	84	80	80	82	94	101	142	156	136.3	1363

第6—4表　　兵庫農科大学卒業生兵庫県内区域別内訳

卒業年次別 / 郡市別	昭和28年	昭和29年	昭和30年	昭和31年	昭和32年	昭和33年	昭和34年	昭和35年	昭和36年	昭和37年	昭和38年	昭和39年	昭和40年	昭和41年	昭和42年	昭和43年	昭和44年	計
神戸市	8	11	7	12	15	7	8	15	9	18	13	22	21	19	15	39	19	248
姫路〃		1		1	2		4	3	4	4	1	2	1	7	4	6	10	50
尼崎〃			3	1	1	3	3	7	5	5	7	5	5	6	5	7	6	69
明石〃	2		1		1	2		1	1	1	2	2	4	4	2	2	1	26
西宮〃			1	2	1		5	3	5	8	6	5	6	4	6		6	58
洲本〃									1			2			1			4
芦屋〃	2		2	1			1	1		1	1	1	1	1		4		16
伊丹〃	1			1			2		2	3	1	2	3	2	4	1	4	26
相生〃									1									1
豊岡〃						1		1										2
加古川〃		1				2	1	2	1			1		2		1	6	17
竜野〃				1		1			1			1	1		1	1		7
赤穂〃								2	2	1								5
西脇〃									1			1						2
宝塚〃				1	3			2	5	3	3	1	4	4		5	3	34
三木〃						2		1	1	1		1						6
高砂〃							1				1	2	2	1				7
西川〃									1			1				4	3	9
小野〃											1		1		1	1		4
三田〃		2	4	4	2	5		4		2	7		1	2	4	1	1	39
加西〃	1	1		1		3	1		1		2	1	1	4		1		17
市の計	14	16	18	25	25	26	26	42	41	47	45	50	51	56	43	81	59	665
川辺郡			1											1				2
美嚢〃	1	1				1		1										4
加東〃							2	2		1		1	1	2	2		1	12
多可〃				1		1	2	1	1		1			1				8
加古〃	1	1										1						3
印南〃			2	1		2				1						2	1	9
飾磨〃								1	1								1	3
神崎〃																		
揖保〃	1							2	1	1		2						7
赤穂〃						1		1										2
佐用〃								1				1					1	3
宍粟〃		1		1				2	1		1					2		8
城崎〃	1			1		1				1								4
出石〃			1						3									4
養父〃			2	1			1	2	1				1			1	1	10
朝来〃			1	1	1	1			1	1	1				1		1	9
美方〃				1				1	2							1		5
氷上〃	1	1	2	5	11	4	5	2	3	3	3			2	2	3	2	49
多紀〃	6	4	8	15	19	11	16	20	23	9	9	8	8	8	9	15	4	192
津名〃	1	1	1	1		1	3	1					1		2	2	1	15
三原〃		1										1			1		1	4
郡の計	12	10	18	28	31	23	29	37	37	17	15	14	11	14	17	26	14	353
合計	26	26	36	53	56	49	55	79	78	64	60	64	62	70	60	107	73	1,018

第 2 節　学生生活の概観

1.　学生補導と学生の諸活動

学生の補導機構としては昭和27年 4 月 1 日県立大学設置条例の施行によって本学にも学生部が設けられ、教務に関する事務は教務課が、補導厚生および保健管理に関する事務は補導厚生課が主管することとなって形式的に整備せられた。

もっとも農大は24年よりスタートを切っているので、初代学生部長としては予科時代の石井教授、教務課長として畑俣弐氏、補導厚生課長として三上善潔氏が既に任命せられていた。

学生の課外活動は大きく運動部関係と文化部関係の二つに分つことができる。

運動部関係は創設の遅速はあるが、サッカー部、ラグビー部、バレーボール部、バスケットボール部、バドミントン部、柔道部、剣道部、弓道部、拳法部、硬式庭球部、軟式庭球部、卓球部、ワンダーフォーゲル部の 14 部があげられる。

何としても本学の学生数は当初は 300 人程度で完成期には 500 人にも達したが、これだけの部の活動は他大学の 3,000 名以上をも包容する学生数に比べればその強化は中々困難であったが、学生たちの不断の精進によって各部とも可成りの実績をあげることができた。

中でも野球は31年 5 月にはスポーツ日本新聞社主催の全近畿新制大学野球大会ならびに近畿地区大学体育大会において優勝した記録をもち、歴代の名選手中には第 3 回卒業の是枝選手、33年医進課程終了の八木選手、35年卒業の小松選手などがある。これらの各部選手の活躍の影には教官の適切な指導のあったことも見逃し得ない。野球における長島教授、庭球における福島教授、ラグビーにおける勝川助手などがそれであった。愛校心の発露なしには不可能のことである。

もっともこれらの運動の場となったグラウンドもしくは各部の練習場も草創期には充分整備せられず、完成期に入って初めて整えられた状態で、当初は鳳

鳴高校グラウンド、市民運動場などの借用によった。

また県当局では県立大学における課外体育の健全な発達をはかるとともに相互の親睦に資するため、兵庫県主催をもって昭和25年その第1回連合体育大会を明石公園総合グラウンドにおいて開催することとなった。大会は以後年々当番校を決めて開かれ、年中行事の一つとしてそれぞれ愛校心の発揮によって熱戦がくりひろげられ運動各部はこの「インカレ」を目指して精進をつづけた。

なおワンダーフォーゲル部の如きは年々地味な活動をつづけ、和気あいあいの裡に一回の遭難事故もなく、種々の壮挙を敢行した。

次に文化部関係では海外移住地農業研究会、新聞部、文芸部、写真部、美術部、生物研究部、園芸部の7部があり、中でも海外移住地農業研究会はブラジル農業移民の実態調査をとりあげ5名の研究会員は39年5月佳山助教授とともにブラジルに渡航、現地調査を行なった。（第3章参照）

また昭和30年頃より毎期移民学演習の名の下にポルトガル語の講義、実習（講師小島厚子）をもち、不断の移住熱をたぎらせた。

なお文芸部の機関誌として「ファルメン」は第1回生の頃より年々刊行、定期文芸誌としてその編集には広く教官、学生ら一丸となって緊密な歩みをつづけ、44年3月にはその最終号を発刊し、農学部にその伝統が引きつがれることとなった。

これまた一学部内における一文芸誌の存在が丹波に誕生して20年間にわたり兵庫農大が辿ってきた文芸の香りをうけつぐことになるであろう。

なお大学祭について一言加える。いずれの大学も大学祭を一つの年間の行事として開催する建前をとっているが、本学も昭和27年以来、5月20日の開学式の前後に体育祭および講演、演劇などをまじえた文化祭を催し、また開学記念日には教職員と合同の運動会、園遊会を行なって、学内親睦の実はこれによっても相当あげられたようである。

昭和31年に至り、体育祭は5月20日前後、文化祭は11月に開催することとした。文化祭における学生の仮装行列は地元篠山町を練り歩き、町民の爆笑と喝采をうけ、地元町当局および商工会は投票によってその優秀なものに授賞するなど年中の名物と化した。

大学祭のパーティーにおける教官と学生との歓談による親和感の醸成はスケールの大きい他大学では到底考えられぬことであり、これらの点に農大学生の育成上大きい効果があげられたのではなかろうか。

当時の篠山町における学生生活は、43年の全国大学の様相に比べればおよそ破格にかけはなれた、ただ「よく学びよく遊ぶ」という純真そのものの如き生活であった。

補導厚生課長の絶えず心労したことは、学生たちの町内与太者らとのイザコザ以外の何ものでもなく、年間1—2回警察ざたになるのは一にそのことだけであったといってもよく、おもえば有難い時代でもあったのである。

2. 学生の厚生施設

① 学生寮

学生寮は本学の西北端にある2階建のものを改装したものであるが、終始仮寮として約30名の収容力にとどまった。学生部の管理下におかれ、入学時当初の2ないし3カ月のみの入寮を許可し、その間に適当な下宿を探さしめることを建前とした。従って充分な施設とはいい難く、父兄たちからは可成り不満が出されたが、篠山町内の人々の学生の下宿に対する協力的態度は積極的で純朴に歓迎し温かい心をもってもてなしたため、学生寮に対しての不満の声は抑えられていた。

② 学生食堂

軍隊の在りし日の酒保の建物230坪の一階をそのまま学生食堂として利用していたが、昭和35年調理室の大改修を行ないまたテレビを新設して一応学生食堂としての形態を整えることができた。

経営は草創の当時は業者の経営に委ねられていたが、利益搾取による食内容の低下などの弊があり、遂に学生の自治にまかすこととし、学生部が指導を行なうこととなった。

しかし当初の経営はなかなか困難を極め、教官としてこれに直接当たり難局を打開した当時の高山敏弘助手らの苦闘の功績は大いに高く評価されるべきである。

なお昭和33年までその2階にあった図書館が新館に移転するにおよび、2階

を学生ホールとし、一部を職員組合の売店或は会合の場とするとともに階下の一室を理髪室として利用者の便をはかることとなり、ここに学生の集談の場が開かれ、建物こそ古いが面目は一新されたといってよい。

③　奨学金、授業料の減額、免除

日本育英会による本学奨学生の推移は第6—5表の通りで毎年度学生部長、関係課長、各学科ガイダンス教官らの協議の下に極めて公平に評価選考せられた。また県立学校授業料減免規定にもとづいて行なわれる減額、免除は第6—6表の通りで奨学生の選考と同様、慎重に選考が行なわれてきたことはいうまでもない。

④　授業料その他諸会費の推移

授業料、入学考査料、入学料などが24年当初それぞれ4,800円（月額400円）、300円、400円であったのがインフレの昂進などにより、30年には9,600円（月額800円）、500円、1,000円となり、更に35年には12,000円、2,000円、2,000円と上昇線を辿り、最終年度には総額24,000円となったが、他の私立大学に比べれば低廉そのもので、特に地元通学の学生の費用はむしろ高校時代に比しても却って少なかったようである。（第6—7表）

なお父兄会、学友会費、大学後援会費その他の費用は第6—8表の如く推移したが、いずれも学生部を窓口として徴収せられた。

3.　学生部部課長の推移

本学学生部の部課長の推移をみると、学生部長は初代部長は医大予科時代を踏襲した石井教授につづいて佐伯教授がその温厚着実の故をもって25年4月より35年7月まで実に10年余在任し、佐伯部長の外遊留学によって三浦教授が選考された。同部長は緻密な数学的頭脳をもって学生を導くこと2年9カ月、次いで長島教授が38年6月より就任、42年3月末日まで勤め同年4月より吉村教授にバトンは引き継がれた。

長島部長はその在任中佳山助教授を団長とするブラジル移民現状調査団の派遣あり、その基金の蒐集、送出諸事務など多忙の中によくその才能を発揮した。最後の学生部長吉村教授は42年4月より就任、その純真性、積極性は多くの学生を魅了して今日に至っている。

第6—5表

日本育英会奨学生状況（各年度末現在）

科別＼年度	昭和24年	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
園芸農学科		2	6	10	18	24	25	27	26	30	28	27	30	32	33	28	33	28	25	10
農芸化学科	1	3	12	23	31	33	32	32	28	32	27	25	26	34	34	40	46	34	24	13
畜産学科			1	3	7	13	15	17	20	19	17	19	16	19	26	32	46	40	30	12
医学進学課程		3	9	9	13	13	13	13	13	10	9	8	11	9	13	—	—	—	—	—
植物防疫学科																8	15	16	17	8
農業生産工学科																9	24	24	26	12
計	1	8	28	45	69	83	85	89	87	91	81	79	84	94	106	115	164	142	122	55

第6—6表　　授業料減額免除状況の推移

科別＼年度		昭和24年	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43
園芸農学科	全額		4		6	2	2	1	1	6	5	9	7	8	6	4	3	2	2	1	
	半額				1				1		1	1	4	2	1	2		2			1
農芸化学科	全額				2	5	4	5	4	6	6	5	3	5	3	5	6	4	3	2	
	半額				1						3	2	4	1	1	2	3	5		1	
畜産学科	全額						1	2	7	6	6	3	2	2	4	4	2	3	3	1	2
	半額										2	3	2	3	1	6	3	2			
医学進学課程	全額							2	2	1	1	3	1	1	1	1	—	—	—	—	—
	半額											1	1		1						
植物防疫学科	全額																	1	3	3	
	半額																				2
農業生産工学科	全額																		2	2	1
	半額																				2
計	全額		4		8	7	7	10	14	19	18	20	13	16	14	14	11	9	13	9	3
	半額				2				1		6	7	11	6	4	10	6	10	0	1	5

第6—7表　　入学考査料、入学料、授業料の推移

年　度	入学考査料	入　学　料	授業料(年額)	計
昭24年度	300	400	4,800	5,500
25	300	400	4,800	5,500
26	300	400	4,800	5,500
27	500	500	8,400	9,400
28	500	1,000	9,600	11,100
29	500	1,000	9,600	11,100
30	500	1,000	9,600	11,100
31	1,000	1.000	12,000	14,000
32	2,000	2,000	12,000	16,000
33	2,000	2,000	12,000	16,000
34	2,000	2,000	12,000	16,000
35	2,000	2,000	12,000	16,000
36	2,000	2,000	12,000	16,000
37	2,000	2,000	12,000	16,000
38	2,000	3,000	12,000	17,000
〃(県外)	2,000	10,000	12,000	24,000
39	2,000	3,000	12,000	17,000
〃(県外)	2,000	10,000	12,000	24,000
40	2,000	3,000	12,000	17,000
〃(県外)	2,000	10,000	12,000	24,000

(注) 41年度以降入学生なし

第6—8表　　諸会費の推移

年度	学年	父兄会費	学友会費	大学後援会費	プリント及び燃料代	同窓会部会入会金	計
		円	円	円	円	円	円
昭24年度	1年目	1,500	入会金350 600	1,000	100		3,550
25年度 〜 26年度	1年目	1,500	入会金350 600	2,000	200		4,650
	2年目		600				600
	3年目		600		200		800
	4年目		600				600
27年度 〜 33年度	1年目	4,800	入会金350 600	2,000	450		8,200
	2年目		600		450		1,050
	3年目	2,400	600		450		3,450
	4年目	2,400	600		300		3,300
34年度 〜 35年度	1年目	4,800	入学金500 2,400	2,000	900		10,600
	2年目						
	3年目	2,400	2,400		450		5,250
	4年目	2,400			450		2,850
36年度	1年目	4,800	2,400	2,000	1,000		10,200
	2年目						
	3年目	4,800	2,400		900	500	8,600
	4年目					500	500
37年度	1年目	4,800	入会金500 2.400	2,000	2,000		11,700
	2年目						
	3年目	4,800	2,400			500	7,700
	4年目					500	500
38年度	1年目	4,800	入会金500 2,400	3,000	2,000		12,700
	2年目						
	3年目	4,800	2,400			500	7,700

	4年目					500	500
39年度	1年目	4,800	入会金500 3,000	3,000	2,000		13,300
	2年目						
	3年目	4,800	3,000			500	8,300
	4年目					500	500
40年度	1年目	12,000	入会金500 3,000	3,000	2,000		20,500
	2年目						
	3年目		3,000			10,000	4,000
	4年目						

（註） 41年度以降入学生なし

初代教務課長としては畑俔弍が勤めたが病気休職となるにおよび岩森嘱託が暫定的に来任したが同嘱託の神戸商大へ転任とともに31年9月より荻野正三が37年3月まで在任、つづいて小倉進一が38年3月まで1カ年就任、引きつづき永井建雄が43年8月31日の移管期まで勤めた。農大の終年度の関係よりその後任は補充せず、庶務課長森秀二の兼任となる。

補導厚生課長は初代三上善潔病気退職のあと暫時畑教務課長によって兼任せられたが、28年12月より川那部講師就任、32年4月まで3年4カ月を勤め、つづいて栃木助教授32年4月より37年4月まで5カ年間在任した。次いで吉積舜三氏37年4月より41年3月末まで在任、その転出後は永井教務課長の兼任となり、同課長の43年8月末の転出とともに森庶務課長の教務課長兼任の例の通り足立経理課長によって兼任せられて今日に至っている。

第3節　卒業生の就職状況

昭和28年3月第1回卒業生を社会に送り出したのであるが、当時は旧制大学卒業生と重複し就職は極めて困難であったが、三宅学長を始め農産製造の権威浜口教授らの存在は業界との連繋もよく、また本学の特殊性も高く買われ年々100％ の完全就職をつづけ来たった。

就職先は一般業界中農業関連産業たる食品工業257名を筆頭とし、化学工業

182名、農林水産業71名を示す。この成果は各講座主任教授の溢れる子弟愛の発露と補導厚生関係担当者たちの忠実な動きによって得られたものであろう。

特に注目すべきは官公庁、学校への進出であり、農業試験場をも込めて地元兵庫県に籍をおくもの30名に達しようとしている。また本学卒業生中優れた教職志望者を助手として採用したものも可成りの数に上り、既に助教授或は講師に昇任日々教鞭をとっているもの5名を数える。なお本学には遺憾ながら大学院の設置がなかったので向学の志ある卒業生は京都大学農学部、大阪府立大学農学部その他の大学院（主として修士課程）に入試の難関を経て入学充分研鑽の上世に出たものも数多く、特に農芸化学科卒業生に多かったようである。

国家公務員の合格者の数も近年多く、41—43年度の最近3カ年間に15名の多きを算えた。

なお本学卒業生は別章完成期に記述の通りブラジル調査団を編成多大の成果をあげたように海外雄飛に烈々たる意欲をもち、既に渡伯し各方面に活躍しているもの十指に余る状態で、これも草創期における移民学講座新設の所産ともいえよう。

第7章 「篠山時代を語る」座談会の記録

兵庫農科大学の胎動期についてもっとも大切な命題たる神戸医科大学予科の後始末をいかにうまく一農科大学新設に結びつけたかの事実を把握するために当時の県当局、予科長、地元有力者と文部省当局との接渉の顛末を、或は現に生存されている当時の地元県議畑貞雄氏、当時の町村会事務局長脇田伊三五郎氏、他数氏から直接のお話を聞き、或は昭和23年ないし24年の県会議事録を漁り、或は比較的詳細な記録を収録した地元篠山新聞の通読などによってある程度は果たすことができる。また京大、阪大という元帝大の近傍に連なる地域にしかも、一地方小邑篠山の地に農科大学を誕生せしめた当時の当事者たちの蔭の活躍の姿を目前に展開せしめるためには何としても当時を追憶する座談会を開くことがもっとも捷径とおもわれたので、昭和43年9月1日を卜し、裏庭にジーンと鳴く蝉の声を背景とする篠山の宿「滔陽」において関係者11人が集まって開かれた。

本章は当日の速記録によったが、冗長、重複にわたる点については一部省略したことを断っておく。

（文責はすべて編さん委員がとることを附言する）

「篠山時代を語る」座談会出席者（順序不同）

	当時の職名（かっこ内は現職名）
出井繁作	元多紀郡地方事務所長（兵庫県職員信用組合常務理事）
松永清	元県学務課主事（川西市助役）
畑貞雄	元地元県会議員
脇田伊三五郎	元多紀郡町村会事務局長
小谷祐通	元篠山町会議長（篠山町長）
小島良	元神戸医大予科事務主任（篠山保健所総務課長）
佐伯秀章	兵庫農科大学教授 同　学生部長（兵庫農科大学学長）
山本賢治	元神戸医科大学予科教授（兵庫農科大学名誉教授）
西羅寛	元神戸医科大学予科助教授（神戸大学助教授）

司会
川那部治良　神戸大学教授（併任兵庫農科大学教授）
書記
西川欣一　神戸大学助教授（兵庫農科大学第1回卒業）

発端
（農大設置への動き）

司会　これから兵庫農科大学創設をしのぶ座談会を開催させていただきます。最初に兵庫農科大学現学長の佐伯先生にごあいさつをお願いいたします。

佐伯　本日は皆さん非常にお忙しいところ、休養される日曜日に御無理申し上げまして、わざわざお集まりいただき、まことにありがとうございます。昨年の秋から農科大学の校舎が神戸に移りまして、約1年近くになりましたが、振り返りまして約20年の篠山における兵庫農科大学を生んでいただき、お育ていただきましたことに対しまして、これまたあらためて厚くお礼申し上げます。現在だんだんと方針どおり神戸大学の農学部に移管中でございまして、まだ先がございますけれども、やがてはもうしばらくたちますと兵庫農科大学というもののからだが心臓移植ではございませんが、そのまま引き継いで神戸大学農学部に変ってしまいます。つきましては昭和24年に誕生いたしまして約20年間育ててまいりました兵庫農科大学というものが名実ともに消え去っていこうということに相なっておりますので、それに先立ち、20年の歴史を持つ兵庫農科大学のほとんど篠山において育ってまいりました学校でございますが、それについての記念誌といいますかそういうふうなものを出版いたしまして、後世にそれを残すという趣旨で県の御了承をいただきまして、計画いたしておるわけでございます。

つきましては一番大きいことはやはり生まれるということでありまして出産の苦しみ、それは県及び土地の方々、関係の方々

の本当に涙ぐましい御努力によって生まれたということを承っております。これは何としても最も声を大にして記念誌に書くべきところのものということを編集委員の方々一同が考えまして、きょうお集まりの方々に忌憚ない当時のことを思い出していただきまして、座談会の形式でお話をお願いするということでございます。そういう趣旨におきまして記憶の遠いところもございましょうし、またなまなましいところもございましょうが、皆さんのお話によりましてその当時の胎動のあり方を再現させていただきますならば、このたび名前は変りますけれども母体でありますところの兵庫農科大学の生まれたことが今後の先生方、学生たちにとっても大きい励ましになってくるものと思っておりますのでどうぞよろしくお願い申し上げます。

司会（川那部）　編集する立場におります者として、農大史をいまのところ胎動期と、草創期、３０年ごろから３６年ごろまでの完成期、それから最後に移管期というようにほぼ大きく４つに分けております。特にそのうち一番前者の胎動期につきましては資料はきわめて乏しいのでございます。幸いにしまして地元に篠山新聞がございまして、萩原さんという方がずっと責任を持って書いておいでになります、それを見せていただきまして、その中からずいぶん資料を得たわけでございますが、しかしそれらを単につづり合わせていくだけでは決して十分な農大史を書くことはできないわけでございまして、本日の座談会もその篠山新聞だけでは十分つかみとり得ない、あるいはまたある一つの動機から次の運動に移るのにどういう潮で移ったかというようなこともわかっていないわけであります。それらの点を本日各先生方からお話をいただきまして、補っていこう。この座談会のねらいもさような点にあろうかと存じます。そして先ほども佐伯先生が申されましたが、本日の記録は全部まとめて一つの章を組みまして、農大の設置あるいは胎動をしのぶ座談会の記録としまして編集するつもりでございます。

それからもう一つ申しますと、たいていの農科大学は土台になる高等農専というものがありまして、それをもとにして昇格したというのが十中九分までの学校でございます。本学の場合は学制の改革によりまして、神戸医大予科というものが廃止されることになり、その医大予科の施設設備をそのまま継承してより補強しまして、そこで人的の資源をどんどん整えてまいったわけでございまして、いわば無から有を生じたまことに全国的にも稀な事例だと思います。しかもその設置されましたのは、かっての連隊の所在地であります篠山というだけでございまして、全くの一つの町、タウンでシティではないわけでございます。こういうところに当時の設置委員さんも非常にそういう点を強調されてうまく運営することを要請してお帰りになったと思います。あるいはまた創設時代にはどういう苦労があったかということは最近神戸医科大学史をちょっとひもときますと、やはりその中にも座談会記録がございまして、玉木元衛生部長さんが予科を農大にするときに農大はなかったために、衛生部の予算として三千万円を県会を通してやったという発言をされておるわけでございます。全く当時は農大の設置のための運動費は少なくとも表面的にはなかったはずでございます。それを押して予科長さんをはじめとしてここに出ておられます当時の小島庶務主任等

も言いしれぬ御苦労の点があったと思います。要するに先ほど学長先生が申されましたように忌憚ない追憶の御開陳を望んでやまない次第でございます。

何よりも胎動期、生まれかけたときのことが一番まず最初にわれわれとして知っておかねばならないことでございます。当時町村会の事務局長であられました脇田さんがおいでになりますし、また全面的に地元県会議員としてこの土台を篠山の医大予科のあとに設置するということで大活躍をされ、県会議員さん方の説得に大わらわになりくださいました畑さんのお二人から当時の思い出話をおっしゃっていただければありがたいと思います。

畑　これは全く私は森先生の熱心にほだされまして、しかも結構なことだからということで町村会の意見もまとまりまして、私が県の農政部にお供をしたようなこともございます。そのときに松永さんのお世話になっておったが、県会で取り上げてもろうてやろうということで、幸い氷上郡と但馬とそれから森先生は姫路でお生まれの方でございますので姫路の県会議員の方に呼びかけられ、残った阪神の県会議員さんがよい返事をせなんだわけですけれども淡路もすぐ賛成してくれ結局県会全員一致で賛成してもらいました。それがきっかけになったわけであとの話ですけれども加古川や明石あたりの議員さんは畑君に一本やられてしもうた、あんなやったらこっちに大学もろうたらよかったのにと聞かされたようなこともございますけれども、ちょうど終戦直後のことで新議員さんがほとんどで、旧議員さんは少ないものですから、あっという間にまとまったというようなことです。その間いまの玉木さんのほうからもお世話になっておりますが町村長会のほうからも運動資金を出していただきましたし、またいよいよ運動資金が足らんときには小島さんが自分の家を担保に置いてお金を借りてもろうたというようなこともございますし、だんだん話が煮詰まっていきかけましたときに、県会の文教委員さんを桜の時期に2回ほど来てもらいましてつぶさに見てもらいました。ところが、書類も昔でございましたので、謄写版刷りの厚いものです。印刷したらちょっとのものでも謄写版刷りで分の厚いものを持って行きまして、松永さんにもお世話になったのですが、向こうに行きましたら文部省のほうの担当したその方がちょうど印刷を持って森さんやらと行きましたら中も見ないで「これは正宗というラベルは張ってあるけれども中はからやないか、こんなもの持ってきてどうするのか」ということで全然開いてももらえなかった。それからだんだん話が煮詰まってくるときに大学設置委員の糸魚川さんに来てもろうたんですけれども灘陽楼にお泊まりになって先生だけは学校を見てもらえなかった。

しかし吉川副知事さんが陣頭指揮だということが大きく中央に響きまして、そのときには中身をこしらえないとどうもならんということで、牛も買ってくる。鍬も買ってくる。森先生はほとんどの金で本を買われましたが、当時手に入らんような本をお求めくださった。これが学者の方々に好感を持たれたらしいのです。それで2回目か3回目のときには糸魚川さんも来てもらいました。私たちがお送りして神戸の料理屋でちょっとしたもてなしをして当時藤本町長さんも来て、やれやれというようなことで目鼻がついたんです。そんなことで何回も行きますときに、一番得をしたのは姫路

の工大で、あそこはこっちが陳情に行くときには必らず松永さんを通して一緒に陳情に行ったものです。それであすこの学校ぐらい楽にいった学校はなかった。みんなこちらがやったついでにやるくらいのことで、一緒にしょっちゅう行っておりましたが、ある日森先生は奥の間に寝られて松永さんの部下の人が県から来てもろうておりましたが、夜中に目があいたら煙が上からおりてくる。それからそっとふすまをあけてみると森先生のふとんが焦げている。階下に馬さん（当時の総務部長）が泊まっておってあんなやかましい人の耳に入ったらたまらんというので、やかんに水を入れて消して、夜が明けんうちにふとんは裏の人目にかからん所に干して、畳は皆寝とる間に表を入れてもらいました。結局晩にたばこを吸うたままで眠ってしもうたんですな、森先生はズボンが焼けまして二、三千円で買うてきてはいてもろうたようなことでした。またしょっちゅう行っている間に、目があいた時分には森先生は千葉の大学設置委員のところに行かれたり、私は東大のほうにお供をしたりしたことがありますけれども、一番設置委員の中でも温厚な近藤先生の一声、近藤先生は森先生とも特別の間柄でもあったのでうしろから相当テコを入れていただいた。これは全く森先生の徳と近藤先生の陰のお力でスムースにいったようにその当時は思っていました。

司会　糸魚川先生がごらんにならなかったのは資格なしというふうに思われたからですか。

畑　どっちかというと変人なような人ではありますけれども、行ったところで見るに及ばんというような印象があったのではありませんか。

松永　糸魚川さんは好意的ではありましたね。兵庫に対しては、森先生が熱意を込めておられましたから…しかし自分は団長でもあるしということで避けられたんだと思いますね。

司会　篠山新聞を見ますと、糸魚川さんのあいさつでも、われわれはここまで来たけれども、皆さん方御陳情はよく聞いては帰る。われわれは率直に調査したそのままをとにかく報告するだけが義務だといわれています。ほんとにまじめな方ですね。

脇田　農大ができますについて町村会のほうにも協力方を言うてこられたわけでございますがその当時の町村会長は山口房次郎さん、副会長は西山貫三郎さんだったと思いますが、その方々がおいでになりましたら当時の状況がわかると思いますが、お二人とも故人でございます。

その当時私は事務局におりましたので、重要な事項につきましは私は陰の人間で、そういうことはあまり聞いておりません。いつも運動やとか、陳情やとかいうときにはカバン持ちでお供をして随行させていただきました。ただいま畑さんがいろいろお話になりました重要な事項について、私あまり出ておりませんので、わからないのでございますし、事務的な問題につきましては森先生とここにおいでになります小島さんが何もかも準備なさったのですが、非常に御苦労願ったわけでございます。ただ私のほうでは出ております運動資金と申しますか、そういう資金の面につきましていろいろと町村会のほうでこれだけ準備せよというようなことで、その手当をしたわけでございます。その当時町村会でも苦しいときでございましたが、やはり郡発展のためには相当な運動資金は準備をしてやるよう

にということで、それにつきましては私は相当経費の問題で苦労させてもらいました。その後のことにつきましては事務局の関係でございますので、相談を受けておりませんので、そういうようなことでご勘弁願いたいと思います。

岸田知事の熱意と篠山町の優位性

司会　当時県におられまして農大の設置についてお力添えをいただきました松永さんから。

松永　農大の設立というのが非常に困難だったという点は先も言われたように全然母体がなかったわけです。大体当時は予科か専門学校を昇格さすというのが方針だったわけですね。教育制度の改革で結局医大の予科がなくなるということで、森先生が「たいへんだ。せっかく予科を設立して教授陣が整っておるのに」ということで、農大の雰囲気も全然ないところにそういうものを設立していくというところまで持っていったのは、勿論地元の方の熱意もありますが、森先生の粘り強い努力、これに尽きるんじゃなかろうかと思いますね。森先生の粘り強いということは有名でしたね。

小島　それと正直だということは文部省でも通ってましたね。

司会　ここが悪いと言われたらその悪いところをよくさえすれば必ず認可になる。そういう信念を持っていられた。中にはこんなものあかんわ、やめなさいと途中で言われたらしいですけれども、絶対やめられなかった。大阪には府立の農専もあるし京都、鳥取、岡山にもある。そういうときに兵庫だけつくらんのはおかしいということで、当初岸田知事さんが県会の答弁でどなたかの御質問に当時神戸大学がいまのような大きなものになるとは考えておいでにならなかったが、基盤さえあればどんどん大学ができて、県全体として国立であれ公立であれ私立であれ、いわゆる総合大学として全体を見たら総合性のあるものにしていこう。県立大学としてそういう構想をお持ちになっていることをたしか県会で答弁しておられました。

それから特にここでつけ加えておきますが、岸田さんには原稿をお願いしておいて先日お伺いしましたら上京中でしたけれども、息子さんの奥さんが出てこられて、「8月中に書かんならん原稿をかかえていると言っていましたから父は良心的ですからそれはおそらく農大史のことでしょう」と言っておられまして、一昨日私のところに書生さんが原稿を持ってきてくださいました。吉川覚さんも原稿用紙を送って先日お願いに参りましたら奥さんがおられまして原稿を書かんならんとおっしゃっていたのは同じことで、「わしが一生の仕事のつもりでつくった大学のことだから、喜んで書こう」といっていられたとのことで、お二方とも軌を一にしているので非常に喜んでおります。

松永　それともう一つ関係のないようなことですが、農大がここにできたという一つの要素といいますか、そういう点で忘れてはならないのはここに連隊があったということですね。もし篠山に連隊がなかったらおそらく農大は出現してなかっただろうと思います。当時の政治情勢としては、連隊がなくなった。この地帯の振興をどう考えるかということに政治的背景があったんです。ですから軍都変じて学都にするんだというスローガンを当時吉川副知事やら畑先生も言われたと思うんですが、岸田知事

もそういうことを言われたし、県の上層部の考えはむしろそういう点が強かったんじゃなかったでしょうか。篠山に連隊がなかったとしたら、おそらく医大の予科もできてなかっただろうと思う。ですからそれを考えていくと篠山に連隊があったということを抜きにして、農大の実現はなかったということを当時を思い出して感じますね。私は胎動期といいますか、農大が生まれるときと、国立移管のとき、両方に偶然にめぐり合わせています。その間の成長期については関係しておりませんが。……

畑　それから姫路の奥のほうの方で文部省におられた坂本さん、あの人が向こうでの案内役をしてくださいましたね。私はいいところにお願いしたと思いました。

松永　彼は、その以前から兵庫県出身だし、師範学校もそうだということで、懇意にしておったわけです。

彼は非常に当時係として力を入れてくれましたね。そういう関係で恩返しもしなくちゃいかんということだし、当時の学務課長の恩賀さんの教え子です。坂本さんはそれでどうだろうかということで、私は今度は教育委員会が発足するということで教育室をつくり、教育委員会のおぜん立てをやりながら今度は教育委員会に身分がえをして、教育室のほうは嘱託、こういうようなことで関係したわけです。そこで教育室長を兼務もしましたが、とにかく室長をさがさないかんということで、どうしようかということで知事、副知事、学務課長集まりましてあすから教育委員会のおぜん立てをせないかんということですから、そのとき日本で初めて、兵庫の教育界はじまって以来初めての教職員のストライキに出くわしまして、そういった中ですし、とても両方できないということで、いよいよ専任を置こうということになりまして、坂本課長を連れてきたわけです。

すべてそうなんですけれども、農大の発足期といいますか、胎動期はそういったような社会の不安定な状態、そういった混乱期だったわけです。そういうふうな社会背景もあったしするので、ある程度こういうことが実現したんじゃなかろうか。そういうことから考えてみると、森先生の粘り強さはとても素晴らしかったですね。あの粘り強さで農大が生まれたんじゃないかと思います。

設置委員の視察を迎えて

司会　当時の地方事務所長だった出井さんから何か。

出井　私が赴任しましたのは２３年３月４日で、期成同盟会ができたのが２３年の１月ですね。それで町村会で医大の予科が廃止になるので、大学を置きたいということで、こういうことをやりたいが所長どう思うということだったんですね。ぼくは口べただから「会長それ本気ですか」と言ったんです。「冗談でこんなこと言えるか」とやられたんですがほんとにやるつもりならせっかくぼくも学務からこっちへお世話になったことでもあるし、郡のためにやります。しかし１００万円くらい経費が要りますがどうですか。会長か副会長だったと思いますが、１００万円でいいのかということです。郡の事情はわかりませんし、１００万円でいいのかと簡単に言われましたがそれは消えてしまう経費、運動費や。それでもよかったらやろうじゃないか。こういうことだったんです。それで８０万円が即座に決まったんですね。

脇田　あれは2回に分けましてはじめ50万円であと50万円追加したんです。100万円を越したはずです。

司会　当時は町村数で19あったんでしょう。全町村文句なしに賛成しましたか。

脇田　篠山町が地元でございますので半額にさしてもろうてほかの18カ村は50万もちました。そういう分担になりました。

出井　あの当時100万というたら大きいですからね。それで決まりましてやらないかんということでまずやりましたのが陳情書を出すということ、ぼくは本庁におったので陳情書を見ておりましたので、そういう形式のものを小島君が5つか6つ書いて知事やら県会に出さないかんということになったんです。（佐伯学長の随想参照）

松永　考えてみると学務課出身の地方事務所長の出井さんがおられた点も強みでしたね。私、県会の工作がやりやすかったのは、目の前で言うと失礼ですけれども、畑県会議員が非常に円転滑脱に処理されていかれたんで、おそらくそのために一ぱい飲んで宴会もやらなくちゃいかん場合もありますし、二人で踊りもやったりして、とにかく県会工作はこんな大きい問題が比較的スムースにいきましたね。全く畑県会議員さんのお人柄でやり易かったんです。当時は県議は二人で野々口さんは全然タッチされなかったですね。

畑　県会の文教委員さんや設置委員が来たときに夜桜でちょうちんをつけて円座で一ぱいやったんです。それが非常に好感を持たれまして、こんな立派な桜見たことないと言われて。……

松永　一番最初の視察のときですね。いま神大の医学部のある楠町の交叉点の四つ角に当時食管法がやかましかったからやみ料理屋があって、そこでもう行こう行こうというのを時間かせぎをしまして、向こうを出発したのが4時半です。篠山まで行くのにどのくらいかかるかと言われたが、長くかかっても40分ぐらいです。こんなことで3時頃からそこへ委員を閉じ込めて、校舎はありませんししますので、とにかく場所はここだということだけで、いろいろなもの見せたらマイナスですから、とにかく篠山に着いたらまっ暗な所に連れていかないかんということで、神戸を出たのは4時半頃だったと思います。これからだったら篠山に着いたら7時か8時頃になるという見込みで4時半頃に出発するように私の部下の者に言うたりして、4時頃になると早う行こうというのを車の準備ができませんとか言うて、4時半頃にもういいだろうということで行ったんです。そうしたら約2時間かかったんです。こっちは計算をしているんですけれども、設置委員は怒りましたね。向こうへ行ったらどうするかと言っておこるんですが、夜になって着いたら桜の花が満開ですわね。かがり火があったでしょう。これはいいところやと言うてごきげんを直して夜のとばりがおりた校舎を外から見て、ここらを切り開いてするのだというような説明をしまして30分ほどですましたんです。お城のところでござをひいてかがり火をたいて、あれは印象に残っているらしいですね。ぼくらも印象に残りました。最初の視察は桜見ですわ。（笑）

出井　23年の4月の中頃やったね。県会の経済委員会が見えたときもやりましたね。

松永　いろんなエピソードがありました。畑先生とゲートルはめて国民服を着て汽車に乗り込んで、窓から乗ってた時分ですからね。

脇田　はじめ出発のときには県会の議員

寮に泊めていただきましてそれから出発したんですね。

松永　向こうに行くのにリュックサックを背負うて中身は一升びんも入れてますし、米も入れるし。

畑　１２時頃に汽車が東京へ着いて交番所の前に通りかかりますと「君ら何持ってるか。」と問われます。「これは文部省へ農大設置で行きます」「それならよろしい」というて中までは見ませんけれどもようひっかかりました。

出井　特に丹波地方から出るやみ米が多かったんです。

先ほども話が出ましたけれども畑先生と森先生はぼくら役に立たんのに始終地方事務所へ見えますし、御熱心でした。先ほど松永さんから話が出ましたが、全然母体のないところに大学をつくるのはむちゃな話で……。

松永　それでしかも農大でしょう。

司会　はじめは理農科大学ということが出ましたね。

松永　文部省に行って折衝している間にそういうものはつくれないとなったんです。それでやるならば農大、こういったほうがいいじゃないかという専門教育課の担当の係の連中がこっそりと言って呉れたものですから、それは願うところじゃないかということで単科農大とこういうことになったんです。

うら話のかずかず

司会　小島さん、その頃のことを一つ。

小島　皆さんのおかげでいろいろお世話になって大学ができたんですけれども、私も森先生の熱意にほだされて一緒にお仕事をさせていただきましたが、一番印象に残っているのは運動資金が足らなかったことに困ったわけです。文部省に行っても篠山から来ました、はあってなもんです。デカンショの丹波篠山から来ました、ああ丹波の篠山ですか、デカンショなら頭にあるんです。篠山だけでは通じません。農科大学をつくるということですけれども、中身は何かいろいろありますのか。百姓の道具ありますのかときかれましても木に竹を継ぐような話で、ボチボチそろえますと言うたら「一升びんに水入れといてこれは灘の生一本やいうて通じますか」と言われてね、ぼろくそに言われました。そこを森先生は熱心に話をせられてきたんですけれども一番最初の取っかかりはそれなんです。

それからその次に私が一番困ったのは申請書なんです。大学の申請書をこしらえるなんてわかりませんし、事務系統もおりませんし、森先生が文部省へ行って手を合わせて貸してくださいと言うて頼まれたのです。それをやっと貸してやるということになったんです。申請書を貸すことは具合悪いと思うのですけれども、その借りてきたのを森先生が宿へ持ってきて写してくれと言われる。どこを写していいのかわかりませんし、要点要点写したんですけれども、森先生はぐうぐういびきをかいて寝とられるし、何とか方法はないやろうかと思うけれども、あほ正直にこれも写さんならん、あれも写さんならんと思うてやってたらとうとう夜が明けてしまいました。そういうことで帰ってきた申請書の絵をかかんならんけれども、紙はボロボロの紙でしょう。謄写版で書くんですけれども、４晩ほど徹夜しました。一人か二人倒れまして先生にも手伝ってもらったんですが、申請書のうしろに諸先生方の承諾の判が要るというこ

とでもらいに走らんならんし、名前だけ書くんじゃなく判ももろうてこいと言われて困りました。

松永　申請書を書くときに教員組織をつくらないかん、それは京大の近藤先生にお願いしたんでしたね。

脇田　近藤先生はじめ４教授おられましたね。

小島　それと学生一人何坪と面積がきまってますから校舎の面積が足りない。これはえらいことだ。そこで水道の水の出が悪いからバルブの締め方を見さしてくれ、どうぞということでそのついでに中を見せて貰ってこれも農大の建物です、こっちの高等学校をあれも将来は全部やるんですというようなことであれは教員宿舎にします、学生寮にしますとかいうようなことで。……（笑）

司会　付属農高というのはジェスチュアだったのですか。

小島　農高の土地を農場が足らんからあそこに行ってやるということだったんですが、それは大学ができてから少し分けてもらいましたね。

出井　いまの農高を大学付属農高にすることも出ておったけれどもそれはだめだということで、県がいかんと言うたんですね。

小島　宝塚の小林の園芸試験場まで入れてしもうたし、どうしても足らんということで篠山町の図書館も一役買っています。

出井　農機具なんかは地方事務所の経済課長やら農務課長やら分担して借りに行きました。

松永　工大の機械を運搬したんですが、工大も専門学校から大学昇格の審査が来るでしょう。そのときはそのときでまた返す。（笑）

小島　ほとんど何にもありませんでしたからね。三木から精米機が入ったわけです。農林部長ですか副知事かが言われてみんな分担して、結局展示場で農機具の展示をしていますが、そこからそこの精米機でりっぱなものが一ぺんも使わずじまいでした。

畑　あの時分は借りものも多かったようですね。

出井　それでもようそろうとると来た委員も言いましたよ。（笑）

司会　１２月２７日か２８日に下見に来て、１月の４日か５日に本格的に見に来るのであの休みはおそらく休まなかったと思います。県もお休みにならなかったのでしょうね。

松永　考えるとむちゃな話ですわ。

司会　役人が１年でたった１週間休む年末年始のこの間もなかったわけですからね。

畑　吉川副知事がトラックに乗って陣頭指揮したというような評判が中央に飛んだりしたものですから、それが印象がよかったようです。

小島　辞表をふところに入れてやったということですわ。

松永　吉川さんはあの調子でわしでも辞表書いとる、君辞表持っとるかと言われてこのとおりですと言うたこともありました。

小島　しかし命がけであああいうことをやって県会にもかけずにやったというわけです。設置委員が来たときに設備も何もないじゃないかということでしょう。副知事が辞表ふところに入れてやるというわけです。１０日ほどの間に丹陽組に全部やらせたわけですからね。

司会　当時町議会の議長をしておられて、

現町長であられます小谷さん何か。

小谷　私はちょうど終戦直後の混乱の第

1回の町会議員に出まして議長をやらされて、非常に混乱しておる最中でして、全期ようつとめずに途中で投げだしたようなことなんでいまの話の主題になっております農大については先程から当時の県会議員さんやら、直接当っていただいた皆さんのお話を聞いて教えていただいたようなことで、私の議長時代に医学部の予科ができるという当時に森先生がいまも皆さんからお話が出ておりましたように、熱心に御苦労を願ったというようなことだけが印象に残っているくらいで、直接議会として、吉川副知事が活躍せられた当時の運動には参加しておりません。議会の議員は町長のやることは文句は言うても実際の責任は持ってないので案外記憶はないのです。森先生が引揚者の装束をしたままでリュックサックを負うて、白い雑のうをかけて、白い巻きぎゃはんを巻いて神戸からひょこひょこ来られて、あんまりものかず言う方じゃなかったですけれども、じゅんじゅんとお話になり、熱心に指導してもらったことを私よく知っておりましたので、当時議会のほうでも御協力をしなければならぬというような話合いをしたことはありますけれども、直接私は運動に参加した記憶はありません。

司会　藤本町長さんのその頃の活動ぶりはどうでしたか。

小谷　いまお話にあったようにあの当時篠山町長としては、連隊のあとを何とかしたいということで、やっと予科ができてそれがさらに増強せられるのだというようなことで、非常に熱心に動いておられましたけれども、具体的なことは記憶に残っておりません。畑さんと一緒に上京したということははたで聞いておったわけで。……

畑　ちょうど藤本さんと上京したときには私が一番先に汽車に飛び乗りまして藤本さんの席をとっといて私たちは新聞をひいて、そこで寝ころぶというようなことで、自由に席がとれない。そういうことはしょっちゅうでありましたし、それから上京して帰りがけに神戸に寄って報告せんならん。藤本さんは足が腫れてしまって靴がはけないのでそれをぼくがはかしてあげたりして…いまみたいな楽な上京と違います。それと農大ができるときも一般の農家の方は割に冷淡で、たとえば私がこれができたら兎でもとってきたらなめしもしてもらえるんだというようなことを言ったりいろんなことを言うてどれだけ得になるかわからんというようなことも言ったんですけれども、その当時は非常に冷淡でして私が森先生と「一力」の2階で人を待っていたときに、先生は庭をちょっと見ておって、「畑君、この栗はあかんな。やっぱり銀寄やないと虫がついてあまり芳しくないので銀寄にかえなあかんな」と言っておられましたがちょっとのことでも即座にそういうふうに言われて多紀郡のためにしょっちゅう考えておられた。それがわかってきまして、あんた方もわからなかったら農大に行けと言っていたのがほんまにどんどん御相談に行って最後は皆喜んだんですけれども、はじめの間は地元は冷淡でした。

出井　最初は自衛隊にするか学都にするかということでもめたんじゃなかったんですか。

畑　あれは大分あとの山崎町長さんのときで農大はできていましたし高等学校もあったんです。そうしたら神戸で私と小林米三（その当時の町助役）と山崎さんと3人

がいろんなコネをつけて自衛隊を引っ張り込もうとしたのです。この経緯についてはいろいろあったのですが、結局沙汰やみになりました。

小谷　そうです。自衛隊にはいろいろ問題もあり、批判もありましたからね。

出井　元来多紀郡は教育に熱心な所ですね。多紀実業が城の中にありまして、組合立を県立にしてくれということで畑先生やら山口会長が見えたと思いますが。

脇田　あれも町村会で、郡有林が１００町歩ありました。それがほとんど農高と実業学校の費用に入れよったんですが、それはずっと入れまして、県立になってからも残った植林を全部あそこに入れまして、１００町歩の植林ですから、いまにしてみれば相当な金になりますけれども。

出井　普通郡立、組合立から県立になったり、市立から県立になる場合相当条件がむずかしいですね。いまの大学の設置と一緒でそれを話したら「やります」と簡単だったんです。いまの校舎では狭いから幸い連隊のあとが残っている。あそこへ改造して持っていく、「やります」と簡単に言うて引き受けて帰られてすぐに書類が出てくる。あそこに県立農学校ができた。それが大学につながるんじゃないでしょうかね。幸い練兵場も農場になるし理想的な農学校ができたということです。

粘りの森先生、創設のうらに近藤先生

司会　要するに連隊跡に農学校がクサビを入れ医科大学予科の設置更に森先生ひいては初代三宅学長、さらに佐伯学長の農大となり、やがては神戸大学農学部につながっていったわけですね。

当時の予科時代から教職にあられ、そういうように胎動期をおそらく予科の先生としてまた農大ができてからは中堅の先生としてずっと続けていただいております西羅先生からどうぞ。……

西羅　きょうは、あの時分のことで初めて聞いたこともたくさんあるんですが、ともかくああいう学校の設立はオーソドックスなことだけでは行かなくて、裏に隠れたきょうの話のかがり火をたいた宴会がいかに必要か、ほんとにしみじみかみしめておるわけですが、いま皆さんの御発言を聞かせていただいたんですが、その中でちょっと触れられたところで当時てまえみそになるかもしれませんが、農学士は私一人だったものですから、森先生が何かにつけてそれを御利用なさったのです。そのときに一つの思い出として京都について来いということで教授の任用のことで行かれた。そのときに近藤金助先生に会われたんですが、近藤先生は森先生の教え子です。非常にツーカーの間で、森先生が行かれますと、恩師のためならどんなことでもする、こういう正義感の強い方で、全部任用は恩賀課長さんも御存じと思いますが、ほとんど近藤先生が兵庫農大の教授陣を全部出す、発令するときには渋る人があるんだそうですが、そうするとぼくが行くといわれる。この一言がきいてほとんど承諾された。そういうことを聞いております。私が行きましたときに近藤先生にお会いする前にお忙しかったので並河という先生がおられました。並河先生は時めく正教授でございますけれども、のぞみというたばこをポケットの財布の中から出して紙切れで巻かれて吸っていた…そういう時分でございます。そこでお話を聞いておりますと近藤先生が来られまして、お前たち予科

におる者は大いに人のことだと思わんと努力せないかんという御忠告を受けましていろいろお話をされた。その中に目的及び使命というのがあります。それが兵庫県立農科大学要覧の一番初めに書いてあるんですが、「本学はわが国特に兵庫県における農業全般の進歩発達に貢献する目的のために農学の学理と応用を研究し、教養高き農学者農業技術者等を養成することを使命とする」これは近藤先生が森予科長と私のおる前ですらすらと書かれたことを一字一句違わないのが出ておるわけですね。大家は違うなと思ってびっくりしたことがあります。何さま当時は血の気の多い若い時代のことですので、びっくりすることも多かったんですが、森先生が御努力なさって地元の協力、県の協力で実を結んだ。森先生は皆さんが申されましたように粘り強い、正直だったと言われましたが、それはわかりませんでしたが、乗り物には一切乗られない。ともかくてくてく歩かれる。それが速いんです。そういうお人柄が出たんじゃなかろうかというようなことを思い出しております。私はそのくらいのことで、ともかく胎動期は外から眺めておった。森先生は予科の先生方にバタバタするな。お前たちは心配せんでもよろしいと足止めをしてほかの先生方も自分にまかせて協力せいということであったのではないか、そういうようなことを思い出しております。

佐伯　近藤先生は京都大学の農学部長さんだったんですね。

司会　設置委員は4人おられました。団長が糸魚川さんでスタッフを決めるについて京都大学が非常に協力して下さったようです。

西羅　お聞きしますと三宅先生は北大御出身、近藤先生と御懇意のかたで森先生、近藤先生、三宅学長そういう関係で、このお三方の御努力があって私らが動いていったんじゃないかというような気がするわけです。

佐伯　北大の三宅先生が来られるときに最初に農科大学ができるから創立委員長として、やがてはできたら学長というようなことで来ないかというのが内々の近藤先生から来た話らしい。

西羅　近藤先生は森先生が福井中学で教えられた教え子で、そういう師弟の愛情と申しますか、そういう点も私たち感激して聞かせてもらったことを覚えております。

司会　この月曜日に私近藤先生にお会いしました。「うまいこといってますか」と問われましたので「すくすく移管になりました」と申し上げましたら心から喜んでおられました。

西羅　設置委員会のことで畑県議さんが申されました糸魚川さんが第一回に来られてちょうどいま言いました校舎の物理化学の先生がおられたあのまん中へんだったと思いますが、あそこに私聞きに入ったんです。そのときに沈痛な感じを受けたんです。吉川副知事さんがおられて重苦しい感じを受けました。丁度雲行きのわるかった時分ですね。それからのちの1千万円というような話を聞きましたが、それで好転したというようなことを伺いましたが、ちょうどその部屋に入ったときのことを記憶しております。

佐伯　さっき運動資金か何かで小島さんがお家を担保にしてというのはそういう時代ですか、つくろうというて陳情する時点のことですか。

資金難のうらばなし

小島　陳情のときです。期成同盟会がで

きましたでしょう。東京へ行くからには旅費がいるし、食費もいることだし、運動費もすべて現金ですからね。そういうような運動費とか金が町村会の脇田さんのお世話になりましたわけです。けれども、その当時の町村長さんで、篠山はよろしい、半分持ちましょうと言われ、またほかの村長さんはみんなよろしいと言うておりましたが、話を持って帰られると収入役さんが金はありませんからと言われたら東京へ行く金がない。それでは東京へも行けませんし、藤本町長さんにお願いしにいったんです。何とか運動費を出してもらいたいということですが、藤本さんが私は顔がきかんからあんた頼むからと言われて私が銀行へ行ったんです。「大学こしらえようと思うので」と支店長代理に頼んだんです。あんたも地元の方やから何んとか一肌脱いでもらいたいと言ったんですが、硅石とか製紙会社やったら何んとかできるだけのことはしますけれども、大学をこしらえる運動費は何んぼ本店へ稟議しても駄目ですと言われてそれやったらよろしいということで、もう1カ所行ってもいずれもそういうことを言われること決まってますから、もう仕様がない。家を担保に入れたら運動費ぐらい出してもらえるかと言うたんです。そこまでやるなら貸しましょうということになって初めて約束手形をもらったんです。結局は町村会にお世話になったのですが、村長さん方の中にもなかなか難しい人もありましたね。

出井　えらい簡単に出しましょうということやったから初め小島君が苦労しておったとは知らなんだ。途中からわかったんやけれども、しわ寄せは事務局の脇田さんのところにいったのと違いますか。

脇田　町村の財政もああいうときですから苦しかったわけです。町村長が承諾しても、収入役に行くとちょっと待ってくれということになってくる。私のほうもだいぶん金を銀行から借りまして、小島さんに融通したことがあります。金の工面調達はその当時は苦しい頃でした。

小島　おやじの実印と権利書を盗んだんです。登記の権利書盗んでだまって判を押して、それがわかってきておやじにおこられるかと思うたけれども、おやじも悪いことに使うてないからよかったと言うてくれました。

脇田　小島さんは苦労されてますわ。

出井　何しろ毎月2、3回上京するんですからね。県会から文教委員会、経済委員会、総務委員会、正副議長、ほとんど毎月篠山へみえてました。地方事務所に連絡がありまして、知らん顔しているわけにもいかんし、役に立たんでも案内せんならんでしょう。ぼくは16回兵舎をあがったりおりたりしている。(笑い)

畑　そこへ篠山川の改修とだぶっていたでしょう。よけい大ぜいお客さんが来ました。

司会　篠山新聞によると1年足らずで予科長さんが12回か13回か上京された。そして朝起きてみたら寝ている間にたとえば千葉大学の設置委員さんの自宅に行っている。じっとしている間もなかった。それだけに晩ぐうぐう寝られたんだろうね。

畑　目があいたら森さんは大抵おってやなかったですね。足が速いので東大なんかでもついていくのにぼくより年が上なのにどんどん行くから走りながらついて行かんならん。

小島　私は昔のトランクがあるでしょう。酒に米に書類を入れてるでしょう。手にまめができてまっかになっている。足が

速いでしょう。とてもついて行けません。そうしたら森先生がうしろ向いてカバン持ちましょうかと言われて恐縮したこともあります。

司会　山本先生には41年3月まで兵庫農科大学教授として英語、経済学両方お持ちいただきまして御活躍いただいたわけでございますが、非常に丹念に日記などもお書きになっておられました。胎動期、それから草創期のお話をいただければありがたいと思います。

山本　私、西羅先生と御一緒に予科時代からおりますものですから、いわゆる胎動期にはそばからながめてはいたわけです。しかし私は文学士でしたから、何の役にも立ちませんし、力もなかったんですから、森先生に何んのお助けもしていないし、森先生もお忙しかったんでしょうが、私たちには何も進行状態を御報告なさらなかった。いわば私たちはつんぼさじきにおかれていた。しかし先ほどからも話がよく出ておりますように、医大予科が農大になる、そんなことはちょっと無理じゃないか、もう一つは私としては森先生が私たち予科の教員たちがどうなるか、その将来を心配されて農大の新設を考えられたんじゃないか、そんなふうにとりまして、却って森先生に御迷惑をかけているんじゃないか、そんな思いでいたものです。しかし力がなかったし、何のお役にも立たなかったんで胎動期の内容についてはちっとも存じあげない。森先生や小島さんが御苦労なさっていることはわかっていたんですが、どういう御苦労か少しも知らなかったわけです。

あるときでしたか、県会議員の方が見えまして、折悪しく森先生がおられなかった。私が出まして県の議員の方が農大の申請の進行状態はどうなっているかなど尋ねられました。私は何も知らないものですから「何も知りません」こう言ったんです。肝心のお前たちがそんなことでどうするんだと大へん叱られました。叱られてもしかたがなかったんですけれども、幸い畑議員がおられてうまくとりなしていただきました。そんなことをいまでも覚えております。先ほどもちょっと話が出ましたが、図書は森先生が立派なものを集められた。それは先生が上京されるたびに、お忙しかったでしょうが余暇をみては古本屋へ交渉されて、その結果バック・ナンバーのある立派なものを集められて100万以上かかっていると思うのですが、そういうような本なんですが、年末ぎりぎりに届いたようなことも覚えています。私胎動期におりましたが何にも知らずに、いままで皆さんのお話を伺ってたいへんなつかしく思っているだけのことでございます。

新制大学になりまして、いくらか予科の教室が改造されたとはいうものの、これが大学かな、そんな感じばっかり受けてましたね。予科生と一緒でしたし学生は46名になっておりましたが、わずかでわれわれ職員も10人ぐらいいましたね。

佐伯　そのときは予科の先生方はやがては予科が廃校になるということで相当真剣に成り行きを心配しましたでしょう。

山本　大いに心配はしておりました。とても駄目だと思ってましたね。

三宅先生の人となり

司会　森先生をはじめとして予科の庶務の方々で一応書類ができ、近藤先生をはじめとして京大4教授の肝入りで少なくとも書類の上でスタッフはできた、いよいよ三

宅学長先生がお見えになって本格的に30講座近くの講座に専門の先生方が来られた。その苦心はやはり三宅初代学長先生が日夜お考えになったものですし、三宅先生の後輩として佐伯先生はいち早く篠山に来られまして、三宅先生にお会いになった当時のことはおそらく佐伯先生の念頭に彷彿たるものがあると思いますが、さような点、24年から26年の草創期の教官の全スタッフをつくり上げるまでの三宅先生のおそばにおられて、これに限りませんけれども草創期のお話を承りたいと思いますが。

佐伯　諸先生方、皆さん方がいろいろと御苦心された末、とにかく昭和24年に新制大学としてスタートしてこちらに赴任したときの当初の頃のことを申し上げます。

私も三宅先生も台北の大学から引き揚げてまいりまして二人とも北大におりました。それでたしか三宅先生は昭和24年の4月に、先ほど話のあったように京都大学の当時の農学部長の近藤先生から篠山に新制の農科大学ができることになった。ついては三宅先生にスタッフを集める創立の委員長、同時に学長にならんかという話が来たからということを承りました。私もそのスタッフの一員としてとの要請がありお引き受けをして赴任するまでに、それぞれどういうふうな学科組織かということの連絡がこちらにあったわけですが、土壌肥料の講座がございますが、それについて君はどうかというお話がございました。結局はそれでお引き受けすることにしたわけでございますが、そのとき私事にわたって変な話ですが、自分は篠山に行ってこの学校を引き受けて、できるだけやるけれどもあとはどうなるかわからない。もし蹉跌するとしたら自分が君の骨は拾うから行かないかといわれたことが私を動かしたわけです。偉い方だと思います。それで三宅先生はたしか5月の早々くらいに一応単身でこちらにおいでになって創立の式典の5月20日にはおいでになった。私はまだ定員もなし、あまり早うしてもろうても困る。ついては北大の農学部長にもオーケーをとっておりましたので、発令を待っていたんですが、いつまで径っても発令されない。農学部長でクレームがあったということを聞きました。結局は8月下旬の発令でしたが、発令までの8月半ば頃に参りました。来るについては小島課長に無理を言い、志を立てて来たけれども丹波篠山というのは日本でももっとも山ぶかい所だからと、詳しい地図を書いてくださったので、それをたよりに8月下旬に参りました。それで家のほうは建ちかけておりましたところの北新町県営住宅で、でき上がっておらんで臨時灯か何かひいてもろうて過ごしました。7月に入りまして三宅先生が御家族を連れてくるために、札幌に帰られて私が着任して1日か2日遅れて御家族がこちらに来られました。学校の中はどうかと言いますと、部屋が2つできておりましたな。農芸化学関係が2つというけれどもほんとの2つで、私のほうの入るべき部屋が1つでありましたが、いすもテーブルも何にもない。床板だけの部屋で住むわけにはいかんというので、石井先生の化学実験室になっておりますあそこが事務局で、事務の手伝いをしてみたり適当に遊びながら2カ月ばかりろくな仕事もせずにいました。そのうちに三宅先生が生物化学をやっておられたから、水野先生も来られて森本先生、浜田先生も来られた。専門の教授では私が一番先に来ました。教授会がございましたがそれも教養のほうの建物のところの部屋で、最後まで石井先生がおられた部屋ですが、10人くらいおりましたが、

予科と農科大学と一緒でしたから、四角いテーブルで端のほうに予科長の森先生、その横に農科大学長の三宅先生、両側に5人くらいということで私はよそ者で端にすわらしてもろうたというようなことです。それから学生は予科と農科大学とが一緒におりましたが、人数がいま山本先生は46人とおっしゃいましたが、入ったのは46人で結局は30人くらいになったんですが、ほかの大学が遅くに試験があって、北大とかいうようなところに行ってしもうた。落ちついたのは30人くらいで当時は農学科1学科としてスタートしたんですね。当初は農学だけで、あと2年か3年くらい経ってから農芸化学と農学に希望によって半々くらいに分けたというようなことでした。確かに大学の形式をなしておらん形でしたけれども、しかし三宅先生を陣頭に立ててここに集まられた皆さんがいまは新しいのでこういうスタートだけれども、あちらこちらに新制大学ができたが、いまに見ておれ、立派な大学にする。三宅先生の手腕、学者的なものに信頼して研究一途にいったというスピリットといいますか、気風はいまでも忘れないで継承していると思います。三宅先生はいよいよ8月下旬に御家族、奥さんとお嬢さんとを連れて来られましたが、お住まいになる所がないというのでとりあえず近又旅館におってその後河原町の川端昇太郎さんのところの離れにしばらくおられて、それから公舎ということになったんですが、公舎を借りるについて小島さんがずいぶん苦労したんですけれども、その苦労と手腕によりまして東新町のいい家を借りたんですね。

公舎や住宅の心配

小島　三宅学長が来られるときにぼくに申されたのが丹波篠山という所は生まれて初めてだ。地図で見たらどの辺かわからん。大阪まで来て福知山線に乗ったらトンネル、トンネルでどんな山奥の中に入るかと思っていたら、入ってみて割合よかったと言われたんですけれども、初めておいでになったときには畑県会議員さんもお迎えに行っていただきました。近又へ着かれて住宅難で住む当てもありませんし、近又の主人と学長と懇意だったのであすこに泊めてもらったんですが、旅館ですから2階ではどんちゃん騒ぎをするし寝られません。そこで川端さんと三宅学長は懇意だったらしくあそこに頼んで裏の離れに入ってもらったんです。その間独身で、奥さんと一緒にと思うても家もなし、なんとか公舎をと思ったんですが、県はなかなか予算を組んでもらえない。とりあえずわずか30万円の予算だったんですが、公舎の予算を組んでもらってっそのときにお礼を兼ねて県庁へ行ったわけです。そうしたらある大学の課長が係にぼろくそに言うてるんです。こんなわずかな予算で公舎みたいなもの買えますか。それでその係長を待ってましたとばかりに私は、こんなにして苦労して予算をとってもらった。せめてありがとうございますと一言いうてこのわずかな金で買えません。とそんなに言うのだったらわかるけれども、ありがとうとも言わんと頭からこんなわずかな金では買えんと言うのだったら、そんなところへやる必要はない。農大へ回せといってその金をもらって合計で60万円で買うたわけです。

結局、学長の公舎については、県の希望や奥さんの希望もあり、なかなか条件を充たすような家は見つからなかったのですが遂に東新町に適当な家を見つけました。その間、或る医者の入居希望にも対抗し、ま

たその登記について裁判所にも強引にしかも迅速に進めて相手方を凌いで手続きを完了したわけです。勿論、間一髪のところだったので、ブローカーの人からも相当睨まれました。

しかしまあお蔭さまでよい買物をしたとおもっていますし、学長さん、奥さんからも大変喜ばれました。

出井　公舎のことなら青山の御母堂に叱られました。ちょうど御母堂が帰られて青山会の評議員会があったのです。たまたま世話人になって出てこいというので御母堂の横に座らされて、便所にも行かれない。皆和服で来とったですが、ぼくだけ服で行った。失礼しますというてあぐらをかいたんですけれども、そのときに大学ができるので町長さんにとにかく先生の住宅をつくらんことにはしんぼうして来てもらってもこの山の奥にはおってくれません。まずそれをつくりなさいということで青山会のあそこがあいとるからあそこに建てたらいいじゃないかということで工事を始めたんですが、へいを破って材料運搬をしたんです。たまたまそこへ御母堂が帰られて巡視された。町長とぼくが案内してきたんですが、「こういうことしてもろうたら困りますね」というわけでつくろうてないから藤本町長は地方事務所長の命令によってやりました、とこう言うんです。（笑）それですぐに所長さんに直してもらいなさいということでした。工事が済みましたら完全に元のとおりにしますからということで済んだがまだ元の通りになっていない。（笑）

佐伯　農大関係の住宅で一番古いのは北新町ですか。

山本　北新町と紅葉谷と両方でした。

小島　あれも県に建ててもらうのは通勤1時間以内そういう所でないと建てない。それを無理に特別の好意で建ててもらったわけです。ほんとは建てられないです。

畑　県営で建てたのは珍しかったですよ。あれは野々口君がやりました。あの人がやって私は野々口さんのうしろをついて歩いただけで、県営住宅は野々口君が非常に骨を折りました。

司会　あの頃は丹陽組がやりましたね。

畑　そうでした。

学長用自動車、海外留学

佐伯　三宅先生も兵隊のボテぐつはいて木ノ部の農場まで視察に自転車のしりに乗せてもろうて行ったらひっくり返ってたんぼに落ちて（笑）

小島　学長は授業を持ってられたでしょう。朝方終ったときに迎えに行ったんです。乾新町の所が舗装してなかったので職員のうしろに乗って足が長いでしょう。バウンドしたはずみにひっくり返って。

松永　それで足悪うしたんかな。（笑）

小島　足の悪いのは前からです。（笑）そのときはそんなにひどうなかったはずです。

松永　三宅学長さんは来られるときから足が悪かったですか。

佐伯　若いときからよくなかったですね。

小島　ぼくと木ノ部の農場ができて巡視に行ったわけです。そのときに農家に苦労かけたということで2、3本持って飲まして、タクシーもないのでぼくのうしろに乗せてきたわけですわ。そのうちにもの言うても返事しません。おかしいなと思うたら自転車のうしろでいいきげんで眠ってしもうて（笑）起きて下さい。あぶないからと言うたら君の乗せ方は一番上手やといわれました。（笑）

佐伯　自転車にリヤカーをつけてそれに乗ってどっかへ行かれたこともあるという話を聞きましたな。

小島　宴会があるでしょう。必ずぼくの自転車に乗せて家まで送りよったんです。それを県の課長が見られてそこまで庶務課長が苦労しているかということで何とか自動車を考えないかんなということになったんです。

松永　自動車は34年か35年にぼくが労政課長から教育課長にかわって就任のあいさつを兼ねて一番最初に視察に行ったんが農大です。篠山口まで自動車で迎えに来てもろうたが、大変なおんぼろでした。そこで学長の車がこれではいかんとすぐに学長の専用車にトヨペットの新車を購入したんです。

兎に角ヨトヨトしとったね。（笑）それが農大についたんですわ。創立してから10年もたっとるし、鉄筋の学舎で相当なものやろうと思うて入っていったら昔と変わっていません。そうして図書室へ連れて行ってもろうたら建物がゆがんでしもうとる。食堂の建物もゆがんどるし、ずうっと回って帰っていろいろ考えたが、要するに単科で4大学置くには非常に経済的にもロスがある。何とかしないとそういった内容の充実をはかられないと思ったんです。それで商大、工大、農大、短期大学もあったけれどもそれと医大この4つの大学を総合大学にしようと思うてしょっぱなの運営委員会に出したら各学長からものすごく反撃をくろうて、特に教養の先生方から突き上げをくらいました。これではいかん、そこで国立移管ということ以外にないな、神戸大学は農学、医学がないし、これが一番賢明な方法だと考えて方向をそちらに変え、それから大学の先生の外国留学の経費も全然予算要求もしてないし、そういう論議もされてない。一方教育委員会におるとき必要やからやったけれども、肝心の大学教授の外国留学の経費がない。それで外国留学制度をつくらんといかんと思ったのです。

佐伯　昭和34年が第1回でしたね。

松永　各大学の学長さんを説得してとにかく医大は別や、これは前からある。農大商大、工大少なくとも3大学で1人と組んだんです。これも阪本知事が予算査定のとき外国へ行ったって何の役に立つかというのです。わしが行ったって何一つ役に立たなかった。そこで私は「知事が行かれるのと大学の先生が行くのと違いますよ」というたんです。そうしたら例の調子で「どんな違いがあるか。具体的に言え。」こういうわけです。その頃は教育課は総務部に属していましたから、教育課長が直接知事の査定を受けるんです。ぼくは阪本さんがドイツが好きでドイツに行って金を使い果たして河上さんに金を送ってもらったということを知っていますから、「いまの状態ではアメリカしか行かれないでしょう。大学の教授はアメリカでも、イタリアでも、イギリスでも、あるいはソ連にでも行くんだ。もちろんドイツへも行ける」と言うと「そうやな。ドイツもあるな」それでいこうということで決まってしもうたんです。

司会　農大がよそに誇り得る図書館を設置したのは何年ですか。

松永　農大が図書館をつくらなけりゃいかんということでとにかく農大は図書館、工大は校舎の全面改築をやったんです。商大は研究室がこれまたお粗末で、一番大学で肝心なのは研究室の整備やということで研究所をこしらえました。外回留学の第1回はそれで佐伯先生が行かれたんですが、その翌年から各大学1人ずつ行くことにな

ったんです。それは行く人の選考に弱ったということで知事に言いまして各大学1人になって、内地留学もそのとき短大は内地留学ということで一緒にくっつけたんです。ところが各大学1人ずつがおじゃんになったら内地留学各大学2人ずつという伏線を出して知事のところに行ったんですがその場に財政課長がおりまして「私らやっぱり大学におったときには外国留学して研究を積んだ教授には魅力を感じましたね」こういってくれたんです。知事も財政課長が認めたらそれでいいじゃないかということで各大学1人ずつということになり、同時に内地留学はどうですかというて聞いたらそれもよかろうということで決まってしまったのです。財政課長は内地留学は削ると言うたのが知事がよかろうというので決まってしもうたわけです。

山本　私が組合の用事で知事会見に行ったことがあるんですが、県としては地方財政の関係もあり、大学はもつべきでなく、国立移管の線に努力すべきだとはっきり表明されたことをつよく感じましたね。あの人が知事になられた当初からそういうお考えだったんですね。

松永　いまの知事もそういう考え方ですね。そういうことですから、農大の設備充実が非常に困難だったんです。そこでしかたがないからこれるどう持っていくかということで、国立移管以外にないじゃないか。文部省は医大は色気を持っているけれども、農大は絶対話にならん。そこでいろいろ考えたあげく文部省では都市農学的色彩ということでいったんです。しかし農大の国立移管は当時としては夢みたいでした。

そして外国留学で思い出すのは佐伯先生が外国へ行かれた留守中に学長選考の問題が起きたときのことです。それまでに商大の関係で県と知事との間にもつれがあったものだから、知事、副知事そろうておるときにどうですか、学長という点については注文があるんですかと聞いたら別にないという。もう大学の歴史も10年余り経過しているし、教授陣容も充実してきたからこの時期に学内から学長を選ぶべきじゃないかと思うが、知事さんどうですかいうたら知事は「学内から選ばないかん。輸入人事は私は絶対反対です」こういうたから力を得て学内から学長を選ぶべきだということでそれを打ち出したわけです。それで佐伯先生が留守の間に決まったんです。

西羅　農大ができます背景に松永さんがおっしゃいました歩兵第70連隊の跡地があったことそれから教職員のストライキというような社会の不安定な混乱期にあったこと、それともう一つ加えますと食糧事情が悪かったということもあります。その頃思い出しますのは予科時代は晴耕雨読とはいきませんが閑地を利用してさつまいもやたまねぎなどをつくりました。一番最初三宅学長先生をお迎えして初めての教官会議がありましたのは、化学教室で、そのときにおもてなしされたのが当時三浦先生が御苦労なさって食堂関係をやっておられましたが、そのときはさつまいもが出たわけです。三宅先生をお迎えした最初の茶菓子がさつまいもだったことを思い出します。そのとき三宅先生がいわれましたことばが「君たちはなかなか農業がうまいね」（笑）皮肉ともおほめともつかないおことばで、松永さんがおっしゃいました混乱期で食糧難であった、それで設立をされるためには畑さんはじめ当時の地方事務所長の出井さんもずいぶん御苦労くださったわけです。

むすび

司会　草創時代は寄り合いでお互いに新しい所へ来たということで親しくしなければならないという気持が強かったですね。いまの教職員組合も当時は親和会といって山本先生が会長をしておられた。毎年飲む会だけでバス旅行などをしたこともありましたね。

山本　三宅先生は教養の先生と専門の先生がうまくいくようにそればっかり考えておられました。私もその間に入っていろいろやりましたからおぼしめしがよかったんです。

佐伯　親和会の会長さんは親和の実をあげていたわけですね。

松永　農大ができたというのはそれこそ奇跡ですね。タイミングとしてもよかったと思うし、森先生がおられ、学務の行政の経験を積んだ出井事務所長さんがおられ、県会は畑先生がおられた。それで県のほうでも出井さんが出たあと私が引き受けたんですが、教育委員会にあのとき移ってしもうたら大学の設置はできなかったと思うね。

出井　設置については県会の方々の意見もまちまちでしたがやっぱり地元の方が非常に力を入れられたことが大きく役立っているとおもいます。

畑　その通りです。但馬の正木議長さんが非常に好意を持たれた。姫路の平田さん魚崎の加藤さん、反対しておられたのは細見さんでいい返事をしてくれなかった。それで先に淡路を口説いたんです。

司会　予定の時間もまいりましたので胎動期から草創期にかけてのいろいろな問題をお伺いして予期以上の収穫があったように思います。これをもちまして本席を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

第8章　随想のかずかず

ま　え　が　き

本章は第7章の追憶座談会記録とともに兵庫農科大学の生い立ちと発展の諸段階を色どる役割を果たすために設けたものである。

兵庫農科大学が昭和24年4月の創設以来満20年の経過において、昭和36年前後を全盛期として国立移管への動きとともにもたらされた既設講座を基盤とした体質改善の実現によって神戸大学農学部へ発展的解消への途をたどるに至ったことは既に第4章において記述したところである。

ここに創設当時の岸田知事、吉川（覚）副知事をはじめ県係官、名誉教授、教官、事務職員更には本学卒業生の中から、兵庫農科大学の歩んできた道を想起するにふさわしいかずかずの随想を書きつづっていただくこととした。

執筆を頂いた31氏に対して満腔の謝意を捧げる次第である。

なお書体、文章などにおいて可なり統制を欠いていることは充分認められるが、ここには原文のままを記したことを附記しておく。

I　胎　動　期　編

県立農大の創設

岸　田　幸　雄

第23回目の終戦記念日を迎えて今更ながら感慨の深いものがある。私の人生も終戦によって大きく転回させられた。そして翌21年1月に民間から引き出されて兵庫県知事に任命された。その日から終戦後の兵庫県復興の仕事が私の双肩に負わされた。県民生活の安定、復興、それには食糧の問題や衣料の問題、住宅の問題、産業の復興や教育振興の問題等、等すべて、重大問題ばかりであった。殊に日本が新しき平和国家、文化国家として立上る為めには、雄県兵庫

として学運の振興もまた一つの重要課題であると私は考えた。

そこで21年1月に県に着任するや、私は直ちに懸案であった県立医科大学（旧制）の創設を取り上げて即時実行に移した。そして昭和23年学制改革と同時に、県立医大、商科大学や、姫路の工業大学の設置を実施した。それと同時に起って来たのが多紀郡篠山に、農科大学新設の案件である。

他の三大学は何れも旧制の医大や、経済専門学校（元の神戸高商）工業専門学校の昇格によることで、その母胎はそれぞれあったが、農大は全然、無から有を生ぜしめることであった。そのことは戦後、軍備が全廃せられたので、篠山の連隊趾の施設を転用して、農大を新設することである。それは地元、多紀郡の要望であったし県下全体としてもそういう声を盛り上げて来た。

兵庫県は、元来、工業県であり貿易通商県であったが一面に於て農業県でもあった。この県に農大を作ることは真に意義あることと考えたので、私は篠山に農大を新設することを決意して立上った。それには私が若かりし頃、大学時代に、卒業後は学問研究を続けて教授、学者になろうと考えたことがあった余熱のほとばしる所もあったのであろう。

そして篠山町のような県の中心都市から離れた農村地域で静かに学修生活を送ることが真にすばらしいことであり、新時代の新風潮なりとも考えた。現にアメリカや欧州では、タウンカレッジと云って大学の所在地は県や州の中心地から遠隔の地に大学町として在る事例が少くないので、県立農大の場所として篠山をとり上げる事が、一つの理想郷をつくることとも考えた。

農大の新設にとりかかったのは昭和23年7月であった。先ず県会の議員総会に、新制の県立農科大学設立意見書を提出し、幸に県会側の満場一致の賛成を得たので直ちに時の森戸文部大臣に対して私の名儀で、大学設置申請書を出し、次いで大学設置委員会に宛てて設置理由書を提出した。その理由書には次の様に書き立てた。

農学は適地適作の理に従って各地方の土壌、作物、果樹、家畜、病害、肥料等の研究にあるから、大学の設置によって、本県農業を対象として適当な調査が行なわれ、実際的な農業経営を指導し、生産増加、品質改良を行ない且つは農業指導面の高級指導員を養成するとともに、本県における農学志望者に対し

て門戸を解放することになる。

以上の見解に基いて本県農科大学の設立位置を想定したが、更に篠山に設定した理由は次の通りである。(1)最高教育機関の地方分散を図ると共に、特に高地、寒冷地農業経営の研究に適すること。(2)実習地の確保が容易であり且つ校舎の用意が十分であること。(3)篠山は教育環境として最適であり閑静であること。の諸点であった。

そして農大設置委員として、当時の京都大学農学部の、並河功、香川冬夫、榎本中衛、片桐英郎の4教授に委嘱し、それに近藤農学部長にも何かと指導を受けた。この中で榎本教授は私の三高時代の同級生であることも奇しき因縁であった。尤も私は三高一部（後の文科）で榎本君は二部（後の理科）であったが、三高時代より相識の間柄であった2人が、30数年後に、大学創設という次元の高い問題で、それぞれの立場で協力し合うということは人世のめぐり合せの不思議なことを痛感させられた。

かくして農大創設の準備は出来上った。然かし調査が進むに従い、設置委員の現地調査も行なわれる段階になって、文部当局や委員の間には、大学の位置や建物は先ず合格としても、農大としての科学研究に必要な器械設備が甚だ不完全であるということで難色を示して来た。そこで私は文部当局や調査委員の間を歴訪して、大県兵庫の面目にかけても、必ず優秀なる農学の学府として育て上げるから、ぜひ認可せられたいと懇願してまわった。そして早速、県の予備費から支出して当面必要な顕微鏡や研究器械器具を一夜にして買い整えた。漸くにして昭和24年3月25日付で認可を取りつけた。

その間、この問題で最も活躍しまた苦心をしたのは、当時の県立医大予科長の森為三理学博士であって、同氏が終始、農大新設のために奔走せられた功績は永く銘記して、最も深く感謝せらるべきことと、今も尚お私は考えて居る。

兵庫県立農科大学はかくて初代学長に、三宅捷博士を迎え、篠山の学舎において同年5月開学式が行なわれて、この日から兵庫農大の歴史が展開せられていった。思えば19年前のことである。それから20年に近い歳月が流れた。その間に多数の卒業生を社会に送り出し、また新進の農学者教授も養成せられ、県の

農業振興と農学に貢献したのであった。そして今や神戸市六甲台の一角に、神戸大学農学部として新装成った学舎はその偉容を誇って居る。

私の神戸の宅はその附近に在るので、毎朝の散歩の折に、その前を歩くたびに時代の変転を強く感じさせられる。私は県立農大から発展した国立神戸大学農学部の学運益々盛ならんことを心より祈っている。　（昭和43年８月記）

（農大創設期の県知事）

開設時代の思い出

吉　川　　覚

私は兵庫県副知事だった。昭和23年夏県立医大の医進過程の森教授が来られて篠山の兵舎が取こわしになるのでこれを国から貰いうけて教育に活用する道はないかと言われた。

私は農科大学にするがよいと考えたので上京して大蔵省にあたってみると認可になれば無償で県にやってよいという。私は丹波篠山に行って下検分して寒冷地農業の拠点にしようと決意し「丹波路や大学設置の秋視察」という句をつくって旅館の主人に渡した。旅館の主人は「篠山に大学が」とびっくりしていた。

県の態度をとりまとめ文部省に申請した。12月20日すぎに大学設置委員会の10人のメンバーが九州に向うときいたので私は神戸駅の列車に乗り込んで全員下車してもらった。

篠山に向う自動車の中で私は糸魚川委員長が眠っているのに篠山農科大学設置の必要性について執拗に論じ立てた。「日本の農業は暖地農業で領土が狭くなったから山陰、北陸、東北など北半分に寒冷地農業を打ち立て食糧を増産し農家収入を拡大し日本復興の原動力たらしめねばならぬこと。ベルリンと同じ緯度にある樺太を農業の対象にしていなかった日本の過失。北大の称讃。新潟県農事試験場が発明した農林32号の米が日本の食糧危機を乗り切ったこと。鳥取高農の発明した20世紀の梨が山陰の農家収入を高めていること。アジヤは科

学がおくれているので日本で大学を増設し技術援助を与えることにより米だけで今の10倍はとれるから日本の食糧事情はよくなり経済復興と繁栄が確保できること。」など論じた。自動車が篠山に着いたとき委員長は「大分矛盾している議論のようだ」とつぶやき乍ら降りた。最初に寒冷地農業を論じ最後に熱帯地農業を論じたのだからこれ程矛盾した議論はなかろう。眠っている者はそれ程鋭い批判は下せない筈だ。私は委員長が眠った振りをして全部私の陳情を聞いていたのだと思った。篠山の兵舎のあとは荒廃し蜘蛛の巣が張っていて私はこれでは駄目かも知れんと思い只々委員諸君の目を見るだけだった。果せるかな結論は「大学の臭いがしない。」というのだった。その夜旅館で牡丹鍋（猪の肉のすきやき）で一行を接待した。そして私は自作のデカンショ節を歌った、「丹波篠山農大できりゃ植えた唐芋猪が堀る。」「丹波篠山農大できりゃ猪を馴らして豚にする。ヨーイヨーイデカンショ。」とやった。その位のことでは大学設置認可の反応は何も見られず委員長は食事をすますと寒いといってさっさと部屋に帰って布団をかぶって寝てしまった。一週間して九州から帰京するといって一行は西下した。私は1000万円の追加予算を県会に提案した。ところが思いがけない質問戦が展開された。「もし認可にならなかったら副知事は如何なる責任をとるか」という。私は「1回で認可にならなければ2回、3回と申請し3回目に認可されないときは1000万円の設備はあげて農業高等学校の設備に転用する」と答弁した。これで満場に笑いが起り拍手裡に予算は通過した。恩賀教育課長を初め森教授は建築部の協力のもとに篠山の大工を動員して夜徹しで1000万円の予算消化に当った。見る見るうちに兵舎は教場に代り物理化学実験室に変った。学長室、教授室はでき上り50台の顕微鏡は搬入され県下農機具会社は近代農機具や鍬シャベルを無数に寄贈し搬入した。森教授は東京でアメリカ農業雑誌の完全な古本を購入しこれを中心に図書館の設置に成功した。1000万円を1週間で使えといわれても仲々使いでのあるものだ。然し予算ではどうにもならないという問題が起った。それは学長を初め教授陣営の整備編成であったのだ。森博士は京都大学農学部に日参し三宅博士を学長とし三宅博士の指導により教授、助教授のリストを作ることができた。昭和24年1月4日九州から帰りの設置委員を神戸駅に迎え委員長の命令で3名の委員が下車し篠山を

再視察してくれることに私は成功した。委員3名が「1週間でよく出来ましたね」といい私が「大学の臭いはしますか」と尋ねたところ「します」と答えてくれた。3月25日恩賀教育課長は喜びに打ち震え乍ら県立農科大学設置認可の報告を私にした。私は4月20日開学式に臨み寒冷地農業について演説し窓越しに見える丹波の山波に向って届けとばかり農業教育の必要性を叫んだのであった。昭和26年9月サンフランシスコで平和条約が締結されたとき私は詩を作った。「明けて行く日本、太平洋の波は静か、世界は愛情にみてり、朝鮮、中国フィリピン、シャム、インドネシヤ、ビルマ、セイロン、インド、パキスタン凡て対等で行こう、ヒマラヤに獅子は吼ゆれど、亜細亜は黎明なり。」これが神戸新聞に載ったといって篠山から森博士が「アジヤには獅子は棲息していません」と警告の手紙をくれた。この大学がアジヤの門戸である神戸大学の農学部となったことは使命への前進であるとして私は無限の喜びを感ずるものである。

（農大創設期の副知事）

農大開学まで

森　　秀　二

思い出は古いものほど懐かしいものですが、いざとなるとまとまったものがないのが残念です。当時の新聞、保存文書を資料に記憶を辿りながら、兵庫農科大学開学までの経過を綴ってみます。

私が、昭和22年5月15日県立医科大学予科に就職、数カ月足らずして“六三制”の新しい学制改革によって予科は23年度入学生を最後として廃止になることを聞かされました。

当時丹波路の篠山に大学が設置されようとは誰一人予想もしなかったことと思います。

農大が篠山の地に産声を上げた理由は、終戦による歩兵第70連隊の巨大な兵舎跡に兵庫師範篠山分校、県立篠山農業高校と県立医大予科が設置され、軍都を転じて学都に一変、そして、理学博士森為三先生が医大予科長の要職に就い

ておられたことに端を発したと思います。

予科長はようやく学校としての基礎形態を備えて来た予科の廃止と教職員の四散を惜しみ、東奔西走、想を練られ、ついに新制理農科大学の新設を決意、23年1月10日篠山町青山会で創設準備委員会を結成。委員長に多紀町村長会長山口房次郎氏が推されました。

1月17日多紀地方事務所において第1回委員会開催、次のとおり最初の“趣意書”が作成されて知事と県会に陳情されました。

「兵庫県立医科大学予科を昇格して新制大学の理農科系を創設せんとする趣意書」

昭和23年1月

兵庫県新制理農科大学創設準備委員会

主旨、兵庫県立医科大学予科は昭和21年度初め100万円の創設費を以って多紀郡岡野村にある兵舎を改造して同年6月21日授業を開始したのであります此度新教育令の体系に従えば予科は23年度の生徒募集をもって自然に解消するが、ことになります。

折角兵舎を改造し内容を充実しつつある際、当予科が廃止となりますのでその設備を利用して兵庫県下には農林専門学校が昇格して農科大学となる大学がないので予科を昇格して新制大学の農科および農科に必要なる基礎の理科を加え理農科大学として発展したき熱願であります。

理農科系大学となれば其の二学年修了者は医科大学に進入する途もあり医大に志願せざる者は理科又は農科の学科を修め四年間学修すれば理学士又は農学士となる次第であります。(中略) よって予科の設備を利用して県下唯一の新制理農科大学を創設し、本県の農産業進歩増産に資する様計画されん事を熱望する次第でここに我々は本予科を昇格して新制大学の理農系創設を建議しこれが実現を達成せん為に各位の御援助を懇請する次第であります。(以上原文抜萃)

2月18日正木県会議長、樽谷県会事務局長来篠、現地の実情を調査の上賛意を表され県会においても設立委員会が設置されました。

しかしながら予科長は、理と農の併設は単科大学では教員組織、設備などの面から難色ありとして断念、ついに23年3月農科系一筋に設立を請願されるに

至りました。

7月10日県会で農大設立が決定しましたので早速農大設置認可申請書を作成することとなりましたが、それは医大予科の職員で予科長の指導を受けてほとんど事務職員が作成したものでありますが、学科課程の編成、講座、単位制などすべて頭を悩まされる事ばかりでした。

予科長は数回にわたり上京、文部省の指示もあって修正「悪い所を直せば通る」の決意は強硬でした。私達は万難を排しても設置認可を実現しなければならなく日夜書類の作成に没頭し修正に修正を重ねて4度目、ようやく大学設置の基礎となるべき申請書が出来ました。申請書は知事名で文部大臣あて。

8月5日恩賀県学務課長、畑県議、森予科長、小嶋事務官，藤本篠山町長によって文部省に陳情されました。

11月17日大学設置委員の現地視察がありましたが農大で農科の設備がないので設置は不可能となりましたので県当局は直ちに1000万円を投じ設備を充実、農機具類は当時の出井多紀地方事務所長が担当。三木、姫路方面で手配されたと聞いて居ります。実験室の工事は篠山町の丹陽組が昼夜兼行で元旦も返上突貫工事を行ない，ようやく24年1月4日に完成しました。いずれも各位のご苦労に対し感謝の意を表しました。

予科長は再び県当局と設置委員（神戸外大視察中）の視察を懇請。翌5日視察をうけ，続いて1月31日農科専門委員の最終的な視察がありました。

当日の委員長、佐藤東京農大学長の一言を次に掲げます。

「設置の暁には地方の人々はよりよき学都建設に精進して欲しい、この大学は昇格でなく新設であり理想的な条件を備え得る可能性がある。何分こうした小さい町に大学設置をみることは恐らく全国始めてだろう」

後は認可か否か、焦燥たる毎日の明け暮れでした。

3月半ばとうとう努力の甲斐あって県立農科大学認可の“電報到着”思わず一堂は歓声のどよめきに包まれました。あの一瞬の喜びは思い出の中でも一入身に泌みて忘れる事は出来ません。

3月25日付正式の認可書が届き、3月26日付、予科長は学長事務取扱に就任4月17日医大予科の先生によって、農大第1回の入学試験が実施されました。

5月早々、初代学長、農学博士三宅捷先生が北海道大学より着任。当時は篠山にハイヤーの数も一、二台私は自転車で近又楼へお迎えに行きました。“生れて始めて自転車に乗せてもらった人は君だよ”と驚嘆される学長を荷台に、意気揚々と凸凹道を大学に向って走ったのもとても懐かしい思い出です。

いよいよ、5月20日文部大臣代理を初め多数のご来賓列席の下に盛大な開学式が挙行せられ兵庫農科大学の第一歩を踏み出したのであります。

これもひとえに県当局はもとより、今は亡き森予科長の燃ゆるが如き愛校の信念に支えられた偉大なる決断力と東奔西走2カ年の歳月を費やされた熱意は筆舌に尽くし得ない努力の賜であると、ひたすら敬意を表しつつ、農大発足までの回顧の拙文を終らせていただきます。

（現農大庶務課長）

森為三先生を偲んで

足　立　隆　夫

兵庫農科大学の母体となった神戸医科大学の予科が、元篠山歩兵第70連隊跡の兵舎を利用して昭和21年6月に来賓多数を迎えて開学式が挙行され、初代予科長として、理学博士森為三先生が篠山へ赴任して来られたのでありました。

私が予科に奉職をいたしましたのは、昭和22年1月でした。その頃は軍隊時代の面影が残っており、校舎の前庭には30人は収容できる防空壕や、蛸ツボと称する1人用の待避壕が散在しておりました。又当時は食糧事情も悪く、空地はほとんど職員によって耕作されており、野菜畠の花盛りでありました。校舎は元兵舎の2階を教室と講堂に、1階を予科生の寄宿舎に改造し、呼び名も南寮、北寮と呼んでいました。当時の予科生は白線入りの帽子に高下駄をはいて大きな音をカラン、コロンと響かせながら街を濶歩して町民に親しまれ、軍都篠山から学都篠山へと衣替えしつつあるよき時代でありました。

この年の暮頃から教育制度の改革による6、3、3制が叫ばれるようになりやがては、予科も廃止になるのではないかといわれていたのですが、昭和23年

になって、その危惧がはっきり具体化してきたのです。職員の動揺もさることながら、学園都市として、発展途上にあった地元篠山町にとっては、計り知れない痛手でありました。

こうした状況の中で、これ等の施設を利用することについて、森先生は農科大学設立の構想をたてられたのでありました。しかしこれは地元の協力や県当局の認定を得ることが先決でありましたが、幸いにも地元町村会の賛成を得ることができ、農大設立期成同盟会が結成されるに至ったのであります。

又農大設立に当っての県当局に対する先生のキャッチフレーズは農大の設立は、現有施設で充分であり、県費をあまり投資する必要はないですよ、という持論で接渉に当られたのでした。——事実は全く逆なのですが——度重なる請願の結果、県当局から篠山に設置してもよいという認定を受けたので、いよいよ農大設立の申請書作成にかかったのでありました。当時事務室の主任をしておられた小嶋良氏（現篠山保健所総務課長）が、先生の補佐役で文部省や、県当局との接渉に、或は運動資金の確保に地元町村会へと東奔西走されました。庶務関係は森氏（現庶務課長）が、そして予算面については若輩ながら私が担当したのでありました。当面の難関は農科大学にとって欠くことのできない圃場の確保と、基準に達していない図書をどうするかという問題でありました。先生はこれ等についても各方面と接渉の結果、農場施設については基準坪数が確保できるまでという条件で、兵庫県下の農事試験場の圃場を一時借りることにして解決されたのです。その結果明石試験場を始めとして、第7農場まで確保できました。（当初提出の申請書）又図書についても篠山町当局と接渉されて、試験場と同じように町立図書館を附属図書館とすることで町の同意を得ることができたのでありました。のち文部省に毎年増加冊数を報告する際、実数を押えて約1万冊の図書を措置するのに約10年を要しました。迂余曲折を経て農科大学としての形態が整ったので、いよいよ設立申請書を文部省へ提出する運びとなりました。その後再三改正の末ようやく、昭和23年10月17日に設置委員の視察を受けたのでありますが、農科大学の施設は何一つない状況なので、委員は難色を示し帰京されたのでありました。

こととここに至っても、先生は動ずることなく職員に今後の運動方針を示され

たのであります。それは、設置委員より指摘を受けた点を改善し、充実すれば必らず認可になるであろうと……。

第1の問題点は、設置委員による視察を再び篠山において受けることと、第2点は研究室や実験室等の整備を行うことでありました。このことについては設置委員の阪神間への視察日程が、1月4日であることが判明したので、この機会を逃がしては、農科大学の設立は危ぶまれるとの判断のもとに、研究、実験室の改造、実験資材及び農機具の整備に要する予算要求書を県に提出し、12月8日の臨時県会で1,000万円の予算を承認していただいたのであります。

これ等の整備に要する日数は約20日間でしかも、正月をはさんでのこととて職員は申請書の作成に、業者は昼夜兼行の突貫工事で見事に完成を見たのであります。当時は各家庭で餅を搗いて正月を迎えたものですが、遂に杵の音を聞かずに正月を迎えたのを記憶しております。

1月4日神戸に設置委員を出迎え、知事等とともに視察を懇請されたのでありますが、一行は再度の視察は例がないことと、短期間に整備ができる筈がないとの理由で、難色を示されたのでありますが、先生の熱意がとおり委員の了承するところとなり、翌5日に視察を受けたのであります。結果は立派な施設であり、他の大学の模範になると、大いに印象をよくして帰京されたのであります。

委員の言を裏付けるかのように、文部省学校教育局専門教育課の坂本文三氏（後、初代兵庫県教育課長）より電話にて、認可さるとの吉報をいただいたのでありました。職員一同会議室に集合の上、森予科長より認可についてのごあいさつがあったのでありますが、あいさつ半ばで絶句され言葉にならなかった……私たちも共によろこびをかみしめたのでありました。

戦後雨後の筍のように新制大学が全国に設置され，駅弁大学といわれながらも地方大学としての特色ある大学像を夢見ながら、開学式に参列したのでありました。

森先生は昭和36年6月の阪神風水害による災害がもとで、奇しくも神戸医科大学附属病院に入院され、教え子たちに見守られながら翌37年7月17日に永眠されたのであります。

ここに設立当時の森先生のご労苦を拙文に託し、ご冥福をお祈り申し上げます。

（現農大経理課長）

三宅　捷先生のひととなりと建学の精神

高　山　敏　弘

新制度の大学が発足して20年が経過し、今や、大学そのものは、イノベーションが迫まられ、メタモルフォーゼをとげようとしています。このような、いわば大学の危機的段階に、過去をふりかえり、建学の精神は一体どこにあったのかを客観的にたずねることは、よりよき未来の大学建設のために欠くことのできないものであろうと考えられます。

大学創設の事業は、これを会社にたとえれば、起業という企業行為であってそこにはすぐれた創造性と革新性が要求されます。

企業者には、該博な知識と豊富な経験、それに事を処するに決断と勇気が必要になりますが、まして、研究と教育を通じて立派な人間をつくり出す大学の創設には、より以上の創設者を得なければならないということになろうかと思われます。無から有を創り出すことほど難しいことはありません。やりなおしのきかない事業だからです。一度軌道にのった大学であっても、これをよりよいものに運営していくには、常にフレッシュな創造性が要求されますから、どのような目的をもち、どのような規模の、どのような組織の大学をつくって、これをどのように管理運営していくかは並大抵の能力と努力ではできないことのように思われます。この事業を完遂されて、立派にその所期の目的を達成されたのが、兵庫農科大学初代学長三宅捷先生であったといってよいでしょう。学長の晩年には、よく「もう10年たったからつぶれることはない。次の代になってもやっていける」といわれていましたが、慎重なその御性格からみましても不安定な立場の県立大学の基礎を如何にきずき軌道にのせたらよいのか、また教官、学生、事務官の将来をいかにすべきかに、日々身をもって責任を感じておられたかがよくわかります。

さて、その人の思想をよりよく理解しますには、その人のもって生まれた素質を知るとともに、その考え方に影響を与えた育ちの環境に目を向けねばならないと考えられます。

先生の御尊父は、広島の田舎育ちでしたが、商家の娘と意気投合して、北海道の新天地に夢を求めて先駆者の道を進まれました。その商家の娘が実母にあたるわけです。この方がまたすごく頭のよいしっかり者であったということです。炭坑汽船株式会社に勤められた父上は、北海道の中をあちこち転勤させられましたが、いわゆる出世がおそいので、母上は、子供だけは何としてでも大学を出さねばいけないということで一生懸命で頑張られたということです。明治27年生れの次男の先生を含めて、5人兄弟を全部当時の数少ない帝国大学を卒業させるという大変な仕事をされたわけです。したがって、生活は決して豊かであったわけではなく、若干の貸地から貰える米だけは充分であったとしても、その他は極度にきりつめた倹約生活をさせられていたのです。

三宅先生が「オヤツといっても菓子ではなくニギリメシだけだった」といわれていたのでもわかりますように、たとえ紙一枚、筆一本でも無駄にしない躾がなされていたのです。晩年になって、御飯の代りにオニギリ、御茶ズケ、餅も塩アンを好まれたのも、当時のノスタルジアであったのかもしれません。先生は、経済的に豊かでない学生や、教職員に対して極度のシンパシイを示され同情と援助を惜しまれなかったようですが、そのような心情や実践は、このような生いたちによるところが大きかったのであろうと思われます。

先生の小学校時代は、一年はやく進学したために、成績など特にめだった存在ではなく、習字の時間に半紙に五字書かされれば余白に四角を書いて提出したり、放課後、先生に罰として立たされていたのに、だまって窓をとびこえて逃げて帰ったという位だから、わんぱくも相当なものであったと思われます。中学の入学試験はビリに近い成績でしたから、小さい時から秀才の誉高かった上級生の兄に「はずかしい」といわれて、「それなら中学に入らない。入るとしても来年入りなおす」といってごねられたこともあったということです。それでも心配した周囲が中学の先生にたのみこんで、その中学の先生の説得によって折れて入学したという経歴の持主なのですから、シンの強さは当時からの

ものであったのでしょう。いわゆる頭の良さだけを誇るありきたりの秀才ではなかったことがよくわかります。

しかし、中学の高学年になるにしたがって成績もよくなり、誰もできない数学が自分にはできるので、自分ながら「まんざらではないなあ」と自信もでてきたということです。それで北大予科入学は2番、予科時代にカッケで大変だったこともありましたが卒業は1番、大学卒業も1番という典型的な「オクテ」の秀才コースをたどったことになります。大正7年に卒業後、直ちに助手、1～2年で助教授、大正10年には恩師大島金太郎先生が新渡戸先生の招きで台湾に出られましたので、若くして実質的な講座主任となられました。次の農芸化学主任は同名の三宅康次先生でしたが、その下で京大名誉教授の近藤金助先生とともに助教授として仕事を続けられ、間もなく京大農学部創設の時に近藤先生は京大へ転出、そのうち台湾の大島先生から台北大学創設のためお招きを受け、一度はその台湾行きをことわられたのですが、恩師の希望でもあり三宅康次先生のすすめもあって、台湾へ赴任することをきめられたのです。その前に台北高農教授の資格で留学することになり、大正15年から2年間ドイツその他の国に学び、昭和3年帰朝後直ちに台北大学理農学部教授として30才そこそこの新進教授が誕生したわけです。このようにして若くして講座主任となり教授となった御自分の体験が、後の兵庫農大創設の時にも「地位が仕事をする」といわれて若い者を信じ若い助教授を講座主任として、その創造性に期待をかけられたものと思われます。

その間に、長兄にたのまれて代りに見合にでかけて、はずかしかったのでまともに相手の顔をみることもできず、着物の裾からちらちらみえた赤いものだけをみて帰り、「まあいいだろう」といって兄の嫁をきめてきたこともあったということです。また先生自身も札幌農学校時代の助教授をしたこともある大脇博士の長女を佐藤昌介学長と大島先生から紹介されて、この方が仲々の美人であったので、別にも話のあった他の先生にとられてしまっては大変というので、早速プロポーズしたということもあったのです。それがいうまでもなく令名高かった賢夫人であり、今の三宅未亡人です。

ともあれ、先生が幼少青年時代を育たれたのは北海道であり、北海道の風土

は、内地と異なり、旧いものが何もない自由濶達なフロンティアの精神的培養土であったのです。そこでフロンティアスピリットをもった両親に育くまれ、日本最古の大学札幌農学校の伝統をうけつぐ北大農学部に学ばれて、とらわれることのない忍耐づよい開拓者精神を身につけられたことが、先生をして外地台湾へ渡り、引揚げては篠山という全く未知の田舎に大学をつくるという創造的行動をとらせることとなったのではないかと思われます。旧いしきたりや慣行の固定したところよりも、何の規制もない新天地の方が、より新しいものが芽ばえる可能性が大きいというところからも、台北・篠山は、先生にとってはやりがいのある希望の地であったのかもしれません。

台北時代は、はじめ講義をするのもはずかしい位にはにかみ屋であったということですが、研究と教育に対する情熱は深く、その態度は随分厳しく随分こわかったもののようです。このこわさの一つは口数が少ないということもありましたが、眼鏡にもこれを倍加する原因があったのではないかと思われます。先生は眼がねをはずすと何もみえない位の極度の近視でしたから眼鏡のガラスはわくをはみ出すこと数ミリという位に分厚いものでして、この奥からみつめられると、いかにも大きな眼でみつめられているような感じとなるのです。晩年に眼鏡をとられたときの細い眼は、長い白いまゆげとともにいかにも好々爺にふさわしいやさしい眼であったのです。

それはともかく、常に実験を重視し、研究室で本を読むのはもっての外、必要な本は家で勉強してくるものだというのがその本旨であって、実験室は休みなく実験をするところという信念であったようです。

農学の科学としての方法は、分析と実験が中心となるわけですから、実験を重視するという考え方は至極当然のことであったわけです。しかも実験は事実を調べることではなくて、多くの研究誌や論文を読んで自己のうちたてた構想を事実によってたしかめることですから、構想をうちたてるための準備は家でやるべきだというのは、一面からみればこれまた当然のことでもあったのです。いうまでもなく実験は単なる実験技術を学ぶだけではなく、自分の理論をうちたてることが最終目標でもあるのですから、学生に対して実験を重視されたことは、単なる実験技術者を育てようとされたのではなく、それをふまえた

真の科学者を養成しようとされたのであって、立派な科学精神をもった科学者養成こそが、兵庫農科大学においても学生教育の根本理念であったことはいうまでもないのです。

この台北時代には、若くして農学部長その他大学運営にも直接参加されましたが、その豊富な経験と高邁な学識は、また、後年の兵庫農大創立運営にもよき参考となったことでしょう。ともあれ、終戦後もひきとめられて残留され、昭和23年5月引揚げて北大講師となられましたが、兵庫農大の設立委員であった近藤先生から委員長になる交渉をうけられて、台北から多くの人が引揚げてきているのでこれを何とかしなければならないから設立委員長は引受けるが、学長として篠山に住むということまでは当初には考えられていなかったようです。それが、引続き嘱望されて学長となり、24年から10年余りを大学の創設と発展のために尽瘁されたのです。

その建学の精神は24年5月、県立兵庫農科大学の開学にあたり述べられた式辞に、集約的にあらわれていると思われます。

『大学の使命は真理の探求とこれが応用であって、これによって得たる知識を基として教育を行なう傍ら教養高き人物の養成にあたることは、いつに至っても変わらぬ事と思います』とある如く、すぐれた研究を行なうことが基礎となってすぐれた教育ができるという大学本来の研究、教育の理想が貫ぬかれているのです。大学が学問の場であり、農科大学が農学の真理追求の場であることは、いつの時代でも変りないことをまず強調されていますのは当然のこととはいいながら、将に卓見であって、開学精神の精髄として誇り得るものと思われます。松下俊夫先生におききした話ですが、辞令がでたので早く行かねばいけないと思い、篠山に赴任の挨拶に出かけたところ、「御覧の通りまだ設備も不完全だから、こちらに来る必要はないから大学（京都）の方でしっかり勉強しなさい」といわれて非常に感激したとのことでした。学問第一のことは、下田先生、その他の多くの先生方が同様の経験をもたれているようです。そのように、研究に対する理解は非常に深かったのです。その後も教官の研究態度に常に留意されて、予算も生活備品的なものを極度に節約して研究に役立つものを優先するよう指導されましたのも当然のことでして、そのことが地方大学とし

ては早い時期に多くの学位取得者を出した一因でもあろうかと思われます。

しかし先生は、歴史的現実にも無頓着であったわけではなく、その歴史的流れの中にあって新制度の大学としての使命をも痛感しておられたわけでして、『然し乍ら、真理の探求もこれが応用も、その方法においては、時代の進歩、時勢の変遷、学問の発達によって、又場所により、人によって、異なるもののあることは、過去の経験、又歴史によって証せられる所であります。また、教育の方法も時代につれて変化し進歩すべきことは、皆様も御承知の通りであります』と述べておられますごとく、研究方法も教育方法も、時代に即応した弾力的方法がとられる必要性が強調されているのです。これもまた、普遍的真理ではないかと考えられますし、先生は、たしかに時代感覚にすぐれていて先見の明があったといえるでしょう。

次いで『今回の如き、日本の革命期とも申すべき時において踏み出さんとする新制大学については、この点大いに考慮すべきであって、旧制度における美点は益々強く採用助長せしめ、その欠点は断然除去しなければならないと存ずる次第であります』とあります如く「将にその通り」といわざるを得ないわけです。

さらに、地方的には兵庫県の農業を対象としても、『農業全般の進歩発展に貢献するために、農学の学理を研究し、応用し』とありますごとく、最終的には一般的農業の進歩発展を目標とした農学の研究が企図されているのでありまして、将に農業に対する先生のフィロソフイーを窺い知ることができるのです。今日の時点における農学の目的を、一歩も誤ったものではなく、農学とは全く先生の述べられているごとく、農業の進歩発展を目的とするものでなければならないと考えられるのです。しかも、その大学では、前にもみましたように、そのような農学の研究を通じて、『教養高き農学者、技術者の養成をなすこと』とありますように、単なる技術者ではなく、試験研究を通して農学の真理を追究していく科学者と、職業人としての教養高き農業技術者養成を同時目標とされていまして、これもまた、今日農科大学や農学部に課せられている教養高い人づくり、高い研究能力をもつ農学者づくり、更にすぐれた職業人づくりという、3つの目標を内包しているものといってよいでしょう。

かくして、『課せられた責務を果すとともに、更にすすんでは、全世界の文化並びに人類の幸福に寄与して以て大学の国際的性格を満足せしめんとする』と述べられていて、兵庫県立ではあっても、日本の大学であり、更には国際的大学でもあって、全世界の文化と人類の幸福に貢献するという、大学として当然のこととはいえ、実に気宇雄大な大理想実現がめざされていたといわねばなりません。

このようにして、学んだ学生には『我々の責務の一端を引継がせたいとも念願しております』とあるごとく、若い可能性をもつ学徒に、限りない期待が寄せられていたのです。そこで、常に入学式の告辞では、『諸君を紳士として取扱う』との言葉が与えられ、学生を、人格をもった大人としての権利と義務をもち、責任を果す個性ある人間として、尊重していく態度がとられたのです。学生に対する教育も、相互信頼が重視されて、大学では厳しく研究教育が行なわれても、家庭に来る学生に対しては、喜んで観迎されて、限りなき慈愛にみちた一時が過されたのです。それが単なるつくりごとではなく、自然にでてくる本来的抱擁力のなせるところであって、その人生が語られる言葉のはしばしにも、人を感ぜしめることが多かったようです。これは学生に限らず、卒業生や若い教官でも同じであって、常にその人の良き将来に気をつけておられたことが、多くの人々をひきつけていた所以ではないかと考えられます。

自分では『毒舌家だ』と云っておられましたが、そのいいたいことをいえる毒舌の裏にある真意を理解すれば、愛情の逆表現であった場合も多かったのです。しかし、時には肺腑まで突かれて、近くで聞く者をはらはらさせられたこともあったということですが、それも、人をみる眼はたしかであり、後になってその時の人物評価がなるほどと思わせられることがしばしばであったというところから、その人その人によって表現を変えられたにすぎなかったのでしょう。御自分の性格が正直で真面目であっただけに、不誠実と御気嫌とりやおべっかは極度に嫌われていたのは、いうまでもないのです。あのぎょろ眼ですぐ心の底を見抜かれて、いたい思いをしたのは、私だけではないのでしょう。

ともあれ、ワンマンとして過された10余年間、その評価はいろいろできるでしょうが、どこの大学をみましても、その創設者の強い個性があって、その理

想実現の上に立派な大学の基礎が確立されるのであってみますと、兵庫農大もその例外ではなかったといえるでしょう。そうして、予算や外部との接衝は責任をもって配慮するからまかしておいて欲しい、教官は研究と教育に熱中して貰いたいというその真意は、日常の言動によくあらわれ実践されてきました。農学科だけで出発した大学が、直ちに農芸化学科と畜産学科の26講座をもち、教養を加えると42講座の堂々たる単科大学に創りあげられたことからみましても、その手腕と実行力による実績は、誰も過少評価することはできないのではないかと考えられます。そのためには『兵庫県にふさわしい大学をつくる』といわれて知事や県議と直接間接の接衝をもたなければならなかったので、国立大学とは異なった人知れぬ苦労も多かったと聞いています。またそれだけに、個人の政治力の発揮の可能性も大きく、将に『永久の生命を有する大学の目的達成の為め万全をつくして、本学の完成に向って努力』されたといえるでしょう。教官、学生は、その大きな翼の下に、将来に疑念をもつことなく、学問研究に精励できたのだといえるでしょう。大学を構成する者が皆一丸となって、それぞれの持場によってよき大学づくりのために努力した良き時代であったともいえましょう。

篠山の地が日本では僻遠の地と考えられているだけに、かって独逸留学時代のカールスルーエの大学と同じ環境に同じような大学を夢みられたとしても、如何せん所期の人材は集めにくかったであろうから、来る者は拒まず、来た者は充分面倒をみようとされたのです。かくして創立期を過ぎると、大学の独立と主体性を強調されて、外からの人事の干渉を排除して大学の自治を貫ぬくためにも、卒業生の採用がはじまったのです。それだけ可能性を信じ期待しておられたともいえましょう。そうして、抱擁力ある御性格でもあったので、良い意味の日本的家族主義的一家が形成されたともいえるでしょう。余りにもドライな人間関係に対して、日本的終身雇傭制が外国の学者によって再評価されようとしていますとき、若し皆が先生と環境に甘えすぎて理想とされた大学人になりえなかったのであれば、その責は創設者にあるのではなくて、期待にそい得なかった構成員に帰せられるものといえるのではないでしょうか。

国立移管の問題がおこり、大学を退かれる時に、『これからは皆が一人一人

協力して大学をよくしていかねばならない』と語っておられたのは、やはり時代を意識しての発言ではなかったかと思われます。

ともあれ、丹波路に高き理想をかかげて生まれた兵庫農大の建学の精神は、神大農学部にひきつがれて永遠の生命を保つでしょう。しかし単なる慣行にしたがうだけでは、世の中の進歩はないし、大学の発展もありえません。構成員が皆、常に自己反省しつつ自分自身で形成主体の自覚をもち実践することによって、よりよき農学部をつくっていくことが、すなわち建学の精神に則ることでもあり、課せられた責務だともいえるのではないでしょうか。

先生は、最後の最後まで坦々とした生活を続けられ、病気の苦しみも決して口にされることなく、家族にも何一つ迷惑をかけることもなく、最後まで意識ははっきりしていて、本当に73才の生涯を大往生で終えられたといえましょう。その安らかな死顔の美しさもまた知る人を感嘆させずにはおかないものでした。人格高潔にして厳しい中にも愛情あふるる人生態度は、到底私どもの及びもつかないこととはいえ、以って範とすべきものと誓っています。人間としても亡くなられるまで偉大でした。本当の意味の『明治の人』といえる人でした。

（現神戸大学農学部助教授）

『書きとめておきたいあの頃の一駒』

西　羅　　寛

丹波篠山といえば先ずデカンショ節を想起する。山深い田舎の代名詞にもたとえられる程、静かな佇まいの小じんまりと整った城下町である。そこに大学ができる、本当かな？と思ったのが、あの当時、まだ創立に間もない兵庫県立医科大学予科に勤めていた若い私達の詐らざる感慨であった。それができたのである。開学されたのである。

県当局の努力、当時の予科長森先生の御健脚と御誠意、それに続く三宅学長の大学運営の遠大な御理想の結実であることは勿論であるが、終戦後、新しい

日本を願う必然的な一つの流れが漸く虚脱状態から脱しつつあった人々の心に甦えりはじめた社会的背景も見のがすことはできない、と今にして思う。

六万石と小藩ながら青山藩主によって設立された鳳鳴義塾により長年培われた地元の潜在的な教育に対する関心、それが自分達の手で私塾のような郡立農学校を県立の篠山農業高校に育てあげてきた地元の人々の声なき心の声援が篠山という大地に栄養分として貯えられていた。このような人々の心の流れと素朴ながらの支えが、終戦後、軍都篠山を脱し、学都篠山をめざし、医大予科の設立、そして農大へと進んでいった一つの原動力ともなったのだと思う。「山羊、兎の皮なめしがしてもらえる」「米増産の指導がいただける」当時はこんな農家の人々の素直な喜びをよく聞いたものだ。

森先生のお伴をして京都大学農学部をお訪ねしたあの頃を思い出す。並河教授が話の途中財布？から煙草“のぞみ”を取り出され、器用な手つきで見る見る“手巻き煙草”をつくられ、パイプで喫煙された御姿を妙にありありと思い出す。大学の教授であられても…こんな物の不足な時代であった。「本学は、我国特に兵庫県における農業全般の進歩発達に貢献するためにその学理と応用を研究し、教養高き研究者及び教育者等を養成することを目的とする」（その後一部変更）の大学一覧にある農大の目的は、当時京大農学部の教授で学部長もしておられた近藤金助先生の御文章である。医大予科の事とて創案することができず、森先生が近藤先生にお頼みになられたのに違いない。私達の前でサラサラと何の苦もなく（若い私にはそのように思われた）書かれたのには全く驚嘆してしまったことであった。

第1回の大学設置委員の視察の時、最後の総評を教養2号館で傍聴した時のあの緊張した雰囲気と、沈痛な出席者の表情。これが県当局が本腰を入れられた出発点であったかも知れない。当時の吉川覚副知事の「メンツにかけても…」などの決意溢れる御言葉をその筋から漏れ聞いたのもその直後であった。直ちにその当時では大金の1,000万円が投ぜられ、夜を日に次ぐ突貫工事が行なわれたのである。

初代学長三宅先生をお迎えしたのは昭和24年である。第1回の教官会議兼初顔見せ会兼歓迎会の唯一の茶菓子が自家製の甘藷の“ふかし芋”であった。「

農学士顔負けの出来栄え……」とお賞め？にあずかりみんな恐れ入ってしまった。そんな食糧時代!!　理科大学、理農大学、そして農科大学に固定して行った底には、当時の食糧時代が強く作用したことが伺える。

秋の実りにはそれを培う大地と環境が必要である。世の不思議にも数えられる篠山での農大開学も、時を得、場所を得、人を得、なるべき必然性がそこに綜合されていたような気持ちがしみじみとする。「桜花の下で歴史は創造される」、時にはかいまみたそんな当時の宴会などの状況も濾過されて「是が非でも……」という当時者の何か物にとりつかれたようなひたむきな熱意と桜がマッチして思えば一ぷくの画としてひしひしとしかも美しく私の心に甦える。

農専の昇格でなく、医大予科の母体で出発した関係か、農大は全国で稀に見る基礎学科の充実した、そして専門コースと完璧なオルガニゼイションのもとに発展して行く特異的な存在となった。私の心を育てて下さった、そして今は思い思いに各職場に別れていかざるを得なかった医大予科初期の諸先生、森予予科長、板倉、山本、三浦、高田、竹内、杉原、斎藤、松居、石井、松浦、久寿米木、前川、俣野、山鳥、柴田の各先生の名をしるさせて頂いて筆をおく。

（現神戸大学農学部助教授）

Ⅱ　草　創　期　編

草創時の思い出

佐　伯　秀　章

農科大学設立までの経過や苦心談は他の人が述べておられるので、ここでは保存の文書に基ずいて設立請願書や講座、教官の認可申請書などを中心に披露します。なお農科大学は昭和24年度に開学、同年５月20日に開学式で行なわれた。

（A） 設 立 請 願 書

昭和23年３月

兵庫県立新制農科大学設立期成会

主旨：兵庫県は我国に於ける大県にして農民大部分を占め農産物の生産高も莫大でありますが従来農林専門学校はなく11校の県立農業学校及一般中等学校卒業生にして農科志望者は他府県の農林専門学校に進学しておる現状であります。従って現在の農業学校が昇格して新制農科高等学校になるもその卒業生及一般新制高等学校卒業生の農科志望者は他府県の新制農科大学に入学せねばなりませぬ。現下食糧事情の困難なる際子弟を他府県に送るには多額の学資金を要します。然るに本県に農科大学が設立されると父兄は多額の学資金を要せずして子弟を進学せしむる途が開かれ其の上農学は適地適作の理に従い各地方の土壌作物肥料等の研究を致しますから上記の如く本県農業を対象として適切なる調査が行なわれ其の成果により実際的なる農業経営を指導し生産増加品質改良を行なうことができます。殊に最も緊急なる理由は本県の農業指導を行なうに必要なる高等技術員、新制高等学校及新制中学校農科教官の養成さるるごとであります。

上記の理由及新教育令の体系に従えば廃校の運命にある県立医科大学予科を農科大学に昇格せしむれば経済的に本県に新制農科大学が創設されるのでここに新制農科大学設立期成会を組織し特別の御配慮を御願致し度請願致す次第であります。（以上原文のまま）

県立医科大学予科を昇格して新制農科大学となす理由（要点のみ摘記）

(1) 前期２ケ年の教養学科の教授陣容と設備の内容は現在の予科のそれで充分であるから創設費がかからないこと。

(2) 設立に建物の新設を要しないこと（兵舎利用）

(3) 実習地は購入しなくてもよいこと。県立農業学校の実習地の一部と多紀郡南河内村の県の指導農場の水田、川辺郡小林の県立園芸試験場を使用すればよい。なお明石の県立農業試験場の圃場も実習地に当てたい。

(4) 寄宿舎、住宅は隣接の国立病院に容易に設備しうること。隣接の国立病院は篠山町内の弘済病院に移転したので元の病院には復員患者４名入院しているだけで空家同然である。

(5) 農科大学２年を修了した者は医科大学に進学する途もあること。

(6) 篠山が教育の都市として適当であること。なお但馬に大学分校（畜産学）設置の構想あり。

新制農科大学設置の構想（要点のみ摘記）

教官数：一（一般教養）教授12、助教授５、助手３名。（専門）農学科＝教授８、助教授９、助手18名。但し教授は園芸学に２名、助教授は作物学と園芸学に２名宛。

農芸化学科＝教授４、助教授４、助手８名。畜産学科＝教授5、助教授5、助手10名。獣医学は２講座分の教官。

学生数：―入学定員農学科35、農芸化学科25、畜産学科25名。

講座組織：―

農学科（７講座）＝作物学、育種学、園芸学、植物病理学、昆虫学、農業工学、農業経済学。農芸化学科（４講座)＝土壌及肥料学、生物化学及繊維化学、食糧飼料化学農産製造学及醸造学。畜産学科（４講座）＝畜産学、獣医学、家畜衛生学、養蚕学。

（B） 設置認可申請書の追申

昭和24年２月３日

兵庫県知事　岸　田　幸　雄

大学設置委員会　御中

（これは認可申請書のうち講座等に変更があった追申である）

講座（専門11講座に変更）：作物学、育種学及栽培学、果樹園芸学、蔬菜園芸学、畜産学、農業工学、農業経済学、植物保護学、土壌学及肥料学、農産加工学、食飼化学。

教官：

作物学＝教授森本勇（和歌山作報所長）兼任講師椴本中衛（農博京大教授）

育種学及栽培学＝教授赤藤克己（農博京大助教授）

果樹園芸学＝教授鳥潟博高（京大助教授）兼任講師小林章（農博京大教授）

蔬菜園芸学＝教授吉良竜夫（京大助教授）

畜産学＝兼任教授羽部義孝（農博京大教授）

農業工学＝銓衡中

植物保護学＝教授赤井重恭（農博京大助教授）

土壌学及肥料学＝教授佐伯秀章（農博北大助教授）助教授葛西善三郎（京大助教授）

農産加工学＝教授麦林楢太郎（京大助教授）兼任講師片桐英郎（農博京大教授）

食飼化学＝教授三宅捷（農博元台北大教授）

農業経営学＝教授神崎博愛（京大助教授）兼任講師渡辺庸一郎（京大教授）

以上のような組織で認可をうけたが、特に教官は実際とは随分変り感慨深いものがある。

初代学長三宅先生は24年５月着任、大学はすべり出した。森為三先生（当時医大予科長兼農大教授）の陰陽のお力は忘れることができない。

私は同年８月専門教官の第一陣として着任、入居した県営住宅も未完成で電灯もまだで、臨時灯で暫らく過した。研究室は２室だけ内装がすみテーブル１

つない空室、隣室は予科生の寮室。暫らくは事務室で手伝いをした。「県では大学とはこんなに金のかかるものとは思わなかったといわれている」と三宅学長は歎息したことがある。予算には教官研究費なるものが県で全く考えられてなく、研究費とは高校の先生に出ている生活費の補助と同じに考えていたという。三宅学長の苦労がわかる気がする。偉大な三宅学長の熱意と手腕とによって旧帝大めざして次第に発展して行ったことである。草創時の農科大学、現在の姿と思い合わせて、考え及ばざる先輩諸氏の労苦に深い敬意と感謝の意を表せずにはいられない。

（現農大学長兼神戸大学農学部長）

兵庫農大の草創期

山　本　秀　雄

篠山は小さいながら昔からの城下町で軍人のもてた所で、将校や将官級の方々も沢山おられた。この点、全国でも有名であった。従って、早くより連隊も設置され、このお蔭で町の商家も繁栄して来たが、さて、敗戦後は、がらんとした、兵営が残されただけで、火の消えたような静かな田舎町になってしまった。

町の人々は、この兵営を何かに利用して、町の息ぶきを続け度いと考えていた。丁度、其の頃に県立医大が出来ることになり、兵営の一部を改造して医大の予科が置かれることになった。町の人々は学生の数は少いが、大変喜んだ。その内、森為三先生が予科長として来られた。それから、2、3年後になって昭和24年3月3日に兵庫県の半沢課長が来られて、今度、篠山に兵庫農科大学が出来るとのことであった。そこで、困ることは、続々来られる先生方の住宅の問題である。4月15日には、多紀郡町村会へ出かけて行って農大のことを話し協力を乞うた。4月27日には、県の議長が来られて、愈々、本格的に兵舎を大学に改造するということになり、愈々、4年制の農科大学が出来、医大の予科は医科コースとして残されることが確定した。ここで次の心配は農大を受験する生徒が少いとのことであった。私の次男も受験させることにした。また、

母校鳳鳴高校や農高へ呼びかけて、成るべく沢山受験するようすすめた。お蔭で地元から三、四十名以上も来てくれた。

かくて、農大も三宅学長を迎えて5月10日入学式が行なわれた。父兄の方々も沢山来られた。この機会でないと再度父兄を集めることは困難と思い、この大学は出来たばかりで設備が何もないので父兄の皆様に何かと御協力をお願いしなければならんと、私が前へ出て話をしなければならん立場になり、とうとう困ったことに、私が父兄会長をやらねばならんことになってしまった。また引きつづき校医にもなり、益々、多忙になった。5月20日午前10時には、はなばなしく開校式が挙行された。はなばなしくといっても、只、紅白の幕を張るくらいのことで、三宅学長は余り派手にすることをきらわれた。

それから、次々と来られる先生方の住宅さがしと遠方から来た学生の下宿さがしで大変だった。私も学生10名、20名をつれて毎日、お宅は下宿さしてもらえませんか、と街を歩いた。それに、女子学生5名が入学して来たので、これまた、特別の下宿を探さねばならなかった。

何にしても、新しい大学で、三宅学長も、森先生も、さぞ、困られたことと想像する。何か困ったことが起ると、それが私の方へ廻って来るので、私は、次々と忙殺された。例えば、大学の図書館の書物の冊数が足らんと県から注意されて、何処かにまとまった古本がないかとさがし歩いて、やっと、味間の平野様方に、2、3千冊あると聞き、交渉して買取ることになった。

このように、次から次へと問題が起ったが、これは農大の後援会を作ってもらわねばと考えて、多紀地方事務所へ行って、そのことをたのんだ。或日、突然、私の家へ電話がかかり、『私は農大生ですが、先程、本町の誓願寺の前で私の自転車で近所の子供をつきとばしました。何卒、後のことをよろしく頼みます。』というので、大急ぎで行くと、子供は医者の許へ連れて行かれ、手当をしてもらっていた。大した怪我でなかったので良かったが、医者の方の支払いをして、農大へ報告して置いた。

次に、困ったことが起きた。それは、農大の東門の附近に井戸があり、軍隊の頃から、この井戸は田圃の水が浸入するので、以前より使用禁止になっていた。そんなことを知らないで、この水を使ったので赤痢が学内に蔓延し出し

た。町中大さわぎとなり、篠山保健所の徹底的な消毒で、漸くおさまった。

沢山な学生のことで、いろいろなことが起きた。若い連中だから、恋愛問題も度々あった。京都から来ていた一人が、篠山の一女性と心安くなり過ぎた問題もあった。また、こんな事件もあった。或日、突然、私の家へ学生が来て、3,000円貸して下さい。エライことになったという。其のわけを聞くと、『日曜日でブラブラと歩いていると、本篠山駅附近で、人が沢山集まっているので一寸、のぞいて見ると、（やし）がうまいことをいって人をごまかしているが余り見えすいたことなので、一寸、金を張ってやっているうち、段々と深みへ入り、金は皆、まきあげられ、腕時計まで取られてしまった。今、3,000円もって来れば時計だけは返すという。この時計は母の大切なかたみだから、何卒助けて下さい』といった。私は急いで出かけて見ると、余り人相のよくない5人組がいた。これは、ひょっとするとなぐられるかも知れんと覚悟して、話しかけて見ると、先方も私の堂々たる風采に和らんでくれて、時計は無事学生に返った。今後、こんな馬鹿な目に合うなよといって置いたが、その学生は今頃どうしているだろうか。私は今も尚、その名前を覚えている。

かくて、農大も出発の初め頃は、何かと不便も多く、例えば、学生の使う顕微鏡でさえも足らず、父兄会から買い足した程であったが、段々、すべてが充実して、設備も他の大学におとらぬようになり、遠い九州、北海道、全国津々浦々よりも兵庫農大の名声を慕ってくるという状況になった。これ、全く学長始め諸先生方の努力の致すところと、私は常に感謝しております。私の次男も4年の農産製造学を卒業させてもらい、現在活躍しております。私は男の子が3人ありますが他の2人も医科コースを出て医者になっております。皆んな子供が卒業してしまった後も是非にといわれて、農大の父兄会長を長い間続けさせていただきました。

また、父兄会長としての最後の仕事として、農大には大学の門がなかったので、各町村へよびかけて、立派な大学の門が出来ました。

20数年も夢の内にすぎ去り、三宅学長も、森先生も、あの世へ旅だたれましたが、眼をつぶって見ると、諸先生方の顔が次々とうかんで来て、誠に、なつかしい想いがします。

農大も神戸大学へ行ってしまいましたが、ふり返って見ると、沢山な学徒の育成と、多紀地方の農業の開発に、誠に偉大な足跡を残しておりますことを、ここに謹んで感謝して筆を擱きます。

（農大の初代父兄会長）

篠山時代を回顧して

浜　口　栄　次　郎

私が台湾から引揚げたのは、昭和24年晩夏のことであった。先ず関西方面の知友を訪れて久濶を叙するとともに、身の振り方について依頼した。当時の兵庫農大学長三宅捷氏は、公立大学なればたくさんあるよと言って、早速非常勤講師に任命してくれた。又京大の某教授を訪れた時には、威勢よく片手を上げてOKといってくれた。これらふたつの返事には、今でも心ひそかに感激している。それで、ともかく安心して生れ故郷で静養しながら、昭和25年教授として正式に兵庫農大に赴任するまで、時々篠山を訪れているうちにその静寂且つ明美な風光と純朴な町民とに全く魅せられてしまった。当時の兵庫農大では特に私を必要としたわけではなかったように思われる。戦後の農芸化学科は一般には生物学、栄養化学、土壌肥料学、醸造学を含む農産製造学等から構成されていた。勿論旧帝大では研究者を養成するために、7～8講座で編成されていた。三宅学長は最初は醸造学を主体とした農産製造学講座の設置を考えていたようであった。三宅学長は、私の飛び入りによって農産製造講座を製糖化学主作の講座に変更し、別に醸造学を単独講座とされた。製糖化学を主体としたことについては、当時の社会的要請に積極的に応えたものであり、独立せる醸造学講座設置は、篠山は多くの「とうじ」（杜氏）一族が散在している村落の中心地であって、それらの人々は農閑期（11月～翌年3月頃まで）灘（ナダ）其他の日本酒醸造業に寄与しているのであるから当然の措置であった。製糖化学を主体とした農産製造講座設置については、三宅学長に伴われて県庁を訪れて其設置理由を私が直接説明し、更に日本糖業のみすかしを説明するとともに、軽い意味で或る約束さえ取り交わした位に難渋した。この種の農産製造講座は

日本では唯一のものであり、その当否についての批判は将来に譲らねばならないけれども、多くの卒業生が既に製糖工場、ブドウ糖工場で活躍している現状をみて一応は納得して頂けるものであると、私は考えている。

三宅学長は昔ハイデルベルヒ大学で研究されたことがあったためと思われるが、篠山をアルトハイデルベルヒ（伝統を誇るハイデルベルヒ？）たらしめんとの理想論をしばしば述べられたことがあった。静かな環境に恵まれている篠山と兵庫農大とをハイデルベルヒとハイデルベルヒ大学との関係に結びつけて科学のひとつのメッカ（Mecca）たらしめんとする理想をもっておられたようであった。篠山は古い歴史をもち特に昔「ほう鳴塾」と称する有名な教育設備があった町であるから、三宅学長の理想は尤もなことであった。しかしながら晩年に至って、経済的貧困且つ地域的偏在のためにハイデルベルヒ大学の轍を踏むことの困難さを痛感されていたようであった。まして近年のようにマスプロ教育を強要されている実情下では、その理想の実現はひじょうに長い年月を要する困難なことであったであろう。

最後に私は兵庫農大の農芸化学科が神戸大学に移管されたことを祝福するとともに、将来社会的環境の変化に伴なって漸次講座の充実或いは増設を行なわれるように切望するものである。一般的にいうと、日本の大学進学希望者の大部分は就職問題を第一義と考えて、大学及び学科を選択しているようである。又少数ではあるが、権威ある研究者を慕って専門を決めるものもある。従ってそれらの希望に副い得るように講座の増設或いは充実を計り、更に卒業生の就職に御尽力下さるとともに研究を盛んに行なわれることを切望して擱筆する。

（農大名誉教授）

兵庫農科大学草創時代

浜　田　秀　男

全国屈指の農業県である兵庫県に県立農科大学がなくて、戦後も京都大学と鳥取大学のお世話になってはいられないとの意見を県当局に出したのは旧京城帝大予科を創設した森為三先生であると聞いている。それが容れられて急拠準

備が進められ、認可に必要な条件の図書、教室、農機具、実験室などが旧篠山連隊の兵舎に応急整備された。当時の知事岸田幸雄氏を始め県をあげて創立に邁進された結果、昭和24年4月には学生募集が行なわれ、農学科、農芸化学科及び畜産学科を合せて41名の学生が入学許可となった。その4年後の昭和28年3月には29名の新農学士が第1回卒学生として世に出た。

昭和24年には既に篠山連隊あとに神戸医大予科が置かれてあった。この予科の教官たちが農科大学設置と共にその教養科教官兼任となった。動物学に森為三氏、植物学に高田英夫氏、英語学に山本賢治氏、数学に三浦義敬氏、無機化学に石井健三氏、有機化学に西羅寛氏、物理学に松居弘氏その他がいられた。私は高田氏が大阪市大へ転出後、昭和24年秋、札幌をたって赴任した。昭和24年開学と前後して学長の選考があって、元台北帝大農学部長の三宅捷先生に白羽の矢がたち、承諾を得られたのである。しかし開学記念日の5月20日にはまだ三宅先生は札幌にいられて、当時大学の運営はあとで副学長になられた森先生が万端指図されたことであろう。新設早々とて教養課程の学生と医大予科の学生が同じ学舎で授業をうけた。私は農大教養科と医学進学科の学生を合せて講義した。農学専門課程の教授として、昭和24年開学まもなく森本勇氏が着任され、青山会の教官宿舎に住まわれ、続いて佐伯秀章氏が夏頃札幌から赴任された。更に水野利雄氏が初秋札幌から赴任されたように記憶する。その後次々と着任されたのは松尾浩気氏、浜口栄次郎氏、山本和太郎氏だったと思われる。当時教授会は無機化学教室の建物の南端の部屋が会場に当てられて、学長と副学長の外には専門と教養の教授、助教授を合せて10数名であって、事務局長の小松小一郎氏が会議に加わるようになった。そして事務局の人員も拡充されて小さい世帯乍らもぼつぼつ整って来た。兵舎の改造も進み東から西の方へと教室や研究室が設けられ、私共も平屋のバラックから教養科の建物にその後引越した。動物学教室は森先生と俣野助手、植物学教室は私と岩本助手がいて平素昼食時には森先生の部屋に集まって、楽しく豊富な話題が交わされた。これらの話をメモして置けばよかったのにと今になって惜しまれる。

化学や物理の教室は実験室のついた建物にいて最後までそこにいられた。学内には学生寮として兵舎を少しく手を加えて運動部選手の合宿にあてていたよ

うに思うが、極めて不完全であった。それで大方の学生は篠山町か周辺の町村に下宿するか遠方から通学していた。戦後3～4年後のこととて物資も不足し娯楽設備も少く、せいぜい映画館がたった1軒あった位であり、本屋も小山書店が僅かな本を売っていた。

そんなことから私は学生や同好者を誘い、多紀郡の周囲にある山々、殊に国立自然公園多紀連山の小金岳、三岳、西ケ岳、城東の弥十郎岳、城南の竜蔵寺や永沢寺の裏山へ植物採集を兼ねて再々登山した。又大学の近くの盃山附近には入学早々野外授業を試み学生たちが新緑の自然界にふれ、生物を親しく観察するようにした。

われわれ教授の宿舎の半ばは篠山町北新町の青山会敷地内にたてられ、世にもお粗末な建物であった。そこには石井氏、森本氏、佐伯氏、小松氏、松尾氏水野氏及び私の家族がいた。又別なグループは王地山の宿舎に入居され、松居氏、三浦氏、山本賢治氏、山本和太郎氏がいられた。われわれの北新町組はしばしば部落会を催したり、家庭園芸を共にして楽しんだ。花ばかりでなく蔬菜なども作ったのは食糧不足を少しでも補ったのである。城の堀ばたの桜の外に王地山の桜も美しく春には稲荷神社にお参りしたのは印象的である。私は助教授を北大より採用するについて、あちこち家を探した挙句城北に適当なのを見付けた。それが堀江格郎氏一家の住居となった。同時に私自身も奨める人があって、東新町の元連隊長官舎あとが空いていたので、南側に私が、北側に浜口氏が入りそこに漸く落付いて10数年定年退職までいた。しかしこの記念すべき立派な旧藩士の住居も昨年取こわされて、あとに新しく洋館の庁舎が建てられたときく。誠に惜しいことをされたものである。

最後に一言つけ加えたい。それは昭和24年10月31日付で私は農大教授に発令されたので11月某日札幌から赴任した。しかし篠山駅に下りたった時には淋しい駅に迎えに来てくれた筈の人影がない。あとで判ったが列車の到着時刻が判明しないので散歩に出たとかであった。ただ一人それらしい人が駅にいたが互に見送ってしまった。しかし私共は無事にバスに乗り、北新町の宿舎に到着したことは幸いであった。篠山駅に出迎えに来て下さった一人は佐伯秀章氏、今1人は森本勇氏、駅の改札所で会った1人は畜産の三宅助手であった。佐伯氏は

三宅学長の後任学長として農大の管理運営に尽され、国立移管にも大任を果され、今日も健在であることは誠に同慶にたえない。しかし森本氏は天寿を完うせずに自ら生命をたたれた。又、三宅助手は早く中風で他界された方である。大学創設の森先生と初代学長の三宅先生も今やいまさず、農大創立以来約20年の歳月が流れ、多くの人々を迎え、見送った。明春は農大最終卒業生を送る年である。神戸大学農学部の今後の発展を祈ること切である。

（農大名誉教授）

開　学　の　頃

西　川　欣　一

ほそ長い街道町、本通りには古めかしい洋館をまじえ、奥行き深いがっしりした瓦ぶきが並び、今なお青山5万石の武家屋敷が堀をとりまいている篠山。

かって兵営であったころ、兵隊たちが毎朝走って登らされた“盃山”をバックに桜の老木が並木をつくっていた篠山学舎。あの学び舎に励んだ者にとっては、第2のふるさとだ。

敗戦、虚脱した心と空腹を抱える人々の足をひきつける青空マーケットから風に乗って流れる「リンゴの歌」のメロディ。この時代は『文化国家建設』が『米英撃滅』にとってかわって日本人の合い言葉だった。大学制度にも民主化の嵐が押しよせ、6・3制の新学制が実施され、その一番上に乗っかる「新制大学」が発足し、わが兵庫県立農科大学が篠山70連隊跡に新設された。

デカンショ節のおかげで、丹波篠山の名は高い。しかしそれが兵庫県のどの位置にあるかを記憶している人はそう多くないだろう。おそらく第1回生として入学した阪神間を中心に全国から集まった同輩たちも、もっと日本海に近い町と思って来たことと思う。

当時の学園風景はまさに「草分け時代」の文字通り草深いグラウンドと兵舎を改造した学舎は、のちの名称で「農芸化学本館」と「農学2号館」のみであった。そして前者を「北寮」、後者を「南寮」と呼んで、1階はすべて学生寮、2階が講義室といった具合で、南寮にはまだ医大予科の生徒が入っていた。

まだまだ敗戦の面影がただよい銃架も残っていたし、○○上等兵・××1等兵といった名前が柱にきざまれ、どこからか鉄砲のにおいがしそうな旧兵舎そのままであった。俗に流行歌はその時代を象徴するといわれるが、昭和24年、当時巷に流れていたのは高峰秀子の「銀座カンカン娘」であり、前年のヒット曲笠置シズ子の「東京ブキ」も引きつづきよく歌われてバラック文化ながら復興のきざしがみえつつあったが、敗戦後の食糧難は依然として続いていた。当時数学の三浦先生が舎監で食堂管理をやっておられ、1カ月の食費は前納制で各自先生の部屋まで納めに行ったものだが、食事はさつま芋かパンに“農大汁”と称して葱が2、3切れ浮いた醤油汁で、これが当時の若者のたべものであった。従って篠山の町に食堂など勿論なく、店といえば旅館、散髪屋、時計屋といった軍隊町特有の店が目立つ外は、下駄と茶の葉ぐらいしか売っておらず、寮で当時大発生していた「ザリガニ」を洗面器で煮て食べたこともあった。

また当時の福知山線も大変なもので汽車の窓はすべてガラスがなく板が打ちつけてあり、明りとりに10㎝四方ぐらいの小さいガラスがその中央にはめてあった。車体もオンボロで、トンネルに入るとすき間から煤煙がもうもうと侵入し、篠山口に着いた時には乗客の顔は薄黒くすすけていた。そればかりか今のバスの半分もない小さい木炭バスに積み残されないために駅の陸橋を懸命に走ったものであった。

そのような中でも、1回生たちは自分らが本学の伝統をつくるのだという気慨はもっていたし、すき腹をかかえながら広いグラウンドを利用して、スポーツはよくやった。高校時代運動部に入っていなかった者までラグビー、サッカー、野球と1人何役もやって県立6大学インカレにも全種目に出場したほどであった。最近は全くはやらなくなってしまったが、全員真新しい角帽をかぶって医大予科生をうらやましがらせたものである。

初代学長三宅捷先生は1回生に向って、「諸君らを紳士として扱う」、「視野を広く」と丹波篠山の地から広く世界へ伸びる農業の方向を示されたが、この言葉が自治と開拓精神を中心とする兵庫農大スピリットの源になっていると思う。

さらに森為三先生は、オックスフォードなど欧米の一流大学は大都市からい

ずれも2時間ほどの所に学都として存在する。篠山こそ立地条件からして、まさに理想郷なりと力説された。しかし現実の篠山は遂にオックスフォードになりえず、農大も篠山を去ってしまった。だがこの森先生の気持はそのまま農大の建学精神でもあったわけである。

草創期の教授陣はスケールの大きい、いわゆる名物教授が沢山おられた。すなわち三宅先生を筆頭に、浜口、沢山、野中、浜田、桜井等々の諸先生、非常勤講師にも榎本、羽部、橋本各先生など、また開学当初から教養課程は充実していたし、現在の佐伯学長をはじめとする御長老格の先生方も若かったし、情熱にもえておられた。1回生としてこれら名教授の講義を拝聴できたことは幸福であった。

昭和43年現在、兵庫農科大学は国立移管によって六甲台に移転し、神戸大学農学部にそのよき伝統を受けつがれ、その名は歴史のかなたへ消え去ろうとしている。

今の大学はマスプロ教育、学園紛争と全国的に騒々しい限りだが、ふりかえって農大草創期はこれと反対に極めて牧歌的であったといえるであろう。

(昭43. 8. 31)

(農大第1回卒業生、現神戸大学農学部助教授、同窓会会長)

草創のころと学歌

山　本　賢　治

兵庫農科大学の生みの親はある意味では篠山連隊の兵舎だといえるかもしれない。終戦後の学制改革により医大に予科を置くことになった時、神戸医大の正路学長はこの兵舎の利用を考えられて昭和21年4月に予科をここへ持ってこられた。ところが再度の学制改革のためその予科がわずか5年で廃止されることになり、折角芽生えた学都の名がかくも早く消え去るのを惜しまれた森為三予科長によってこの学舎を土台として農科大学新設が計画された。森先生を主軸とする地元有力者が岸田知事以下の県当局と協力して苦心の結果ついに昭和24年4月農科大学が誕生した。連隊の兵舎がなかったら予科は篠山へ来なかっ

ただろうし、予科がここに出来ていなかったらあるいは農大は生れていなかったかもしれない。連隊の兵舎は今や老朽の域に達しようとしているが、現在の神戸大学農学部を生んだという大きな功績に充分満足していることであろう。

農大が最初に計画されてから実現に至るまでの期間は1年か2年ではなかったかと思う。私は教養課程の一員として名を連ねただけでなにもせず森予科長の御苦労を陰ながら推察しているにすぎなかった。他の新制大学と異なり医大予科の後に畑違いの農大を作ることになんらかの違和感がないではなかった。そんなことも生みの苦しみを倍加したにちがいない。しかし当時は森先生、地元有力者および県当局の熱意によってなるべくしてなったのだという漠然とした観念で済ましてきたのであるが、申請から陳情やら推進運動の経過をつぶさにたどっていればもっとはっきりした事情が摑めたのではあるまいか。大学創立の功労者たる森先生やら三宅先生がすでにいまさずおことばを聞くすべもないけれど幸いこの農大史によってなにかがさぐれるのではないかと期待している。

第1回の入学試験が昭和24年4月17日に行なわれた。農学科45名を募集、志願者は70名、受験したのは62名だった。5月10日の入学式で三宅捷学長は「今日から諸君を紳士として扱う」と学生にいわれた。どこかで聞いたような気もしたが新入生の自覚をうながす好適な文句である。学長のお好きなことばとみえその後の入学式にもきまってこのことばが出たように覚えている。終戦後間もない不安定な世情において多くを望むのは無理である。教室が改造されていくらか大学らしくなったものの、なにかと不備の中で45名の学生と学長以下10名ばかりの教養教官とが手を握り合ってきわめてつつましく農大は発足せざるをえなかった。ただひとつ構内のポプラ並木だけが心なしか一層高くそびえて輝やかしい大学の将来を予言するかのごとくであった。

この調子で書いて行くときりがないが特に私がふれておきたいのは学歌についてである。「丹波路や多紀高原に」と来年3月の卒業式に歌われるのが最後になるのかと思うといささか感傷的にならざるをえない。開学後3年、大学の形体がほぼ整ったころ、どなたの発案かは知らぬが、この辺で学歌を作ってはという議題が教授会に出された。経費の関係から有名な詩人の作詞は望めな

い。昭和27年2月18日学歌募集を学内に掲示、締切りは4月15日とした。その時選者に指名されたのが桜井教授と教職科の森信三先生と私の3人である。桜井先生は北大予科時代に寮歌を物された経験者、信三さんと私はどちらも文学士というのが選ばれた理由だった。締切り間際に学生の作品が6篇集った。どれもこれもおもしろくない中に山鳥崇君のものがいくらか形になっていた。これをなんとかするより外はない。ところが頼りにしていた桜井先生に農学士だからといって逃げられ、すべては両文学士の肩にかかってきた。歌詞に筆を入れたのは主として信三先生、私はもっぱらその批判に廻りつつ、やっとの思いで作りあげたものをおそるおそる教授会へ提出した。まあこんなものだろうと寛大な教授方の承認を得た時、私はなにか重責を果したような思いをした。次は作曲である。そのころ農芸化学科の講師をしておられた内海誓一郎先生に依頼したのが5月10日だった。内海先生は趣味として音楽をたしなまれるとか三宅学長から聞かされていたが、果してどんなものができることやら、失礼ながら私はひそかにあやぶんでいたものである。しかし一週間くらいで出来上ったのがあのすばらしい名曲だった。5月19日の開学記念音楽会の席上においてこの学歌を発表することができたのは私の忘れえない喜びである。歌詞がもっとすぐれていたらおそらく全国を風靡していたことであろう。神戸大学農学部となっても、の歌が寮歌的にでも、発祥の地多紀高原に思いをよせていつまでも歌い継がれることを望んでやまない。(23-8-1968)

(農大名誉教授)

10年間の回顧

桜井芳次郎

終戦後に続々とできた地方の新制大学は、ほとんどが既存の各種高等専門学校、高等学校、師範学校などが中核となって、建物も教官も包括されて、いわゆる大学の偉容をととのえたものであります。

しかし古びた篠山連隊の兵舎をとのままにして創立された兵庫県立農科大学は、全く古い伝統などにとらわれない、自由かっ達な諸先生によって構成され

た稀な単科大学でありました。しかも諸先生はいずれも一家をなした専門家でありまして、すでに学会その他から本学の存在を高く評価されていたのであります。

昭和24年4月本学が開設されて、教養課程の学生が専門課程に進むようになった昭和26年5月に私は本学に赴任しました。そして担当の園芸学講座（第1果樹、第2蔬菜造園）の創設に参加したのであります。その当時としては園芸学に2つの講座が設けられていたことは特異でありましたが、これは当時の京都大学農学部図芸学の並河功教授（後に大阪府立大学々長）がこの実現に推進援助されたのでございまして、たしかに卓見でありました。

園芸の研究としては、蠹（とう）の立った私には、専門の熱帯園芸以外には何もできなかったので、教室の若い先生方に丹波栗やまつたけなど県特産物の研究を進めてもらい、すでにその業績には顕著なものがございます。

教養課程の学生のための農学概論の講義を私が始めて担当させられましたが、私一人では到底できませんので、序論と結論を私がやり、中味は農学、農芸化学と畜産学の諸先生に各専門分野の概論の講義を行っていただきました。これは新機軸でしたが、受講した学生には大きなプラスであったことと思います。

その頃農業高等学校教員が急増されましたので、資格認定のための夏季講習会が県下で行われまして私もしばしば講師になりました。

大学運営の根幹である教授会は講師、助教授、教授の方々で行われましたが議長であった三宅学長は剛腹、辛辣、いくらかワンマン的なところもありましたが、至極公平に淡々と諸事を円滑に処理されました。それには裏方の小松事務局長のサービスも忘れることはできませんでした。さらに忘れられないのは人格円満な森為三先生でありました。教養課程開設の先任者として、また副学長として、三宅学長より年配でありながら、よく学長をもり立てられ、さらに教養と専門の諸先生間の交流融和の中心であられたことは大きな存在でございました。

昭和29年12月25日のクリスマスの日に、米軍占領下の奄美大島がわが国に復帰されましたので、同地のパインアップルやバナナの生産が、高率の輸入関係のため急に有望になって参りました。それ以来私は毎年の夏休みには奄美大島

に園芸指導に参りました。また文部省より琉球へも派遣され面目をほどこしました。また私が奄美大島へ行ったのがきっかけとなって、わが国の製糖化学の権威であられる浜口栄次郎教授が同島の幼稚な原始的黒糖製造法を実施に改良指導されたのは大きな業績でございました。

昭和32年3月、阪本知事の時に、県立加古川短期農科大学が、第5回目の卒業生（5回合計365名）を世に送っただけで突如閉校されまして、引き続きその農場（第1及び第2農場＋数ヘクタール）が、兵庫農科大学附属加古川農場となり、私が場長に任ぜられました。附属農場は定員数が少なく、あとに残された多くの事務職員と専門諸先生方の進退には、人事にうとい私には大問題でございました。幸に県庁当局の悠々たる待機処理と、三宅学長の全幅の信頼に支えられまして順次円満にすべて解決されたことは感謝にたえませんでした。農場は経験豊かな残留諸先生方により漸次改善充実することができまして、学生実習と農場収入の拡大に相当貢献し得たものと自負致しております。

県立大学連合協議会にも昭和32年から委員に委嘱されました。諸学長の間で大学運営についていろいろと談合されましたが、言葉数のすくなかった三宅学長が、いつも最後に述べられた片言隻句には重みがあったのは誠に印象的でございました。この協議会で、各大学の教官の外国留学制度の確約を県側から取り付け得た事は特筆大書すべきものと存じます。

また年々新しく増設されて行った講座の数も多くなり、最後の段階では官立大学より多彩となりましたが、これは兵庫県が大県であることはもちろんですが県当局の三宅学長に対する信頼の度が高かったものと信じています。

昭和30年3月に教授会で定年制が決定されて実施したことは、当時としては他の公立大学に率先して行なわれたものでありました。これによって大学人事の沈滞し始めた空気を一掃したのでした。

兵庫農科大学の国立移管の問題が起こり始めましてからは、文部省派遣の大先生方がよく本学の視察にお見えになりましたが、その接待役を時々三宅学長から仰せつかりましたが、これは桜井が酒好きだったからだと思って、時々思い出して苦笑致しております。

今からふりかえって見ますと、静かな篠山の城下町で、何らうるさい雑音も

なく、先生方の研究も進み、学生諸君も至極のんびりと、悠々と、きれいな丹波盆地の空気の中で、楽しく勉強されたことは大きな幸福であったと思います。ことに最近のような大都市の大学の物情騒然たる現状を思うと、篠大農大の卒業生諸君はめぐまれていたものと存じます。そして千数百名の新進有為の農学士を世に送り出された兵庫県の功績は今後さらにさらに刮目するに値するものがあろうと思います。（昭和43年9月2日記）

（農大名誉教授）

兵庫農大草創期に想う

宮　沢　秀　介

篠山は城下町であり、軍都であった。誓願寺前でバスを降りて1.5㎞の道を歩いて篠山の辺ぴな街筋を離れると、桜の見事な並木の奥に旧陸軍の兵舎跡が後に盃山を背負い木々の緑の中に、茶やけた建物。そこに新制大学、新設の兵庫県立農科大学があった。

昭和24年4月、学区制の改革により新制大学が全国一斉に開学し、その第1回生として兵庫農科大学に入学して以来かれこれ20年を数えるようになった。

20年前の農大は大学というものの、実に殺風景なものであり、地理的環境を除けば、旧兵舎をむき出しの姿であった。兵庫県立医科大学の予科が置かれていた一部を除いて、ほとんどが、未使用の荒廃した巨大な建物が東西に連らなり一時代前の廃墟であった。その中で農大の開学式、入学式が、学生40数名で、感慨深く行なわれました。兵庫農大の学色というか、思想がその時の三宅学長訓辞により生れ、特に印象深く残っています。

「諸君は今日より大学生として、紳士であれ、大いなる希望をもって、学問に励み、大志を抱け」と北大開学の精神のクラーク博士の言葉を引用された訓辞が今も耳の奥に残っています。

開学当時は医大予科の学長を兼ねられていた森副学長を初め、予科の先生方を中心に講義が始まりましたが、旧兵舎の二階が教室に改造されたもので、森先生の第1回の講義から「科学について」石原純先生と○○○○先生（お名前

は失念しました）との論文の比較をレポートで提出を求められて面喰い、石井先生の化学は、およそ当時の知識から理解の出来ない「ポテンシャル・エナージーが云々」の学術語、竹内先生のドイツ語はのっけから「ア、ベ、チェ、デェ……」解らずにボーとしていると「立っとれ!!」。山本先生の英語に三浦先生の数学、今想えば汗顔のいたりです。教養部時代は外来の先生方も多く、2回生頃には、京大の猪熊先生、関学の古武先生（現在関西学院大学の学長）の講義が印象深く残っています。その頃には、佐伯先生、森本先生、岩田先生、浜口先生、浜田先生も赴任され、農大の基礎が築かれ、国立移管までの多年の業績と社会への実積を粒々苦心され積み重ねられました。

講義室の階下は、開学当時寮に使用されていて、そこに、県下各地から、九州から、私のように和歌山から集まった者が入り、当時は食糧難時代であり、代用食を食べて生活していましたが、その頃の生活が一番なつかしく思い出されます。広大な校庭は寮生にとって無限の可能性と、悪童振りを発揮しました。兵舎跡にまつわる怪談を利用して、岩銀さん（岩本先生、植物学の助手をされていた江戸ッ子先生）を驚かしたこと（張本人は野原啓吾君）、2回生から医大に進学した連中に犬を喰わしたこと（張本人は石田陽博君）町の女の子の親になりすまし、寮に談んじ込んだ芝居を演じた野村、五藤、中山三君（医大に進学しその方面で活躍中）、安酒飲んでのコンパ、勉強家でスポーツマンで悪戯の陰の参謀児島初男君、ユーバー、ブリュケンする者……等々。

春は校庭の桜並木、夏は盃山の山登り、秋は名物の霧と青山城、王子山公園の散策、冬はきびしい寒さの中の田園風景、四季を通じ農大の環境は、自然に育てられ、科学を起し真理を探求しつづけ、学舎は古びた廃物ながら、諸先生を中心に熱気を帯びた意気があった。酒保跡の食堂で名物農大汁をすすり、その二階の粗末な図書館で本を奪い合いながら読み、細長く仕切られた講堂で講義を受け、すきま風の入る研究室で、研究を続けられた先生方、農大草創期は苦難も多かったが、それだけに血の通った有意義な生活を諸先生方と過しました。

年と共に発展し、今日国立移管により発展的解消した兵庫県立農科大学は篠山の町と共にいつまでも消えないし、又今日をあらしめた故三宅捷先生初め諸

先生方に深く敬意を表する次第です。

（農大第1回卒業生）

農芸化学科発足のころ

麦　林　楢　太　郎

創設の意気込み

『旧制帝大の農学部に勝る農科大学にしたいと考えている。』『大学では教官の研究が中心でなくてはならない。予算も講座研究費に重点を置くつもりである。』当時、京都大学農学部長であった香川先生の指示に従い、昭和25年8日のある日、篠山の兵庫県立農科大学学長室で、始めて三宅捷先生にお目にかかったとき、先ず承わったのはこのお言葉であった。

戦後の大混乱の中で、前年の春開学したばかりであり、旧兵舎を利用した農科大学の施設は、京都大学農学部に16年間なじんで来た者の目には、失礼ながらお粗末な姿に見えて、憚りながら創設の御苦労は並大抵でなかろうと推察できた。夏休み中ではあったが、折良く在学されていた佐伯先生に引き合わせて頂き、板張りの仕切りを濃緑色のペンキで塗りたくった小部屋に、机と椅子だけが調度品という姿の教授室で、明春開設予定の農芸化学科の編成、近く着工予定の研究室の構想などのお話を聞いたが、新しい大学づくりに三宅先生と苦労を共にされている盛んな意気込みが感じ取れて、頼母しい思いを深くした。

帰洛早々京大の先生方に委細を報告したところ、『兵庫県は大県であり、学長にその人を得ている故、農科大学の将来には大いに期待している。』と口を揃えてのお話に意を強くしたものである。

農芸化学科開設

昭和26年4月開設された農芸化学科は、土壌学、肥料学、生物化学、食飼化学、農産製造学、農産加工学(間もなく醸造学と改称)の6講座編成、まだ欠員はあったが、講座定員は1、1、2、の4名が予定されていて、当時の新制大学農芸化学科の殆んどが、4講座編成であったことと比較すると、本学の編成は旧制帝大のそれに匹敵するものであった。このことは数年後には化学工学、

農薬化学の2講座が増設されて、特色ある8講座編成の農芸化学科となる基盤が、当時すでに固められていたものと考えられ、注目に値する。

学科開設とともに、昭和24年入学学生中から農芸化学科を希望する者15名を編入して、専門講義並びに農芸化学実験が開講された。しかし、学生実験設備が未完成であり、水道はあっても水圧が低くて使いものにならず、ガス設備はなく、学生諸君に少なからず不便をかけたが、これを指導する教官の苦心も一通りのものではなかった。また、この頃困ったことの一つは、講座研究室の工事が遅れていたため、半年程の間は講義時間以外は自分の居場所がなかったことである。止むなく生物化学、土壌肥料学の仮研究室へお邪魔する次第となったが、浜口先生も御同様であったため、しばしば御同席し、台北大学のこと、台湾引揚げの御苦心、台湾を失なった我国の製糖工業の将来などのお話を承わり得たことは意外の幸いであった。しかし、傍で実験されていた方々には嘸かし御迷惑なことであったであろう。

その年の秋10月には講座研究室の工事も完成して、面目を一新し、翌年には吉村教授も着任されて、教授陣も整い、それぞれ活潑な研究活動を開始することができて、すべてが軌道に乗ることになった。

農芸化学会関西支部大会

昭和27年4月から卒業論文実験が始まり、研究室はさらに活気を呈するとともに、一方、第1回卒業生を送り出すための就職運動が教官の仕事の一つとなった。こんな頃、三宅学長は『技術者としての職責を果し得る卒業生を送り出すことも肝要だが、真に学問を愛し、学問研究に生涯を捧げるような卒業生を送り出してこそ、この大学は始めて大学の名に値することになると思う。』と話された。後年大学院に進学し、優れた研究業績を挙げる者が相継ぐようになって、既に勇退されていた三宅先生にこのことを報告して喜んで頂いたが、この間、10年余りを要したことになる。

三宅先生のこのようなお考えの一端を推察できるのは、農芸化学会関西支部大会が昭和27年11月篠山で催されたことである。これは開学以来始めての学会であった。京大からは農芸化学科全員がバスを連ねて来学され、当日の参会者は150名に達し、多くの研究報告のほかに、本学の浜口先生、京大の奥田東先

生の特別講演が行なわれて、当時としては中々の盛況であった。孔雀会館の懇親会では可愛いい女児のデカンショ踊りも披露され、参会者に松茸と丹波栗のお土産が供せられたことは、長く語り草となっている。この大会は農科大学の一応の完成を祝う意味をこめて、特に計画されたものであったと後日聞いたがその後16年を経て、神戸大学農学部としての新発足を記念して、昭和43年5月六甲台の新学舎で、参会者350名に余る盛大な関西支部大会が催された。往時を追懐して、感慨深いものがある。

（現神戸大学農学部教授）

私が着任したころ

堀　江　格　郎

昭和25年の10月の終りころ、札幌ではもう冷たいみぞれが降っていた。当時北大理学部の植物生理学研究室で勉強していた私は坂村教授の室によばれた。用件は新設の兵庫県ささ山の県立農科大学で植物学担当の助教授をもとめている。もし君が希望するなら推選しよう――ということであった。これが私と篠山との始めての『出合い』である。

私はしばらくの猶予をねがって退出し、家に帰ってから地図を開いて、『ささ山』をさがして見たが、どこにも見当らなかった。翌日先生の室に再び参上して、「ささ山という町はどこにあるのですか、地図には見当りませんが……『しの山』という町ならありましたが」と申しあげたのである。すると滅多に笑われたことのない坂村先生が、この時ばかりはワッハッハと大笑いされて、『君、それだよ。『しの山』と書いて『ささ山』とよむのだよ』とまた大笑いされたので、私はアッと二の句がつげなかったのである。

こんなわけで、篠山のことはそれまで何も知らなかったが、篠山転勤をきめてから、たまたま文芸春秋の郷土だよりで篠山の記事を読んだ。丹波篠山は山紫水明の美しい城下町で、飛弾の高山、美作の津山と共に、日本古来の山邑を代表する三名邑の一つであるという。津山は今でも知らないが、高山は曽遊の地で、その静かな町のたたずまい、街筋の小川の清冽な流れ、古城址の松の緑

など、特に印象深いものがあったので、篠山への期待も楽しく胸にふくれ上った。

いよいよ篠山に赴任したのは翌昭和26年6月のことであった。二男二女の幼児をつれて城北村佐倉の農家の草深い別宅に居を定めた。登校第1日、村人に教えられた通り田圃の小道を通って登校したが、自宅から学校までひろびろと切れ目なくつづく青田、なみよろう山々の美しさ、澄みきった空気のすがすがしさ、都会とはまた次元の異なる美しさがあり、自然の環境は期待通りすばらしかった。

大学学は旧兵舎ときいていたので一目でそれとわかったが、困ったことに門が見当らなかった。広い道路を生垣に沿って歩いてゆくと、やっとちっぽけな古い門が一つあった。もちろん門標もなければ守衛室もない。門を入ると正面の土手に同じ建物が3つ並んでいた。中央からのりこめば間違いもなかろうと中央の建物（後の教養4号館）に一歩入って見たら、何とガラガラ、ボロボロのあき家であったのにはおどろいてしまった。

やっとさがしあてた生物学研究室も物置同然の粗末な建物で少々がっくりした。しかし、浜田教授、森教授はここで丁重に温かく私を迎えて下さった。早速三宅学長にもお目にかかったが、かっての将校集会所を改造したと思われる学長室に居られた。『設立早々で今はこんな状態だが農大の前途は洋々としている。すべてパイオニヤー精神でやって貰いたい。』

学長は自信と情熱を以て、こう語られた。帰りは郡家通りを通って見たが、何ともたいへんな田舎町で心細い思いがした。二階町の自転車店で中古自転車を6,000円で買い求め、これが翌日から通勤の足となったのである。

私が着任したころの農大は農芸化学科が農学科から分離したばかりで、学生も3年目までしか居なかった。教授会も出席者は20人くらいで、家族的な和やかなムードをもっていた。始めての教授会のとき、最後に誰か立ち上って、『あす町内のチームと野球試合をしますから応援をたのみますよ』と言うと、パチパチと拍手が起った。それが松尾助教授だった。試合は篠高グラウンドで行なわれ、私も行って見ると、三宅学長、森教授、浜口教授以下全学そろっての応援で、結局11—1で大勝、相手は篠山運送チームだった。

このときの農大メンバーは次のように記憶している。

17年前のことだから皆わかく、殊に松尾三塁手は俊敏だった。

P	大　庭	SS	上　野
C	水野(進)	LF	野　草
IB	長　島	CF	岩　本
IIB	福　島	RF	山　本
IIIB	松　尾		

この頃の農大はまた活気と野望にもあふれていたように思う。しかし先にものべたようになお新設早々であったから、研究施設の点では充実していると言えなかったのも止むを得ない。あれから17年、今日の神戸大学農学部への発展研究者及び施設の充実を比べて見ると、全く隔世の感に堪えない。

しかし当時の草ふかい研究室の中からも着々と業績があげられ、生物学教室では森教授の『日本海産魚類の分類学的研究』、浜田教授の『東南アジア栽培稲の系統学的研究』、野草助教授の『魚類染色体の系統学的研究』、宮田助教授の『半数体性カエルの発生学的研究』、小生の『ムラサキツユクサ開花機構の研究』などが揃って開花したことを記しておきたい。

最後に兵庫農大の神戸大学農学部としての発展は結構なことであったが、そのために農大開学の基盤であった教養教員が離散したこと、また美しい篠山の自然と人から別れたことが心残りのことである。

(現神戸大学教養部教授)

畜産学第一講座時代の思い出

福　島　豊　一

1. 畜産学科の誕生

わが畜産学科が開設されたのは、昭和26年4月である。ところが、畜産学科の創設に当って、他学科と違ったいきさつがあったことを知っている人は少ないのではないだろうか。

初代学長三宅捷博士が生物化学の権威であったことは、誰しもよく承知して

いるところである。そこで、先生は学長に就任されると、直ちに農芸化学科の増設を希望され、一応農学科・農芸化学科の2学科からなる農科大学の構想を提示されたのである。ところが、当時の兵庫県議会は農芸化学科増設の附帯条件として畜産学科の設置を強く要望した。

昭和24～25年といえば、役利用の普及によって和牛飼養頭数が年々大巾に増加した時代であって、約8万頭（全国第1位）の和牛（但馬牛）をもち、一方では古い歴史をもつ淡路島、氷上郡を中心として、各地に新興酪農地帯が誕生し始めた頃でもあった。そこで、戦前から種畜供給県として、常にわが国の畜産業界をリードしてきた兵庫県に、その推進力となる大学の畜産学科が欲しいという兵庫県議会の素朴な要望も、無理からぬものがあったように思われるのである。また、畜産学科のみを切離して、豊岡市附近に誘置しようという意見もかなり強力に出たということである。

その結果、さすがの三宅先生も、この県議会の意向を心ならずも（先生が筆者に述懐されたところであるが）承諾されて、ここに本学第3番目の学科として、わが畜産学科が日の眼をみるに到ったのである。

今後、当畜産学科も神戸大学の一学科として発展を続けるであろう。また関係者の1人として、そうあるべく努力する所存であるが、学科創立に当たってよせられた兵庫県民の期待と声援とは、後輩諸君に永く銘記して欲しい事実である。

2. 弱体学科の発足

三宅先生は畜産学科の講座編成を当時大学設置委員であった東大の佐々木清綱博士に依頼された。

佐々木先生は戦後各大学の畜産学科の発足に大いに貢献された方であるが、本学に畜産学第一講座（家畜繁殖学）、同第二講座（家畜飼養学）、同第三講座（畜産製造学）、同第四講座（家畜解剖学）、同第五講座（家畜生理学）、同第六講座（獣医学）の6講座を作られたのである。この学科編成は基礎学である家畜解剖学・同生理学をもつところに大きな特色があった訳であって、長らく佐々木先生の御自慢の種でもあった。また現在のように家畜飼養学とか畜産製造学という講座名を表向きにはつけなかった。この第一から第六まで通し

番号で表示したところは、いささか奇異の感じはあるが、6講座の畜産学科がわが国では余りなかった時代でもあっただけに、学科の充実性を示すものとして、これまた佐々木先生には大いに宣伝されたものであった。

ところが問題は何しろ「心ならずも」できた学科である。そのため表面的には6講座の堂々たる（？）畜産学科であったが、教官組織はいつまでたっても充足されなかった。いわゆる創成期における教授は第三講座の沢山智教授と、第四講座を兼担された森為三教授のお二方で、他は30才前後の若輩助教授が講座主任ということで運営していた訳であるから、教授陣が充実した農学科・農芸化学科からみれば、まことに弱体学科であることには間違いなかった。

三宅先生はこの点について、どのように考えられていたか憶測するすべはないが、台北帝大に赴任された当時の思い出を語られ、「貴君達の努力で新らしい学科——畜産学科の設置されていた大学は戦前は北大のみであり、旧制専門学校では宮崎高農（現宮崎大学農学部）だけであった——を作るように」と激励されたことを今さらながら思い出すのである。

この三宅先生の温情で、筆者なども何とか自分の好む道を進んで来たのであるが、その後着任された小野豊教授の御指導によって、かっての若手助教授諸氏は教授に、大学卒業間もない助手諸氏は有能な助教授に昇任され、他大学の畜産学科にひけをとらない畜産学科にまで発展することができるようになった。

この間、長い眼でみて下さった三宅・佐伯両学長に心から感謝の意を表する次第である。

また、それと同時に、いわゆる駆け出し時代に内容的にも貧弱な講義を聞きながら、卒業していった初期の卒業生諸君には、本当に済まなかったという自責の念にかられている。

3. 最大の思い出—就職難

草創期における苦労話は教官諸氏によっていろいろあるであろう。筆者は幸にして、京大を出る時に自分の仕事をどのように展開するかということについて指示をもらっていたし、協力スタッフとして気心を知った井上君にも来てもらっていた。また、京大上坂教授、現神戸大学医学部長平田美穂教授始め神戸医

大関係の協同研究者にも恵まれていたし、これら両先生には文部省科学研究費を始めとして物心両面から御援助を頂くことができた。従って、研究面における苦労は余りなかったといえる。

ところが、ここに最大の悩みがあった。すなわち、卒業生の就職口がないことである。世はまさに就職難時代であった。しかも、指導しているのが30才になるかならずの若輩助教授である。学生自身もそうであろうが、その父兄にしてみれば、頼りないこと甚だしいものがあったであろう。4年生の夏頃ともなれば連日就職の督促である。そのため、先輩・知人の間を足をそれこそ棒にして歩いたものである。大阪駅前の雑踏をみながら、これだけの勤労者を必要とする大阪で、学生の1人を収容してくれる所がないものかと、しみじみ感じたことを今さらのように思い出すことがある。

幸い、昭和30年以降、畜産関係の第2次産業も大きく伸びた。また、畜産関係の公務員、団体の求人も年々増大している。昨今の卒業生は8月中には殆んど就職が決定するようになったことは、御同慶の極みではあるが、その反面、当初の就職戦線を乗り越えて、わが畜産学科卒業生の就職面を拡大してくれた初期の卒業生各位の努力に対して、敬意と感謝の意を表したいと思う。

（現神戸大学農学部教授）

農　場　随　想

松　尾　浩　気

（1）　学生と実習の思い出

終戦後の数年間は食糧難のため特に活躍時の学生にとっては1日でも亦1回でも充分にお米の飯を食べたいと考えていた時が続いたもので、そのためにか幸か、不幸か、現在の様な学生運動は少しも見られなかった。又これが篠山の様な僻地の特殊性でもあるとばかりも言えませんでした。実にお米様様の時代で、元気な若者は白飯にありつけることを唯一の楽しみとしているように思われた時でありました。終戦当時は皆が一率に餓飢のようでしたが。兵庫農科大学が出来て4～5年の間の学生にも、まだまだ充分に配給米で足りることは絶

対にあり得なかったのです。従って学生運動やデモに参加するなどの考えは勿論、そのような行動は夢にも考えられなかったのではないでしょうか。或は馬鹿らしくそれどころではなかったのではないでしょうか。われわれもそんな事は少しも考えても見ませんでした。従って昔から農学部で一番教えにくいとされてきた、またいやがられてきた農場実習を農学科（A）の学生ばかりではなく、農芸化学科（C）や畜産学科（Z）の学生にまでも課し、更には医科（M）の予科学生までも、即ち教養部一年目の全学生に1単位の実習を課したことです。今でしたら大変なことになるでしょう。その上に創設しばらくは充分な圃場と設備更に実習指導教官も少なく実に貧弱な実習内容で申し訳けない限りでしたが、学生がこれについて来て呉れた事を思い廻らしますと汗顔の至りです。それだけ学生と教官の間にも親しみがあって、一致した目標のようなものがあったためと思われました。創設時代の農場実習は多くは教養部のA、C、Z及びMの1年目学生全員と2年目のA、C及びZの学生であったので殆んどが集中的に2～3日間宛の終日実習で少ない教官の指導によったものです。従って圃場の作業は多くの学生が一団となってやれる単純な作業が多く、圃場整備の意味の農場開発に大切な第一歩としての石ころひろいも行なったことがあり、特にここは練兵場としての排水のために、幅2米、厚さ0.5～1.0米の礫層が縦横にあり、石炭殻、硝子、陶器類の破片のまざった所で、耕作中しばしば犁先を破損したもので、やむを得ず、当初は巨石除去や石ころひろいまで行なったことがあり、また草刈りも時々やりましたが、手のかかる蔬菜作りなどはあまりやれなかったような土壌状態でした。従って一方では堆肥の積込みや、切り返えしなどに力を注いだものです。特にその頃は食糧難の時でもあり、米作りは大切な時でしたので、特別米作には力が注がれましたが篠山第一農場は練兵場跡の畑地でしたので、主として西方に3粁はなれた南河内村東木の部の第二農場1町5反の水田の田植えとか、収穫などの季節的な集中作業の実習を行なったものです。なおこれだけの圃場では、A、C及びZの約100名の2年目学生に曲りなりにも実習をやったという気持ちにはなれないので第一農場近くの水田を学生実習用として契約を結び栽培させて貰ったこともあります。なお、一番困難に感じ、良心的に悩んだのは3年目Aの学生の実習でした。これは時

には、関係教室の教官の方々にも、それぞれの専門的立場で色々と援助を願ったものです。かくて学生も食糧増産には苦労をして来ています。或る時は学生のために、学生食堂に配給米の特別許可申請を警察当局にお願いに参ったことも記憶しています。また終日農場実習があった時は、その後も必ず昼食に握りめし或は弁当を食堂で作って貰って食べてもらったものです。これらは当時の学生の思い出にもなり、苦しい中の楽しみの一つでもあったようです。中には欠席者の分を見越して二度分け前に手を出す元気者もいたようです。実に無邪気な時代でよかったとも思われました。またこの他に1年目A、C、Z及びMの学生全員で多い時は140人が実習に参加しています。これは主として学年末の試験が終ってから3日間、2粁程東北の山林である第三農場に3月中旬頃毎年植林に行ったものです。そこは割合に景色もよく、お寺があって、お寺の住職夫妻はなかなか立派な方々で、よくおいしい手製のお茶接待をして呉れたものです。今は息子さんの方々の時代に変っていますが。汗を流した後のお昼のおべん当は特に学生諸君にとっても思い出の多いものだったとおもいます。この思い出の記念の植林もすでに直径20糎以上の杉樹となって、耳をすませば、まだまだ色々の思いでが次から次へと、聞えて来るようです。

（2） 労力投資の思い出

創設当時の本学直属の篠山第一農場の整備には数年間非常に苦労をして来ました。当時本部は学科増設に懸命の努力を払っていましたので、これらの附属施設への予算の裏付けは全く出来なかったのでしょう。従って第一農場は、教室の実験圃はもちろん、学生実習圃場としての使命も果し得ない状態で、申しわけない数年間を過して来ました。それで農場職員は圃場の区画整理と、圃場の中央を南北に走る主幹道路を造り、農場らしい農場を少しでも早く作らねばと、必死に水田の造成と、地力及び土壌条件の均一化を計るために、特に地力養成に堆厩肥の製造に、非常な労力を注ぎ、更に圃場内の収納作業場に関しても、旧兵舎の一建物を解体再築し、コンクリート塗、また車道の砂礫運搬等も全て農夫職員の手によるなど、極力完成を急ぎつつ、一方ではこの水田のない圃場から生産をあげながら、他方では主食難の時代を少しでも緩和さす意味もあって、附近の水田を契約栽培して増産に馬力をかけて、学生食堂に少しでも

足しになるようにと、非常に苦労を重ねて来ました。前にも述べましたように当時の学生の気質も、新設大学のために、少しでもよい大学にしたい気風が見られましたと同様に、職員間にもそれに対する責任感が強く、自力で今日の第一農場を作って来たようなもので、当初の数年間の農場員の気構えもこの目的にしぼられていて、農場内に親しみの深い気風が感じられていました。例えば藤岡山林の第三農場のそばに東窟寺所有の水田が少しありまして、これを契約栽培していましたが、毎年収穫期頃になりますと、猪の食害が大きく、それの防止に苦労したもので、それでお寺の一室を借りて、農場員2名宛の交替で不寝番をしたものです。更に別の方法としては、学内でよく食堂の残飯あさりに来る野犬を飼いならし、時には野犬狩を許可して貰い、これらをつれてこの山田に行き、猪のよく出る田の附近に5～6匹の犬を或る間隔を置いて杭につないで、猪よけにしたもので、朝夕犬のために職員が残飯を運んだこともあります。猪の罠や、嫌いなものとして、ぼろぎれや、タイヤのゴム等をもやし、或は手製のカーバイト入りガス点火用竹筒などをならし、或はおけのふちを天秤棒でこすってギーコギーコと変な音を出しながら15分置きにならして歩くなどして、また簡易柵なども廻らして色々と防除に努めましたが、こちらは疲労してくるし、一方の猪はかしこくて、これらは一時的な方法でしかなく、うまく続けられた方法は何もありませんでした。電柵をするにも予算はなくて、労力奉仕ですべてを片付けていて、お互の助合いの時代でした。殊に昭和27年の秋作は猪の出頭数が多くて、親猪があちこちで5～6匹の子猪をつれてひどく荒し廻ったので農夫だけの力ではどうにもならなく、遂に農場職員全員が9月から10月頃まで、2人宛の組となって、お寺で毎夜猪の番を続けたという苦心談があります。上野、水野、広瀬、三宅(幾)、石田(亨)、小島(俊)、山本(保)、小山、山田、宇杉、矢尾、西本、小島(照)、長沢(庄)、長沢(勇)、福山等の諸氏が蚊にさされながら15分～20分毎に眠い思いをして廻っていた当時のメンバーを思い出させられます。第三農場の山田を作っていた間で少なくとも7～8年以上もこの苦労は続けられていたと記憶しています。当時の貧乏農場は可哀そうなものでした。

これらの苦労の慰安の一つとして、よく農家が行事として、田植後に行なう

サナブリと、收穫祭りのイノコを職員全体で親しく行なったもので、この行事も金をかけずに全部手作りでやったものです。例えば篠山川や近くの池を浚い魚を捕って、それ等をテンプラにして時には廃鶏を料理するなど、また葱や野菜を適当に処分しておいしい手作りの料理で野趣を充分に満喫したものです。

平和な時代には、料亭に上り、人の作った料理で女の酌で高い金を払って、おきまりの料理で過し得たもので、この時代とは大変違ったことで、真の親しみのある苦労のしがいのあった時代はこの頃の時代であったと思い廻らされます。この時代が予算のなかった田舎の農場員の気風に合った時代だったでしょうか。精神的苦労よりも肉体的苦労の方が農場員の性に合うようですね。これらの他にも色々の苦労がありましたが、例えば許可を得て酒を造ったり、あられ、おかき作りに、寒中の育雛等もやりましたが、これらの汗の結晶になる篠山農場に敬意を表して筆をおきます。

（現神戸大学農学部教授、附属農場長）

Ⅲ 完 成 期 編

思い出のままに

太　期　　勇

――はじめに――

事務職員として昭和25年3月（大学創立の翌年）より、今日まで大学と運命をともにしまして、その思い出の一端をこの大学史に留めることは望外のよろこびであります。

冒頭に当り農科大学の生み育ての親であり、その発展に終生の努力を傾注され、故人となられました前学長三宅捷先生、副学長森為三先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

私は奉職以来事務局庶務課勤務で一貫しました。他の課へまわしても役に立たなかったのか、適材適所主義によるものか、それはそれとして――、同じ職場で一貫したのは森庶務課長、足立経理課長と私の3人であります。行政職で

こんな例は県職員としても例外でありましょう。この長い職場ですから色々と悲喜交々印象に残る思い出は尽きません。しかしいざ筆をとると何をどう書こうと迷うことばかりですので思い出すままに書き列ねます。

――先ず学長さんによせて――

二代の学長さんに仕へ強く印象に残るのは、三宅学長は剛の方、森副学長は柔の方、佐伯学長は剛と柔を兼ねた方と思います。創立当時の二人による剛と柔、その後一人による剛と柔、この順序は大学の運命と全く一致し、その時代に適した方々と思われてなりません。創立の労ようやくにしてなり、内容の充実と発展に至る間の学長（昭24. 4～昭36. 6）三宅先生は、威丈夫そのもの、厳として毎日学長室に在り、電話一本で職員を手足の如く動かされました。そのものズバリ、ズバリと解決され、余計な説明は極力嫌われ、間違いに対しては時には叱声もありました。ですから用事があっても学長室に容易に入室できなかったことを懐かしく思い出します。

佐伯学長は国立移管の真只中に在職（昭36. 7～昭44. 3）され、神戸六甲台学舎の新築、篠山学舎より六甲台学舎への移転、農場の新設、移管人事等次々に山積する問題を抱へ、県当局、神戸大学、文部省への接渉と、関係諸会議の出席など席暖まる暇もなく、あの痩身、白髪で毎日東奔西走されました。

今日、この頃は移管の大事業を達成され、双肩の重荷をおろされていることと思いますが、いよいよご自愛をお祈り申し上げます。

――皆さんのお顔を思い出して――

一河の流れ、一樹の蔭に袖すり合うも他生の縁とやら、長い年月多勢の方々と接して参りました。私が前述のとおり庶務課勤務の関係上、ほとんどの方の顔を記憶しております。転勤された方、退職された方、移管された方等、大なり小なり喜怒哀楽を共にし、今日となっては一人一人を懐かしく思い出します。飲み語り合った思い出、叱言をこうむった思い出、失敗したがことなくすんだ思い出、説明に窮した思い出、卒業、入学式、親睦旅行等々の思い出――……に列なる顔を――彼や、彼女のイメージをどうしても思い出せない方は、写真台帳を神大農学部庶務係に保管しておりますのでご覧ください。参考までに申し添えます。

——卒業証書によせて——

私どうしたはずみか第1回卒業生（昭和28年3月）諸兄の卒業証書を書かされてより、最後（昭和44年3月）まで書き続けました。枚数にして1,360枚余になります。毛筆においては特にこの字はこう書けば今流行の「カッコエエ」と分りながら書けないものです。卒業生諸君にとっては、卒業を証する唯一の物的証拠で大切なものです。悪筆深くお詫びいたします。この悪筆が私であったと私を思い出していただく一つのよすがとなれば大変幸であります。「顔と字と一致しないね——……」と上司、同僚からよく冷やかされたり、賞められたり、いや冷やかされ下手で賞められているほうが多かったでしょう。しかしいずれにせよ私にとっては、奉職期間中における一番大きな高価な書き残しであります。ちなみにあの大きな証書は時価1枚150円余もするそうで値打ちがあります。書いている傍で足立経理課長から「失敗すれば150円弁償——……」と再々おどかされました。またあの大きな大学印を押すのも大変で、当初は職人を呼ぶやら、印肉を別注するやら大変でした。

——六甲台へ学舎移転によせて——

昭和41年4月から始まった神戸大学への国立移管業務は着々と進み、42年10月に至り篠山の学舎もいよいよ閉鎖、神戸六甲台の新築なった学舎に移転しましたが、当時事務系職員37名であったのが移管完了時は、14名となりました。

お互に最後までご奉公をと思いは一つであったことと思いますが、本人の職場の配置転換希望、また家庭の事情等によってそれぞれ惜別の涙をかくしつつ送る者、送られる者健康と多幸を祈り、たもとをわかったのであります。

六甲台に学舎移転とともに、私は篠山の自宅よりの通勤困難なため、上司、同僚合わせ8人（妻帯者ばかり）と共に独身生活を送ることになりました。この間（昭42.10〜昭44. 3）当局の配慮により、県庁前の県職員独身寮(春帆寮)、大学物置、宝塚職員宿舎と1年6月の間に、最後の引揚げを入れると4回もの引越しを命ぜられ、お蔭様で引越しが大変上手になりました。8名とも布団袋一つと箸、茶碗一式で、戦地での避難民を思い出す程度の荷物で至極身軽であったことは幸いでした。またこの間一度も欠かさず毎週土曜日の午後は自宅へ帰りました。土帰月来です。安らぎの場「家庭」の味を始めて知った次第で

す。

――おわりに――

昭和44年3月31日をもって、兵庫農科大学の看板は再び日の目を見ることなく、永遠に消え去ります。しかし昭和24年4月の開学から、三宅学長より佐伯学長に引継がれ培われた美わしい学風は、その後を受継がれた教職員各位、また同窓生各位によって脈々とより培われ永久に消えることがないでありましょう。六甲山上朝日、夕日に映える学術の殿堂、俯仰回顧しつつ各位のご多幸とご健康を心からお祈り申し上げ、併せて永年皆様より寄せられたご厚誼、ご指導に対し拙文の一端を借りて深く感謝の意を表し、筆を止めます。

共に暮らして20年、黒髪も霜置きて光りあり、別るとも永久（とわ）に幸あれと祈る。

（現農大庶務課主任）

ド　ラ　フ　ト

東　　順　三

六甲台の新学舎に移った現在、篠山学舎の時代をふりかえると、中身（なかみ）はほとんどそのままですが、器（うつわ）は何をみても格段の違いで、あまりパッとした想い出は浮んできません。もっとも兵庫農大が20年たらずの間に、いかに急速に充実されていったかということを裏付けるのに、不備な頃の実験室の想い出も、また一興かと思ってお許し願いたい。

完備されたドラフトを使っている今の学生さんには化学実験にドラフトがいかに大切なものか、痛切に感じないと思う。篠山学舎で、農芸化学の本館が創設された当時から10年余り使っていたドラフトは名前だけで、ほとんど排気の機能をもたず、ただ実験室の角に仕切られただけのもので、ややもすると、有害なガスが大きな顔をして部屋の中で、人間様と共存している有様でした。その後、長い間の念願がかなって実験室の大改造が行なわれ、ドラフトも換気ファンがついて、やっと安心して有害なガスから身を守ることができるようになりました。今度、六甲台の新しい学舎にきてみると、よくまとまった実験室の

壁面にスマートなドラフトがズラリと並び、名実共にドラフトも一流となり、何よりも有難いと感じたものです。

なにしろ、初期のドラフトは換気の煙突がもともとはあったそうですが、例の積雪のためにへし折られ、穴だけ残り、換気能は皆目だめで、冬にはよくスズメが入り込んでバタバタと飛びまわっているのを見かけたものです。農芸化学の卒業生なら3年目のときに体験されて、よくご存知のことでしょうが、土壌の系統分析をオーソドックスな方法でやると、酸とアルカリのガスに、しばしば接しなければなりません。そのせいで私はドラフトの不備には人一倍身につまされたのかもしれません。いかに機能の悪いドラフトでも、衛生上と同時に教育上、ガスの出る実験はドラフトの中でするように学生さんに指示するのですが、ドラフト内で発生する多量のガスは逆流して、おかまいなく部屋に入り込みます。そこで、たまりかねて部屋中の窓を全部開け、ガスを追い出してやっと凌いだものです。これこそ文字通り完全なドラフトかも知れませんが。しかし、雨が降ると外気との交流がうまく進まず、部屋に濃霧のようなスモッグが立ち込めることがしばしばでした。もっとも、あまり涼しい顔をして窓を開け放しておりますと、風下の実験室のゴホンゴホンとせき込む声に、あわてて窓を閉め、やむなく実験を中断するようなこともありました。

私自身は土壌分析にはある程度のガスはつき物だと案外気にもしていなかったのですが、学生さんの中には「珪酸分離のときの塩酸ガスだけはたまらん」といって、それだけでも、土壌の教室を専攻するのはごめんだという連中がかなりありました。

たまたま、ある卒業生のお母さんが息子さんの将来について相談にみえたことがあるのですが、そのとき、息子さんが日頃勉強している部屋として実験室を案内しましたところ、その翌日息子さんがやってきていうのには、「文科系の学校へ今からでも転学したらどうかと、昨晩下宿でお母さんに進められた」とまた急にそれはなぜかと問い質すと、「あのくさいガスのある部屋で勉強する必要があるのなら、お前の体が持つまい」ということなのです。その当時、私は研究室に残って間なしの元気盛りの頃ですから、いかにも母親らしい大げさな気づかいだなと思って、その学生に、こんなことで病気になるものかと、そ

の話をまともにとりあげなかったのです。

今となってみると、常時有害なガスに触れていると、体をこわすのがあたりまえのことで、そのお母さんの心配が至当のようにも思われてきました。

でも、もう完備したドラフトを使う、今の学生さんには関係のないことで、安心して土壌分析に精だすことができそうです。

（農大第1回卒業生、現神戸大学農学部助教授）

農大キリスト教活動

清　水　俊　秀

農大関係のキリスト教活動には三つの系統があった。

その第一はいうまでもなく、北新町の加藤牧師が主宰して居られる篠山キリスト教会であって、この教会の歴史は最も古い。その開教は明治の中葉に遡る。旧青山藩の士族で入信する人も可成りの数に上り、自然古い信者が多い。農大の中村五郎助教授の母堂もこの教会の支柱であられる。農大創立と同時に現学長佐伯教授の一家や当時の農大事務局長小松氏一家、その後ブラジルに移って行った上野氏の一家など、農大関係者でメンバーになる人が相次いだ。これらの人々の活動は篠山キリスト教会発展の歴史に永くその名が残る立派なものであった。

その第二はドイツ語の長谷部講師が学内において農大キリスト青年会を指導され、土曜日毎に祈りとドイツ語によるバイブルクラスがもたれたその活動である。彼の強固な信仰とキリスト観がいかに多くの学生達に影響を与えたことか、測り知れない。彼らは“じいちゃん”と愛称して彼に親しみ、その没後未だに5月5日の子供の日には必ず集会をもち、彼を偲び、彼を足がかりとしてキリストに接近しようという努力を続けている。彼がドイツ語の担当であった関係からその部屋に出入りする学生は医学進学コースのものが中心ではあったが、農学や畜産の学生も決して少くなかった。今田村に農大の牧場を建設するときには、長谷部先生が自ら陣頭に立ち、キャンプ生活をしながら労働奉仕を

された。金関、松本、保田、井上、本田、中井、野木、柴田、萩原、金田らの卒業生も今は医者として、あるいは公務員、あるいは製薬会社や建設会社の中堅社員として活動している。

最後に、須磨に本部のある日本キリスト教伝道隊が河原町にその伝道所を開設し、当時隣町の柏原町で布教していた英人宣教師F・スタンリー女史が黒田信子伝道者と共に赴任してこられたことである。

このようにして三者はそれぞれ三様の活動を続けていったのであるが、それらのうちで特に女性の身でありながら、異郷の、しかも古い因襲の殻に閉ざされたような、小さな城下町で、キリスト教の伝道に挺身されたミス・フレダ、スタンリーの業績の一端をここに記しておき度いと思う。

河原町の露路の奥にスタンリー先生が伝道所を開かれたのは1959年であったと思う。

先生はスコットランド・ヨークシヤの農家の出で、キリスト教の伝道に志したのは中年になってからだといっておられた。非常に明朗、そしてこれが男性ならば、大いに豁達とでもいわれるような性格の方であった。

日曜礼拝の他に附近の農村を駆けめぐって布教される忙しい日程の中で、水曜日には学生、金曜日には一般の人々を集めてバイブル・クラスを指導された。農大の学生と農大の職員が中心となり、附近の高校の先生がたも熱心に通った。

このバイブル・クラスが起ったいきさつは、教会が開かれてまもなく、農大の若い助手の一人がスタンリー先生に英会話の指導を申込んだことがそもそもの始まりで、そのときは先生は「私は日本人に神様の道を教えに来たので、英語の教師にはなりたくない」と断わられたということである。然し誰かに説得されたのか、或は御自身で思い直されたのか、間もなくバイブル・クラスは始まった。おそらく英会話は手段であって、バイブル・クラスによってキリスト教伝道を大いに努めようと決心されたのであろう。それ以来1967年8月スタンリー先生が帰国された後も、後任のエドワード師によってこの仕事は受継がれたのだが、同年10月には農大が神戸市に移ったし、それから間もなく伝道所そのものも廃止された。それは農大の国立移管問題の最後の10年間にあたってお

って、正しい大学の姿はこれ以外にはないと決心し、多くの予想される困難に自ら突入し、そして突撃を繰返えした後漸く移管の実施に漕ぎつけた年月であった。一方伝道所の先生方の布教活動はわれわれの目を見張らせるものがあったが、業績そのものはすぐには見えなかった。粉雪の降る夜オートバイででかけ、山間の村の公会堂の板の間に深夜まで待ちつくしたが、その夜は遂に一人の信者も参会しなかった。このような肉体的にも精神的にも甚だしい試練の連続であったが、「私はこのバイブル・クラスあるが故になぐさめられる」と述懐されたこともあった。

バイブル・クラスに出席する目的はその人々によってちがっていた。篠山のような小さな町では英人に直接会話を習う機会はないので、そういう意味でも大いに便利がられた。外国に留学するので出発前の口ならしとか、専門の研究論文を英文で書いては、文章を見てもらったりした。先生は元来英国で看護学校を卒業した看護婦で、南アフリカの病院で実際に医療活動に従事した経験もあって、理科系の術語には詳しかったので、研究論文の英文を見ていただくには適していた。

しかし何といってもキリスト教の伝道が本命で、バイブルの研究は奥深いものがあった。キリスト教の信仰をもつということは並大抵の訓練では達せられるものではないが、バイブル・クラスのメンバーの何人かはイエス・キリストを信じて平和を心の中に獲得するに至った。殊に学生の中には多くの受洗者を出した。

バイブル・クラスではバイブルの拝読のあとお茶をのみながら雑談をするのが習しであった。そういう時にお互の人生観が飛出すのだが、先生はそれを待っておられたらしい。私などは専らこの茶話会を楽しむ部類であった。
先生が興味をもたれたことの一つは兵庫農大の組織が大きくて、研究部門のバライティーに富んでいることであった。私の専門を聞かれたので、ケミカル・エンヂニャリンクの解説をひとくさりしたところ、それでは工科大学に属すべきではないかと反問されたりした。

あれは何年頃の事であったか、農大の職員や卒業生に自殺する人が相次いだことがある。このことが話題となって大いに議論したが、先生は先生らしく

この事実を、日本人の宗教の主体である仏教と結付けておられた。英国の職場でも競争は激しいもので、敗残者はドンドン取残されるが、彼らは決して自殺はしない。要するに自殺の行為は仏教の中に流れる諦観の思想にちがいない。今日の日本人に必要なのは「キリスト教の根本思想すなわち神の愛を信ずることです」と強く言われた。もっとも日本人の生活に滲みこんでいる古い形式の仏教には別の意味で大いに感嘆して、日本人はレリジャスだと常々いってはおられた。

春と秋の学期のかわり目に農大の校門の前に黒田信子先生とお二人で、学生や職員に伝道隊の週間行事表を手渡しながら、教会にくるようにと誘っておられた姿や、卒業式に学生の依頼を快くうけて、母親代りに講堂の一隅につつましやかに坐っておられた姿は立派だった。

1967年10月農大が篠山を引払って神戸市に移転するというその8月、いかにも、篠山での仕事は終ったといったように先生はあれだけ熱情を傾けられた篠山から、あっさりと帰国して行かれたのである。

（現神戸大学農学部教授兼神戸大学評議員）

カンボジャ調査団の頃の思い出

岩　田　久　二　雄

日誌というものをつけておらぬので、年月がとんとわからぬが、昭和32年といえば、農大は忙しい年であった。自由渡航のできる今なら問題はないが、面倒な外貨審議会のあった当時である。まえの年にカンボジャ学術調査隊を農大の自前で送りだそうという、荒唐無稽な発案をしたのである。一文の資金もなく学内のカンパを核として、何がしかの募金を手にいれて、借りた三輪車で、二人の若い学者が出発したが、当時のわれわれは、とくに悲壮にも感じなかった。それどころか楽しい希望に勇みたっていたのである。しかしこの貧乏旅行が二人の研究者にとって、いかに想像に絶する心身両面での苦労であったかは無事に帰学したときの憔悴しきった風貌が、よく物語っていた。しかしその甲斐あって、その蒐集資料はすばしい学術報告となって出ただけではなく、その

後の学内の熱帯の農業研究の気運を大いにたかめ、1964年のブラジル国の日系農業移民の実態調査にまで発展したとも思われるのである。

昭和32年には、学術調査隊として佐藤さんと高山さんがカンボジャに出かけた他、コロンボプラン専門家として松尾さんが、ベトナムの稲作指導に派遣されている。その頃には、すでに農大は現在の陣容をととのえていたのであるが、人々の間には今よりももっと活発な交流があり、多少の確執も時によってはあったが、全般的に忌憚のない楽しい全学的な会合もしばしばあったように思える。どういうわけかと、今になって考えてもよくわからぬが、案ずるところ当時の年長者たち、すなわち、浜口・三宅・森・野中・桜井・沢山(ＡＢＣ順)などの諸先輩が大様であったためではなかろうか。それはそれとして、一文なしの計画がうまく軌道にのって成果をおさめたのは、熱帯の生活と農業に明敏な洞察力と豊かな体験をもっていた佐藤さんがいたことにもよろうが、学内に台湾において長年熱帯農学を研究してきた、老若多くの権威がいて、熱意をもってこの計画を支援したことにも、また大きい理由があったのであろう。

近頃共同研究というのが名目だけははやる。しかし本当の共同研究には何がしかのお金がいる。それで共同とはいいじょう、実は分担研究であって、わずかのお金が更に細分されて、霧散する。で研究は孤独である。石壁にかこまれて独り考えてやっている。そこで大学人同志の交流が必要である。篠山では大いに飲んでいた。そして互に相手を理解し相手の能力を高揚し不屈の友情を手に入れた。いまやわれわれは石の壁の独房に封じられたさまである。これからはよく思案して、何とか草創時代の勇しい心を、お互いの友情のうちにそだててゆきたいものである。

(現神戸大学農学部教授)

農短大合併の想い出

平　林　成　志

この度兵庫農科大学史の編さんに当りまして兵庫農業短期大学の合併問題について何か随想を書くようにとの当事者から御依頼を受けまして甚だ恐縮を感

じたのでありますが敢えて拙文を呈する事に致しました。

御承知の如く兵庫農科大学は昭和24年、兵庫農業短期大学は昭和26年に発足して居りまして従って第1回卒業生は共に昭和28年4月に世に巣立って居ります。このことは共に当初の新制大学の目的に添うた業績を遂行し得て輝かしいこの種の歴史の一頁を飾ったものと存じ御同慶の至りと思います。兵庫県当局の意図に依り合併問題が起り昭和31年度1ケ年間短大は農科大学の短大部として存在し昭和32年度から完全に同心一体になり合併が完結されよくその目的に叶ったことも亦お目出度いことでありました。つらつら考えますにこの種の問題はなかなか難しいことでありまして利害問題や感情問題等が交錯してお互にインテリの団体であるだけに遂行すること自身が難事であったと想像されます。私は当時短大の図書課長を拝命しておりまして図書課事務員と二人で6年間の図書整理を行ない、農大大学院設置のための図書5万冊への拡充に挺身したことを回想して今では却って愉快感に変るとは不思議な人間心理を感ぜずにはおられません。農大と短大の合併は理性の豊かな者同志が大所高所から世の中を見た理想像の一つの具現の一つと見てよいのでありまして、どちらが蛇でも蛙でもない私はそう考えたいのであります。更に兵庫農大が神戸大学農学部に変った事についていささかも卑下を感じないで胸を張って堂々と進みたいのであります。そして農大に貢献した短大の献身的努力にも或る自負心を持って居る事を私なりの18年の体験から一種の誇りを感じているのであります。私としては形式的一流大学云々の言辞に迷わされたくないのでありまして、よく学生を指導し、研究員を培養し実力ある人間を育て得る環境を持ち得る自信こそ一流と豪語できる客観性があるものといえましょう。農大に貢献できた根拠も短大における基礎を築いたお陰ともいえましょう。私は短大において農産製造学を担当するかたわら教養の化学を兼任し理科教職に貢献できたのもその一つといえましょう。神戸大学農学部が生まれるに当り、その殆んど全部が兵庫農大の化身である事に間違いなく誠に慶賀に堪えない次第であるが、その裏付けになったものには色々の努力の結晶があったことは忘れることができないのであります。表面的の言動に迷わされることなくよく大地をふみしめて勉学し向上できる途を考えて行きたいものであります。大学院設置問題については既

に農大時代に行なわれ得たものと思われるが色々の事情で今日迄未解決であったことが遺憾であります。私が短大合併問題の折聞いてからもう約12年になるから随分検討期間があったことになります。今となっては神戸大学農学部が生れているから先ず農学部の卒業生を世の中に送ることが根本問題であって余り体裁問題や枝葉問題に精力をすりへらさないことが必要と思われるのであります。

（定年退官される。現神戸大学農学部教授。44年3月）

牧場の想い出

三　宅　睦　男

昭和36年に牧場が開設されるまでの、状況を想起すると、周囲は、加古川水系の黒石川に沿った、未開墾の、篠竹に覆われ、赤松、椎、くぬぎ、野生栗、はぜ、萩、薄、野いばら、さるとりいばら、雁の巣、つつじ等の灌木林であり至るところ岩盤の露出した、赤地の中に石英粗面岩の岩片の多い、表度の極めて少い、いわば、極めて瘠薄の土地であった。

当時、開墾の直接の任に当られたのは主として、佳山良正先生と居垣千尋先生及び畜産学科の諸先生と学生諸君で、牧草地の開墾整地、畜舎及びその他の建物敷地の造成、牧道造りに専念した。

牧場の四季は実に変化に富んでいる。春は野つつじにはじまり、山桜、木蓮、ほうの木の花と香、秋には樹木は紅葉する。 野鳥の種類も多い。 やぶ鶯が鳴き、ほととぎすの声も聞かれる。せきれい、めじろ、もんつき、山鳩、ひよ、河がらす、鴨等。其の他、虫類も極めて種類が多い。いまだ、自然の環境がそのまま保存されているといってよい。

牧場開設当時は、電灯もなく、石油ストーブ、石油ランプで一冬を過し、谷間の流水を飲料水にとり、川の水で米を洗い、思わぬ大雪に驚かされ、雪を知らぬN君の心細い顔、それを紛らすべく「こんな雪は北海道では何んでもないよ」といいながら、心中これは、えらいことだと思い、部屋の中で零下12度にも降り、窓ガラスに氷の結晶が張り、北海道なみの寒気に驚かされた。

昭和37年に鶏舎が完成した。その年の6月にわれわれの最初の仕事である産卵鶏を入れた。計画当初は、雛の育雛からはじめるつもりでいたが、収入予算の関係上、成鶏を岡山県下の種鶏場から購入した。家畜、家きんを購入する場合、まず、考慮に入れなければならない鉄則は、病気の伝播である。丁度雨期であった、輸送中に斃死するものがあり、その結果は、病鶏を育成するしまつ誠に情けない状態であった。その年の産卵率は、40%弱であった。

同年の7月に篠山農場で飼育していた乳牛4頭を受け入れた。これが、牧場での酪農経営の第一歩であった。これらの牛は、故沢山智先生が、北海道十勝の明治乳業の牧場から、兵庫農科大学畜産学科に寄贈を受けた、第2、アーチス、ダツチ、ヘロドラ、その子の、アーチス、ストレーター、ドラ、及び、孫のアーチス、グローリー、ピアレスと雑種牛であった。親牛の、ヘロドラは既に繁殖障碍のため廃牛同様であった。その子、ドラは月足らず出産の小柄な牛で、放牧にも慣れず、幾度か、鼓脹症をおこし心配させられたが、その後その子、ピアレスと共に順調に成育し、毎年分娩してくれた。牧場の功労牛である。この牛によって、畜産学科の学生は搾乳を勉強した。またその子は、現在牧場繁養牛の基礎牛となっている。

病気及び事故のため死亡に至らしめ、また、廃牛としたものは、分娩後、腸捻転のため1頭、分娩後腰麻痺及び繁殖障碍等のため廃牛処分にしたもの数頭である。これ等は要するに、われわれの飼養管理の適切を欠いた結果といわれてもしかたのない場合が多い。家畜を飼養する場合、大切なことは、色々と考えられたが、今も昔も、まず、不断の愛情と細心な注意力、観察力が必要なことが痛感される。

牧場なり、農場での酪農を考える場合、その土地に適した牛を造ることが大きな仕事となる。この牧場で実際に知り得たことは、傾斜地で放牧され、運動の十分な牛は、四肢は丈夫であり、蹄は硬く、削蹄は行なわなくても、形が整い腰が充実してくる。従って、分娩と極めて軽い。7年間に分娩のための事故は極めて少ないし、産後も経過がよい。

牧場で飼育され、育成された乳牛の大半は、沢山先生の導入された乳牛の子孫である。基礎牛が如何に、その牧場で重大な意義をもつか、また、その遺伝

的素質が如何に大切であるか、長年畜産に携わっているわれわれが実際に知り得た体験である。

牧場の経営は複雑である。その年の収入が計画通り行くことが望ましい。しかし、もっとも重要なことは、基礎となるべき家畜を、経営者の技術、知識に応じて造り出すことであると信ずる。その年の収入は、家畜生産物の価格によって毎年多少は違う。しかし、立派な家畜を持つことは、更に、経営の基礎を確実にする。

この牧場は昭和43年度で終了することになっている。その跡には、田園学校が造られる。緑の放牧地も、むざんに乱され、昔の自然はなくなるかもしれない。しかし、ここで育成された、乳牛や豚の血液は、新しい農場に引き継がれることになる。

（農大助教授、附属牧場長）

加古川農場草創時代の思い出

秋　田　謙　司

加古川農場は昭和32年に農短大廃止後の研究室の一部と隣接する横蔵農場、それに約2 *km*北にある稲実農場を併せ兵庫農大附属農場として発足した。

当初私は主として稲実農場で勤務したが、初めてこの農場を訪れたのは昭和26年に農短大が創設されて日も浅い初夏のことであった。圃場で働いている作業服の人に農場主任の所在を尋ねたところ、その人が当の林助教授だった。この農場は県立農学校と青年師範学校の生徒達によって戦時下に開墾され、食糧増産と勤労精神涵養を目的に運営されてかっては時代の脚光を浴びた歴史があった。将来の基本方針も確立されぬまま継承されたが、教育理念の転換期を迎え学生実習の場としての体面を保つことは容易ではなかった。乏しい設備に依存した経営が行なわれ、林助教授以下教職員達は毎日鍬、備中を握り、手に「たこ」をつくり、肥桶かつぎによろめき、汗と埃にまみれた努力が続いた。このような状態の中でともすれば挫折しようとする職員達の心もいつしか作物の生長に喜びを見出すようになったのである。果樹類も次第に増植され、家畜群も

飼育されるなど漸く綜合農場としての形態を確立するに至ったが、農短大廃止問題で再び混乱に遭遇したのであった。

農短大跡の校舎と農場を統括し加古川農場として発足し、初代農場長桜井教授を迎えた時は過渡的混乱の後だけに未だ幾多の困難な問題が残されていた。研究室の処遇は一つの重要な課題であったろうと思われる。

農場は作業員の転出で運営の壁に直面し、それぞれ経営形態を異にして運営されて来た二つの農場は現状打開に苦慮し、過去の状態から脱脚して共に連繋を保ち協力したがなかなか容易なことではなかった。私など農場を思うあまりとはいえ桜井教授につよく打開策を要望したが、今にして諸般の事情を考えると若さのためとはいえ全く汗顔の至りである。却って調査研究の必要性を強調され、単なる農場運営に終ることなく恵まれぬ条件の中でも何かを得るようにと叱咤激励された。殊に甜菜の研究については種々御指導を賜わったのは感銘深いものがあった。桜井教授の高度の識見により、多くの問題も漸次処理され、農場の経営内容も次第に改善され、再び果樹等の増植が行なわれるまでに至った。

昭和36年桜井教授の後を引継がれた松尾農場長は、残された問題を着実に解決され、加古川農場の発展に尽力された。農場変遷の過程で多くの体験をした教職員達は、高潔な人格者松尾教授のもとで相互の信頼と協調性が急速に深まり、多少の労苦など厭わず家族的な雰囲気の中で積極的に職務に専念した。人事の移動に伴って研究室は廃止され限られた人数となったが、経営の合理化と共に農場は楽しい職場として高度の進展をみたのである。

農家の圃場が永い世代に亘って耕作を継承され生産基盤の上にたって経営されており、その間多くの人々が苦闘を経たであろう事実などは直接栽培にたずさわる者を除いてはとかく見落されがちである。まして学校農場は悪条件下でも学生達が講義で受けた農学理論を体験する場として形態を整えなければならない。彼等が農場で作物に接する時納得しうるような生育が行なわれていない場合は、学校農場の存在意義は低下し、ひいては講義に対しても疑義を抱き、農学に対する情熱にも影響を与えるおそれがある。

歴代農場長のもとに林助教授をはじめ教職員達の努力で学生実習の場として形成されて来た加古川農場は、周囲を田園と溜池に包まれ、春には遙かに霞む

裏六甲の山塊を背景に一際あでやかに梅、桃、梨などの花が咲きほころび、近在の人々の眼を楽しませる。稔りの秋には落日を背に遠く瀬戸の海を隔てて家島、小豆島の島影を望み、繰り拡げられる豊かな作物群は職員達の労苦を忘れさせるのであった。

やがて消滅する運命の加古川農場の今昔を思うと一入感無量なものがある。

（農大加古川農場助手）

思　い　出

河　南　保　幸

大学を出てから、既に5年余の歳月が流れている。聞けば、私達の在学した頃が農大完成期にあたるそうである。私自身、この「完成期」という言葉はあまり好きではない。というのは、歴史のいずれの時代においても、それは衰退あるいは崩壊の前兆を意味するからである。篠山で生まれ育った農大は六甲台の地に神大農学部として受け継がれ、その発展の歩みを止めることはない。

ここに、学生時代の雑然とした、そして、断片的な思い出を羅列し、その当時のことをふりかえってみたいと思う。

学　歌

どういう時であったか、はっきりしないが、おそらく入学式においてではなかったかと思う。学歌なるものを聞く機会を得た。元来、学歌というものはそこに学ぶ若者達の気風を発揚するためにあるものであるが、聞こえてきたリズムは威勢の悪いものであった。正直なところ、なんと歯切れの悪い学歌であろうとうんざりしたことを覚えている。

1年目の後期に入ってから、友人に誘われるままにコーラス・グループに加わって、講堂横の小部屋でピアノを囲んで美声ならぬ微声をあげていたことがあった。ここで最初に練習したのがこの学歌であった。実際に自分で歌ってみても気がのらない。また、大学祭などに引張り出された時にも口だけは一人前に開けてはいるが、心の底から歌う気持ちにはならなかった。とにかく、大声でがなりたてられるような歌ではなかったようである。

学歌に対してこのような気持ちをもったのは、私一人だけではないようである。というのは、ある人から聞いた話であるが、卒業後いろいろな機会に学歌を歌わなければならない場面に遭遇することがあるそうである。そんな時には第二学歌と称して「デカンショ節」をどなることもあるという。母校の学歌を堂々と歌うことができないとはなんと情ないことか！　ちなみに、今、学校が咄嗟に口をついて出る人は案外少ないのではないだろうか。

しかし、最近、ようやくこの学歌に非常な愛着を感じるようになっている。それは農大創設当時の心意気が折にふれて私を鼓舞してくれるからであろう。今更ながら、作詞者および作曲者の慧眼に頭のさがる思いがする。

いずれにしても、学歌は私達の心のよりどころとして、生涯忘れ得ない心の調べであってほしいと思う。

あと数カ月で兵庫農科大学という名前は過去のものになろうとしている。このような時機に臨んで、学歌を思い出し、口ずさんでみるのもあながち無意味なことでもあるまい。

コンパ

学生時代の思い出の中で楽しかったことといえば、なんといってもコンパであろう。

国語辞典によれば、コンパとは学生の用語で「小茶話会」のことをいうとある。「茶」が「酒」に変わることはいうまでもなく、「小茶話会」程度では飽き足らず、「大酒乱会」になることもあった。

3年目の解剖実習で山羊を屠殺した時のことである。剝皮が終って、筋肉の観察が始まった頃、だれかがこの肉を失敬していって一杯やろうと言いだした。それは妙案ということで、ささやかな宴を催すことにした。解剖台の上によこたわる肉の塊はいささか食欲をそそるものであったが、焼きあがった肉を口にほうりこんでみると、とても食べられるものではない。煮ても焼いても食えないとはこのことをいうのであろう。なんとも、拍子抜けのしたコンパであったことを覚えている。また、ある時は仮装行列でせしめた一升瓶を桜並木の下でとり囲んだこともあった。

学生の特権とでもいうべきものであろうが、この時ばかりは、どんなに羽目

をはずしても、なんの気兼ねもいらない。陽気に歌い、騒ぎ、あるいは、怒鳴り散らして日頃の鬱憤をはらす。これがコンパなるものの醍醐味であろう。とにかく、愉快な一時であったことにはちがいない。

その当時は飲んで騒ぐだけでなんと時間の浪費であることかと思うことも少なくなかったが、今となってはなつかしい思い出でいっぱいである。コンパのことを思い出す度に友人の顔が浮んでは消えてゆく。無意識のうちに、人間と人間との触れ合いの大切なことを体得していたのかも知れない。

人間は社会の産物であり、社会というものを離れてはその存在はありえない。どのような場合であっても、お互いに心ゆくまで話し合うということは重要なことなのではなかろうか。

（農大第9回卒業生　現神戸大学農学部助手）

Ⅳ　国立移管編

思い出すまま

吉　村　貞　彦

何故兵庫農科大学の体質改善が必要であったか、そしてそれがどのような経過をたどって現在の5学科27講座におちついたかは、重ねて述べることは避けたい。だが、この学科編成の組かえにあたっては、農大教官は勿論、外部の方々を含む多数の関係者が長期間にわたり、非常な努力と勇断を傾けて、漸く実現したものだけに、勿論色々な裏噺はつきもので、私は私なりに思い出せば限りない。

今は故人になられた三宅前学長先生のご在任中、私は代理を仰せつかり、不敏をも顧みず上京して、県と神戸大学から委嘱されて、委員となった3名の有識者の方々の作成した、新しい農学部の学科編成案を、我々農科大学当時の実情をつけ加えた改正組織案とを、どの様に調和させるかについて当の委員の方々と会談した時のことである。この委員のうちには、初めから農大を地方の田

舎大学と見下げてか、「研究は東大に任せ、そちら（農大）は教育一本槍で行け」とか、「新しい組織に組かえてはみ出される教官は高校の先生になれ」とか随分こちらの勘にさわることをづけづけとおしつけがましくいう人がいた。こちらもたまりかねて「先生はこちらの立場だったら、あっさり高校へ転出しますか」なんて応酬したりで、すっかり座を白らけさせ、何等稔りのない会合に終始してしまったことは、今顧みて、大人げなかったと思っている。

この席に同行された望月さんは、あとで、くさりきっていた私を懇ろに慰め又励まして下さったこと、又その折出席された当時の教育課長竹内さんが、会議終了後砂を噛む様な面持ちで、夕方の銀座をしょんぼり歩いておられたのも、脳裡から消えやらない。しかし、もしこの時委員の示した案通りで農大が体質組換を遂行されていたら、今はどうなっているかを考えると、全くぞっとする。

これより少し前だったと思うが、前記の委員の方々が篠山に視察に来られた頃、三宅先生のご心労はおそらくご在任中での最絶頂でなかったかと私はお察ししている。委員の方々との会談は相当長時間続いたが、その間先生の極度に緊張しておられたことは今でも私の目前を彷彿する。会議終了後、本部建物裏の側溝で先生が足を捻挫されたのもその時である。

このようなことがあってしばらく国立移管は実質的に進展しなかったのであるが、三宅先生は後事を佐伯教授に托されて引退されたことはさぞかし、心残りであられたと思っている。しかし二代目佐伯学長の異常な熱意、誠実あふれる献身的なご努力で現在のような輝やかしい成果をあげられたことを、三宅先生に今心からお喜びいただいていることと思っている。

現在の5学科27講座への組換えは、こちらを立てれば、あちらが立たずという難局にぶつかったが、そのあおりをくわれた一部の方々の深いご理解と限りないご協力とにより何んとか実を結び、他大学農学部には追随できない独特の機能を発揮できるような体質改善が行なわれたことは、立案にたづさわった一人としての私も心から感謝しつづけている。だが、これについて、一部の方々に今まで努力に努力を重ねて来られた、いわば生命ともいうべき研究の方向を大幅に転換して下さいという無理をお願いというより、むしろ強要した私の暴

力には、私自身として今でもその大それた仕草にとても心をいためつづけている。この悔悟の念は私にとり終生つきまとうことであろう。と同時に、今後できるだけ早い機会に学科、講座の増設、組更えが行なわれ、皺寄せを余儀なくされた方々が本然の姿に立戻っていただきたく、心から希っている私である。

佐伯学長のことを書こうとしたが、さて何をという段ですっかり戸惑ってしまった。何しろ佐伯学長と私とは40年以上の知り合いであるからだ。あまりに材料は多すぎる。しかし一言にしていえば、佐伯学長は情味あふれる全く立派な人格者である。

農大から今日の農学部への輝やかしい転換が全くスムーズに行なわれようとしているのも、ひとえに佐伯学長の人格によるものと文句なしに信ずる。過大評価されてか、又は長年にわたるくされ縁のせいか、私は佐伯学長の相談相手にされたり、苦楽を共にさせて貰ったり、おかげで何一つ不平不満も覚えることなしにずうっと過ごさせていただけたことは、三宅先生のご在任中もそうであったと同様いくら感謝しても尽きるものではない。

我儘をしてこの文の原稿をぎりぎり迄引き延ばしたため、農科大学の廃校となる本年3月末をもって佐伯学長が引退されるという寂しい事態に遭遇したことを述べることができたのも一つの宿命であろう。農大と運命を共にするという立派なお気持ちはよく理解できても、又、限りない皆さんの愛措の情の披瀝でも、固い学長のご決意をひるがえし得なかったのは、くれぐれも残念で、偉業をなし遂げられた佐伯学長の引退されることに呆然となったのは私だけではないことは勿論である。大学の長い歴史を通じて国立移管というような特殊なことは全く稀有のことであり、佐伯学長は前三宅学長と同様、学長として確かに働き甲斐のあった在任期を持たれたことは大いに自負していただきたく希っている。（44. 2. 11）

（現神戸大学農学部教授兼神戸大学評議員、農大学生部長）

思い出の中に

竹　内　照　蔵

本県は医・農・工・商の四大学を設置し……その充実を図るとともに、大学教育につき国立大学の補完的役割を果してきたところでありまして…しかし…県財政の現状及び将来の地方財政の見透しの上に立って種々検討した結果、県立大学を今後維持運営し、大学としての機能を更に伸張せしめ、充分な教育効果を挙げることは到底至難であると思料されるのであります。…」。これは昭和34年県会議長から自治法に基づき国へ提出された県立大学の国立移管に関する意見書の一節であります。意見書は更に続けて、神戸大学は総合大学として最も重要な医・農の学部を欠いているので県立の医大と農大を神戸大学へ移し商大と工大は現地で国立大学にすべきだと主張したのであります。

昭和30年頃から県財政は極度に逼迫し、遂に再建団体に転落してしまいました。自治省はその原因が大学にありとの指摘です。文部省は県は大学を創っておいて、苦しくなったから国に引き取ってくれとは何事かと剣もほほろで取りつく島もありません。阪本知事さんは「君！大学は国でやるべきだよ。県は高等学校、市町村は小中学校」と、ずばりおっしゃる。一体公立大学何処へ行く？当時教育課で大学係を担当していました私は真剣に考えました。

昭和30年の暮れ、県立大学連合協議会が知事に出した答申中にも「…かくの如き使命をもつ大学なるものは、一度これを設置したからには、いかなる困難あるも、その永遠の発展を計るべきであって県財政の緩急により、濫にこれを改廃すべきではない……」と悲愴なるものがありました。これを受取られた寺畑総務部長さんも真剣そのものでした。

当時農大からの委員であった三宅、森、野中の三先生はともに故人となられてしまいましたが、三宅学長さんは私が大学を訪れるといつも、将校集会所だった学長室に坐って、度のきつい近眼鏡の奥からじっと私をみつめながら「僕はね、農大を引受けてやってくれというので来たんだよ。県でやれんというのはどうかね…」と訥々と諭されるのでした。

私は大学の学部のうちで一番農学部がいいなあと篠山へ行く度に、しみじみと思うのでした。第一大学全体がコセコセしていません。北大の血が流れていた

のかもしれません。構内の桜並木、ポプラの林、良い気になって桜並木の草むらに腰をおろすと牛の小便の嗅いがします。豊かな自然が人の心の中にもありました。しかし余りにも自然すぎて大変責任を感じていましたのは学舎の整備でした。明治40年に建てられた篠山連隊の学舎はまだまだ土台はしっかりしていましたが、半分程の棟は手入れもできず荒れ放題。いくら予算要求しても、現地移管か移転移管かで方針決定せず、お手上げの格好でした。青天井の見える腰板のとれた兵舎がいつの間にか学生の工夫で空手拳法道場の看板がかかっていたり、北西隅の一棟が板を打付けて学生寮に化けてしまったりしました。学生もようまあこの化物屋敷に住みついたもので、瘴癘蛮雨の未開地のパイオニアーたらんとする学生の修練蕃地小舎だと学長さんに皮肉られたものです。その南西にありました先生方の単身平屋住宅もまことにおそまつなものでした。夏など訪問しますと、夏草が窓から覗く部屋の中で蚊やりを焚いて平然と読書三昧に耽っておられる先生もありました。

農場は小さなのがあちこちに飛んでいました。農業短大が廃止になって加古川の二つの農場が増えてからは更にヴァラエティに富んだものになりました。36年地元の援助で黒石川の清流に橋を架け、山裾を開墾して今田牧場ができました。美しい牧草が萌え、サイロの塔が建ちました。下流にダムができるので湖畔の牧場を夢みていましたが、そのうち移管条件の先行整備のため一大農場を創設することになり、この牧場は43年度に一谷教育長さん発案の田園学校のベースになりました。うまいこと考えよったと感心しています。

一大実習農牧場適地探しには寺畑総務部長さんや、佐伯学長さん、松尾農場長さんらと方々歩きまわったものです。最後に中播のうづらのに決り開発公社もこの買収や整地にお手伝いしたそうです。植村、箱根課長さん時代の苦心の程が偲ばれます。

農大移管で三宅、佐伯両学長さんや諸先生方が一番心を痛められたのは、何といっても学科再編成と教員人事でありました。ユニークな文部省の基準に合った学部に再編成することが移管条件整備の中心課題でした。35年の吉田、大

槻、戸苅案は立派でしたが、大改変を伴うので実現せず、37年に委嘱した井上、香川、斉藤案が基礎となって39年4月移管に先だち大改組が断行されました。この苦心談は尽きません。当時の長浜大学係長さんは苦労しました。

現地移管が不可能ならばどのようにして地元を納得してもらうか。当時の一谷総務部長さんの大活躍が偲ばれてなりません。

このようにして学科の再編成、六甲台への移転、大農場の新設等々着々条件整備がととのいましたが、金井知事さんの副知事時代からの終始一貫した考え坂井副知事さんや総務部長さんの活躍、代議士、県会議員さんの熱心な工策、そして大学側の苦心と熱意。思えば十数年間の長い悪戦苦闘でした。

兵庫農科大学は今や都会の真中に移って立派な学舎ができました。やがて総合大学の一学部として融けこんでしまうでしょう。そしてデカンショ節を歌った篠山のあの古ぼけた学舎は美しい丹波の自然とともに私の思い出の中にのみ生きのこることでしょう。（昭和43. 8.31）

（農大完成期の県教育課長）

農業土木の年輪

後　藤　定　年

兵庫農科大学で講義をするようになったのは、昭和26年5月1日、農業工学非常勤講師の辞令を受けてからのことである。期待に胸をふくらませながら、宝塚駅から福知山線の列車に乗車した。ローカル線のことで国鉄のサービスは悪く、また客車の中はいわゆる飛脚さんが所せましと占領していて、先ずどぎもを抜かれた思いであった。用心のため、切符は本篠山まで買って乗車した。列車の進行にともない本篠山と篠山口のいずれの駅に下車したものか迷うほどに、篠山口駅に到着した。

ここでひとまず下車することにしたが、丁度待ち合わせていた神姫バスに乗り換え、篠山町に向った。バスが進むにしたがい、次第に篠山盆地の景色が眼前に展開してきた。周辺にそびえる古生代の連山は都市からの騒音をさえぎる

ようにつらなり、湖面を思わせるような緑の篠山平野を、篠山川は静かに東から西へ流れている。閉ざされた幽すいな感じを与える景観に心ひかれたが、また、学園都市としては最もふさわしい環境であるという印象を受けた。

学舎は旧兵舎そのままの形で、1部改装されて使用されていたが、校庭の樹木は年を経た優雅なもの多く、ことにそめいよしのの桜並木はひろびろした校庭に華麗な風情を添えていた。これが篠山町の重要な観光資源であることを後から知った。

丹波篠山といえば民謡にもあるように、どんな田舎かと思っていたが、かなり開けた明るい城下町であることがわかった。

昭和27年9月1日、兵庫農科大学専任の発令があり、職業教育と農業工学を担当することになった。そのとき手渡された学生便覧を開いてみると、それには兵庫農科大学の教育の目的と使命が、わが国、特に兵庫県における農業全般の発達に貢献するために農学の学理と応用を研究し、教養高き農学者、農業技術者および教育者を養成することにあると明示してあった。従来とことなり大学教育の目的の中に教育者養成が特に取りあげられていることは、新制大学制度における一つの特徴でもあり、教員養成制度が解放的になった結果と考えられる。

このようにして養成された教養高き農学者および農業技術者がわが国、特に兵庫県の農業の発達に貢献するためには、一部の進学者を除いては、まず、産業的機能の分担に参加することが前提であり、職業に就くことが必要である。しかしながら、国家公務員または地方公務員になるためには職種によって定められた採用試験に合格しなければならない。また、会社員になるためにもそれぞれの会社の行なう激甚な競争試験を通過する必要がある。当時は全国的な経済不振が影響して、求人に乏しく、大学の卒業生はあげて就職難に悩まされていた。兵庫農科大学の第1回卒業生も例外ではなく、会社方面の就職も困難であり、また、公務員試験関係では、これに合格したものがなかったということである。

昭和26年4月発行の学生便覧を見ると、農業工学に直接関係ある学科目としては次の表に示すようなものがあげてあった。

学科目	単位数		計
	3年	4年	
農業工学	3		3
同実験及び実習	1		1
土地改良学	2		2
測量及び測地学	2	2	4
農業機械学		4	4
計	8	6	14

当時兵庫農科大学においては農業工学が農学科の中にあって、1講座で構成されていた。したがって、1講座で農業土木学と農業機械学とを担当することになるが、教育の目的と使命にあげてあるような農業土木と農業機械の教養高き学者と専門的技術者を養成することは至難なことであるといわねばならない。このように学則によって定められている学科目だけでは公務員試験を受けるにしてもすこぶる不備であると考えられる。したがって、これによって農業工学専攻生が農業工学職の公務員試験を受けるに充分な実力を養うことはほとんど不可能に近く、また、その反面、農業工学専攻学生が農学職で公務員試験を受けることは一層不利であると言わねばならない。

なお、一方当時の世論においては、わが国の産業経済の発展および、国民生活の向上の基礎をなすものは産業教育であるとして、これの振興を図らねばならないということが次第に強調されるに至り、昭和26年6月には産業教育振興法が公布された。これの施行によって農業教育の振興と強化の機運がひとしお盛り上げらることになった。

現状のカリキュラムでは到底農業土木の専門的技術者および学者としての学術を修得させることは困難であるということから、昭和29年には学則の一部を改正することになり、次のように農業工学に関する学科目を増設し、教育内容の強化と充実が図られた。

学科目	学年			計
	2年	3年	4年	
農業工学	2	2		4
農業水利学			2	2
測量学		2		2
土木材料施工法		2		2
応用力学		2		2
農業工作			2	2
農業機械学		2		2
農業工学設計			2	2
農業工学実験		2		2
計	2	12	6	20

このようにして農業工学に関する教育内容が充実されるようになったが、担当者の増員は認められなかったため農業土木学教室の担当者においてはかなり過重な教授が続けられた。しかしながら、第2回卒業生のうちからは農業工学職の公務員採用試験に合格するものがでるようになったが、これによって担当者の意図は一部報いられたわけである。

昭和33年には学則のかなり広範囲にわたって改正が行なわれた。その主な点はまず、兵庫農科大学の教育目的が農学に関する学理とその応用を研究教授しもって文化の向上と人類福祉の増進に寄与することとされ、その目的が一層広く高められたと同時に、農学科が農学系、農業生物学系、農業工学系および農業経済学系の4つの専攻課程に分けられたことである。したがって、専攻課程別に独立したカリキュラムを編成することができるようになった。また、教育の目的の条文から教員養成の項が除かれたが、教育職員免許状の取得ができることにおいては従前どおり変わりなかった。

農業工学系専攻課程の学科目編成にあたっては農業工学の専攻学生が農業土木および農業機械の専門的技術者および研究者としての学術を修得できるように、可能な範囲において、学科目の種類と単位数を増加し、拡充することを図った。

当時の国家公務員採用試験においては試験科目と内容について範囲が拡大され、採用学力も引きあげられていた。農業工学職専門試験の第1部択一式による筆答試験では、試験科目が数学、水理学、応用力学、測量、材料および施工農業水利、農業造構、農地造成、土地改良、農業機械、農業一般、農業経済一般であり、第2部の記述式による筆答試験においては水理学、応用力学、農業水利、農地造成、土地改良、農業機械のうちから一種を選択することになっていた。したがって、農業工学系のカリキュラムを編成するにあたっては現在の担当者によって負担し得る許容の最大限度にこれらの学科目を採択し、次のようなカリキュラムを編成した。

学科目	2年	3年	4年	計
農業工学	2	2		4
農業水利学		4		4
農業造構学		4		4
農地造成学		4		4
土壌物理学		2		2
測量学		3		3
農業機械学			4	4
農業動力学		2		2
応用力学		2		2
農業工学実験		2	2	4
農業工学演習		1	1	2
農業工学設計製図		1	1	2
計	2	27	8	37

兵庫農科大学に転任した当時においては研究費その他の面で国立の大学に比較し多少上回るようであったが、県財政が次第に窮迫し、兵庫県が地方財政再建公共団体に指定されるようになった。この頃から次第に国立移管の問題が表面化し、県会においても兵庫農科大学の国立移管の最終方針が議決されるに至った。

当時わが国経済成長の重心はすでに工業に移り、工業を中心とする他産業の

驚異的発展は農業との格差をますます拡大する結果になり、わが国経済の発展過程において、農業がいわゆるターニングポイントに立つはめに陥っていた。

昭和36年6月農業基本法が公布され、高度成長をたどるわが国経済の中で、農業の進むべき新たな道が明示された。ここにおいて根幹的地位を占める政策は農業構造改善であるが、その目標は経営規模を拡大し、その経営の近代化により、労働生産性の高い農業生産を実現するとともに、農業従業者が他の産業従業者と均衡する生活を営むことができるように生活水準を高めるところにある。また、構造改善政策を支えるものは生産性の向上にあり、これの実現には先ず生産基盤が整備、開発されるとともに、近代化設備を導入し、農業技術の高度化を図らねばならない。農業生産基盤の整備と開発にはまず土地および水の農業上の利用および開発を目的とする土地改良事業が必要であり、農業技術の高度化には従来の小農技術から転じて、機械化を図るとともにこれに適応する農法の確立と、技術水準の向上とを図らねばならない。このような近代化に基づく機械化には、大型機械の導入を必要とし、この目的を達成するためにはまた、農道の新設、かんがい排水施設の整備、区画整理による水田の拡大化など大規模な農業土木事業の施工を実施しなければならない。

このように、農業構造改善の施策が推進されるにしたがい、経済社会においては近代化された高度な技術に修熟する農業従業者を必要とし、また、農業構造改善の新たな構想に基づく指導者と研究者の養成が要望されるようになってきた。

わが国経済の高度成長に伴ない、大学の農業教育に対する要請も急激に変動したが、従来の大学の組織と機構によってはもはやこのような経済社会の要望に答えることが困難となり、これが大学の体質改善を促す契機となった。

既に高等学校の農業教育においては、農業教育近代化促進費によって、昭和37年度から3年計画で園芸科、農業科の体質改善、農業製造科、農業土木科への転換に対し補助が行なわれているが、わが国大学の農業教育においても進展する経済社会の要望に即応するように、多くの大学において学科の新設と編成がえが実施された。同時にまた、大学の自主的体質改善によって、農業教育体制の調整と再編成とが活発に行なわれるようになった。

わが国の大学における体質改善の実情を見ると、総合農学を有する大学においては、まずこれを編成がえし、体質改善の実をあげている。この再編成にあたり、ほとんどの大学が農業工学科を新設した。しかしながら少数の大学ではあるが、体質改善の主旨により、その内容を表現することができるように、新たな学科名を付したものもある。

兵庫農科大学においては体質改善を実施した後、国立移管する方針が決定され、教授会もこれを承認した。

大学を近代化し体質改善するため、まず、学科の編成がえを実施することになったが、専門課程における講座数を変えないで、園芸農学科、植物防疫学科および農業生産工学科が新設されることになり、農芸化学科および畜産学科を加え学科数を5学科に増設することが、昭和38年9月3日の教授会において決議された。ついで文部省の認可を経て、昭和39年4月1日から園芸農学科、植物防疫学科とともに農業生産工学科が増設されることになり、ここにおいてようやく農業土木学が一つの講座として独立することになった。

また、昭和43年5月21日には建設省国土地理院によって、農業生産工学における測量に関する科目が、測量法第50条第1号および同法第51条第1号に規定する測量に関する科目として認定されることになり、農業生産工学科の卒業生は無試験で測量士補、卒業後測量に関し一年以上の実務経験を有するものは測量士となる資格を有することが認められた。

しかしながら、他大学の農業工学科が農業土木学に関する講座を少なくとも2講座以上を有することからすれば、これらと比較し農業土木学教室の運営にはきわめて過剰な負担が避けられないが、最近農業土木学専攻を志望する学生が逐年増加する傾向にある現状においては、このような困難を克服することに最善を尽し、教育と研究の効果の実をあげていくことがこれからの農業土木学教室の課題でもあると考えられる。

なお、一般学生と専攻学生の教育に追われているが、農業土木学教室が続けてきた主な研究題目には次のようなものがある。

1　篠山川沿岸における水田土壌の物理的性質に関する研究。

2　篠山盆地における湿田の特性に関する研究。

3　水田に発生するき裂に関する研究。

4　かんがい用水の水質と汚濁に関する研究。

5　水田における機械化に関する研究。

6　神戸層群における地すべりに関する研究。

7　地すべりによる現地 C．I．P．の抵抗力に関する研究。

8　地すべり防止鉄筋コンクリート杭の抵抗力に関する研究。

9　建設機械（ブルドーザー、パワーショベル）に関する研究。

10　爆薬による竹林の開墾に関する研究。

また、学外からの依託による調査、研究もかなりの数にのぼっているが、このうちの主なものとして、兵庫県および神戸市からの依託による調査研究がある。

兵庫県からの依託調査研究には、篠山川沿岸における水田の単位用水量の調査に関するものなどがあるが、主なものは六甲山系と三田市の間に広く発達する神戸層群に発生する地すべりの防止に関するものである。兵庫県における第3紀層地すべりはわが国でも有名であるが、これが発生の原理を究明し、その防止対策確立に貢献するところが多かった。

また神戸市においては、渦森および須磨アルプスなどの六甲山系を開発することによって宅地造成を行ない、掘削した土砂をもって臨海地を埋立て、工業地帯その他ポートアイランドなどを建設し、大国際港都建設計画の工事が進められている。このような工事の進展によって、かんがい用水の水源である六甲花こう岩流域が改変されることになるが、これが水田のかんがい用水の補給に支障を与えないようにあらかじめ対処すべき方針を確立するために必要とされる調査研究などを依託されている。その他、長尾町、八多町、大沢町の共有林の調査および岩岡町のため池調査などがある。（第3章第3一要表受託研究参照）

このようにして、次第に農業土木の年輪は重ねられてきたが、兵庫農科大学の農業土木学教室が担当した教育と研究および社会に対する貢献と奉仕において、たえず絶大な協力と援助とを受けた、農業生産工学科、農業工学および農業土木学教室の教員と専攻生に深甚なる謝意を表する次第である。

（現神戸大学農学部教授）

5学科27講座と附属図書館

小　野　　豊

昭和24年4月、旧篠山連隊のオンボロ木造兵舎趾に、兵庫農科大学が文部省告示第26号によって、農学部農学科という，ただ一科だけで開設されてから20年の歳月が流れた。その間、昭和26年には農芸化学科、畜産学科が増設され、同39年には大幅な体質改善の結果、新たに園芸農学科、植物防疫学科、農業生産工学科が増設されて、完全27講座が整備された。また国立移管の条件としてではあるが、40年10月には神戸市六甲台に6階建、1万5千㎡の学舎が竣工した。未曽有の敗戦後に創立されてから、わずか20年で完璧の域に達するには、いまだほど遠いものであることは、私ども自ら認めるところではあるが、今日学科編成、教員組織、施設、設備などについても、一応の水準に達し、他の一流大学農学部に比しても、それほど見劣りしないところまで、こぎつけたものと考えられる。

由来、大学は学問研究の最高の場であって、真理の探求を使命とし、その成果は人類、社会の福祉に貢献すべきものである。大学は特殊の目的のための研究の場ではなく、純粋な立場に立つ学問の場であることはいうまでもない。農学研究の場においても、その研究基盤の上に農業の発展が期待されるべきものである。本学が昭和39年に行なった大幅な体質改善もこの見地に立脚したもので、国が昭和36年に制定した農業基本法の構想に対して、いたずらに迎合したものではない。しかし、わが国農業の体質改善、構造改善が必至であり、これに伴なう農業生産の選択的拡大として、畜産振興、農業機械化、農業協業化が滲透、進展しつつあるとき、私ども大学人のみが20年1日の如きマンネリズムにおちいっていることは、さけなければならない。

つぎに本学付属図書館について述べたい。本学の開設と同時に、仮設図書館が、学生食堂の二階（115坪）を修築して設けられた。図書は神戸医科大学予科の一般教育関係の蔵書約5,000冊をひきついだものであった。当時の大学設置基準からみても、農学科のばあいは、8,000冊以上は備えねばならなかったわけである。蔵書数はその後次第に増加して、昭和30年には23,444冊、35年

には51,540冊、42年には58,704冊となった。うすぎたなかった仮装設書館も昭和33、34年に木造モルタル塗り、240坪の新館が完成した。この新設図書館は閲覧室、書庫等、十分設置基準に合格するものであった。ところが神戸六甲台に新築された農大専門学舎内の図書館は当時の図書館長の努力にもかかわらず、面積わずかに140坪に減少し、現在の蔵書すら収容しえられなくなった。これは基準面積にも、はるかに及ばないものである。とかく戦後に発足した新制大学では、教室、研究室の整備が優先されるため、図書館等の設備は著しく、なおざりにされる傾向が強い。現時点においても、わが国の多くの大学図書館は欧米にくらべて、半世紀以上もおくれているといわれているが、このあたりで、大学図書館の将来あるべき姿を念頭において、改善の方策を打ち出すべきであることを痛感する。

いうまでもなく、大学図書館は大学における研究および教育活動が円滑に行なわれるようにするための基礎的施設であるとともに、総合的教養の場としても重要な役割を果す機関である。したがって、これからの大学図書館は近代的な施設、設備をそなえ、ぼう大な図書館資料の収集、蓄積、整理、保存をはかるとともに、学術情報の総合的運用を行なって、積極的に奉仕活動をしなければならない。学術情報処理の機械化が進めば、これまで多くの研究者が文献あさりに研究時間の大半をついやさねばならぬような悩みも解消されるわけである。文献探さくについて多年、無自覚につづけられたマンネリズム的態勢は研究者にとっても、この上もなく不幸であり、また許さるべきものではない。

また、公立単科大学としての図書館の整備拡充には自ら限度がある。幸にも本学が移管される神戸大学においては、すでに昭和41年以来、これまで実体をともなわなかった中央図書館の建設問題を中心として図書館制度委員会（委員長八木学長）が発足し、私もその一員としてその企画に参加している。この委員会があげている新しい図書館の主な目標は、学術情報センターの構成と情報、図書館学科の設置、受入、整理機能の集中化を機械化などである。またこの中央図書館の建設と相まって現在の部局（学部）図書館は今後研究図書館としての機能をはたすように努力されなければならないであろう。文部省も大学図書館の近代化についてはかなり強い支持を示しており、各地の国立大学に、相つ

いで中央図書館の建設が進められている時でもあり、数年後には時代に即応した新設図書館が実現するであろう。

（現神戸大学農学部教授兼神戸大学評議員、兵庫農科大学図書館長）

国立移管・体質改善時代の声なき声

奥　谷　禎　一

体質改善ひきつづいて国立移管決定と、昭和38～40年頃は、全く学内外はてんやわんやのさわぎであった。この間に色々学内、学外でささやかれてはいたが、今日実現を見なかった各種の意見編集し、当時をしのんでみたい。

順序として神戸大農学部についての問題点をとりあげてみたい。以前には国立移管はよいが、別に神戸大でなくとも阪大でもいいではないかという議論もあったが、神大が医農を持ち9学部からなる綜合大学を目指すことを明らかにしてからは、全く盲目的に神戸大一辺倒と化した。所で、その敷地が問題で六甲ハイツ跡1万4千坪といわれているが、斜面・道路等を除き実効面積8千坪余りで学舎用地4千坪余りを引き去ると残り4千坪余り、これで農学部が成立するのかと鋭い意見も述べられた。また、東大の友人は「駒場から本郷に移転したため、学部発展と共に圃場を失って行った。この移転には全く後悔させられている。君の所も神戸に移転とは全く時代錯誤だね。」と皮肉られ、農学部の六甲台への移転は相当注目を引いていた。もちろん実習農場が近接していれば、こんな批判も出なかったであろうが。私自身も交通機関的には便利になったが将来発展の余地のない台地には未だに一抹の不安を抱かざるを得ない。

体質改善については、改悪だと揶揄する声も聞いたが、兎に角一応落着いたことは目出度いことといいたい。官僚は何を血迷ったか、1学科4講座分の職員構成という基準を振り廻すので、全くやり切れない。日進月歩、学問細分化の方向にある時、わずか8名の教官で巾広い農学をカバーしようなど、私には想像もできない。今日の1講座が、1学科なら8名でもわからないでもないが農学科のような広い間口では、何でもかでもこんな基準をつくられてはお手上げである。食品学科とか土壌学科とか、もっときめ細い学科構成をし、全体の

学科で農学がほぼカバーされるよう配慮すべきではないだろうか。もちろん、そのためには、創立当時からどんな構成をしてゆくか、遙かな先を見通した定見により新設講座を設定すべきであったことはいうまでもない。先に移民学講座を開設された当時、熱帯農学講座を設ける配慮が欲しかったように思われる。また改善策に当って、人事面の配慮が欠けていたことも否定できない。特に教養課程の人材を専門課程で生かし得なかったのは、今日でも残念に思われる。恐らく当時の専門課程26講座を増加させないという至上命令があったのかも知れないし、また当局として、1部の教養の教官を専門に組み入れ、残った人々と不公平を生じてはとの配慮もあったのかも知れない。この辺の事情については、私たちには知ることができなかった。このほか、いわゆる転換講座のできたことも不思議であった。主任教授が説得（？）され、果して、他の教官が唯々諾々とついてくると思ったのか、全くお目出度い話である。結果的にはお目出度くなったが、不満不安は完全に解消したとはいいきれない。むしろ、学科の新構成を行ない、希望者を集め、新しく発足する道を開くべきではなかったろうか。

すべて、今となってはもう遅い。何とか学部が団結して、新しい時代の新しい人材を養成することに心掛けると同時に、長年月かかることを覚悟で、すこしずつでも変換して行って、時代と共に進歩発展させなければならない。

（神戸大学農学部助教授）

附表Ⅰ

沿革の概要

年月日	記事
昭和24年 3月25日	学校教育法による兵庫県立農科大学設置の件次の通り認可される。（文部省告示第26号） 1. 位置　兵庫県多紀郡岡野村東浜谷 2. 学部学科　農学部農学科 3. 開設学年　第1学年 4. 開設時期　昭和24年
3月26日	兵庫県立医科大学予科長森為三兵庫県立農科大学長事務取扱に就任
3月31日	三宅捷初代学長兼教授に就任
4月1日	兵庫県立農科大学開学。農学部農学科（兵庫県示第327号）
5月10日	第1回入学式挙行
5月20日	開学式挙行
昭和25年 3月31日	本年度末教職員　学長1　教授7　助教授6　助手4　計18名（24年）
昭和26年 3月31日	本年度末教職員　学長1　教授12　助教授16　講師1　助手20　計50名（25年）
1月31日	農学部農芸化学部、畜産学科増設の件次の通り認可される。 1. 修業年限　4年 2. 開設学年　第1学年 3. 開設時期　昭和26年
昭和27年 3月31日	教職課程（中学校「理科、職業」高等学校「理科、農業」）設置の件認可される。 本年度末教職員　学長1　教授15　助教授19　講師8　助手39　計82名（26年）
4月1日	兵庫県条例第13号により県立大学設置条例公布、 兵庫農科大学と名称変更
5月19日	学歌作成発表
昭和28年 3月6日	第1回卒業式挙行
3月31日	本年度教職員　学長1　教授19　助教授22　講師8　助手39　計89名（27年）
4月1日	本日より教授会規程、教官会議規程実施せられる
昭昭29年 3月31日	本年度末教職員　学長1　教授19　助教授26　講師44　計99名（28年）
4月13日	大学設置条件中の教員組織に関して大学設置審議会に協議を要する条件解除される。従って人事委員（資格審査委員）を教授中より数名選んでこれが審議に当ることとなる。
12月7日	教育職員免許法第5条別表第1備考第1号の2に規定する免許状授与の所要資格を得させるための適当な課程として認定し、昭和29年4月1日から適用。（文部省告示第100号）

年月日	記事
	課　程　兵庫農科大学の正規の課程 免許状の種類および教科 中学校教諭　1級普通免許状　理科、職業 高等学校教諭　2級普通免許状　理科、農業
昭和30年 1月20日	神戸医科大学への医学進学課程設置の件次の通り認可される 1. 名　　称　兵庫農科大学農学部医学進学課程入学定員40名 2. 位　　置　兵庫県多紀郡岡野村東浜谷 3. 修業年限　2年 4. 開設年次　第1年次 5. 開設時期　昭和30年度
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授23　助教授34　講師7　助手48　計113（29年）
4月1日	名誉教授の称号授与に関する規程実施される（別表参照）
5月18日	教育職員免許法第5条別表第1備考1号の2に規定する免許状授与の所要資格を得させるための適当な課程として認定し、昭和29年4月1日から適用。（文部省告示第58号） 課　程　兵庫農科大学の聴講生の課程 免許状の種類および教科 中学校教諭　1級普通免許状　理科、職業 高等学校教諭　2級普通免許状　理科、農業
6月1日	三宅捷、学長の任期を更新
昭和31年 2月9日	第62県議会において兵庫農業短期大学の廃止が決められ、これに伴ない同校の本年3月卒業予定者および1年修了生中農大入学希望者に対する特別選考による編入学を許可方総務部長より通知あり。
3月31日	兵庫農業短期大学を兵庫農科大学短期大学部と名称変更し併設。（兵庫県条例第2号） 兵庫農科大学長　三宅捷が短期大学部学長に兼ねて就任。 兵庫農科大学短期大学部教授三須英雄が短期大学部長に就任。
	本年度末教職員　学長1　教授24　助教授37　講師4　助手49　計115（30年）
昭和32年 1月15日	カンボジア調査のため佐藤孝、高山敏弘2教官出発
3月31日	兵庫農科大学短期大学部廃止（兵庫県条例第4号）
3月31日	森為三、上田英之助、金子平一、三須英雄の4教授停年退職
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授24　助教授42　講師3　助手46 計116名（31年）
4月1日	附属研究施設を次の通り設置（兵庫県告示第117号） 名　称　　位　置 兵庫農科大学附属篠山農場（兵庫農科大学附属農場）　多紀郡篠山町東浜谷602 兵庫農科大学附属加古川農場　加古川市平岡町新在家
昭和33年 3月31日	カンボジアに学術調査のため出張した佐藤、高山両教官帰学 本年度末教職員　学長1　教授24　助教授50　講師6　助手52 計133名（32年） 浜口栄次郎、沢山智の2教授停年退職

年月日	記事
昭和34年 2月15日	附属図書館第1期工事（書庫閲覧室、161坪）起工
2月26日	国立移管対策委員会発足する。
3月18日	兵庫県立大学国立移管に関する知事の陳情書を提出するとともに県議会議長の意見書、陳情書も提出せられ国立移管への足がかりは強固なものとなった。 同時に県立大学の国立移管促進懇談会も設置開催
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授26　助教授53　講師2　助手50 計132名（33年）
3月31日	野中時雄教授停年退職
4月25日	附属図書館第1期工事竣功
6月1日	三宅捷学長の任期更新される
9月10日	附属図書館第2期工事（館長室、事務室など）起工
12月16日	附属図書館第2期工事竣功
昭和35年 1月11日	文部省にて公立大学調査書が計上され国立移管に曙光がみえる。
3月31日	中島友輔教授停年退職
	本年度末教職員　学長1　教授25　助教授53　講師2　助手42 計123名（34年）
	国立移管のための学科組織等の体質改善につき前東京農工大学長吉田正男氏外2氏による第1次答申あり。
昭和36年 3月31日	桜井芳次郎教授停年退職
4月1日	本年度末教職員　学長1　教授23　助教授52　講師2　助手42 計120名（35年）
	県立大学設置および管理条例第5条第2項の規定に基き、附属研究施設の名称および位置を次の通り定められた。（昭36年4月1日　兵庫告示第312号） 名称　位置 兵庫農科大学附属牧場　多紀郡今田町木津山前山191番地
6月30日	学長三宅捷願いにより学長兼教授を免ぜられる
7月1日	教授佐伯秀章学長兼教授に補せられる
10月19日	文部省公立大学調査委員井上吉之（東京農工大学長）山崎守正（東京農業大学教授）田中徳次（文部省管理局教育施設部長）調査のため来学
昭和37年 3月31日	本年度末教職員　学長1　教授20　助教授52　講師4　助手39 計116名（36年度）
昭和37年 4月26日	①国立移管と本学の諸設備の充実を図るための将来の計画を検討する委員会を作ることとし、従来の国立移管対策委員会委員がこれを兼ねることとなる。

年月日	記事
	②また本学教授会の名において、県立大学国立移管促進に関する要望書を決議、各方面に提出した。
4－5月	事務室が大改築補修され、教官会議室も学生控室を改築し充当された
昭和38年 3　月	国立移管のための学科組織等の体質改善につき井上吉之（東京農工大学長）外2氏の学者グループによる第2次答申あり。 これによれば農学科、園芸学科、植物防疫学科、農芸化学科、畜産学科の5学科とすることとなっている。
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授21　助教授51　講師3　助手44 計120名（37年）
昭和39年 3月31日	本年度末教職員　学長1　教授22　助教授47　講師3　助手38 計111名（38年）
3月31日	神戸医科大学への医学進学課程廃止
4月1日	学科増設および学生定員の変更 農学部　園芸農学科　40名　（増設） 植物防疫学科　20名　（増設） 農業生産工学科　25名　（増設） 農芸化学科　40名　（定員変更） 畜産学科　30名　（定員変更）
5月31日	本学ブラジル農業実態調査団（団長佳山良正助教授団員5名）出発
12月下旬	本学の神戸大学への移管は昭和41年度より実施と決定
昭和40年 3月31日	浜田秀男教授停年退職
	昭和41年4月1日より兵庫農科大学は神戸大学農学部として移管の件決定（法律第15号）
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授30　助教授40　講師4　助手33計 108名
5月6日 昭和41年 2　月	本学ブラジル農業実態調査団6名帰学 国立移管の年次別講座順位内定
3月5日	園芸農学科、植物防疫学科、農業生産工学科に対する教育職員免許法第5条第1項別表第1備考第1号の2に規定する免許状授与の所要資格を得させるための課程として下記の通り認定し、昭和41年4月1日から適用。 課　程　兵庫農科大学正規の課程 兵庫農科大学聴講生の課程 免許状の種類および教科 中学校教諭　1級普通免許状　理科、職業。 高等学校教諭　2級普通免許状　理科、農業。
3月31日	山本賢治、薗村光雄両教授停年退職
	本年度末教職員　学長1　教授31　助教授34　講師4　助手35 計105名
4月1日	神戸大学農学部への移管第1年次として、本年度入学生は神戸大学へ入学、本学学生は2、3、4年目となる。

年月日	記事
4月1日	兵庫農科大学長佐伯秀章は神戸大学農学部長に併任。
〃	神戸大学農学部事務室を兵庫農科大学本部内に併設。
昭和42年 3月15日	神戸大学への移管に伴ない兵庫農大の学生部長は農学部補導委員に、兵庫農大附属農場長は農学部附属農場長に、兵庫農大附属図書館長は神戸大学図書委員兼図書分館長に任命される。
3月31日	岡田総一教授停年退職
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授16　助教授19　講師3　助手24　計63名
4月1日	神戸大学農学部への移管人事　教授9　助教授9　講師1　助手9名発令される
9月19日	兵庫農科大学篠山学舎終了式および感謝パーティ開催学（午後1時）地元篠山町その他主催兵庫農大惜別園遊会開催、篠山城趾において盛大に開催された（午後5－9時）
10月1日 ～15日	六甲台学舎へ移転
昭和43年 3月31日	川上幸治郎教授停年退職
3月31日	本年度末教職員　学長1　教授7　助教授10　講師1　助手11　計30名
昭和43年 4月1日	神戸大学農学部への移管人事　教授8　助教授9　講師2　助手9名発令される
昭和44年 3月12日	兵庫農科大学第17回卒業式（最終）挙行
3月31日	佐伯秀章学長退職
3月31日	平林成志教授停年退職

附表Ⅱ

学長名誉教授および部局課長役職員

1. 名誉教授の名称を授与せられたもの

氏名		授与せられた年月日
理学博士	故森　為三	昭和32年6月15日
農学士・農学博士	浜口栄次郎	昭和33年4月10日
農学士、農学博士	故沢山智	昭和33年4月24日
農学士・農学博士	故野中時雄	昭和34年11月28日
農学士	桜井芳次郎	昭和36年6月29日
農学士・農学博士	故三宅捷	昭和36年9月14日
農学士・理学博士	浜田秀男	昭和41年2月24日
文学士・経済学士	山本賢治	昭和41年6月23日

2. 学長

氏名	就任年月日	退任年月日	備考
森為三	昭和24. 3. 26	昭和24. 3. 31	学長事務取扱い
三宅捷	24. 3. 31	36. 6. 30	
佐伯秀章	36. 6. 30	44. 3. 31	

3. 副学長

氏名	就任年月日	退任年月日	備考
森為三	昭和26. 7. 16	昭和32. 3. 31	

4. 学生部長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
学生部長	石井健三	昭和24. 5. 31	昭和25. 3. 31	
〃	佐伯秀章	25. 3. 31	35. 7, 31	
〃	三浦義敬	35. 8. 1	38. 5. 31	
〃	長島浩二郎	38. 6. 1	42. 3. 31	
〃	吉村貞彦	42. 4. 1	44. 3. 31	42. 4. 1　神戸大学教授 兵庫農科大学併任

5. 事務局長、次長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
事務局長	小松小一郎	25. 4. 1	35. 3. 31	
〃	小林勝治	35. 4. 19	36. 9. 30	
〃	浅野武	36. 10. 1	38. 5. 15	
〃	山中慶次	38. 5. 16	42. 7. 30	
事務局次長	小野田慶司	41. 4. 1	42. 7. 30	41. 4. 1 神戸大学事務長 兵庫農科大学併任
事務局長	小野田慶司	42. 8. 1	44. 3. 31	

6. 附属図書館長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
図書館長	山本賢治	24. 5. 31	32. 5. 31	
〃	野中時雄	32. 6. 1	34. 3. 31	
図書館長 事務取扱	三宅捷	34. 4. 1	34. 5. 31	
図書館長	吉村貞彦	34. 6. 1	36. 5. 31	
〃	山本賢治	36. 6. 1	41. 3. 31	
〃	小野豊	41. 4. 1	44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学教授 兵庫農科大学併任

7. 附属農場

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
篠山農場長	松尾浩気	25. 5. 31	30. 3. 31	
〃	大崎忠一	30. 4. 1	37. 3. 31	
〃 (兼任)	松尾浩気	37. 4. 1	43. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学教授 兵庫農科大学併任
加古川農場長	桜井芳次郎	32. 4. 1	36. 3. 31	
〃	松尾浩気	36. 4. 1	44. 3. 31	〃
加西農場長	松尾浩気	42. 4. 1	43. 3. 31	〃

8. 附属牧場長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
牧場長	三宅睦男	36. 4. 1	44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学助教授 兵庫農科大学併任

9. 学生部課長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
教務課長	畑　俤弐	24. 5.31	30.12.15	
教務課長事務取扱者	岩森一男	30.12.16	31. 9.20	
教務課長	荻野正三	31. 9.20	37. 3.31	
〃	小倉進一	37. 4. 1	38. 3. 1	
〃	永井建雄	38. 3. 2	43. 8.31	
〃（兼任）	森　秀二	43. 9. 1	44. 3.31	
補導厚生課長	三上善潔	25.10.10	28. 3.31	
補導厚生課長事務取扱(兼任)	畑　俤弐	28. 4. 1	28.11.30	
補導厚生課長	川那部治良	28.12. 1	32. 4. 9	
〃	栃木　亨	32. 4.10	37. 3.31	
〃	吉積舜三	37. 4. 1	41. 3.31	
〃（兼任）	永井建雄	41. 4. 1	43. 8.31	
〃（〃）	足立隆夫	43. 9. 1	44. 3.31	

10. 事務局課長

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
庶務課長	小嶋　良	24. 4.30	38. 5.15	
〃	小野田慶司	38. 5.16	41. 3.31	
庶務課長心得	森　秀二	41. 4. 1	41. 7.31	
庶務課長	森　秀二	41. 8. 1	44. 3.31	
経理課長(兼任)	小嶋　良	24. 4.30	32. 1.17	
〃	中島敬次	32. 1.18	37. 2.15	
〃	畑　実	37. 2.16	41. 3.31	
経理課長心得	足立隆夫	41. 4. 1	41. 7.31	
経理課長	足立隆夫	41. 8. 1	44. 3.31	

11. 附属図書館

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
図書係長	大安徳蔵	26. 2.10	33. 6.21	
図書主任	吉積舜三	33. 6.21	37. 3.31	
図書事務取扱者	日置貞正	37. 4. 1	38. 3. 2	
事務長	和田正	38. 3. 2	42. 9.30	

12. 附属農場

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
篠山農場事務取扱者	三宅幾太郎	25. 6.15	33. 6.21	
〃	石田亨	34.10.21	36. 8.20	
〃	中西政弘	37. 4. 1	40. 1.31	
〃	田村幸夫	40. 2. 1	42. 3.31	
主査 篠山農場事務担当	藤田長三	41. 4.20	43. 3.31	
加古川農場事務長	山中信儀	33. 7.31	35. 4.18	
〃	岩崎春治	35. 4.19	36. 8. 1	
〃	後藤精一	36. 8.16	38. 7.31	
〃	長谷川冨夫	38. 8. 1	43. 7.31	
加西農場事務取扱（兼任）	長谷川富夫	42. 4. 1	43. 3.31	

13. 附属牧場

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
		昭和	昭和	
牧場事務主任（兼任）	足立隆夫	36. 4. 1	41. 7.31	
〃（〃）	市内繁清	41. 8. 1	42. 4.30	
主査 牧場事務担当	日置貞正	42. 4. 1	44. 3.31	

附表Ⅲ

兵庫農科大学職員一覧

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
森 為三	副学長兼教授	24. 3.26～32. 3.31	死亡
三宅 捷	学長兼教授	24. 3.31～36. 6.30	死亡
大安徳蔵	主事	24. 4. 1～35. 6.30	
小山正雄	〃	24. 4. 1～25. 5.30	兵庫県税事務所へ
森 秀二	事務局庶務課長兼学生部教務課長	24. 4. 1～44. 3.31	
足立隆夫	事務局経理課長兼学生部補導厚生課長	24. 4. 1～44. 3.31	
廣石昌代	助手	24. 4. 1～24.10.19	
堀毛 昌	雇	24. 4. 1～26. 1.31	
山本 保	〃	24. 4. 1～30. 4.30	尼崎県税事務所へ
新家泰子	〃	24. 4. 1～25. 9.30	
弓場年子	〃	24. 4. 1～24. 9.14	
三原 榮	〃	24. 4. 1～25. 3.31	
藤本重藤	保安員	24. 4. 1～31. 7.23	死亡
谷田忠次	〃	24. 4. 1～42. 3. 9	兵庫県総務部管財課へ
畑中徳義（旧加藤）	〃	24. 4. 1～28.12.31	
中村民之助	用務員	24. 4. 1～35. 3.31	死亡
片瀬荘三郎	〃	24. 4. 1～29.12. 5	〃
谷田貞治郎	〃	24. 4. 1～30.12.15	〃
中川てる子	〃	24. 4. 1～40. 3.31	
高橋よしの	〃	24. 4. 1～42. 7.31	柏原土木出張所へ
小山芳松	〃	24. 4.10～44. 3.31	
石田亨（旧福井）	主事	24. 4.13～43. 7.31	丹波財務事務所へ
山田兵吉	農場員	24. 4.30～44. 3.31	
小島 良	事務局庶務課長	24. 4.30～38. 5.16	篠山保健所へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
石井健三	教授	24. 5. 31～39. 3. 31	神戸大学へ
三浦義敬	〃	24. 5. 31～42. 3. 31	姫路工業大学へ
斉藤義一	〃	24. 5. 31～40. 1. 31	大阪大学へ
竹内賢吉	助教授	24. 5. 31～42. 3. 31	姫路工業大学へ
高田英夫	〃	24. 5. 31～24. 6. 13	大阪市立大学へ
松居弘	〃	24. 5. 31～42. 3. 31	姫路工業大学へ
西羅寛	〃	24. 5. 31～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
佐伯秀章	学長兼教授	24. 8. 31～44. 3. 31	
福井寿満子	雇	24. 9. 6～29. 3. 31	
三宅幾太郎	助手	24. 9. 12～35. 2. 29	死亡
坂井保子	雇	24. 9. 15～27. 5. 31	神戸商科大学へ
水野利雄	教授	24. 9. 30～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
森本勇	〃	24. 10. 31～35. 2. 28	死亡
浜田秀男	〃	24. 10. 31～40. 3. 31	親和女子大学へ
岡本昌雄	助教授	24. 11. 30～35. 12. 18	死亡
吉川三吉	教授	25. 3. 15～44. 3. 31	
岩田久二雄	〃	25. 3. 21～44. 3. 31	
松下俊夫	助教授	25. 3. 25～42. 3. 31	姫路短期大学へ
宮田澄男	〃	25. 3. 25～40. 1. 15	神戸大学へ
水野進	〃	25. 3. 25～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
山本賢治	教授	25. 3. 31～41. 3. 31	24. 5. 31から兵庫県立農科大学兼務、甲子園大学へ
俣野稔	助手	25. 3. 31～34. 9. 20	24. 5. 31から兵庫県立農科大学兼務、兵庫県民生部国民年金課へ
前川圓治	〃	25. 3. 31～27. 4. 15	24. 5. 31から兵庫県立農科大学兼務
山取博	〃	24. 5. 31～25. 3. 31	24. 5. 31から　〃
太期勇	事務局庶務課主任	25. 3. 31～44. 3. 31	
小島俊彦	主事	25. 3. 31～44. 3. 31	
久合田清	〃	25. 3. 31～43. 7. 31	県立病院柏原荘へ
堀尾由夫	〃	25. 3. 31～36. 8. 15	摂津財務事務所へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
畑尾秀一	主事	25. 3. 31～35. 8. 30	神戸商科大学へ
樋口幸夫	主事補	25. 3. 31～32. 8. 31	多紀郡城東中学校へ
前川淳子	雇	25. 3. 31～29. 2. 28	
細見淑子	〃	25. 3. 31～30. 4. 1	
中西美代子	〃	25. 3. 31～27. 4. 4	
矢尾勤(旧中尾)	農場員	25. 3. 31～43. 3. 31	丹波財務事務所へ
山田まきの	用務員	25. 3. 31～42. 3. 31	篠山川農業水利建設事務所へ
小松小一郎	事務局長	25. 4. 1～35. 3. 31	死亡
井上善右衛門	教授	25. 4. 25～41. 4. 30	神戸商科大学へ
荻野義定	助手	25. 4. 30～25. 9. 15	
西本新蔵	農場員	25. 4. 30～29. 10. 31	死亡
宇杉儀一	〃	25. 4. 30～42. 3. 31	兵庫県総務部管財課へ
谷田巌	保安員	25. 4. 30～41. 3. 31	〃
上山泰	助教授	25. 5. 10～44. 3. 31	
岩本良次郎	助手	25. 5. 15～28. 3. 31	京都大学へ
中村五郎	助教授	25. 5. 15～41. 3. 31	神戸大学へ
清水淳一	助手	25. 5. 31～28. 5. 16	芝浦精糖K. K. 東京本社へ
松尾浩気	教授	25. 5. 31～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ兵庫農科大学併任
塚本綾子	用務員	25. 5. 31～43. 3. 31	24. 5. 31から兵庫農科大学兼務
樋口元亮	助手	25. 6. 5～35. 1. 31	
田村幸夫	主事	25. 6. 30～44. 3. 31	
岸本泰明	主事補	25. 6. 30～35. 10. 19	篠山土地改良出張所へ
小林潤	講師	25. 7. 31～42. 10. 15	兵庫県農林部耕地課へ
佐伯宏子	主事補	25. 7. 31～30. 10. 7	
長嶋浩二郎	教授	25. 7. 31～42. 7. 31	神戸商科大学へ
山本和太郎	〃	25. 8. 14～37. 1. 6	死亡
樋浦巌	助手	25. 8. 15～27. 12. 31	島根大学へ
三上善潔	学生部補導厚生課長	25. 8. 15～28. 3. 31	死亡
上野慶一	助教授	25. 8. 30～37. 7. 1	ブラジル移住へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
小林重郎	講師	25. 8.31～30. 4.30	多紀郡教育委員会へ
浜田高男	助手	25. 8.31～25.10.12	
竹見数正	主事補	25. 9. 1～32. 7.25	西宮警察署へ
宮田豊子	電話交換員	25. 9.15～42. 5.31	兵庫県工業奨励館へ
佐古田千代子	〃	25. 9.15～31. 4.30	
川上幸治郎	教授	25. 9.20～43. 3.31	名城大学へ
澤山智	〃	25. 9.20～33. 3.31	死亡
浜口栄次郎	〃	25. 9.30～33. 3.31	
伊沢恆郎	〃	25. 9.30～44. 3.31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
上田英之助	〃	25.10.16～32. 3.31	
長谷川儀一	〃	25.10.31～38.10.31	
大平恭造	〃	25.10.31～41.10.15	姫路工業大学へ
安田勝幸	助教授	25.10.31～41. 4.30	神戸商科大学へ
井上良	〃	25.10.31～44. 3.31	
麦林楢太郎	教授	25.11.30～44. 3.31	24. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
広瀬要	雇	25.12. 1～27. 5.31	
森本達五郎	農場員	26. 1. 4～26. 6.30	
小畠一夫	主事	26. 2. 1～43. 7.31	篠山保健所へ
西躰雄二郎	講師	26. 2. 5～39. 5.31	島根大学へ
大庭高明	助手	26. 2. 5～34. 8.31	滋賀県種畜場へ
永田忠男	教授	26. 3. 3～44. 3.31	
野草俊作	〃	26. 3.19～42. 3.31	姫路短期大学へ
下田与四雄	〃	26. 3.31～44. 3.31	
福島豊一	〃	26. 3.31～44. 3.31	
久寿米木朝雄	助教授	26. 3.31～31. 4.15	25. 4.25から兵庫県立農科大学兼務
畑俤弍	学生部教務課長	26. 3.31～30.12.15	24. 5.31から兵庫県立農科大学兼務　死亡
岡村清次郎	用務員	26. 3.31～39.12.31	24. 5.31から兵庫県立農科大学兼務
柴田精太郎	〃	26. 3.31～40. 3.31	24. 5.31から兵庫県立農科大学兼務
桜井芳次郎	教授	26. 4.16～36. 3.31	

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
川那部 治良	教授	26. 4.16～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
吉谷 啓作	助手	26. 4.16～29. 8.31	京都大学大学院へ
福沢 文雄	助教授	26. 4.16～37. 3.31	京都大学へ
永富 昭	助手	26. 4.16～35. 5.15	鹿児島大学へ
松田 二郎	〃	26. 4.16～29. 2.28	愛媛大学へ
碓井 隆次	教授	26. 4.16～28.10.31	大阪社会事業短期大学へ
田中 昭	助教授	26. 5.12～34. 7.31	滋賀短期大学へ
沢野 稔	〃	26. 5.12～44. 3.31	
野々口 昭典	助手	26. 5.12～28. 5. 1	死亡
竹内 正幸	主査	26. 5.10～44. 3.31	43. 4. 1兵庫県建築部営繕課へ、兵庫農科大学兼務
三宅 玲子	雇	26. 5.10～29.10.31	
水野 為夫	〃	26. 5.31～27. 3.31	
酒造 恵美子	〃	26. 5.31～30. 1.31	
石田 栄代	主事	26. 5.31～42. 3.31	多紀福祉事務所へ
西山 竹治	雇	26. 5.31～28. 2.15	兵庫県人事委員会へ
畑尾 桂子	主事補	26. 5.31～32. 6.30	
高山 昭康	助教授	26. 5.31～43. 3.31	南九州大学へ
河本 正彦	教授	26. 5.31～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
堀江 格郎	〃	26. 5.31～41. 3.31	神戸大学へ
伊藤 和彦	助教授	26. 5.31～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
冨森 純郎	助手	26. 6. 1～27. 5.31	京都全国和牛登録協会へ
石垣 秀明	〃	26. 6. 1～29. 3.31	伊丹市ゼネラルフーズKKへ
小嶋 照次	農場員	26. 6. 5～41. 3.31	宝塚保健所へ
長沢 勇	〃	26. 6. 5～33. 7.31	篠山農業高等学校へ
長沢 庄治	用務員	26. 6. 5～41. 3.31	宝塚保健所へ
中川 成男	技師	26. 6.15～44. 3.31	42. 4. 1.神戸大学へ 兵庫農科大学併任
土方 節	助手	26. 6.20～29. 8.31	徳島市日新酒類KKへ
芦田 義憲	〃	26. 6.30～28.12.31	京都府北桑田高等学校へ
木戸 稔	〃	26. 7.16～26. 9.30	

氏名	退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
福山信次	保安員	26. 7.15～41.12.31	篠山川農業水利建設事務所へ
藤井和子	雇	26. 8.31～28. 3.31	
河村節子(旧宇杉)	主事補	36. 8.31～32. 4.30	神戸商科大学へ
畑中田鶴子	〃	26. 8.31～36. 8.15	丹波財務事務所へ
苅田淳	助教授	26. 8.31～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
大安範子	主事補	26. 9.10～34. 3.31	
岡本三郎	助教授	26. 9.16～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
宮本(谷口)セツ	〃	26. 9.16～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
奥谷禎一	〃	26.11.15～44. 3.31	
藤井一夫	助手	26.11.30～36. 8.31	
野中時雄	教授	26.12.10～34. 3.31	死亡
森信三	講師	26.12.10～28. 3.31	神戸大学へ
高山敏弘	助教授	27. 1. 5～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
稲垣美恵子(旧松本)	主事補	27. 1. 5～37. 3.15	伊丹保健所へ
長沢知子	主事	27. 1. 5～31. 3.20	
中村直彦	教授	27. 2.16～44. 3.31	
中城真	技師	27. 2.21～30. 4.30	和歌山県工業試験場へ
近藤健次郎	教授	27. 3.31～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
三好和夫	助手	27. 3.31～31. 5.18	死亡
寺分元一	助教授	27. 4.21～44. 3.31	
広瀬智久	助手	27. 5.10～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
名武昌人	助教授	27. 5.10～44. 3.31	〃
佐々木豊作	教授	27. 5.11～42. 3.31	姫路工業大学へ
居垣千尋	助教授	27. 6.16～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
多河慶一	〃	27. 7. 1～42. 9.30	神戸商科大学へ
金子平一	教授	27. 7.11～32. 3.31	
荒木澄	助手	27. 7.16～28. 3.31	美方郡畜産農業協同組合へ
星和美	〃	27. 7.16～32.12.16	伊勢崎市共同乳業KKへ
吉村貞彦	教授	27. 8. 1～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
後藤定年	教授	27. 9. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
西垣芳子	助手	27. 9. 1～29. 1. 31	
田場典治	助教授	27. 9. 5～44. 3. 31	
太田日出夫	助手	28. 2. 2～28. 12. 31	
石橋武彦	教授	28. 4. 1～44. 3. 31	43. 4. 4 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
東順三	助教授	28. 4. 1～44. 3. 31	
野々口善隆	助手	28. 4. 1～34. 6. 30	KKミドリ十字中央研究所へ
勝川周郎	〃	28. 4. 1～39. 4. 15	姫路商業高等学校へ
山取集八	〃	28. 4. 1～28. 5. 31	多紀郡多紀町山取孵化場へ
三崎亮	〃	28. 4. 1～43. 3. 31	姫路短期大学へ
中原達雄	助教授	28. 4. 15～39. 3. 31	大分大学へ
辻英夫	助手	28. 4. 15～39. 12. 15	京都大学へ
河合雅雄	〃	28. 5. 16～31. 6. 30	犬山市犬山モンキーセンターへ
三木正士	〃	28. 5. 16～30. 9. 30	
清水俊秀	教授	28. 5. 25～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
小早川利次	講師	28, 6. 25～35. 7. 5	ブラジル移住へ
大嶋俊彦	助手	28. 8. 1～44. 3. 31	
久葉昇	教授	28. 8. 10～41. 3. 31	岐阜大学へ
酒井義郎	雇	28. 9. 21～29. 10. 31	篠山鳳鳴高等学校へ
小林史子	主事補	28. 9. 21～35. 3. 31	
佳山良正	助教授	28. 10. 10～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
高沢一徳	〃	28. 12. 22～34. 9. 5	死亡
松林元一	〃	29. 1. 1～44. 3. 31	
岡光夫	〃	29. 2. 1～34. 3. 31	同志社大学へ
臼井猛夫	保安員	29. 2. 16～42. 3. 31	兵庫県総務部管財課へ
岸本昇三	助手	29. 2. 20～35. 11. 10	神戸大学へ
井上一弥	主事	29. 3. 20～35. 10. 31	篠山保健所へ
渡辺憲	教授	29. 4. 15～35. 7. 17	死亡
小野一	助教授	29. 4. 16～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
大崎忠一	教授	29. 4.16～37. 3.31	種子ケ島新光糖業KK鹿児島事務所へ
西村洋子	雇	29. 4.19～30.10.10	
渡部学	教授	29. 4.26～32. 1.15	武蔵大学へ
石田陽博	講師	29. 5.15～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
堂本高明	助教授	29. 5.15～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
望月明	教授	29. 6.16～44. 3.31	〃
佐藤孝	教授	29. 6.16～44. 3.31	
一井隆夫	講師	29. 7.26～44. 3.31	
酒井重男	助手	29. 7.26～34. 6.30	東京都KK日本オルガノ商会研究所へ
宮本雄一	教授	29. 9.11～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
木村重	助教授	29. 9.21～44. 3.31	〃
岩森一男	嘱託	29.10. 1～31. 9. 9 35. 9. 7～37. 4.30	神戸商科大学へ 武庫川女子大学へ
田中朱	主事	29.10. 5～34. 6.30	柏原職業安定所へ
中村弘	講師	29.12.15～39. 2.29	大阪府河内市日本農薬KKへ
野原啓吾	助手	29.12.15～30. 4.10	
太野垣順子	主事	29.12.20～42. 9.30	篠山川農業水利建設事務所へ
河北明	助手	29.12.20～35. 3.31	京都府志賀醸造KKへ
足立繁	農場員	29.12.20～30. 7.20	
中尾清一	雇	30. 1.25～32. 3.31	県立西宮病院へ
小野豊	教授	30. 3. 1～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
前田巳之助	助手	30. 4. 1～36.10.15	香住高等学校へ
児島初男	助教授	30. 4.21～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
橋谷義人	助手	30. 4.21～34. 3.16	大阪成蹊女子短期大学へ
矢野締蔵	主事	30. 5. 1～34. 5.31	西宮土木出張所へ
久保知義	助手	30. 5.16～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
前田直彦	〃	30. 5.25～35. 8.14	豊田市クロレラ工業KKへ
山内喬典	自動車運転員	30. 7.20～43.10.20	氷上福祉事務所へ
西川欣一	助教授	30.11. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ兵庫農科大学併任
西田初枝	主事	31. 2. 1～36. 8.15	伊丹保健所へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
山本寅雄	教授	31.4.1～41.10.15	神戸商科大学へ
山口禎	助手	31.4.1～44.3.31	
丹下宗俊	教授	31.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ兵庫農科大学併任
吉積舜三	学生部補導厚生課長	31.8.20～41.3.31	丹波財務事務所へ
日置貞正	主査	31.8.20～44.3.31	
荻野正三	学生部教務課長	31.9.20～37.3.31	兵庫県農林部林務課へ
竹崎通善	助教授	31.10.1～38.9.30	但馬工業指導所へ
重永昌二	助手	31.10.1～40.6.30	京都大学高槻農場へ
三上雅章	〃	31.10.1～39.3.31	徳島県立徳島農業高等学校へ
藤田悦久	〃	31.11.1～35.4.15	武庫川女子大学へ
中島敬次	事務局経理課長	32.1.18～37.2.15	三田保健所へ
前川進	助手	32.2.1～44.3.31	
森田洋子(旧大西)	主事	32.2.1～41.4.30	
三須英雄	教授(兼)	32,2.25～32.3.31	島根農科大学へ
岡田総一	〃	32.4.1～42.3.31	園田学園女子短期大学へ
平林成志	〃	32.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ兵庫農科大学併任
大川金作	〃	32.4.1～32.7.31	
林正旦	〃	32.4.1～44.3.31	
塚本正美	〃	32.4.1～44.3.31	
笹岡恒太郎	助教授	32.4.1～39.3.31	死亡
長谷川清三郎	〃	32.4.1～44.3.31	42.4.1神戸大学へ兵庫農科大学併任
三宅睦男	〃	32.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ兵庫農科大学併任
樋口巌	〃	32.4.1～41.4.30	姫路短期大学へ
花井七郎兵衛	〃	32.4.1～41.4.30	〃
栃木亨	〃	32.4.1～42.3.31	〃
猪股修二郎	講師	32.4.1～33.1.11	死亡
中島友輔	〃	32.4.1～35.3.31	
高田亘啓	助教授	32.4.1～40.3.31	兵庫県立衛生研究所へ
国枝鉱造	〃	32.4.1～40.3.31	福岡市筑紫女子短期大学へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
秋田謙司	助手	32.4.1～44.3.31	
石神信夫	〃	32.4.1～34.8.15	鹿児島県庁へ
太田叔衛	〃	32.4.1～33.6.30	鳥取県日本海新聞社へ
切貫武代司	講師	32.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
野田執 (旧二宮)	助手	32.4.1～36.1.15	
石田裕	〃	32.4.1～38.4.30	神戸商科大学へ
河野覚三	主事	32.4.1～35.6.30	
黒田高茂	〃	32.4.1～32.9.30	神戸商科大学へ
上田教司	技師	32.4.1～44.3.31	
橘英一	技師補	32.4.1～34.3.9	姫路工業大学へ
玉利俊雄	嘱託	32.4.1～35.8.31	
中田義知	雇	32.4.1～33.1.31	神戸医科大学へ
大西秀策	農場員	32.4.1～43.3.31	加古川土木事務所へ
福田平次	〃	32.4.1～42.3.31	兵庫県総務部管財課へ
林文男	〃	32.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
松岡保	〃	32.4.1～38.3.31	県立農業高等学校へ
山本正	〃	32.4.1～35.3.31	
大西房次	用務員	32.4.1～35.4.1	
藤原康計	主事	32.5.20～35.5.15	神戸商科大学へ
西垣八重子	主事補	32.5.20～36.8.31	南但財務事務所へ
上河内譲	〃	32.7.1～34.5.31	神戸商科大学へ
畑中諒 (旧工藤)	主事	32.8.1～39.3.31	兵庫県出納事務局へ
畑正子	電話交換員	32.8.2～35.3.31	
川崎義明	主事	33.3.1～42.3.31	北但福祉事務所へ
青木菊恵	技師	33.4.1～44.3.31	42.4.1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
溝端進	主事	33.4.1～39.7.31	氷上福祉事務所へ
氷上雄三	助手	33.4.1～44.3.31	43.4.1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
渋谷直唯	〃	33.4.1～36.12.31	三田高等学校へ
山中信儀	加古川農場事務長	33.7.31～35.3.31	県立歯科衛生士専門学院へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和 昭和	
南条 巌	助手	33. 8. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
藤井利男 (旧安田)	主事	33. 8. 1～34. 6. 30	有馬高等学校へ
吉谷厚司	農場員	33. 12. 2～41. 1. 31	
酒井貞夫	主事補	34. 3. 10～39. 3. 31	
岸田忠昭	助手	34. 4. 1～39. 3. 31	姫路短期大学へ
畑中陽次	〃	34. 4. 1～43. 3. 31	氷上農業高等学校へ
和田正	附属図書館事務長	34. 6. 1～42. 9. 30	丹波財務事務所へ
永井建雄	教務課長兼補導厚生課長	34. 6. 1～43. 8. 31	築山産業高等学校へ
安福良美	主事	34. 6. 1～36. 4. 30	兵庫県商工労働部工業課へ
藤井聡	助教授	34. 8. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
新家竜	助手	35. 4. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
藤原良平	〃	35. 4. 1～35. 6. 30	小野市小野中学校へ
藤原武文	〃	35. 4. 1～36. 5. 31	
小林勝治	事務局長	35. 4. 19～36. 9. 30	兵庫県民生部へ
岩崎春治	加古川農場事務長	35. 4. 19～36. 8. 1	兵庫県開発公社へ
溝端礼子 (旧畑)	電話交換員	35. 4. 22～42. 9. 30	県立病院柏原荘へ
加藤暢重	助手	35. 5. 2～39. 4. 15	篠山鳳鳴高等学校へ
畑喜之	自動車運転員	35. 5. 2～41. 5. 31	篠山保健所へ
永田次夫	農場員	35. 5. 2～42. 3. 31	企業局加古川水利事務所へ
足立忠	保安員	35. 5. 2～43. 3. 31	多紀福祉事務所へ
中田秀明	事務見習員	35. 6. 1～36. 7. 31	
石田薫	助手	35. 8. 1～44. 3. 31	
佐藤陞	農場員	35. 9. 1～44. 3. 31	
桃井節也	助手	35. 10. 1～44. 3. 31	
尾崎武	〃	35. 10. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
中西政弘	主事	35. 10. 20～41. 3. 31	柏原保健所へ
中道泰民	主事補	35. 11. 1～43. 3. 31	神戸大学へ
士田広信	助手	36. 4. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
団野源一	〃	36. 4. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任

氏名	転退職時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
杉原一三	助手	36. 5. 1～44. 3.31	
長谷川富夫	加古川農場事務長	36. 7. 1～43. 7.31	姫路短期大学へ
卯野耕造	主事	36. 7. 1～41. 3.31	県立病院柏原荘へ
畑守広	農場員	36. 7. 1～43. 3.31	柏原土木出張所へ
藤田長三	主査	36. 8.16～44. 3.31	
市内繁清	事務局経理課主任	36. 8.16～42. 6.30	篠山保健所へ
野瀬俊一	主事	36. 8.16～37. 7.31	氷上福祉事務所へ
後藤精一	加古川農場事務長	36. 8.16～38. 7.31	神戸商科大学へ
山口道徳	見習員	36. 8.24～43. 3.31	神戸大学へ
玉田実男	主事	36. 9. 1～39. 3.31	尼崎財務事務所へ
浅野武	事務局長	36.10. 1～38. 5.15	県立農業試験場へ
杉原雄	助手	37. 2. 1～39. 3.31	神戸大学へ
畑実	事務局経理課長	37. 2.16～41. 3.31	篠山土地改良出張所へ
中田昌伸	助手	37. 4. 1～44. 3.31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
竹内正	〃	37. 4. 1～44. 3.31	42. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
岸原士郎	〃	37. 4. 1～44. 3.31	〃
清原利文	〃	37. 4. 1～44. 3.31	
小倉進一	学生部教務課長	37. 4. 1～38. 3. 1	兵庫県商工連合会へ
畑直子	主事補	37. 4. 1～39. 9.30	県立西宮病院へ
小山富子	〃	37. 4. 1～41. 3.31	篠山保健所へ
今西昌夫 (旧吉田)	動物飼育員	37. 7. 1～44. 3.31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
西嶋琢磨	〃	37. 7. 1～43. 1.31	日本通運姫路支店へ
山本一幸	農場員	37. 7. 1～44. 3.31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
松井範義	助手	37. 7. 1～44. 3.31	〃
岡本邦夫	主事補	37. 8. 1～42. 3.31	氷上農業高等学校へ
中山みや子	〃	37. 8. 1～42. 9.30	
北山幸一	農場員	37.10. 1～42. 3.31	神戸大学へ
山本実	動物飼育員	37.11. 1～43.11.30	三田土木事務所へ
今西すみ子	〃	38. 4. 1～44. 3.31	

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
河原　巌	主事補	38. 4. 1～43. 6.30	多紀福祉事務所へ
王子幸子(旧中岡)	〃	38. 4. 1～43. 3.31	
岡林愛子	〃	38. 4. 1～42. 3.31	
吉岡勝一	農場員	38. 4. 1～38.12.31	県立農業高等学校へ
山中慶次	事務局長	38. 5.16～42. 7.30	兵庫県議会事務局へ
小野田慶司	庶務課長 事務局長	38. 5.16～41. 3.31 41. 4. 1～44. 3.31	41. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
津川兵衛	助手	38. 6. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
中井董一	動物飼育員	39. 1. 1～39. 2.29	
細谷圭助	主事補	39. 4. 1～40. 4. 8	兵庫農科大学進学
今井孝三	〃	39. 4. 1～43. 1.31	兵庫県総務部教育課へ
小寺美智	〃	39. 4. 1～42. 3.31	柏原保健所へ
堀　登	主事	39. 4. 1～44. 3.31	
山本博昭	助手	39. 4. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
王子善清	助手	39. 4. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
矢崎　治	農場員	39. 4. 1～41. 8. 4	東播磨工業地帯建設事務所へ
薗村光雄	教授	39. 5. 1～41. 3.31	南九州大学へ
山本　修	〃	39. 5. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
河南保幸	助手	39. 5. 1～44. 3.31	〃
辻　荘一	〃	40. 1. 1～44. 3.31	
西山清文	主事補	40. 1. 5～41. 3.31	神戸大学へ
安井　元	用務員	40. 2. 1～42. 3.31	神戸大学警務員 43. 4. 1兵庫農科大学併任
保田　茂	助手	40. 4. 1～44. 3.31	42. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
高橋竹彦	〃	40. 4. 1～44. 3.31	
中山利二郎	用務員	40. 5. 1～41. 3.31	41. 4. 1神戸大学警務員 43. 4. 1兵庫農科大学併任
井上利明	主事補	40. 5.15～44. 3.31	
永吉照人	助手	40. 7. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
松本三千夫	動物飼育員	40. 7. 1～44. 3.31	43. 4. 1神戸大学へ 兵庫農科大学併任
明山美枝子	事務見習員	41. 4. 1～42. 9.30	神戸大学へ

氏名	転退職当時の職名	在職期間	備考
		昭和　昭和	
大川紀男	助手	41. 5. 1～43. 4. 15	大阪府大へ
石川富士雄	主事補	42. 4. 1～42. 9. 30	神戸大学へ
吉川豊	保安員	42. 4. 1～42. 9. 30	〃
畑武志	助手	42. 4. 1～44. 3. 31	42. 4. 1 神戸大学助手 兵庫農科大学併任
小泉武紀	講師	42. 7. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学へ 兵庫農科大学併任
浦本歳広	主事補	42.10.16～43. 3. 31	神戸大学へ
岩崎照雄	助教授	43. 3. 1～44. 3. 31	
灘泰宏	助手	43. 4. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学助手 兵庫農科大学併任
小西竹之進	保安員	43. 4. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学警務員 兵庫農科大学併任
小前久好	〃	43. 4. 1～44. 3. 31	〃

臨時職員

氏名	転退職当時の職名	在職期間	転出先等
		昭和　昭和	
内藤親彦	臨時助手	40. 4.16～41. 3. 31	
溝端宣子	臨時事務員	40. 7. 1～41. 2. 28	
沢直美	〃	40. 7. 1～41. 1. 31	
脇喜和	臨時助手	41. 4. 1～41.12. 31	
四方淑子	臨時事務員	41. 4. 1～44. 3. 31	
瀬戸優子	〃	41. 6. 1～42. 9. 30	
長谷川和子	〃	41. 6. 1～44. 3. 31	
梶原幸之進	臨時用務員	41. 6. 1～42. 9. 30	
滝本義一	〃	41. 6. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学作用員へ 兵庫農科大学併任
梶川武雄	臨時農場員	41. 6. 1～42. 9. 30	
宮定節治	臨時保安員	41.10. 1～44. 3. 31	43. 4. 1　〃
飯尾邦雄	臨時農場員	42. 4. 1～42.12. 31	43. 1. 1 神戸大学農場員へ 43. 4. 1 兵庫農科大学併任
飯尾重博	〃	42. 4. 1～42.12. 31	〃
松尾実	〃	42. 4. 1～42.12. 31	〃

氏名	転退職当時の職名	在職期間	転出先等
		昭和　昭和	
森　祐子	臨時事務員	42. 4. 1～42. 9. 30	
宮城修子	〃	42. 4. 1～44. 3. 31	
三宅加代子	〃	42. 4. 1～42. 9. 30	
畑中憲三	臨時保安員	42. 4. 1～42. 10. 16	
恵　たね子	臨時用務員	42. 10. 1～44. 3. 31	43. 4. 1 神戸大学作用員へ兵庫農科大学併任
井口　忠	〃	42. 10. 1～44. 3. 31	〃
井口寛一	〃	42. 10. 1～44. 3. 31	〃
三久京子	臨時事務員	42. 11. 1～44. 3. 31	
伊賀八重子（旧米山）	〃	42. 12. 1～44. 3. 31	
村井文子	〃	43. 4. 1～44. 3. 31	
後藤公子	〃	43. 4. 1～43. 9. 30	
市浦与雄二	臨時農場員	43. 4. 1～44. 3. 31	
蓬莱丈作	〃	43. 4. 1～44. 3. 31	

兵庫農科大学短期大学部職員一覧

氏名	転退職当時の職名	在職期間	転出先等
		昭和　昭和	
三宅　捷	兵庫農科大学長兼短期大学部学長	31. 3. 31～32. 3. 31	死亡
三須英雄	短期大学部長	〃　～　〃	島根農科大学へ
猪股修二郎	教授	〃　～　〃	兵庫農科大学へ
中島友輔	〃	〃　～　〃	〃
大川金作	〃	〃　～　〃	〃
平林成志	〃	〃　～　〃	〃
笹岡恒太郎	助教授	〃　～　〃	〃
林　正旦	〃	〃　～　〃	〃
塚本正美	〃	〃　～　〃	〃
長谷川清三郎	〃	〃　～　〃	〃
三宅睦男	〃	〃　～　〃	〃

氏名	退職時の職名	在職期間	転出先等
椿　卓	助教授	昭和31.3.31～昭和32.3.31	兵庫農科大学へ
樋口　巌	〃	〃～〃	〃
花井七郎兵衛	〃	〃～〃	〃
栃木　亨	〃	〃～〃	〃
竹崎通善	〃	〃～31.9.30	〃
高田亘啓	講師	〃～32.3.31	〃
国枝鉱造	〃	〃～〃	〃
瀬戸本瀞	助手	〃～〃	〃
三上雅章	〃	〃～31.9.30	〃
松井宏安	〃	〃～32.3.31	姫路工業大学へ
石神信男	〃	〃～〃	兵庫農科大学へ
石田　裕	〃	〃～〃	〃
切貫武代司	〃	〃～〃	兵庫農科大学へ
伊藤敬一	〃	〃～〃	県農林部蚕糸園芸課へ
重永昌二	〃	〃～31.9.30	兵庫農科大学へ
太田叔衛	〃	〃～32.3.31	〃
秋田謙司	〃	〃～〃	〃
野田執（旧二宮）	〃	〃～〃	〃
原田幸蔵	〃	〃～〃	鹿児島県立高等学校へ
竹之内優	事務長	〃～〃	地方労働委員会事務局へ
宇仁茂雄	主事	〃～〃	
河野覚三	〃	〃～〃	兵庫農科大学へ
黒田高茂	〃	〃～〃	〃
今西　修	技師	〃～〃	県農林部農地開拓課へ
岩本克己	主事補	〃～〃	加古川地方出納室へ
堀田昌男	〃	〃～〃	県民生部国民健康保健課へ
上田教司	技師補	〃～〃	兵庫農科大学へ
橘　英一	〃	〃～〃	〃
山本　正	農場員	〃～〃	〃

氏名	転退職当時の職名	在職期間	転出先等
福田平次	農場員	昭和31.3.31～昭和32.3.31	兵庫農科大学へ
大西秀策	〃	〃～〃	〃
松岡保	〃	〃～〃	〃
林文男	〃	〃～〃	〃
大西房次	用務員	〃～〃	〃
中田義知	自動車運転員	〃～〃	〃

短期大学部学長および部課長職員一覧

職名	氏名	就任年月日	退任年月日	備考
短期大学部学長	三宅捷	昭31.3.31	昭32.3.31	
〃部長	三須英雄	〃	〃	
学生課長	中島友輔	〃	〃	
図書課長	平林成志	〃	〃	
農場長	大川金作	〃	〃	
事務長	竹之内優	〃	〃	

非常勤講師職員一覧

学科名	氏名	委嘱年数	本務先
		昭和 年 昭和	
文学	上西繁	24 ～31. 3. 31	神戸大学助教授
史学	武藤誠	24 ～27. 4. 30	関西学院大学講師
法学	猪熊兼繁	24 ～24. 10. 31	京都大学教授
〃	前田正治	24 ～27. 3. 31	関西学院大学助教授
経済学	柏井象雄	24 ～26. 3. 31	〃 教授
人文地理学	樫原好忠	24 ～40. 10. 31	神戸外国語大学教授
英語	黒田正利	24 ～25. 3. 31	京都大学講師
地学	稲見悦治	24 ～29. 3. 31	神戸大学助教授
体育講義	伊庭一夫	24 ～26. 3. 31	医院
体育実技	畑清勝	24 ～25. 3. 31	篠山農業高等学校教諭
畜産製造学	沢山智	24～25 33～39. 5. 31	元兵庫農科大学教授
農産製造学	浜口栄次郎	24～25 33～38. 3. 31	〃 〃
生物学	高田英雄	24 ～25. 3. 31	大阪府立大学助教授
政治学	中井淳	25 ～28. 12. 31	関西学院大学教授
社会学	飛沢謙一	25 ～39. 3. 31	〃 〃
作物学汎論	榎本中衛	25 ～33. 3. 31	京都大学教授
体育実技	斉藤隆	25 ～40. 3. 31	篠山鳳鳴高等学校教諭
家畜繁殖学	羽部義孝	25 ～30. 3. 31	京都大学教授
地学	久綱正典	25 ～36. 3. 31	神戸大学講師
心理学	古武弥正	25 ～26. 1. 31	関西学院大学教授
〃	石原岩太郎	26 ～26. 11. 25	〃 助教授
体育講義	岩井正知	26 ～32. 3. 31	医院
農業工学	後藤定年	26 ～27. 8. 31	神戸大学助教授
産業概説	高松繁雄	33 ～36. 10. 15	兵庫農業短期大学附属高等学校長
育種学	西大条透	26 ～27. 3. 31	県農事試験場長
果樹園芸学	大沢仲三	26 ～36. 3. 31	県農事園芸試作場長
農業経営学	橋本伝左衛門	26 ～31. 3. 31	県農業経済研究所長

学科名	氏名	委嘱年数	本務先
生物化学特論	内海誓一郎	昭和26～昭和32.3.31	東京大学教授
農業気象学	小笠原和夫	26～27.3.31	山形県庁気象災害対策室付
心理学	多河慶一	26～27.6.30	神戸女子薬科大学
蔬菜園芸学	並河功	26～26.12.31	京都大学教授
採種論	青木喜昭	27～36.10.15	県経済部農業改良課
史学	吉武夏男	27～32.3.31	神戸大学助教授
畜産製造学	太田新作	27～28.3.31	県経済部畜産課長
ドイツ語	村井勇吾	27～28.5.31	関西学院大学助教授
家畜飼養学	蒔田徳義	27～33.10.15	静岡大学教授
林学	西垣喜代次	28～43.10.31	篠山農業高等学校長
畜産製造学(乳)	斉藤良一	28～32.3.31	明治乳業K.K.取締役
ドイツ語	長谷部武次郎	28～42.3.31	
教育学	碓井隆次	28～28.12.31	大阪府立社会短期大学教授
〃	渡部学	29～29.4.26	東北学院大学教授
遺伝学	望月明	29～29.6.15	京都大学助教授
作物学	佐藤孝	29～29.6.15	京都大学講師
体育実技	小林重郎	30～32.3.31	元兵庫農科大学講師
教育行政学	岡田総一	30 42～43.10.31	睦学院女子短期大学教授
農業気象学	上原勝樹	31～32.3.31	香川大学助教授
生物学	森為三	32～37.10.15	
体育講義	岸本秀雄	32～41.3.31	国立篠山病院長
農業経済学	野中時雄	34～35.3.31	元兵庫農科大学教授
作物保護学	中島友輔	35～36.3.31	〃　〃
農場実習	小松小一郎	35～36.3.3	元兵庫農科大学事務局長
造園学	三好勝彦	36～38.10.31	県土木建築部観光緑地課
地学	春成兼俊	36～37.6.20	神戸大学講師
天文学	松本巖	36～37.10.15	〃　〃
熱帯園芸学	桜井芳次郎	36～39.3.31	元兵庫農科大学教授
生物化学特論	三宅捷	36～38.10.15	〃　学長

学科名	氏名	委嘱年数	本務先
		昭和 昭和	
地質学	津田秀郎	37 ～40. 7. 31	和歌山大学教授
地学、天文学	高橋清	37 ～41. 7. 31	〃 助教授
ポルトガル語	小嶋厚子	37 ～42. 3. 31	関西学院大学非常勤講師
産業概説	三宅義一	37 ～38. 10. 15	和歌山大学教授
花卉並造園学	久保貞	38 ～43. 11. 30	大阪府立大学教授
社会学	及川伸	39 ～42. 3. 31	関西学院大学助教授
哲学	斉藤義一	40 ～41. 3. 31	大阪大学教授
昆虫生理生態学	片山寛三	41 ～42. 3. 31	会社代表取締役
語学	山本賢治	41 ～42. 3. 31	甲子園大学教授
政治学	中村五郎	41 ～42. 3. 31	神戸大学助教授
生物学	堀江格郎	41 ～42. 3. 31	〃 教授
農業動力学 農業機械学	薗村光雄	41 ～44. 1. 31	南九州大学学長
道徳教育の研究	井上善右衛門	41 ～44. 3. 31	神戸商科大学教授
化学第1	安田勝幸	41 ～42. 3. 31	〃 助教授
体育実技	樋口巌	41 ～42. 3. 31	姫路短期大学助教授
物理学	大平恭造	41 ～42. 3. 31	姫路工業大学教授
系統生物学	野草俊作	43 ～43. 10. 31	姫路短期大学教授

大学医職員一覧

	氏名	委嘱期間	本務先
		昭和 昭和	
内科	伊庭一夫	24. 4. 1～26. 3. 31	医院
〃	岩井正知	26. 4. 1～32. 3. 31	〃
〃	谷森久信	26. 5. 31～28. 3. 31	国立篠山病院
外科	富川篤郎	28. 4. 1～29. 2. 15	〃
内科	村上暉正	29. 2. 16～31. 11. 30	〃
〃	岸本秀雄	32. 4. 1～41. 3. 31	〃
〃	高橋昭	32. 4. 1～38. 3. 30	医院
外科	辻尚司	33. 4. 1～35. 3. 31	国立篠山病院
〃	奥野尚一	35. 4. 1～37. 4. 30	〃
〃	平谷隆	37. 5. 1～39. 3. 31	〃
内科	本山新三	38. 4. 1～42. 10. 15	医院
外科	岸村治美	39. 4. 1～40. 3. 31	国立篠山病院
内科	依藤進	42. 10. 16～44. 3. 31	神戸大学医学部
歯科	山本秀雄	24. 4. 1～42. 10. 16	歯科医院

附表Ⅳ

表1

創立以来の才出決算額調

年度別	農科大学予算	内訳				職員数(現員)	開設講座数	備考
		人件費	旅費	物件費	臨時費			
24	11,167,835	3,356,150	1,211,444	2,395,173	4,205,068	55	17	予算令達内訳書一覧表の営
25	29,181,970	9,152,841	1,174,197	12,476,932	6,378,000	99	23	繕費と本庁執行の工事費の
26	46,248,051	20,453,539	1,913,430	17,232,082	6,649,000	144	34	合計額が臨時費である
27	60,228,716	31,284,668	1,899,769	11,361,476	15,682,803	146	34	
28	65,566,317	41,557,250	1,130,969	11,991,098	10,887,000	157	36	
29	74,141,741	49,634,640	1,151,268	15,532,833	7,823,000	172	39	
30	76,942,536	52,889,862	850,162	16,310,512	6,892,000	169	39	
31	75,433,240	57,463,978	1,105,669	16,263,593	600,000	171	39	
32	96,934,575	76,297,561	1,340,070	19,296,944	0	199	39	
33	106,229,388	76,872,623	1,721,979	23,934,786	3,700,000	200	40	
34	110,025,825	79,571,831	2,202,903	24,615,091	3,636,000	184	40	
35	125,772,586	91,980,829	2,290,522	25,587,235	5,914,000	186	40	
36	165,777,497	107,411,807	5,156,762	35,873,928	17,335,000	183	40	
37	186,037,948	126,002,877	5,726,579	43,661,492	10,647,000	192	40	
38	205,307,521	148,664,531	6,154,000	46,829,990	3,659,000	182	40	
39	210,991,000	155,174,000	5,477,000	40,951,000	9,389,000	182	40	
40	232,573,459	171,453,931	7,184,544	46,954,306	6,980,678			
41	233,302,515	165,105,533	7,259,306	60,937,676	0			
42	222,437,509	120,626,984	7,259,306	39,252,860	55,298,359			9講座神大へ移管
43			4,172,000	27,472,036	0			

表2

教職員数の推移表 (各年、3月31日現在調)

年度	採用退職の別	学長	教授	助教授	講師	助手	小計	主事	技師	小計	主事補	技師補	嘱託	小計	保安員	運転員自動車	農場員	飼育員動物	用務員	見習員	交換員電話	小計	計	備考
24	採用	1	7	6		4	18	6		6	17			17	3		5		8			16	57	昇格，昇任，職名変更による異動数は現員らんのみ記載しているので差引数においては一致しないらんがある
	退職							1		1	1			1									2	
	現員	1	7	6		4	18	5		5	16			16	3		5		8			16	55	
25	採用		5	9	1	19	34	2		2	6			6					5		2	7	49	
	退職					2	2				3			3									5	
	現員	1	12	16	1	20	50	7		7	19			19	3		5		13		2	23	99	
26	採用		2	3	6	22	33	1		1	11			11			4					4	49	
	退職					1	1				1			1			2					2	4	
	現員	1	15	19	8	39	82	9	1	10	27			27	3		7		13		2	25	144	
27	採用		4		1	8	13		1	1													14	
	退職				1	5	6	1		1	5			5									12	
	現員	1	19	22	8	39	89	8	2	10	22			22	3		7		13		2	25	146	
28	採用		1	3		15	19	1		1	2			2	1							1	23	
	退職		1			8	9				2			2	1							1	12	
	現員	1	19	26	9	44	99	2	9	11	22			22	3		7		13		2	25	157	
29	採用		2	4	1	9	16	1		1	3			3			1			1		2	22	
	退職					2	2				3			3			1		1			2	7	
	現員	1	23	34	7	48	113	10	2	12	22			22	3		7		12	1	2	25	172	
30	採用					5	5		1	1	3			3			1					1	10	
	退職				1	2	3	3	1	4	4			4			1		1			2	13	
	現員	1	24	37	4	49	115	7	2	9	21			21	3		7		11	1	2	24	169	
31	採用			2	1	5	8	4		4	1			1									13	
	退職		4	1		2	7				2			2	1						1	2	11	
	現員	1	24	42	3	46	116	11	2	13	20			20	2		7		11	1	1	22	171	
32	採用		3	8	4	6	21	2		2	7			7			7			2		9	39	
	退職		3		1	1	5	1		1	5			5									11	
	現員	1	24	50	6	52	133	12	2	14	19	2	1	22	3		15		8	3	1	30	199	
33	採用					3	3	1		1	3	1		4			1					1	9	
	退職		1	1		2	4	1		1	1	1		2			1					1	8	
	現員	1	26	53	2	50	132	15	3	18	19	1	1	21	3		15		8	2	1	29	200	
34	採用					3	3	3		3													6	
	退職		1	2	1	8	12	4		4	3			3			1		1	1		3	22	
	現員	1	25	53	2	42	123	18	3	21	13	1	1	15	3		13		7	1	1	25	184	
35	採用					7	7	4		4	2		1	3	1		2			1	1	5	19	
	退職		2	1		7	10	4		4	1		1	2			1					1	17	
	現員	1	23	52	2	42	120	21	3	24	12	1	1	14	4		13		8	1	2	28	186	
36	採用					4	4	8		8	1			1			1			1		2	15	
	退職	1	2	1		4	8	6		6	3			3						1		1	18	
	現員	1	20	52	4	39	116	27	3	30	6	1	1	8	4	1	13		8	1	2	29	183	
37	採用					5	5	1		1	4			4			2	3				5	15	
	退職			1			1	3		3			1	1			1					1	6	
	現員	1	21	51	3	44	120	26	3	29	9	1	0	10	4	1	14	3	8	1	2	33	192	
38	採用					1	1	2		2	3			3			1	2				3	9	
	退職		2	2	1	5	10	5		5	1			1			1	1	1			3	19	
	現員	1	22	47	3	38	111	25	3	28	9	1		10	4	1	14	4	7	1	2	33	182	
39	採用		2			4	6	1		1	4			4			1		1			2	13	
	転退職		2	3	1	3	9	1		1	1			1					2			2	13	
	現員	1	30	40	4	33	108	25	3	28	12	1		13	4	1	15	4	6	1	2	33	182	
40	採用					3	3				1			1				1	1			2	6	
	転退職		4	1		1	6	5		5	3			3	1		2		2			5	19	
	現員	1	31	34	4	35	105	20	3	23	9	1		10	3	1	14	5	5	1	2	31	169	
41	採用					1	1													1		1	2	
	転退職		16	15	1	11	43	3	2	5	3			3	3	1	5		2			11	62	国立神戸大学へ移管第1年次
	現員	1	16	19	3	24	63	17	2	19	6	0		6	1	1	7	5	3	2	2	21	109	
42	採用			1	1		2				2			2	1							1	5	
	転退職		10	10	3	12	35	4	1	5	6			6	2		5	3	2	2	2	16	62	〃 第2年次
	現員	1	7	10	1	11	30	13	1	14	2			2	0	1	2	2	1	0	0	6	52	
43	採用																							
	転退職	**1**	**7**	**10**	**1**	**11**	**30**	**13**	**1**	**14**	**2**			**2**		**1**	**2**	**2**	**1**			**6**	**52**	**〃 第3年次**
	現員	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**	**0**			**0**		**0**	**0**	**0**	**0**			**0**	**0**	

附表V

兵庫農科大学卒業生一覧

（※　物故者）

第　1　回　（昭和28年3月卒業）

農　学　科　14名

飯野嘉和	勝川周郎	久保知義	坪倉浩一
稲山恒夫	西川欣一	野原啓吾	細見　正
前田巳之助（旧姓中安）	松浦良彦	宮澤秀介	三木正士
村田　熙	山口　禎		

農芸化学科　15名

東　順三	今村文郎	井口弘之	久下　平
小林一盛	小口匠生	坂本圭佑	田中平義
※永杉健二郎	野々口義隆	山取集八	山本　治
横田耕一	和田茂樹	鷲尾治郎	

第　2　回　（昭和29年3月卒業）

農　学　科　15名

有田史順	石田陽博	岡本恒男	川崎泰民
川端　清	酒井　徹	※清水幹司	世木尚夫
津国節男	東郷　満	堂本高明	平山国治
平吉功樹	山門峰夫	石川瞭二	

農芸化学科　15名

魚山完三	河北　明	河村恒徳	河南　恒
貴田正義	久保一兵	酒井重男	真鍋恒一
中川　敏	能宗康夫	信西清人	福田喜一
古川　淳	正井博司	山内治雄	

第　3　回　（昭和30年3月卒業）

農　学　科　26名

石野拓造	岡田稲喜男	大南　彰	尾松滝雄
賀美富士雄	喜多河順造	木戸口三郎	酒井速雄
桜井隆雄	下嶋悦男	瀧川憲嗣	高見和光
垣内正記（旧姓西脇）	橋本利太	八田知美	樋口英武
前川　進	前田　弘	前中太三	正永　勇
松田一義	南　敬貴	三宅　昌	桃井節也
守本卓也	貴嶋鉄彦		

農芸化学科　21名

青木茂雄	大内智次	岡　敬一郎	小田和正
久保田昭正	公文啓雄	是技哲士	田畑増生
千葉嘉胤	西垣倬夫	西口実美	西村哲也
橋　和夫	※細見友馬	前田直彦	村本卓夫
児島初男	衣笠大吉	橋谷義人	古河信夫
山本四郎			

畜産学科　5名

伊藤　修	中西博信	※長谷川　豊	羽室宏昭
牧野信彦			

第 4 回　（昭和31年3月卒業）

農学科　21名

稲森次郎	今村幸三郎	井殿敏雄	岡田侃一
奥西　弘	荻野正平	小前寛治	早栗　毅
清水清隆	中谷吉実	中島正清	永井　悟
鍋山郁夫	桧皮光昭	古田　昌	藤田悦久
正木三夫	丸山輝樹	宮本弘義	※溝畑進務
森　俊人			

農芸化学科　22名

安達忠良	相川治昭	稲川千秋	片岡弘男
片瀬正之	岸本　功	喜多河四郎	黒田隆雄
久下誠彦	小林　明	阪本正子	佐伯敬道
須方通郎	谷口耕三	谷口　修	谷田嘉久男
玉川祐光	土井久司	船木宗昌	長澤　繁
幣　洋	松岡洋治		

畜産学科　17名

小西　進	金藤祐輔	川越幸雄	佐藤允男
下岡文一	竹下　完	都筑良武	中井貞夫
仲井啓郎	西上純弥	長谷川忠司	古島寿之
藤中　勤	松原佳成	森田衛輝	柳田昌三
和田善博			

第 5 回　（昭和32年3月卒業）

農学科　22名

赤松輝彦	豊増千鶴男（旧姓荒木）	石川克行	稲次三郎
井上庄平	岩崎厚夫	小西保雄	中村靖弘

新田邦夫　長谷川市郎　林隆正　平野彰一郎
藤岡烈　本田安利　松井範義　三方彰一
村上和良　村原稜　森澤巧　安川峻男
山本功　鷲尾三郎

農芸化学科　31名

新井瞳　芦田美佐子　石浜義信　井関徹三
※井上敦雄　上山英夫　奥田幸康　小島悟
勝村明夫　木寅三司　木村康一　清原利文
小山禎彦　近藤奎吾　後藤弘志　酒井一幸
阪本多門　桜井宏一　新家龍　橘次郎
千葉泰弘　中村靖夫　波部喜代志　福井康夫
藤井聡　堀江正治　松原正明　森下昌計
安尾勲　吉岡邦明　米村忠司

畜産学科　13名

今村金二郎　橋爪保武　岸田満須夫　小山佚怡
進藤恭　杉本金五　寺本章　中島英夫
西村元喜　水船宏　三原英和　薮中治郎
池上良一

第6回（昭和33年3月卒業）

農学部　21名

秋末宏幸　石野尚弘　大塚美智夫　大森明夫
岡村昌明　加藤暢重　岸本基男　北浦義久
北垣忠温　小寺徹彦　桜井紀子　進藤正隆
高倉淑雄　内藤正敏　野々口睦巳　野村吉弘
※前田邦矩　宮城重喜　森口忠義　山田克彦
石田薫

農芸化学科　22名

芦田敏男　上田洋　内海敏博　勝本克彦
川村修　来村瞭宏　木下顕　久米威三郎
小林義夫　後藤秀夫　桜井勝夫　渋谷直唯
谷口正昭　玉森忠顕　辻春雄　夏見俊彦
波多野国視　深田順次　安福弘明　三浦樹紀
吉田泰男　吉田善彦

畜産学科　13名

石田司郎　植木邦人　大東明　大神弘
佐谷稔　玉岡昌則　中村秀昭　西浦宏

氷上雄三　広岡瑞一郎　古河武司　間野文爾
森部至博

第 7 回 （昭和34年3月卒業）

農学科 28名

足立正　石井貞雄　植田武彦　浦岡睦
大樫常臣　大西章司　尾崎武　金子忠康
河南重晴　岸本石根　北野成彦　葛原正雄
斉藤豊夫　坂井一郎　笹倉克也　白石善樹
関泰男　多方正信　高畠三郎　津田佳久弥
恒光伍郎　中沢啓一　西浦康二　畑中陽次
平川昌寛　前田勅滋　毛利敏治　米田正好

農芸化学科 25名

井上博文　植山光陽　臼井且郎　太田信雄
大野茂　勝川実　河南泰弘　河南彰
金森邦夫　岸田忠昭　岸本章　北山範夫
吉瀬徹也　小倉実　小林俊彦　酒井進
田附康彦　樽味宏　瀧内雅宏　豊田正也
中森久明　冨士大高司　前川洋一　前田昌彦
山本正義

畜産学科 15名

石田敏彦　荻野充胖　小林寛二　世良義明
高田彰宏　出口公長　中尾春雄　中谷修
永原茂夫　馬場鉄治　藤尾芳久　松尾誠三
山本修　横林哲也　米村健

第 8 回 （昭和35年3月卒業）

農学科 40名

池口慧　石橋正義　市村祝夫　井上隆溥
上田武志　内田淳　内山隆明　大佐田宏良
加古武和　川上邦夫　神田聡　岸田安弘
木下勝　黒田洋司　小稲茂夫　古河崎正昭
中川勝文　関灘重一　田中智　田淵義朗
中尾（旧姓今藤）重保　中川秀夫　長澤弘　野田眞良
橋本敏正　蜂須賀清彦　平川克治　藪林拓行
藤岡道　藤木靖男　藤原武文　藤原良平
堀宏行　堀口功　堀口昌男　前田義人

前野良夫　前山　勇　森田尚敏　安井秀夫

農芸化学科　26名

和泉孔庸　大倉正也　金関　憲　鎌谷　勲
※北尾暢康　黒田武良　古西義正　小林一郎
坂上　經　※上木克友　高谷和男　高浜哲哉
武山　昇　谷口次男　津田安啓　中村隆則
西川元介　波部　浩　林　宏昌　福田　久
藤本孝順　戸次純一郎　前田泰秀　松下　功
森竹利夫　矢持四郎

畜産学科　20名

泉　潤　井上照朗　高見吉一　岡本圭司
勝矢邦男　川内正幸　香山秀和　小林晥二
小松基宏　正垣蓉之輔　杉田正見　竹内嘉朗
西本壮一郎　表具　董　松尾佳彦　水澤健治
妻鹿康行　山口義人　吉田朝光　盧　在定

第 9 回　(昭和36年 3 月卒業)

農学科　41名

足立隆昭　位飼孝明　井上博明　井上征男
※岡田寿光　小田垣博三　川田　統　金田成雄
京川義久　久下征士　桑原寛太郎　小林征夫
近藤博美　酒井　修　進戸牟光　杉田靖興
鈴木素彦鳴　須永忠雄　田井　晃　竹中祥倶
土井郁夫　中尾義則　永田健二　浪貝　裕
西岡省三　橋本佳久　長谷部健一　樋口清一
平田善昭　古家資也　細見峻弘　本間恒夫
松永英輔　松本　浩　水谷利治　村上義一
室谷哲生　山内　脩　吉川　徹　吉田澈平
吉田敏也

農芸化学科　35名

石橋次男　入江義人　岩見止才夫　上中茂義
魚山洋一　永並　明　太田博司　岡谷伸治
荻野信人　岸本芳郎　喜多八州男　小山博之
酒井富久美　坂本昭夫　佐野秀夫　正源寺正義
鈴木清明　鈴木　蓮　巽　祐一　田中光夫

園野源一　土田廣信　長沢園司　長島成光
西川清志　西本俊一　畑　英雄　細見　淳
堀本繁信　前川文男　森　浩祥　山田　隆
山本篤　行政定夫　渡辺　進

畜産学科　21名

青木久雄　稲岡重幸　今井眞一　運天朔正
太田章　大森祥男　織田博司　小林克彦
杉原一三　武田和雄　多田三喜男　田中弘
鳥羽友昭　花崎長登　飛田健吉　前川浩治
前坂正　前田利家　三木啓造　村尾久隆
米山恵　　　　Z・9 (21)

第 10 回　(昭和37年3月卒業)

農学科　37名

芦田昌保　井関五郎　伊藤剛　稲垣国昭
井上靖郎　岡嶋潔　岡本喜一郎　岡山光雄
岸谷靖雄　古家正敏　小山美幸　佐々木英夫
島津久明　城谷進　新保幸範　武晋
竹内正　田中正義　田中美治　戸沢昭夫
西谷延彦　長谷崎雅弘　藤田利親　細木光
本郷義雄　牧晃　牧亨　松原成克
松村康正　宮崎直道　森本明義　保田茂
山崎敏雄　山田孝義　山田誠　山本勝一
和久克明

農芸化学科　30名

稲田和之　井上治彦　岩井剛　梅谷邦彦
大杉匡弘　岡松修身　小野豊三　鍵本正之
岸原士郎　斎藤鉄夫　柴田征一　谷口良弘
田村元義　辻洋一郎　出口厚生　寺岡確司
中田昌信　長岡俊明　永田忠和　西浦隆司
畑中熙　波多野敬二　福井伸宏　藤田儀信
前川季義　松下昌弘　森孝夫　安川章
山村春夫　山本隆司

畜産学科　17名

蘆田一幸　木下啓佑　木村寿彦　坂野恵造
桜井誠次郎　柴田次郎　菅原通弐　住田昭男
高橋忠生　塚元晴彦　中井勉　中村康

仁藤憲征　東元治也　藤井明雄　別府昭彦
松浦祥二

第 11 回　（昭和38年 3 月卒業）

農学科　33名

田中光夫　稲見寿樹　上山薫　宇治日出二郎
(旧姓足立)
円増肇　大岡眞夫　大谷周　大谷忠敬
栗崎康徳　小林豊政　小山重示　芝辻淳一
清水義生　鈴垣則夫　高見昭弘　橘厚三
田中善男　谷口健　津川兵衛　中村喜彦
畑中康　樋口進二　福井正樹　藤田冨夫
戸次浩二郎　松尾紀敬　松本文雄　宮崎秀紀
村上一致　室田行雄　湯浅浩史　吉田守
脇尾忠久

農芸化学科　30名

足立収生　生島紘一　伊藤清　江田扶介
尾下廣敏　大村哲夫　小原眞也　金関良子
(旧姓佐藤)
鎌田廣司　神部昌彦　木村宇一郎　衣笠誠吾
楠本義雄　志賀元信　※鈴木武司　田中正一
坪内宏　仁木大治　西村信行　福若茂太
藤崎正時　廣田滋　三宅咸一　三木健
森友彦　森博章　山内惇一　山根敏英
山本建志　吉田英毅

畜産学科　17名

浅野拓三　植木五郎　江口宣昭　岡沢秀晃
河南保幸　北川勲　久保善信　黒田正明
小林弘宣　酒井一　清水克彦　團史雄
中濱光生　檜本浩一　逸見眞二　松木晴義
渡辺大

第 12 回　（昭和39年 3 月卒業）

農学科　34名

天野高久　井上寿　猪股涼一　上田昭彦
大久保理生　岡沢美津子　岡本康義　小国昭信
鎌本勝博　岸本晟　小林久太郎　小林尚武
坂井永利　佐藤充実　下川和生　瀬川政一
竹谷昭彦　谷俊祥　中田義富　中川洋
中野義彦　坂東義三　廣島豊彦　藤池昭之

藤田豊英　本田勉　松浦幸夫　圓尾哲郎
水田勲　村上顯　森田正勝　山下安博
山本博昭　横井政美

農芸化学科　28名

青山英紀　網代眞也　池田裕彦　上村啓
江上富士雄　王子善清　荻野仁志　角田洋
木村一彦　賀川知彦　柴野隆也　清水希彦
新藤充宏　高井崇博　辻啓介　内藤毅
楢本勲　畑克守　東野和夫　久田芳郎
藤田安志　堀安行　本郷主税　森鼻久
山田敦夫　山本茂和　湯川益男　米田耕作

畜産学科　18名

石原矩武　大西正登　小田垣昭治　勝元一
※加納久數　鎌谷昭　神中舜正　角倉来
竹内碩　谷口明浩　辻荘一　常深邦晃
中川一司　藤川孝行　三徳四十四　無量林尭
山本茂　米田哲

第13回　（昭和40年3月卒業）

農学科　31名

荒木斉　池田吉一　植杉次郎　魚本富郎
大田征六　奥原茂　小池成夫　小林範子
小原孝夫　斉藤長生　芝軒邦夫　住吉公文
竹内眞嗣　竹中尚一　内藤親彦　永吉照人
西田清數　早川巖　日高昌三　平山敞
藤原宣正　藤本和男　前田佑一　増田康雄
丸山英彦　水谷武雄　水谷晴彦　山田堅一郎
村本充正　山田光良　山本將

農芸化学科　31名

芦田賢一　伊藤武秀　内田順博　宇仁龍彦
大江武　大谷良逸　岡本浩之　岡本吉司
垣本建一　片岡一博　金井寛　阪本薫
嶋澤正彦　下坂宏　高橋竹彦　高橋弘剛
武本要人　田部嗣郎　谷口寛治　民田義弘
中村好秀　西釋英章　林良純　平谷潔
松浦捷二　松原功　宮出伸一　山崎潔
山崎孝一　吉田千秋　黒田人士

畜産学科　20名

天野忠明	岡　正路	生永治彦	栗原　慧
小山一義	芝田恵夫	下岡一則	杉本龍秀
杉本光房	多田俊明	冨山忠昭	仁科圭司
萩本邦彦	番匠宏行	寶山大喜	水野　進
南　昌明	盛谷　浩	柳　正城	多田泊二

第 14 回　（昭和41年3月卒業）

農学科　40名

淺田武典	新木正昭	宇杉興一	大賀三郎
加藤一人	置塩康之	小出健士	奥山益生
落合明美	岸本正紀	黒田禮文	後藤孝雄
志野木邦夫	芝田正一	菅原政芳	武下謙一郎
辰巳吉彦	新谷芳粋	千部祐子	重富規正
中前公之	西田隆昌	西脇吉彦	萩原誠二
畑澤則雄	幡野尹信	林　博行	細川延英
細田昭男	岸田剛二	友井健夫	西川　澄
原　淳	藤田隆彦	味村省藏	中條道裕
高田紀夫	宮崎雅夫	川田温生	恒次邦彦

農芸化学科　34名

岡野康之	青山　洋	池田雅充	石井康雄
伊藤孝之	伊藤嘉博	岡本　晃	岡本英輔
河合忠明	垣内鉄平	上月延介	小山太八郎
横田眞人	新納功一	高木槙夫	高見知之
田仲正之	谷口良平	園野定次	中島正行
中西敬夫	野呂良久	畑中彌寿彦	東郷和紀
肥田修二	平岡謙一	福西洋幸	藤原武治
三宅謙二	山口芳和	矢野泰臣	渡辺正弘
渡辺常一	渡辺和彦		

畜産学科　20名

厚海　宏	井上勝博	大田凱夫	大林信夫
佐伯一郎	渋谷　徹	清水洋一	隅田啓介
竹安　進	冨田隆三	中井公明	西村義孝
廣澤武夫	戸来正博	松井克也	三木　卓
山内隆司	山本昌弘	和田彰文	脇　喜和

第 15 回　（昭和42年３月卒業）

農　学　科　45名

池田健三	石井宗博	井上正保	大澤　淳
太田　賢	大村義憲	岡本清嗣	鹿島平藏
柏木知	梶原佑三	久下豊彦	小池正之
斎藤允己	迫　正幸	笹谷　平	佐藤勝彦
佐藤　喬	杉本正勝	園田　浩	高貝忠弘
高瀬孝三	滝本　進	辰己　廣	田中立根
田中瑞樹	谷口敏彦	谷田清秋	西内允武
西野治彦	西山幸司	林　錠一	堀田春夫
前川匡宏	前田孝司	松下修三	望月　晋
森岡　通	柳田育宣	山口吉則	渡部忠司
和田　勲	藤田章子	丸山　真	山口勝幸
宇佐美暘一			

農芸化学科　37名

淺川　浩	石下雄造	石原　晃	市岡　馨
今津彰夫	上山貞夫	内由邦夫	大岡信夫
太田守彦	大野博行	大原保雄	岡本靖弘
億田紘一	加藤進弘	岸本　極	櫛部孝二
久保繁幸	田頭康弘	多志満弘夫	田中靖夫
塚本準之輔	寺岡彰夫	時岡　登	西川勝美
服藤　峻	藤原　昌	渕上　彬	松尾健二
松下輝雄	森　直道	森本克巳	山本菊治
横山宏	吉川年彦	吉田公夫	脇内成昭
恒木忠昭			

畜産学科　19名

井口元夫	井上珖一	岡田勝三	岡村啓司
金野省三	神戸　陽	久下豊光	楠　正毅
坂井田智治	外林諭吉	高木秀暢	友金　弘
信岡正登	山崎雅之	山西宏明	吉田穣治
和田信行	堀毛善明	中川　守	

第 16 回　（昭和43年３月卒業）

園芸農学科　35名

有澤　篁	有元達知	石崎勝彦	岩崎正範
岩花光彦	上田博昭	大田垣多一郎	大西秀人
親泊康夫	陰山　駿	桑本　進	小谷　要

佐野　滋　塩川芳郎　勢志忠嗣　清田直樹
髙月和美　髙橋信彦　田頭康和　富田希一郎
中垣長睦　中川和代　中西安司　灘　泰宏
西松武宏　西脇圀博　橋本博允　平澤昭男
福島　明　松尾信吾　松下征彦　三輪順子
村田武久　山本義三　侯野和英

（旧制農学科）

植物防疫学科　19名

青木和年　井口　剛　五十川是治　宇杉富雄
岡田　忍　小川長利　桂　稔郎　岸野正司
佐郷勝也　酒井清隆　白石裕久　進藤凱紀
長尾秀之　平松禮治　星野顕彰　牧野徳彦
村田賢二　山川　昇　仲　誠一

（旧制農学科）

農業生産工学科　24名

池田弘司　石濱　英　板井丈夫　伊藤久儀
伊藤　勝　岩本陸生　臼井　敏　太垣秀和
奥田博司　一見光男　神谷保好　菊池秀城
澤村維知郎　鷹野正二　中川　清　中谷健治
羽野明範　古田　守　松井　功　松下親之
宮郷博明　森宮　峻　山中郁夫　幸　義隆

農芸化学科　37名

秋末　力　池田恵治　石橋　宏　井上哲哉
井上吉一　今井　徹　上垣　豊　宇治田勇次
氏丸俊彦　宇杉正昭　岡根谷隼次　片山　誠
勝矢泰夫　加納健三　河合次郎　小西喜八郎
酒井忠司　澤崎晃榮　副田真佐雄　竹川　龍
武下龍夫　中村　修　中村　親　長手尊俊
西海秀作　長谷川信弘　花本秀生　播磨　修
福井正憲　真継　博　松村正信　山下市二
山田峯久　山本和博　吉井國郎　吉倉惇一郎
舞田慶一郎

畜産学科　28名

荒木　公　伊佐光雄　石井豊治郎　井上士郎
岩谷　尭　植木正雄　大野　勉　越智昭博
大江秀夫　加舎和子　桑原佑司　小林義武
芝野日出男　杉原重治　髙橋祐三　高良昭雄
谷口正夫　中津　篤　西尾　司　西川吉孝

半澤幸一郎　藤原耿之介　細見充史　三浦隆治
三原哲男　吉村俊紀　村西節治　村上勝也

第 17 回　（昭和44年3月卒業予定）

園芸農学科　38名

青木文吾　石井敏弘　上田勝一　岡田清志
海山家隆　神木清　河合希直　川口典
木村嘉門　桑島茂子　小村国則　小山康之
坂上日出雄　阪口純一　澤田圭吾　重久毅
白石邦英　菅井晴雄　関山太　高橋洋二
橘温　立花誠一郎　佃和民　土屋隆生
長谷川嘉昭　原宏　原田文雄　藤田正子
堀内久満　前田浩典　前田豊　宮川龍明
三輪悦夫　森下正博　和田舜二　若林茂
若山潤一　星野昌

（旧制農学科）

植物防疫学科　26名

生駒紀男　今川昂　入江和己　入江克美
宇山賢一　兼田喜明　川口明　北尾實朗
佐藤敬文　塩田悠賀里　立入政之　田中康司
中川章三　長嶋正彦　西村正史　延原正弘
土師利和　原忠彦　福永勲　水野浩
百田洋二　矢田脩　山口隆右　山田保
吉田茂　今井国貴

農業生産工学科　23名

梅本諭　井上雅之　今村道信　梶原孝嘉
加藤茂男　菊田旭宏　木村逸郎　佐々木光博
尾川五朗　鈴木道夫　陶山武司　高田豊
田中圭介　谷口啓　常友永市　寺本努
鳥山孝昌　中島周治　原恒夫　松田弘
宮石進介　村田幸裕　湯淺哲昌

農芸化学科　36名

赤松幹雄　淺野正志　嵐一夫　有本敏之
小原良明　片山一　神田豊　岸本今日子
北原修　木輪亜夫　久代昭夫　酒井洋二
直原俊策　高木弘之　孝橋真理子　谷哲哉
照瀬勝仁　徳廣正道　長澤藤延　西村浩

濱　和明　萩中慶治　平谷善彦　平野克彦
藤田正邦　船路徳七　松嶋勝嘉　松田修幸
松原健　三輪豊隆　山北太郎　山本義明
山本隆三　吉本一之　蔑山裕子　谷口正浩

畜産学科　32名

蘆田郁夫　麻生達二　岩佐貞夫　大喜多健彦
大塚洸次　大槻吉継　小畑太郎　片木博之
姜岩童　坂戸一郎　笹尾民夫　佐々木博己
杉本善美　千崎佑二　田崎泰二郎　田宮一輝
中西健郎　中西三生　中道忠宏　永井博美
永松正徳　土生俊雄　氷室進　藤本睦雄
藤原政啓　細谷圭助　堀口好昭　本城武久
三浦俊六　三木泰之　山代正夫　李春雄

短期大学部（鶴陵会）

第1回　（昭和28年3月卒業）　73名

芦田正富　足立祐幸　石坂十字　井上皎
（旧姓足立）
井上貢　今井孝　今田淳彦　魚住広道
尾内崇広　大杉保男　山口孜由　角岡斉
（旧姓大西）
金井正夫　加門康宏　岸本哲夫　切貫武代司
上坂旭　児玉勝義　小林勝　小山吉二
野口利宏　柴田一郎　芝地喜代一　渋谷宏徳
（旧姓桜井）
清水悦　島田勤　高井寿一　三浦晋
（旧姓吉田）　（旧姓武内）
田中益雄　棚原敬止　都留茂　寺田哲也
田路篤　時安秀延　富田清　豊田泰敏
中尾脩　長尾嘉彦　中谷正美　中村紀郎
沼田昇　西川修　西河清　西口一成
（旧姓二重）
西田誠　大野三郎　清水民五郎　早川勝
（旧姓長谷川）　（旧姓畑）
福沢一郎　藤尾欣二　藤岡時夫　藤田鉄也
藤本良一　藤原稔　船原昭男　松尾博次
松岡永治　松田幸三　松原捨雄　松本実
丸山輝樹　丸山永　三木久弘　宮宅安雄
（旧姓永峰）
宮永治美　邑橋和夫　本岡安勝　賀川実
（旧姓森下）

山口誠道　山田耕作　草川貞良（旧姓 山本）　幸長勝実
吉野昭治

第 2 回（昭和29年 3 月卒業）　73名

安達幹夫　荒木修　井場義晴　大西彊
大内栄治（旧姓 見明）　河原義信　岸本光司　窪田嘉昭
山崎裕美（旧姓 小佐）　島田達男　坂井修　砂川和夫
田中芳隆　谷口雷太郎　高畠末暢　中島一三
西岡弘之　西山敏和　長谷川昌則　船引浩一
細見一敏　松下房雄　松本繁樹　増田逸雄
松原敏夫　三原有三　宗平長城　安尾勲
山本勇雄　山本義孝　山口照和　安富隆久
横山雅臣　横田幸治　米沢一幸　吉田繁雄
石山豊　飯塚鉄也　磯野敏明（旧姓 植原）　梅木明義
中務猪之助（旧姓 内海）　上田芳　大藪領一　大野忠治
紙漉政一　兼古桂　北内昌彦　横谷幹（旧姓 九合）
塩崎真一郎　高田宏策　武田陽之　田中秀正
竹下令雄　佃貞徳　小林敏（旧姓 坪田）　苗村司郎
中尾裕之　中森進　浜端省二（旧姓 中村）　橋本清
長谷川進　林田幹夫（旧姓 四方）　広田豊　高原隆生（旧姓 藤川）
河原絹男（旧姓 藤原）　前川重夫　前田三郎　松尾達義
丸岡哲郎　三好旭　山中芳郎　山村貞平
長井好明（旧姓 横山）

第 3 回（昭和30年 3 月卒業）　63名

甲斐務（旧姓 石川）　上野弘　大西豊司　大西成巳
岡村政夫　河田隆夫　岸本昭宏　衣畑琢次
倉部次男　広本茂樹　篠原正登　諏訪義昭（旧姓 大西）
高橋勝洋　山形庸（旧姓 田村）　檀特教信　東坂豊
中尾耕作　中戸健　中村正　福井格
溝端隆（旧姓 藤井）　藤田斉　藤田隆司（旧姓 沼田）　丸山正樹
宮永賢才　山口美治　山口菊雄（旧姓 安達）　山本仁志
南弘（旧姓 山本）　藪田昌之　吉田徳之　麻中俊宏
乾寿　岩本治　大西陸夫　岡本正典

菊元督一
（旧姓森田）
藤原賞三
（旧姓小枚）
高徳正弘
中谷宏
福山昇
湯尻邦夫

岸本洋三
小林長司
清水啓造
（旧姓井高）
土肥洋
平田吉照
八木和一
※岡野猛

沖素務夫
高馬繁一
塩谷亮一
柘植利正
長谷川為雄
藤原義郎
※西崎和聡

岡本保正
功力徳重
中舎和孝
（旧姓斉藤）
田村大
蝿原寿喜生
藤田勝
山本茂

第 4 回 （昭和31年3月卒業） 75名

内野敬弘
加藤誠一一
坂田啓一一
竹内敏文
田中治男
長井礼三
辰巳明
（旧姓畑田）
藤原敏泰
（旧姓丸岡）
土佐正
（旧姓足立）
岩崎篤蔵
小倉滋
桐山良平
酒井孝明
谷口慎吾
西岡利弘
春名八郎
槙原誠三
本岡登美夫

井上克彦
数井淳巳
近藤良樹
勢能秀憲
田中栄蔵
田渕哲
中村寿良
藤原龍平
吉田喬雄
井上浩
上田達雄
北井和利
梅田正晴
（旧姓小林）
高見富夫
永井淳一
播磨小太郎
前津栄位
村岡政雄
※岸本雄三

石田安夫
大田清重
久内英輔
杉原清一
橘保夫
竹村和男
（旧姓畑）
中西真
藤井直文
丸山幸男
稲岡正昭
上田耕三
古賀貢
（旧姓片山）
黒木征次
松沢蓉之輔
（旧姓正垣）
内藤洋
萩原秀夫
本多宏州
衣笠富重
（旧姓松本）
山田正二

池田千晴
内橋康二
釜江嘉幸
下川政一
橘正継
谷本文男
中島秋穂
福本高士
丸山秀敏
出田求
植木治郎
香川正清
国広真規
新田進
（旧姓佐藤）
土江泰夫
西田尚司
藤永英一
増岡昭博
矢崎渕美

第 5 回 （昭和32年3月卒業） 81名

高見吉一
（旧姓大槻）
黒田洋司
清水敏男
谷川日出男
津田安信

梅本英雄
釜坂正利
柴崎修男
武利光
佃末光

内山隆明
長田円次
吉峰春雄
（旧姓寒川）
高橋吉博
為則年博

内橋直昭
岡本晃
小西敏夫
高谷和男
玉谷一幸

中川秀夫
中表具薫
藤田義隆
森本和昭
赤松総躬
鎌田正躬
（旧姓井上）
太田倉雄
古崎正昭
武末昭彦
寺島正躬
西本荘一郎
引田博
藤原操
森田忠利
渡辺吉隆

川名公重
田山夫省
林上毅
井江利勇
木藤人雄
高橋元
津田啓
南条巌
東谷保
藤本常夫
松田至弘
幸一

中春藤向若井木高津南東藤松

剛
彦
博
治
宏
次
苗
郎
浩
祐之
典
正二郎

尾賀須
清
良
好
成
美
早
三
裕
保
祺
弁
四
持

中蜂広牧吉犬植北坂田鳥畠藤松矢

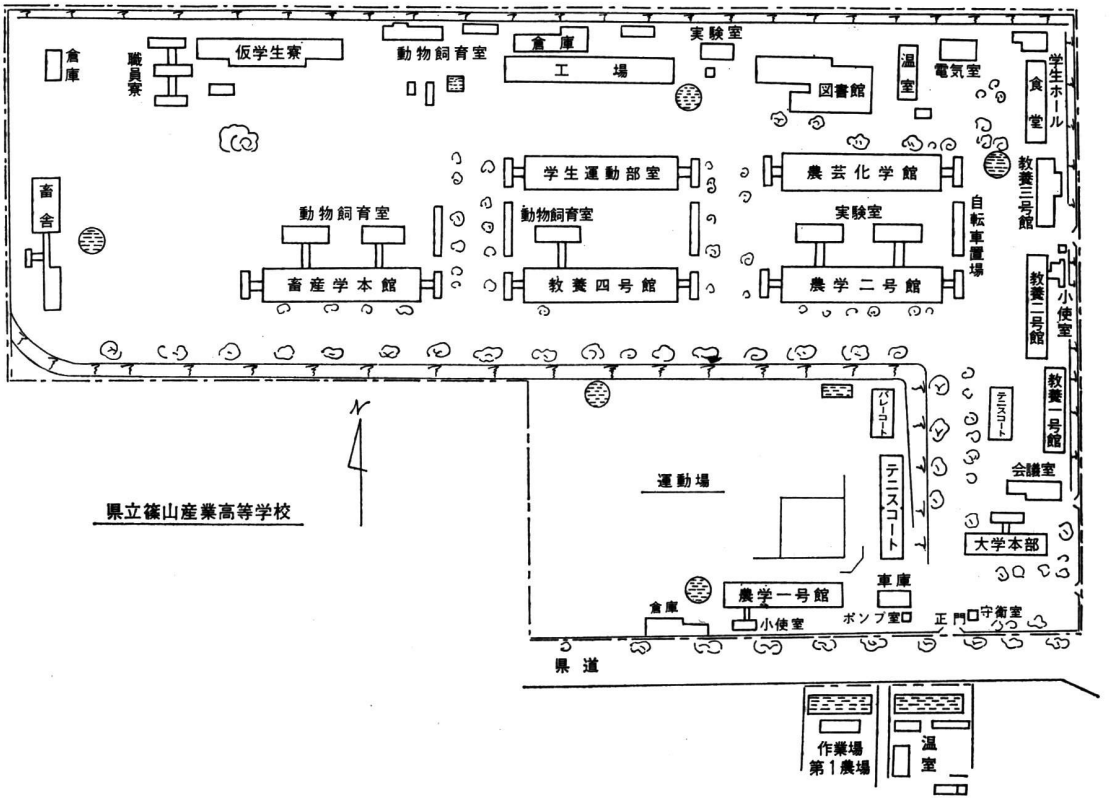
吾
昭
幸
道
実
郎
勝
昭
敏
男
功
直
治
勇
雄
夫

健
宏
敏
一
敏
稲葉
幹
政
耕
福
幸

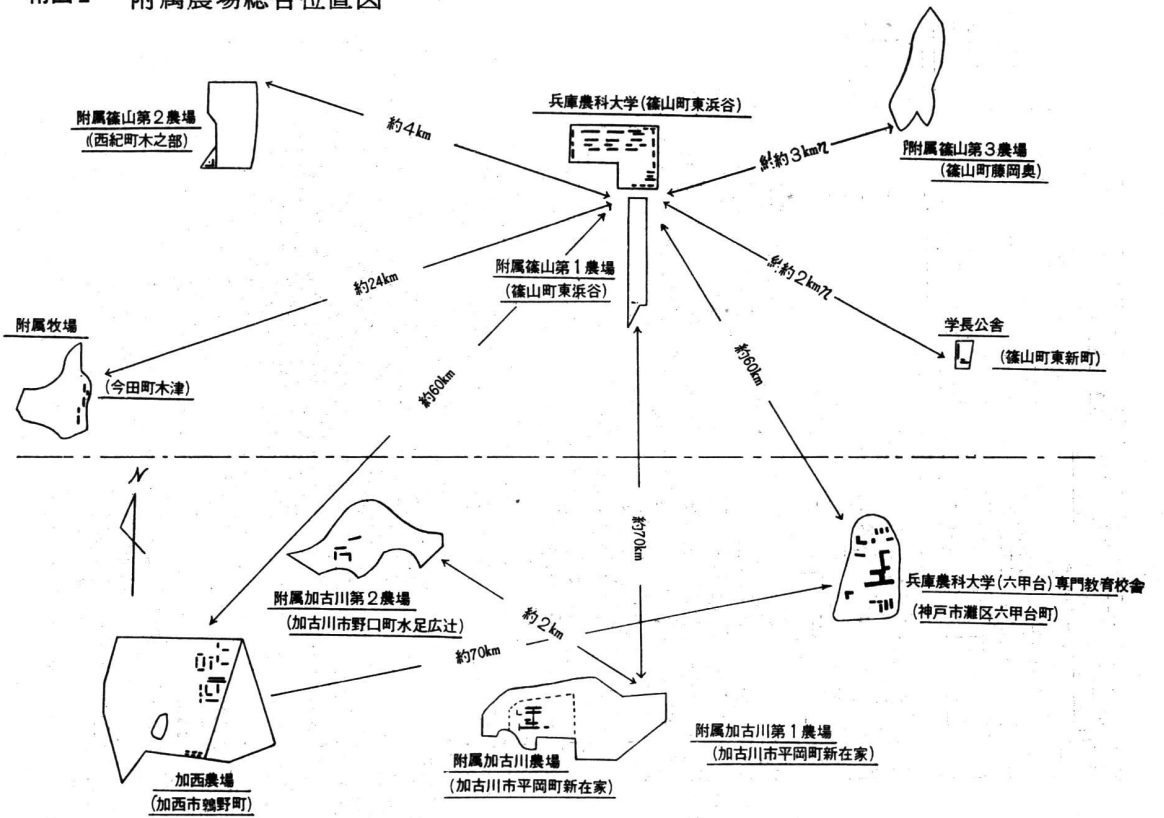
徳平橋平藤森石（旧姓上）笠小多渡久橋福前森大

平本岡原本本垣山寺田山本田山本杉

附図1　兵庫農科大学校舎配置図

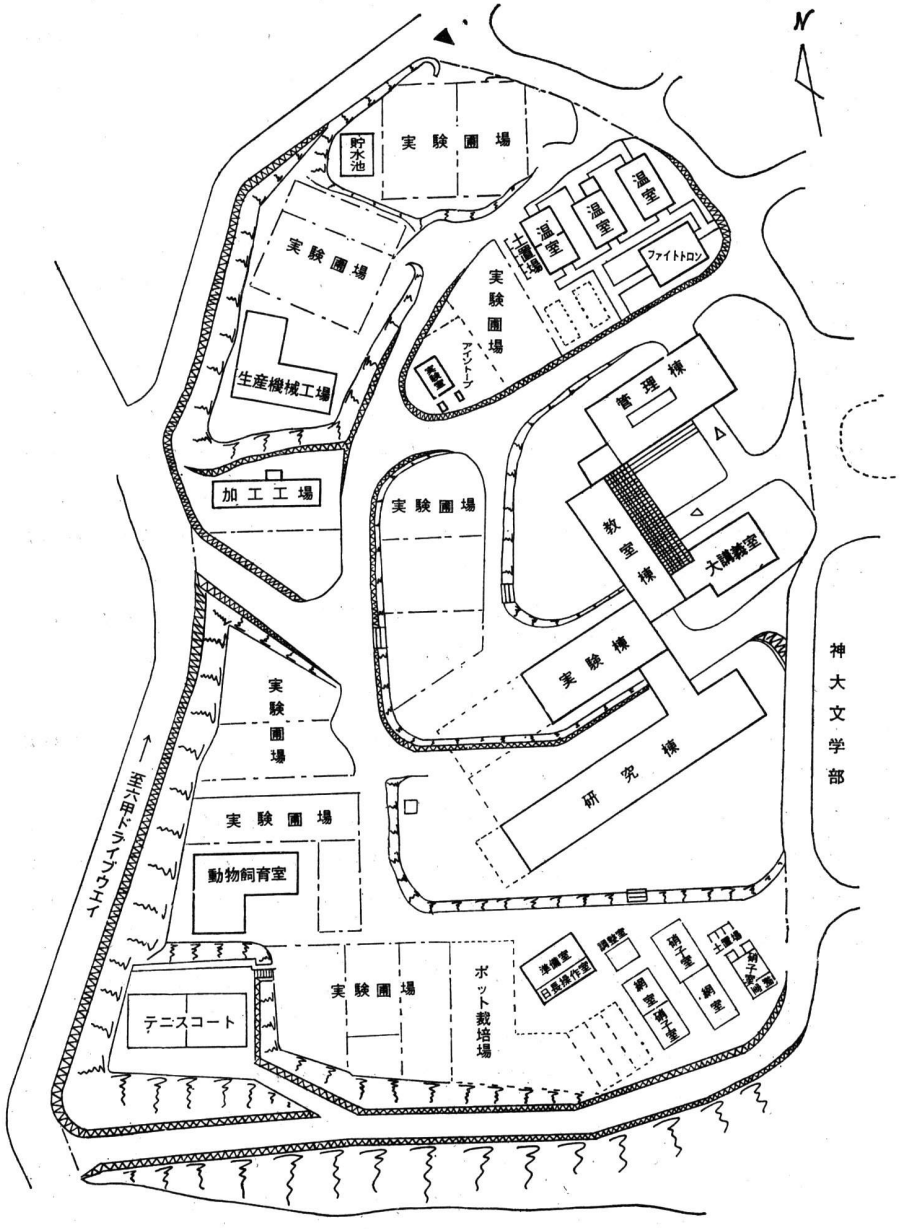


附図2　附属農場総合位置図



附図3

兵庫農科大学（神戸大学農学部）
専門教育校舎配置図



あ と が き

兵庫農科大学史の編さんという大仕事をひきうけることになりまして、才能に乏しい私たちは一時は途方に暮れましたが、何とか目鼻をつけねばならないと考え、既往の記録、資料にもとづいて事実を叙述するとともにできるだけ読者に終始関心をもって読了していただくようなものにしたいと心掛けてまいりました。従って会計および施設（土地、建物）等の詳細につきましては割愛させて頂きました。

また諸々の情勢の動きは県会議事録その他生（なま）の資料を掲載することが捷径と考えましたので可成りそれらの資料を利用させて頂きましたことをお断りしておきます。

殊に胎動期ないし草創期は15年ないし20年以前の事実でありますから、第1章・第2章の記述のほかに、より以上当時のことを印象づける追憶座談会記録や関係各位のものされた随想録（第7章および第8章）に多くの頁を振り向けました。

またこの書が刊行されるに至ったのは、一に県当局の御支援の賜と深謝の意を表しておきます。

更に資料の蒐集につきましては編さん委員会委員の方々の絶大な御協力によるものであることを記し、御芳名を次に列記しておきます。

兵庫農科大学史編さん委員会委員氏名（ＡＢＣ順、敬称略）

足立隆夫、後藤定年、松尾浩気、三宅睦男、望月　明、森　秀二、永井建雄
小野　豊、小野田慶司、吉村貞彦

なお附記しておきたいことは、草創期からこの方、当初は学生部長として、後半は2代目学長として国立移管へと発展的解消を全く円満裡になし終えられた佐伯秀章先生が、兵庫農大の閉学とともに停年をも待たず退職されることとなったことであります。

ここに謹んで先生の幾久しき御健康をお祈り申上げることと致します。

昭和44年1月31日

兵庫農科大学史編さん委員会

専門委員長　川　那　部　治　良
専門委員　西　　羅　　寛
専門委員　西　川　欣　一

昭和44年3月25日発行

兵庫農科大学史

発行者　兵庫農科大学史編纂委員会
印刷人　神戸出版印刷株式会社
発行所　兵　庫　農　科　大　学

兵庫農科大学同窓会